

2017 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



2018 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

この報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した平成 29 年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果をとりまとめたものです。本調査は、関西大学総合情報学部で開講されている授業「社会調査実習」(2017 年度)の一環として行われています。この授業では、学部生として上級の社会学的分析手法を習得するばかりでなく、受講生が各自の分析テーマを設定し、それらを盛り込んだ調査票の作成から最終報告書の執筆まで、社会調査の実施に必要な一連の作業を経験します。

この調査では毎年、研究テーマとして大学生ならではのユニークかつ現代的感覚に優れたテーマが取り上げられており、平成 29 年度の調査でもその長が受け継がれています。現代社会における情報端末やインターネットの利用実態、ライフスタイルと社会生活における意識との関係、地域参加への意識など、それぞれのテーマに柔軟な発想とみずみずしい感性が映し出されています。

本調査は今回で第 7 回目の実施となりますが、過去 6 回の調査では回収率が 60%程度で推移しており、今回も 59.8%という、近年の郵送調査としては非常に高い回収率が達成されました。時間と資源に限られる中、関西大学総合情報学部の松本渉先生からは時宜を得た的確なアドバイスをいただき、お陰さまで調査の一連の手続きを着実に進め、このような質の高いデータを得ることができました。また、ティーチング・アシスタントの杉浦翔さん、スチューデント・アシスタントの藤永里沙さん、宮原遼さんにはさまざまな形でご尽力いただき、授業を円滑に進めるために大きな助けとなりました。そして、仕事量が多く学習内容も多岐に渡る授業でありましたが、本講座の受講生の皆さんには辛抱強く、そして真剣に取り組んでいただきました。最終報告書は受講生の皆さんの努力の結晶として上梓されるものです。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり多大なご協力をいただいた高槻市市民生活部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さま、そして何より、調査にご協力いただいた高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2018 年 3 月

関西大学総合情報学部「社会調査実習」担当講師 横井 桃子

目次

はじめに		i
第 1 章	調査の概要	横井桃子・松本渉 1
第 2 章	調査結果の概要	杉浦 翔 8
第 3 章	高槻市の結婚と生活満足度の関係性	山根 優花 121
第 4 章	地域イベントの宣伝方法と参加について	中川 雅貴 128
第 5 章	高槻市の自然環境と暮らしやすさの関係	播磨 遼 134
第 6 章	地域への思いと実際の貢献度の関係	真鍋 和紗 140
第 7 章	高槻市における救急車の利用とその意識	高橋 えり 145
第 8 章	高槻市民における高槻 JCT・IC 開設に関する意識	川端 菜幹 161
第 9 章	インターネットの利用と生活満足度の関係	赤井 孝徳 167
第 10 章	インターネット利用による健康被害について	平見 遥華 173
第 11 章	プログラミング教育必修化の認知度	濱田 倭汰 178
資料		185
予告はがき		187
調査票		189

第 1 章 調査の概要

横井 桃子・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

「高槻市と関西大学による市民意識調査」は、2017(平成 29)年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、前期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、後期にはデータの打ち込み、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
前期	4/10	「社会調査実習」前期授業開講	
	4/17～5/1	基礎的・応用的な分析方法の習得	高槻市と関西大学の 打ち合わせ(随時)
	5/8～7/17	調査票の作成	
夏休み	7/31		サンプリング
	8/1～8/5		調査票印刷
	8/9	調査票発送準備作業	
	8/21		予告はがき発送
	8/24		調査票発送
	9/8		返送締切日
後期	9/25	「社会調査実習」後期授業開講	
	9/25～10/30	データの打ち込み・読み合わせ	
	11/6～11/13		データクリーニング
	11/13～11/27	応用的な分析方法の習得	
	1/10	中間レポートの提出	速報版報告書執筆
	1/22	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/31～2/28		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者：18歳以上85歳未満の高槻市民(1932年8月1日～1999年7月31日出生)

抽出名簿：住民基本台帳(2017(平成29)年7月31日現在)

標本抽出法：層化抽出法

(具体的な手順)

1. 2017(平成29)年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる(表2)。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	平成29年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19歳	3,471	3,353	6,824	24	24	48
20代	16,382	16,807	33,189	115	117	232
30代	20,139	20,674	40,813	141	145	286
40代	28,322	28,772	57,094	198	202	400
50代	19,902	20,781	40,683	139	146	285
60代	21,521	25,408	46,929	151	178	329
70代以上	26,947	33,064	60,011	189	231	420
合計	136,684	148,859	285,543	957	1043	2000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の3日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点)にとどめた。今回は8月21日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、お盆が終わってから最初の木曜日である 2017(平成 29)年 8 月 24 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、あじさい色(なお前年は空色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

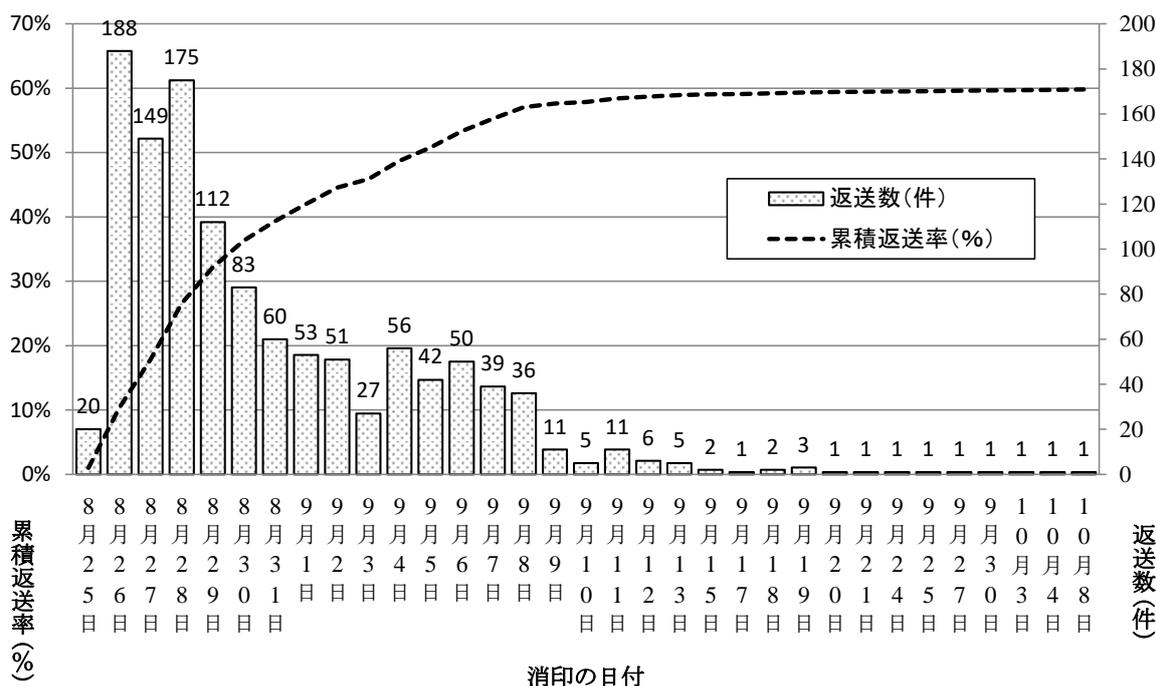
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。ただし消印が不明の票 4 票については、高槻市から受け取った順番を基準として、前と後の調査票の消印日との照合により日付を推定している(グラフの下の注3を参照)。

最も早い消印は翌 25 日(金)である。例年の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、返送数 188 という最大の返送数を記録した 8 月 26 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は、返送数 175 となった 8 月 28 日(月)である。調査票受領後におとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、2 回目の月曜日である 9 月 4 日(月)の返送数 56 であり、これは土日を利用した記入・返送によるものと考えられる。この返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50% 台後半に達している。累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなかなか上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 59% を越えるという結果になった。



(注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数(日付は消印による)。
 (注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。
 (注3) 消印が不明の回答票(4票)はすべて、前後の調査票から日付を推定できたため、その日(8月25日が2票、8月26日、9月8日が各1票)を消印日とした。

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月8日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月8日(日)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,197件であったが、1件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,196件、回収率を59.8%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	4	(0.20%)
	未返送	799	(39.95%)
	無効調査票	1	(0.05%)
	計	804	(40.20%)
2. 有効回答票		1,196	(59.80%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	(100.00%)

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性51.3%、女性66.1%となり、女性の方が15%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で75.2%、60代が74.5%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代では37.1%、18・19歳においては31.3%にまで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

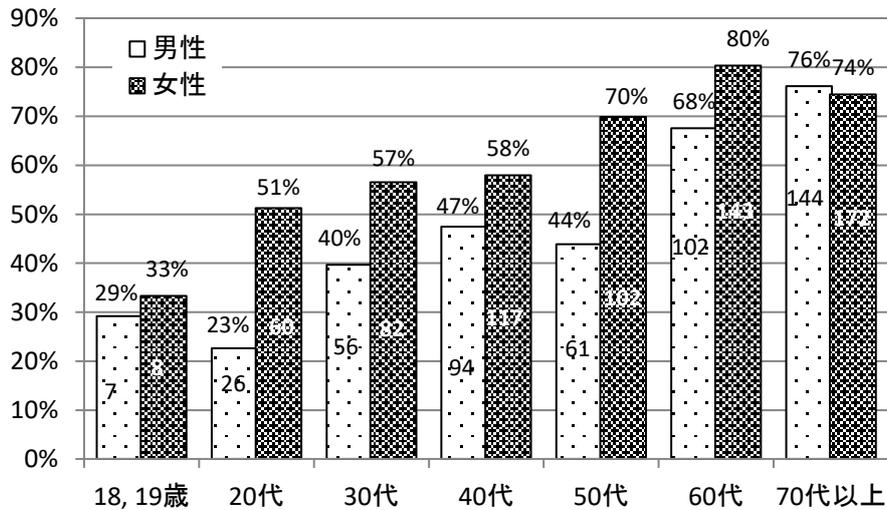
	男性	女性	不明	合計
回収標本	491	689	16	1,196
計画標本	957	1,043	—	2,000
回収率(%)	51.3%	66.1%	—	59.8%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分16件が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	15	86	139	215	164	245	316	16	1,196
計画標本	48	232	286	400	285	329	420	—	2,000
回収率(%)	31.3%	37.1%	48.6%	53.8%	57.5%	74.5%	75.2%	—	59.8%

(注) 年齢層別の回収率の計算には、不明分16件が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。
(注3) 男女別・年齢層別のいずれかで不明となった分は含まれていない。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代、30代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、男性60代以上、女性50代以上といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布に当てはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、2017(平成29)年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。dfは、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。pは、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度dfから計算されている。

表6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	H29年 6月末人口	%
男性	18, 19歳	7	(1%)	3,471	(1%)
男性	20代	26	(2%)	16,382	(6%)
男性	30代	56	(5%)	20,139	(7%)
男性	40代	94	(8%)	28,322	(10%)
男性	50代	61	(5%)	19,902	(7%)
男性	60代	102	(9%)	21,521	(8%)
男性	70～84	144	(12%)	26,947	(9%)
女性	18, 19歳	8	(1%)	3,353	(1%)
女性	20代	60	(5%)	16,807	(6%)
女性	30代	82	(7%)	20,674	(7%)
女性	40代	117	(10%)	28,772	(10%)
女性	50代	102	(9%)	20,781	(7%)
女性	60代	143	(12%)	25,408	(9%)
女性	70～84	172	(15%)	33,064	(12%)
		1,174	(100%)	285,543	(100%)

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分22件が含まれていない。

(注2) 表右側はH29年6月末の高槻市全体の人口である。

(<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/index.html>) 参照。

(適合度検定) $\chi^2=90.1522$, $df=13$, $p=0.0000$

表7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	H29年6月末 世帯人員別人口	%
1人	125	10.5%	57,291	16.2%
2人	414	34.6%	93,356	26.4%
3人	259	21.7%	80,487	22.8%
4人	236	19.7%	87,392	24.7%
5人	83	6.9%	28,520	8.1%
6人	21	1.8%	5,058	1.4%
7人	8	0.7%	1,113	0.3%
8人	0	0.0%	360	0.1%
9人	2	0.2%	72	0.0%
10人	0	0.0%	40	0.0%
11人以上	0	0.0%	22	0.0%
無回答	48	4.0%	—	—
合計	1,196	100.0%	353,711	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_h29/1499405800898.html)

から算出した。ただし、回収標本が20～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=89.2550$, $df=10$, $p=0.0000$

第2章 調査結果の概要

杉浦 翔

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が491人で女性が689人であり女性の方が多（図1）。年齢は60代と70代以上は2割以上と多く、18歳、19歳と20代は1割未満と少ない（図2）。男女別に年齢を確認しても同様の傾向が見られる（図3）。

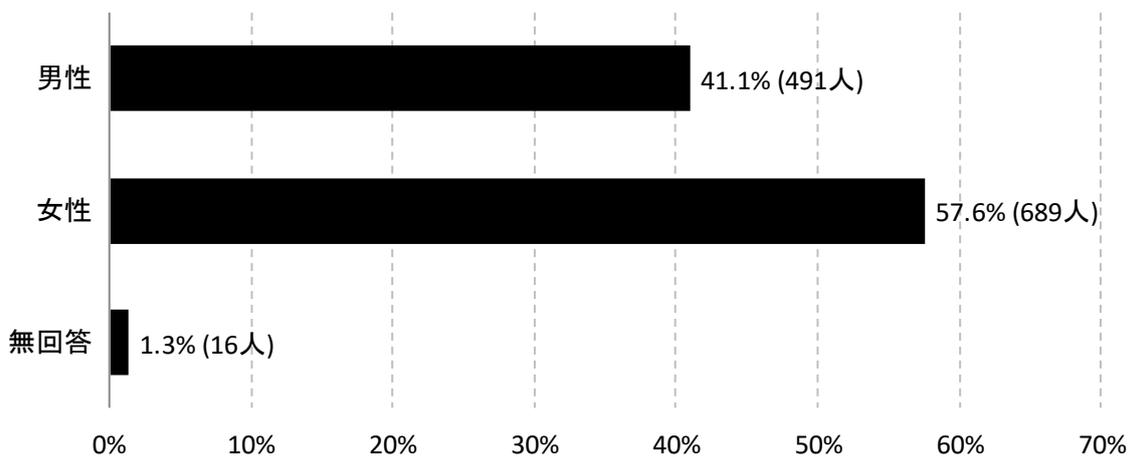


図1 Q64 性別

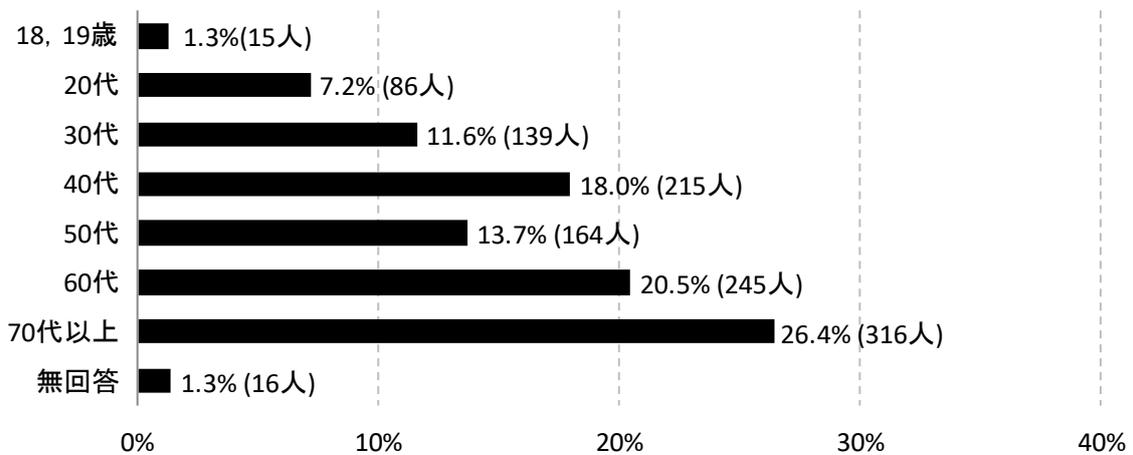


図2 Q65 年齢

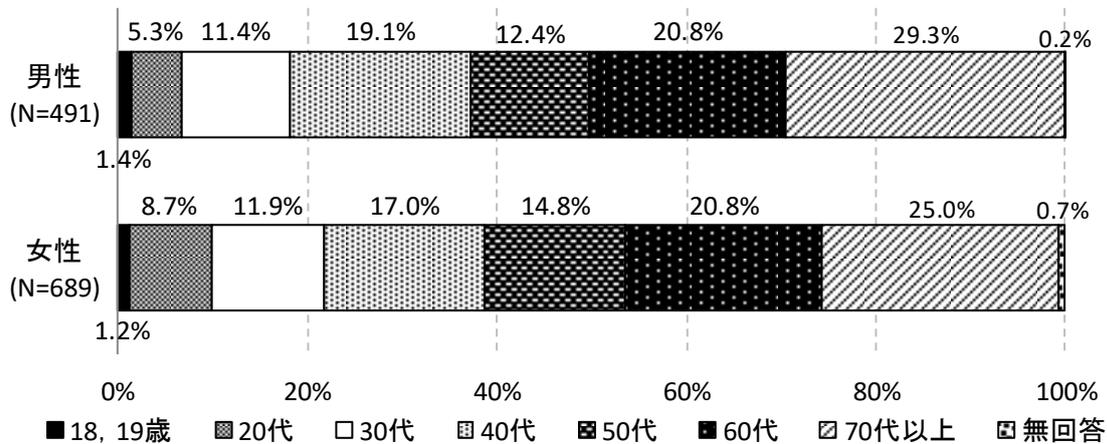


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は1,196人である。性別・年齢の内訳については図1と図2を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が26.3%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性では常時雇用者が37.5%と最も多く、女性では家事専業が30.5%と最も多い。年代別で見ると、60代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、40代で26.0%と全年代中で最も高い割合である(表1)。

表 1 Q66 職業

		(%)									
		常時雇用の勤め人	臨時雇用、パート、アルバイト	自営業主	自営業の家族従業者	経営者、役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
合計 (N=1196)		26.3	15.9	3.9	1.5	2.5	17.6	2.8	25.1	1.6	2.8
男女別	男性 (N=491)	37.5	8.4	6.5	0.8	5.1	0.0	3.1	34.4	1.8	2.4
	女性 (N=689)	19.0	21.0	1.9	2.0	0.7	30.5	2.8	18.7	1.5	1.9
年代別	18歳, 19歳 (N=15)	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0	93.3	0.0	0.0	0.0
	20代 (N=86)	47.7	14.0	2.3	0.0	0.0	4.7	20.9	4.7	3.5	2.3
	30代 (N=139)	57.6	18.7	4.3	0.0	2.2	12.2	0.7	2.9	0.7	0.7
	40代 (N=215)	45.1	26.0	4.7	1.4	1.9	11.6	0.5	3.3	0.9	4.7
	50代 (N=164)	39.0	22.6	4.3	2.4	4.3	17.7	0.0	7.3	1.2	1.2
	60代 (N=245)	12.2	19.2	4.9	2.0	3.7	27.3	0.0	26.1	2.9	1.6
	70代以上 (N=316)	0.9	2.8	2.5	1.9	2.2	20.9	0.0	65.5	1.3	1.9

最終学歴は、男女別で見ると、男性では「大学（旧高専）・大学院」が46.8%と最も多いのに対し、女性では21.0%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、35.1%である。また、「短大・高専（5年制）」は男性では1.4%と最も少ないのに対して、女性では21.2%と「高校（または旧制中学など）」に次いで2番目の多さである。年代別で見ると、18歳、19歳では「大学（旧高専）・大学院」が66.7%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では16.8%である。反対に、20代では「中学（旧小学校など）」と「高校（または旧制中学など）」の合計が12.8%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では68.6%となっている（図4）。

居住地については例外的に、単純集計のみを提示する。檜田地区に住む回答者は3人と極めて少なく、統計的に処理することにそぐわないためである。ここでの地区とは小学校の校区を参考にしている。各地区と該当小学校区は、檜田地区（檜田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図5）。

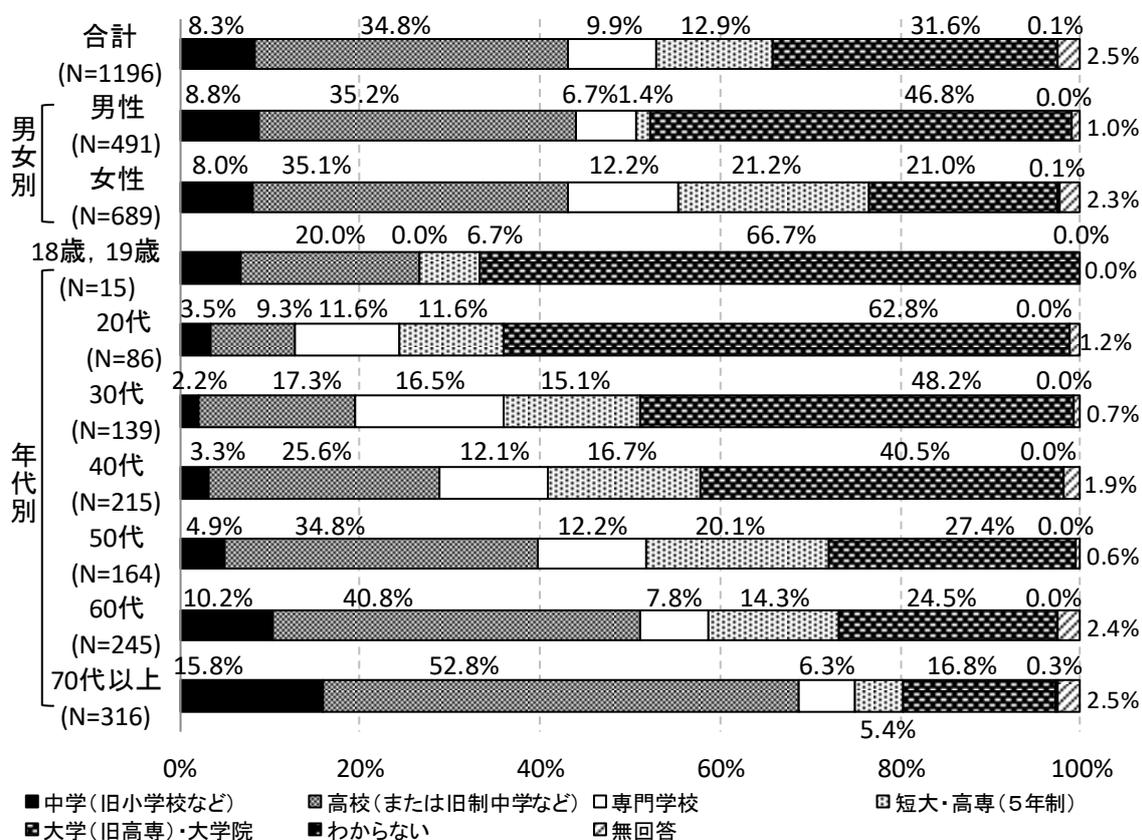


図4 Q67 最終学歴

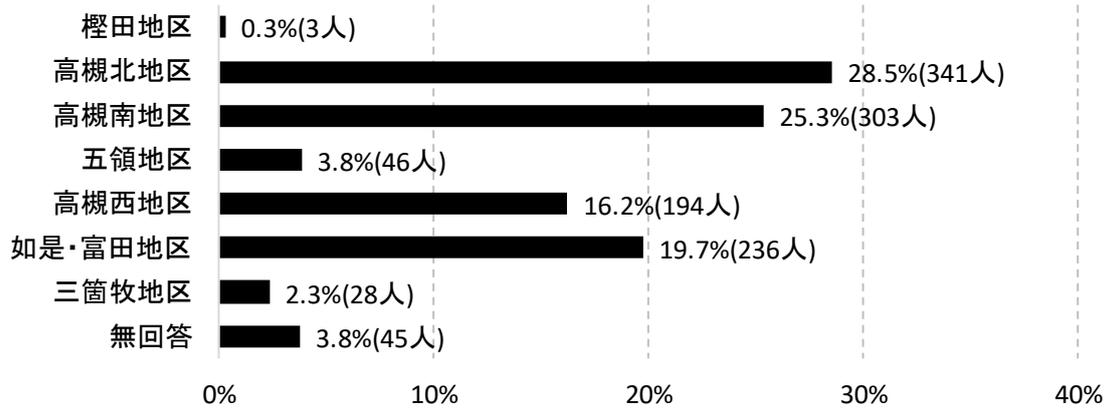


図 5 Q68 居住地域

高槻市内での居住年数に関しては、全体の 8 割以上が 10 年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、20 代では「20 年以上 30 年未満」が 48.8%と最も多く、子どものころから市内に居住していることが分かる。70 代以上では「40 年以上 50 年未満」40.2%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない (表 2)。

表 2 Q69 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
合計 (N=1196)		2.3	2.9	2.6	5.6	14.2	16.5	20.0	23.7	11.2	1.1
男女別	男性 (N=491)	2.4	2.4	3.1	5.7	15.3	15.7	20.0	23.8	11.0	0.6
	女性 (N=689)	2.2	3.3	2.3	5.2	13.4	17.1	20.5	23.9	11.3	0.7
年代別	18歳, 19歳 (N=15)	0.0	0.0	6.7	13.3	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	20代 (N=86)	9.3	8.1	5.8	8.1	17.4	48.8	0.0	0.0	0.0	2.3
	30代 (N=139)	6.5	5.8	6.5	13.7	18.0	9.4	40.3	0.0	0.0	0.0
	40代 (N=215)	3.7	4.2	3.3	11.6	21.9	13.0	12.1	28.8	0.5	0.9
	50代 (N=164)	0.6	4.3	1.8	3.7	18.9	26.8	15.9	18.3	9.8	0.0
	60代 (N=245)	0.4	0.8	2.0	1.6	7.8	15.9	31.8	25.3	13.9	0.4
	70代以上 (N=316)	0.0	0.6	0.3	0.9	6.0	9.2	16.8	40.2	25.9	0.0

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅」よりも高い割合である。年代別で見ると、「一戸建て」の割合は、20代と30代では6割未満であるが、40代以上では6割以上である（図6）。

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が6割以上と最も高い割合である。60代以上では8割以上が「持ち家」である。20代では「民間の賃貸住宅」も25.6%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少しており、70代以上で2.8%になる。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70代以上が10.1%と最も高く、次いで60代の9.4%である（図7）。

婚姻状況に関しては、男女別・年代別の30代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合である。30代未満では「未婚」の割合が7割以上である。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で9.0%、女性で17.0%と、女性の方が8ポイント高い（図8）。

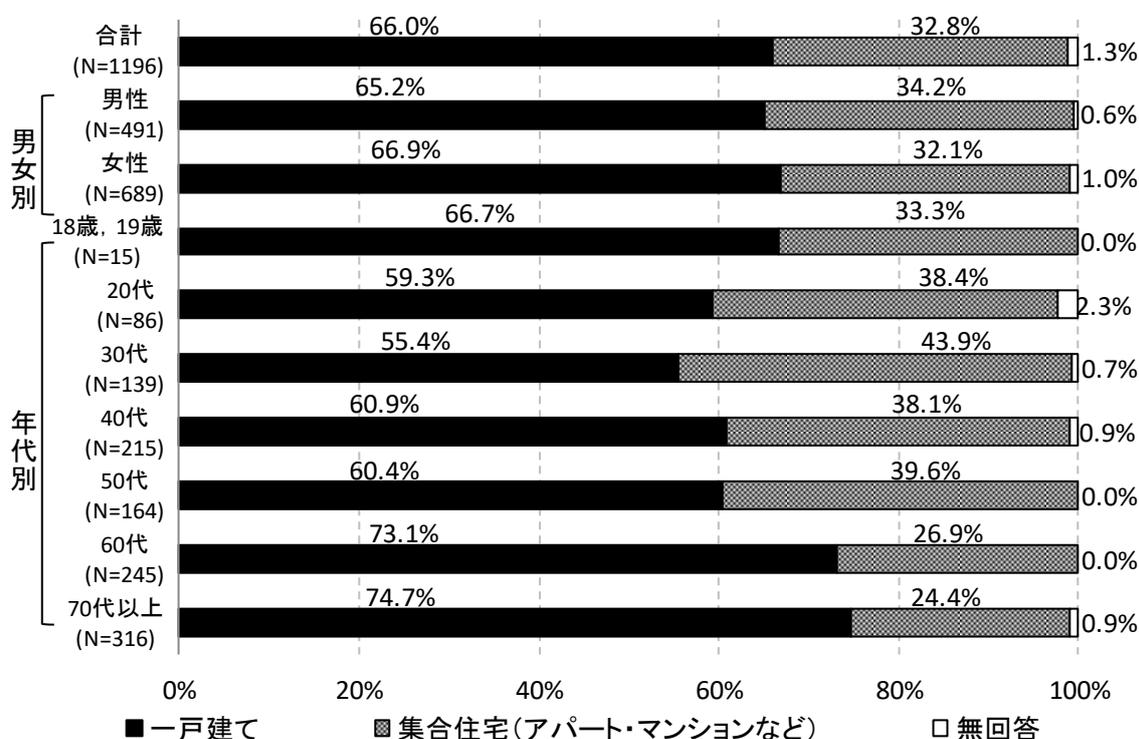


図6 Q70 住居

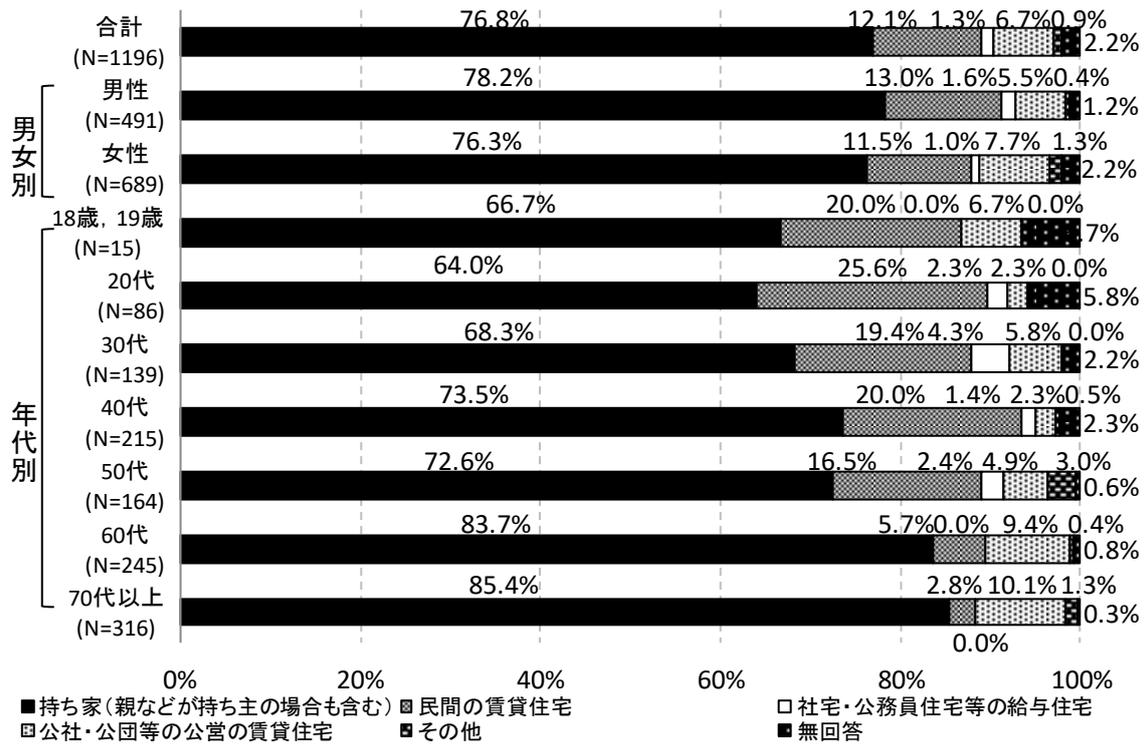


図 7 Q71 居住形態

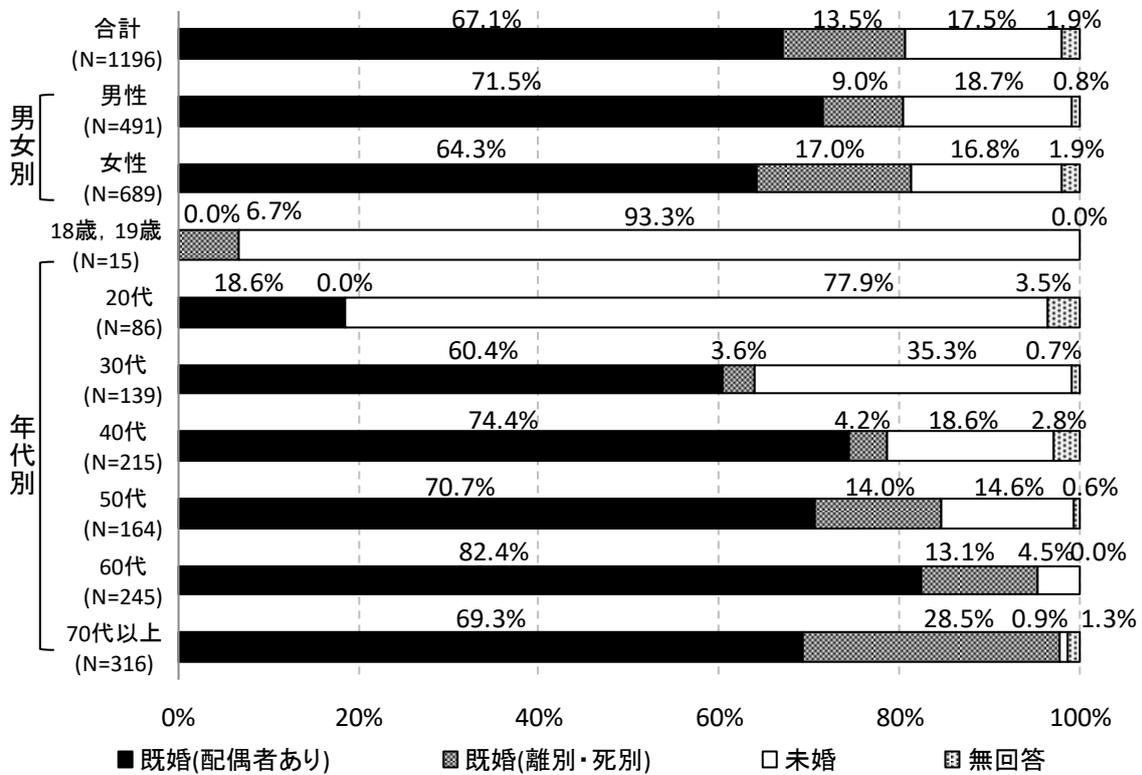


図 8 Q72 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別・年代別の30代以上の層で、「いる」が最も高い割合である。30代未満では「いない」割合が8割以上である。なお、大きな男女差は見られない(図9)。

世帯人数に関しては、その多くは2~4人世帯である。年代別で見ると、30代では3人世帯が最も多いが、4人世帯の割合と3ポイント以内の差である。一方で20代以下と40代では4人世帯が最も多く、3人世帯の割合と6ポイント以上の差がある。また、60代以上では2人世帯が4割以上を占めている(表3)。

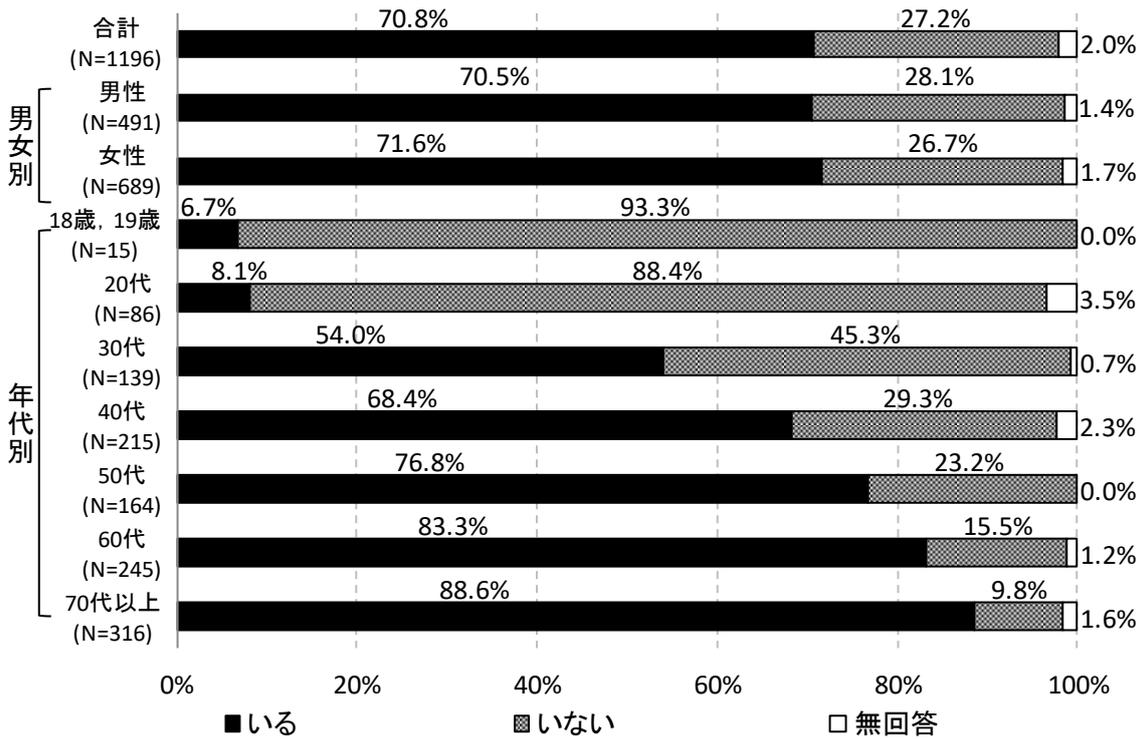


図9 Q73 子どもの有無

表 3 Q74 世帯人数

									(%)
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人以上	無回答
合計 (N=1196)		10.5	34.6	21.7	19.7	6.9	1.8	0.7	4.2
男女別	男性 (N=491)	10.4	36.5	20.2	22.2	6.5	1.4	0.2	2.6
	女性 (N=689)	10.7	33.7	23.1	18.0	7.3	2.0	1.0	4.2
年代別	18歳, 19歳 (N=15)	0.0	13.3	13.3	53.3	13.3	0.0	6.7	0.0
	20代 (N=86)	10.5	19.8	19.8	26.7	9.3	2.3	1.2	10.5
	30代 (N=139)	5.8	17.3	30.2	27.3	15.1	2.2	0.7	1.4
	40代 (N=215)	5.1	16.3	27.0	34.0	9.3	1.4	1.4	5.6
	50代 (N=164)	9.1	27.4	22.0	26.2	11.0	1.8	0.6	1.8
	60代 (N=245)	11.4	45.3	23.7	12.2	2.9	0.4	0.0	4.1
	70代以上 (N=316)	17.1	55.7	13.9	6.0	2.2	2.8	0.3	1.9

世帯収入は、合計および男性・女性では「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、18歳, 19歳では「100万円未満」で26.7%、20代と30代では「200万円～400万円未満」、40代では「600万円～800万円未満」と、年代が上がるごとに収入が高額になっている。ただし50代では「400万円～600万円未満」、60代と70代以上では「200万円～400万円未満」の割合が最も高い(表4)。

表 4 Q75 世帯年収

											(%)
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
合計 (N=1196)		4.1	9.9	28.5	16.2	10.6	7.4	5.5	1.7	5.4	10.7
男女別	男性 (N=491)	2.6	9.0	33.0	17.5	12.0	7.1	6.7	2.6	3.3	6.1
	女性 (N=689)	5.1	10.9	25.7	15.7	9.9	7.4	4.8	1.0	7.0	12.6
年代別	18歳, 19歳 (N=15)	26.7	0.0	13.3	6.7	0.0	13.3	6.7	0.0	26.7	6.7
	20代 (N=86)	4.7	7.0	23.3	12.8	11.6	4.7	7.0	0.0	20.9	8.1
	30代 (N=139)	0.0	5.0	20.9	19.4	16.5	14.4	7.2	0.7	7.2	8.6
	40代 (N=215)	3.3	3.7	13.0	18.1	22.3	10.2	11.2	1.9	5.1	11.2
	50代 (N=164)	3.0	6.7	14.0	20.7	14.0	12.2	9.8	4.3	3.7	11.6
	60代 (N=245)	4.1	13.1	38.8	14.7	5.7	4.1	1.6	1.6	2.0	14.3
	70代以上 (N=316)	5.4	17.4	44.9	14.6	2.8	2.5	1.6	1.3	3.2	6.3

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけではなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については 8 ページの図 1 と図 2 を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。

Q1 の生活満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」もしくは「やや満足」と回答した人の割合は 20 代が 72.1%と最も高く、反対に 50 代が 57.3%と最も低い。なお、大きな男女差は見られない (図 10)。

Q2 の居住地は暮らしやすいかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 20 代が 86.0%と最も高い。反対に、18 歳、19 歳は 73.3%と最も低い (図 11)。

Q3 の地域に愛着を感じるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 70 代以上が 83.3%と最も高く、反対に 60 代が 71.4%と最も低い (図 12)。

Q4 の地域の役に立ちたいかに関しては、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20 代以下では 4 割以下であるのに対し、30 代以上では 5 割以上である。なお、大きな男女差は見られない (図 13)。

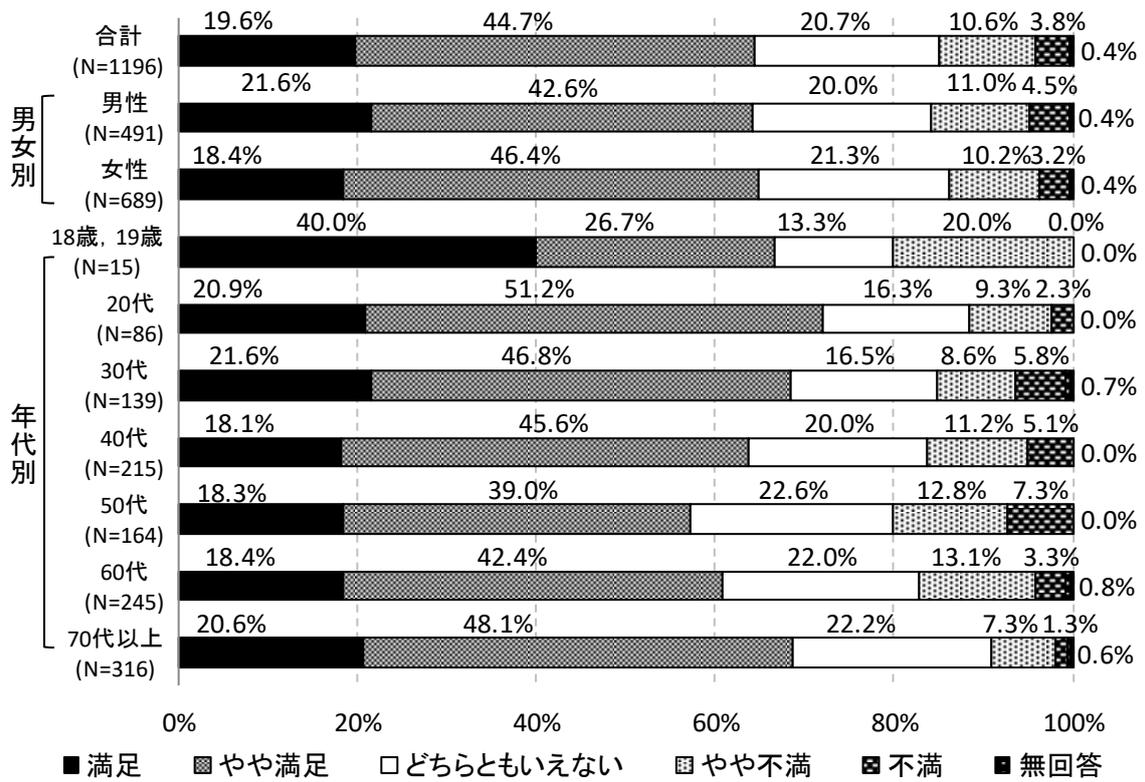


図 10 Q1 生活満足度

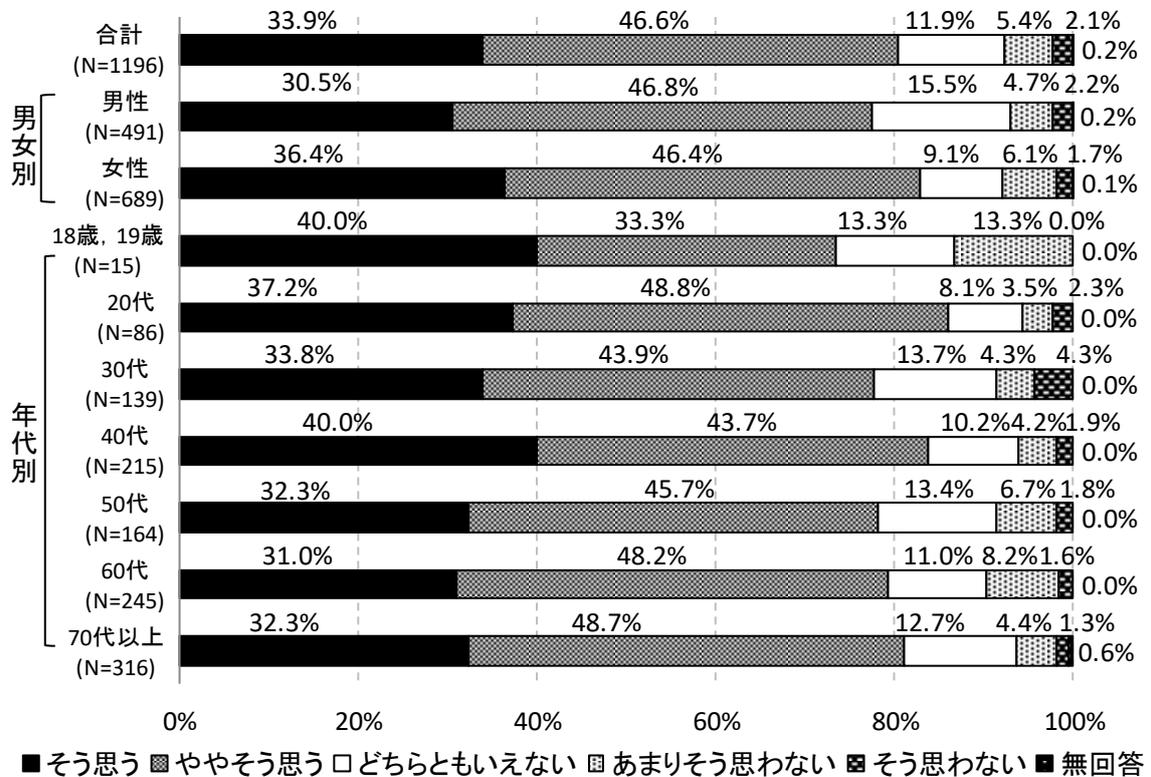


図 11 Q2 居住地は暮らしやすいか

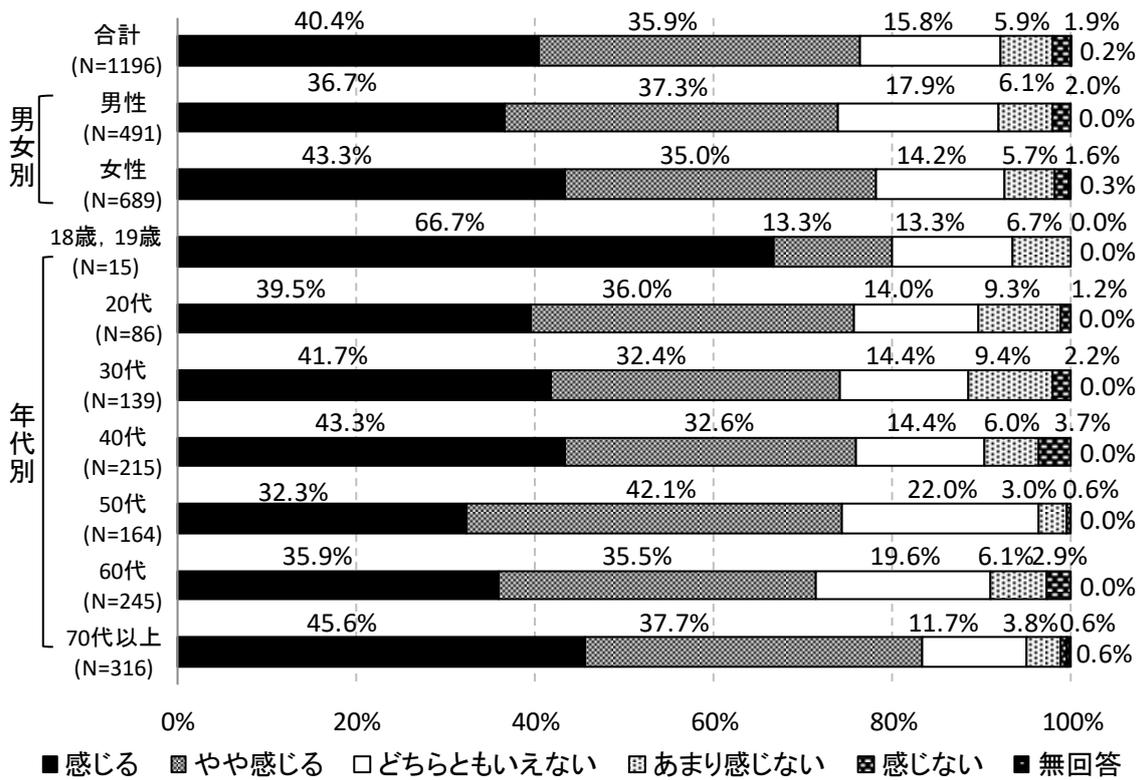


図 12 Q3 地域に愛着を感じるか

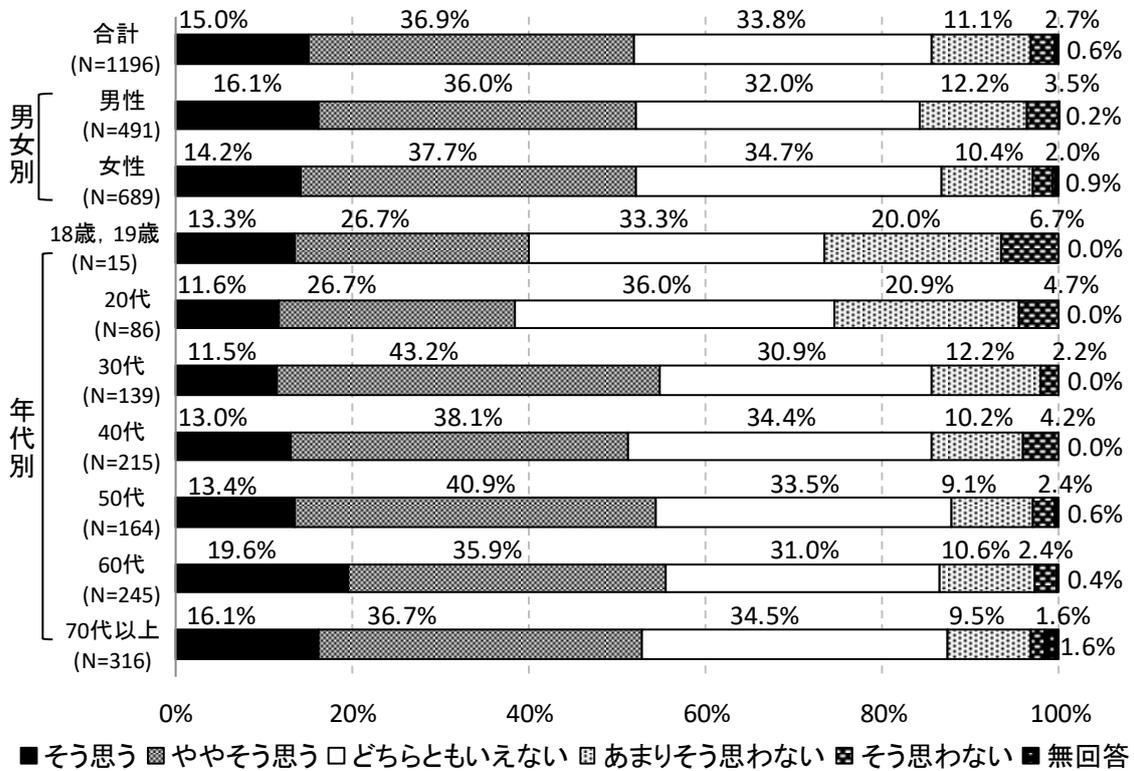


図 13 Q4 地域の役に立ちたいか

Q5A の運行時間帯における高槻市営バスの満足度に関して、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳、19歳が13.4%で最も低い。反対に、20代以上の割合は2割以上であり、70代以上は61.4%と最も高い（図14）。

Q5B の路線・系統における高槻市営バスの満足度に関して、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳、19歳が20.0%と最も低いのに対し、70代以上が59.8%と最も高い（図15）。

Q5C のバス停における高槻市営バスの満足度に関して、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、60代未満が5割以下であるのに対し、60代以上は5割以上である（図16）。

Q5D の乗務員の対応における高槻市営バスの満足度に関して、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、70代未満が5割以下であるのに対し、70代以上は63.6%と最も高い（図17）。

Q5E の運賃における高槻市営バスの満足度に関して、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、60代未満が3割前後であるのに対し、70代以上が68.7%と最も高い（図18）。

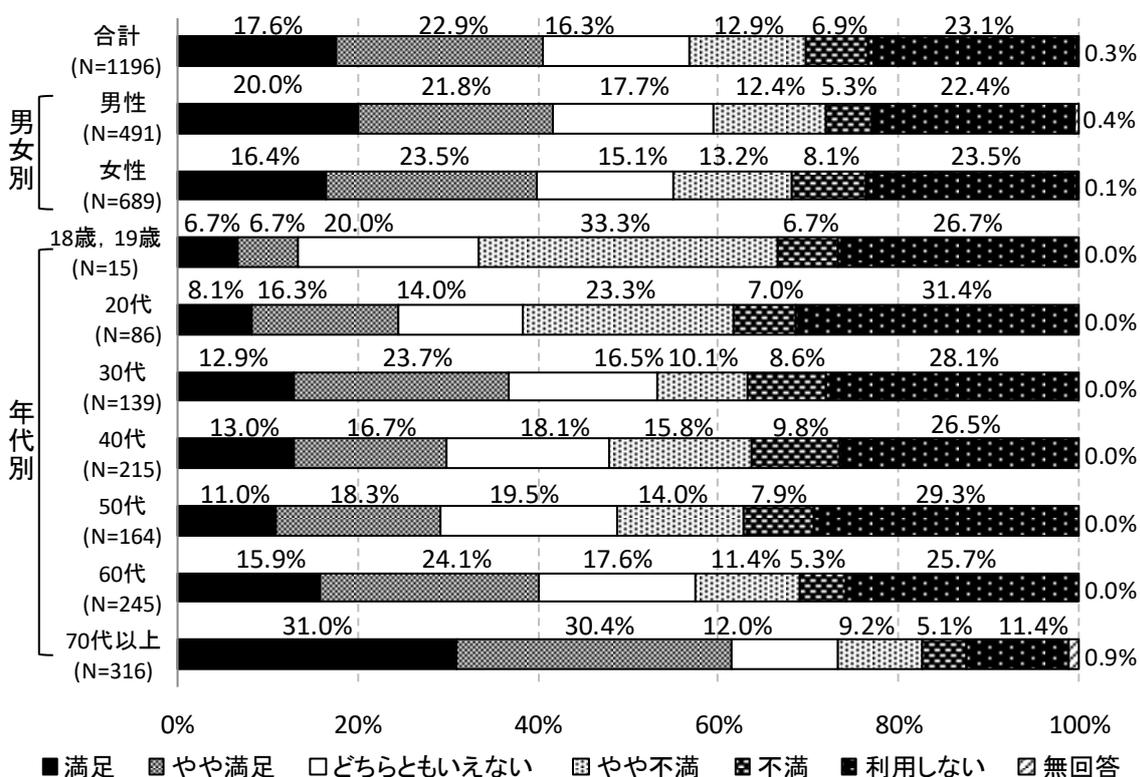


図14 Q5A 高槻市営バス満足度：運行時間帯

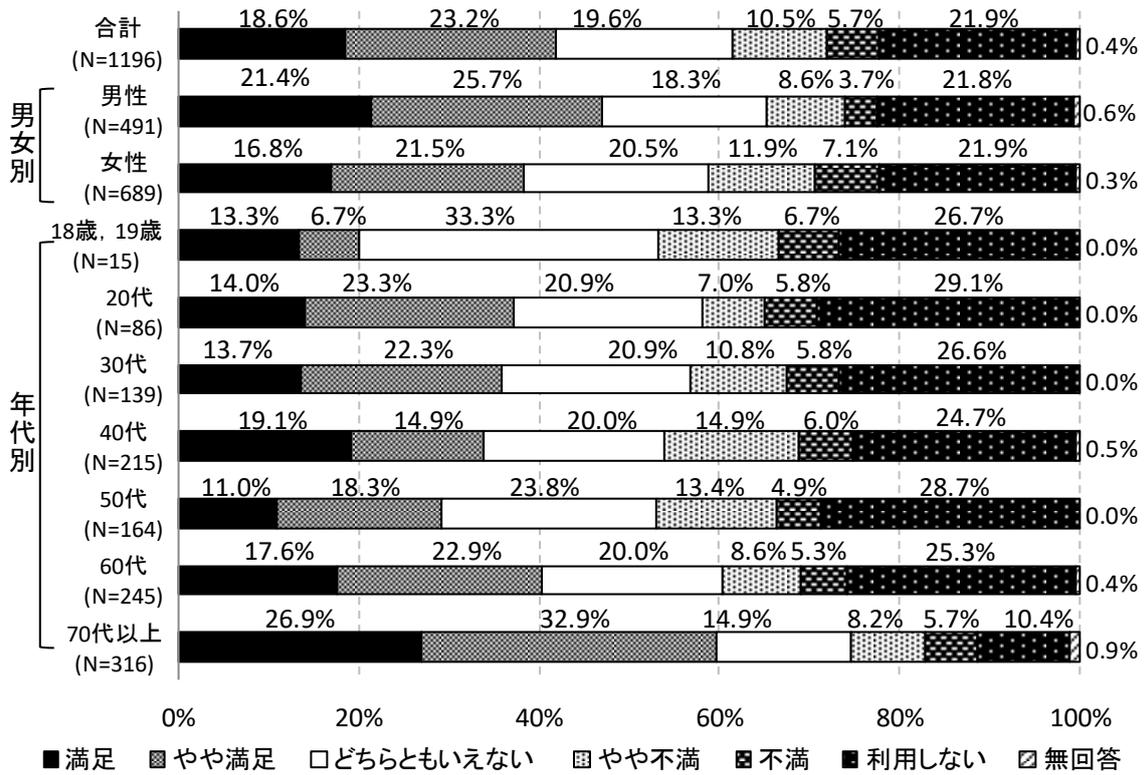


図 15 Q5B 高槻市営バス満足度：路線・系統

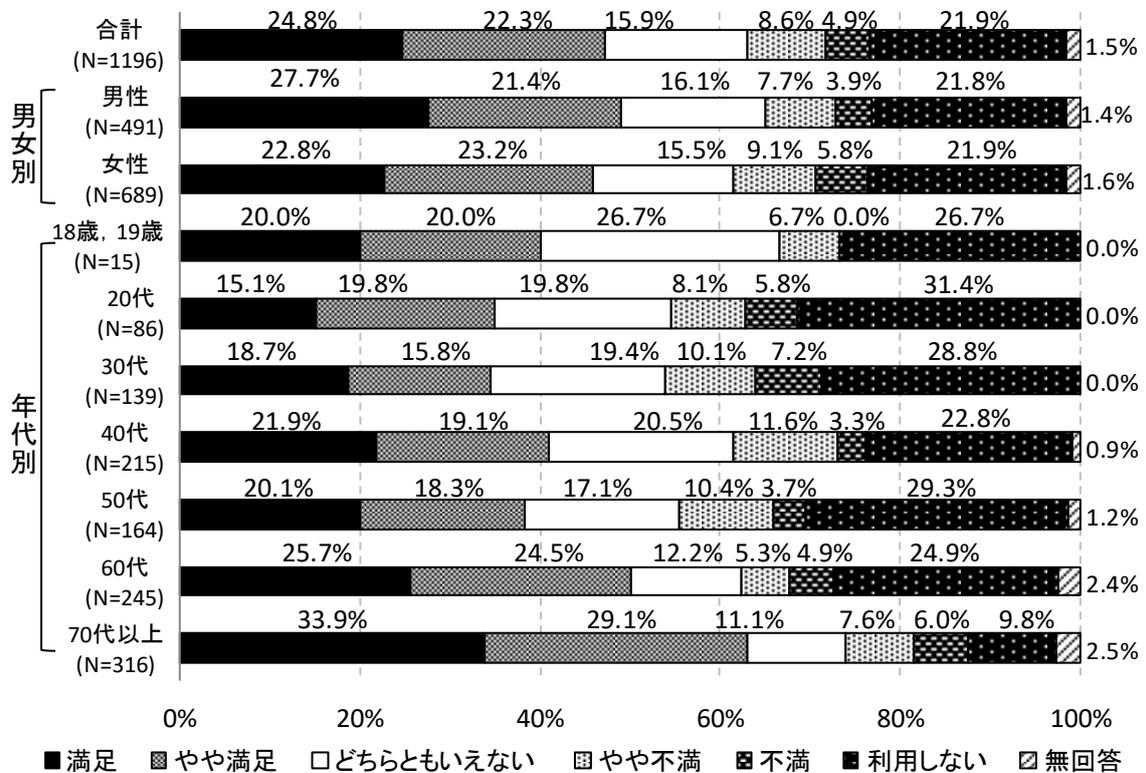


図 16 Q5C 高槻市営バス満足度：バス停

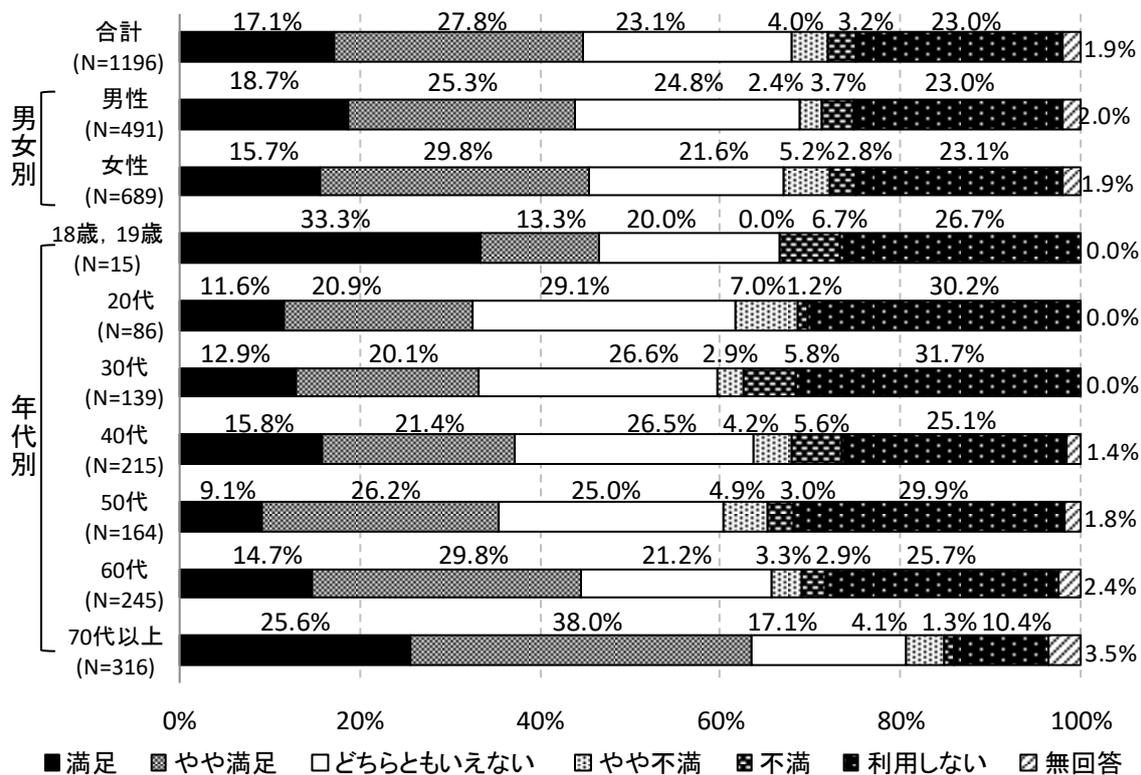


図 17 Q5D 高槻市営バス満足度：乗務員の対応

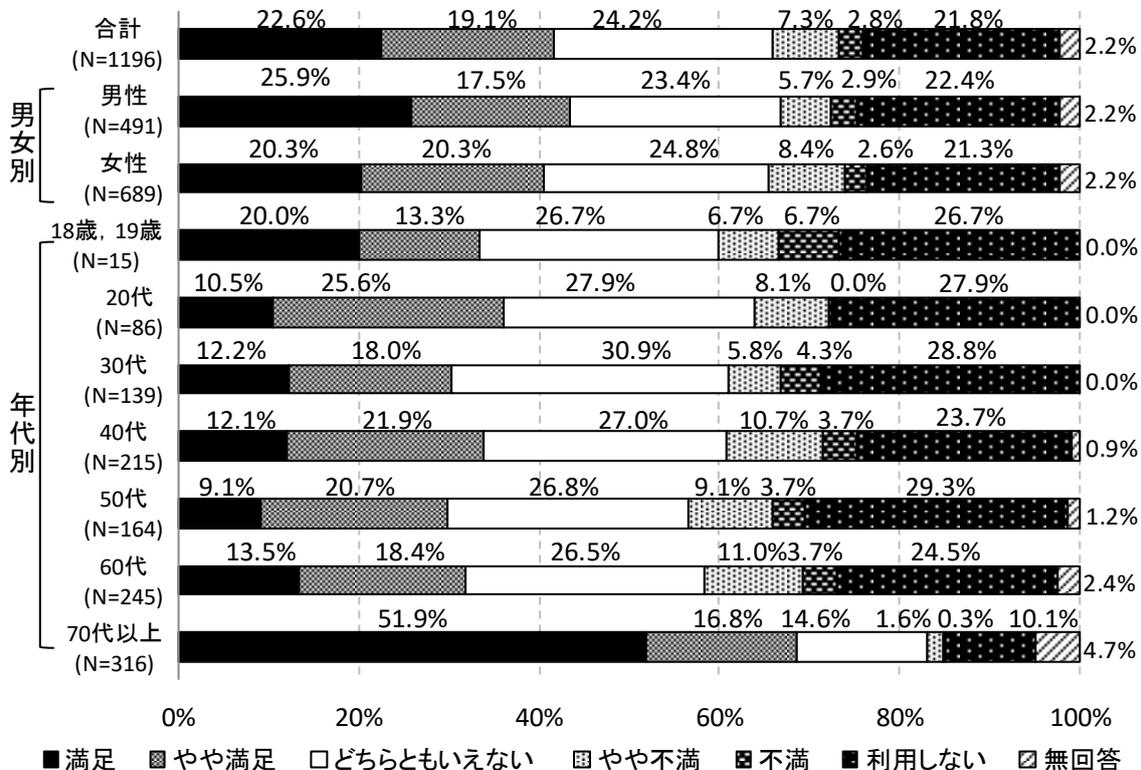


図 18 Q5E 高槻市営バス満足度：運賃

Q6の高槻市営バスの利用頻度に関して、「ほぼ毎日」または「週に3～4日」、「週に1～2日」と回答した人の割合は、年代別で見ると、30代が11.5%と最も少ないが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では42.3%と最も高くなっている。これは、2番目に多い60代が21.6%なので、20.7%もの差がある。「利用しない」と回答した人の割合は60代未満が3割前後であるのに対し、70代以上は12.0%と最も低い(図19)。

Q7の外出頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で8割以上が「ほぼ毎日」または「週に3～4日」、「週に1～2日」と回答している。年代別で見ると、「ほぼ毎日」と回答した人の割合は60代未満が6割以上である(図20)。

Q8の外出時の自家用車・レンタカーの利用頻度に関して、「まったく利用しない」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳、19歳が13.3%、20代～60代が2割前後であるのに対し、70代以上は38.9%と最も高い(図21)。

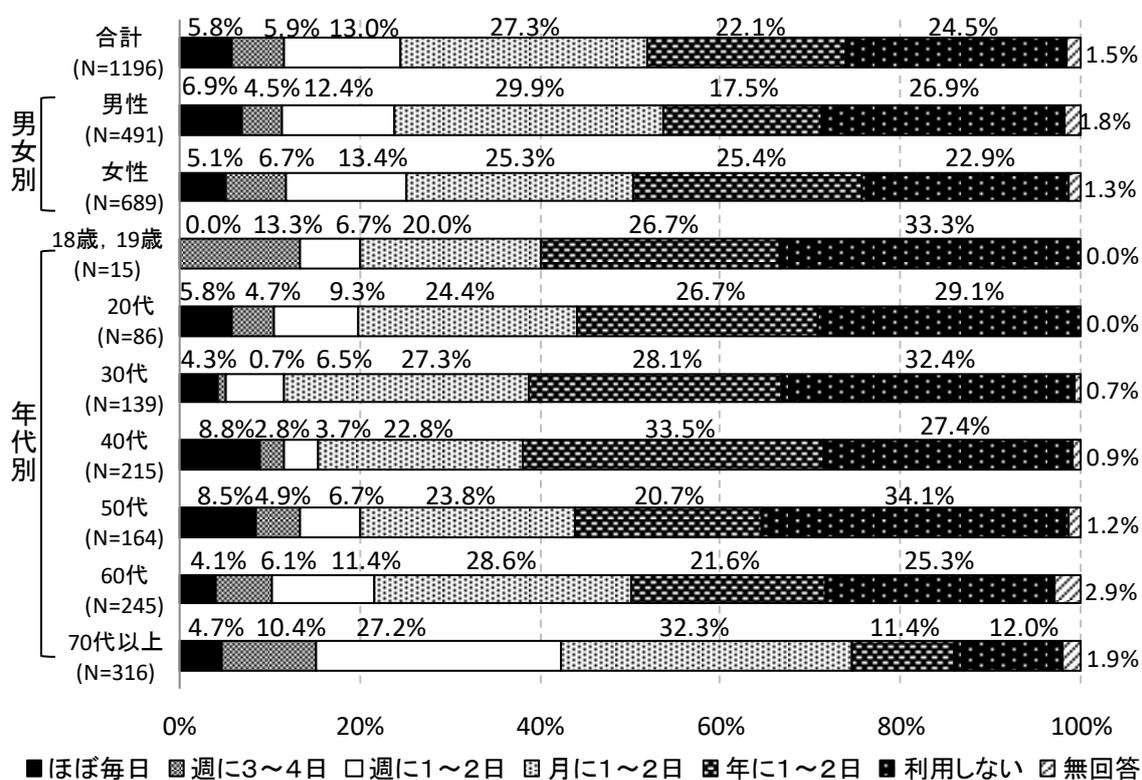


図19 Q6 高槻市営バスの利用頻度

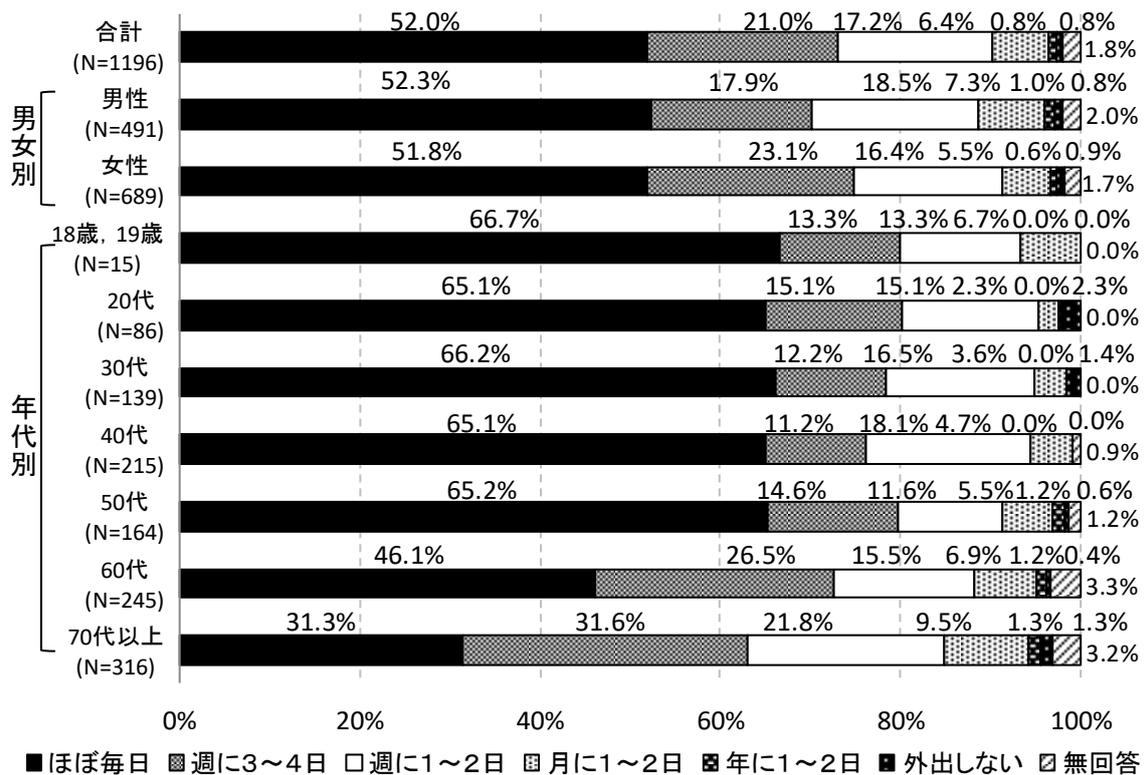


図 20 Q7 外出頻度

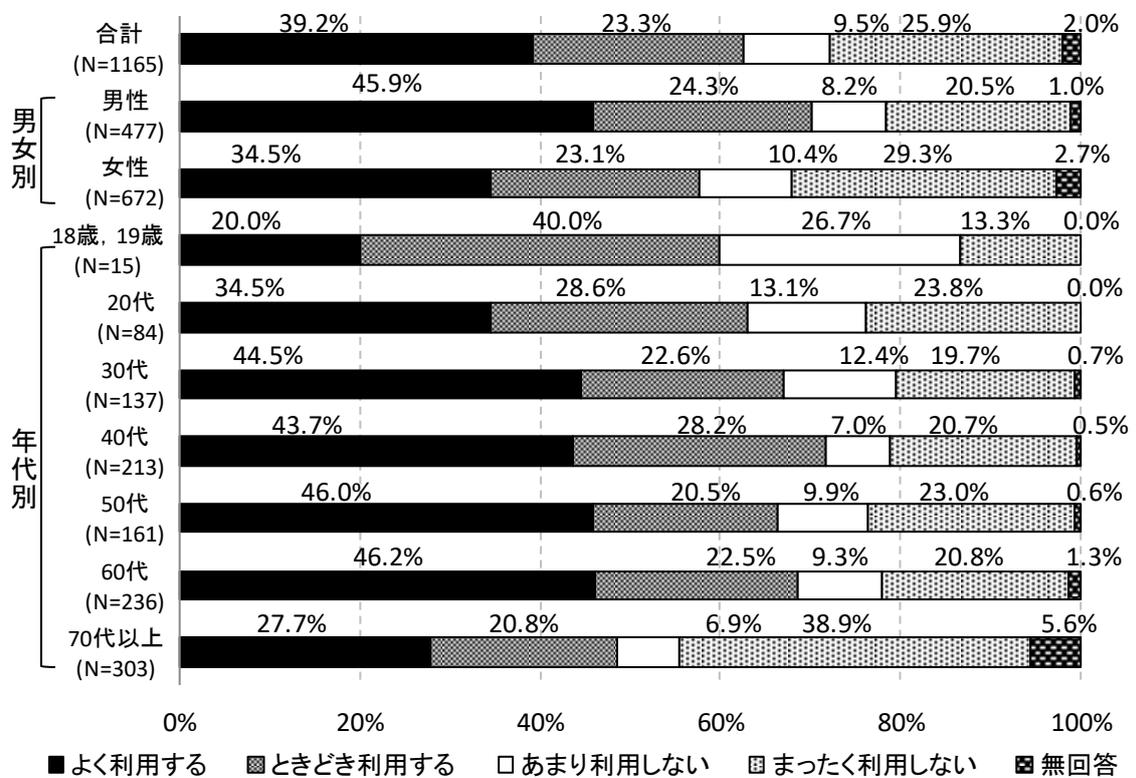


図 21 Q8 外出時の自家用車・レンタカーの利用頻度

Q9の自動車の運転免許の有無に関して、「持っている」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性が80.9%、女性54.9%と、男性の方が26ポイント高い。また、年代別で見ると、「持っている」と回答した人の割合は18歳、19歳が13.3%と最も低く、次いで70代以上が39.6%である。反対に、20代から60代が6割以上である（図22）。

Q10の自動車の利用頻度に関して、「よく運転する」または「ときどき運転する」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性が68.0%、女性が33.7%と、男性の方が34.3ポイント高い。また、年代別で見ると、「よく運転する」または「ときどき運転する」と回答した人の割合は40代が60.9%と最も高い。反対に、20代以下と70代以上が5割以下である。特に、18歳、19歳は6.7%と最も低い（図23）。

Q11の自動車の保有台数に関して、「0台」と回答した人の割合は、年代別で見ると、60代未満が1~2割前後であるのに対し、70代以上が36.4%と最も高い（図24）。

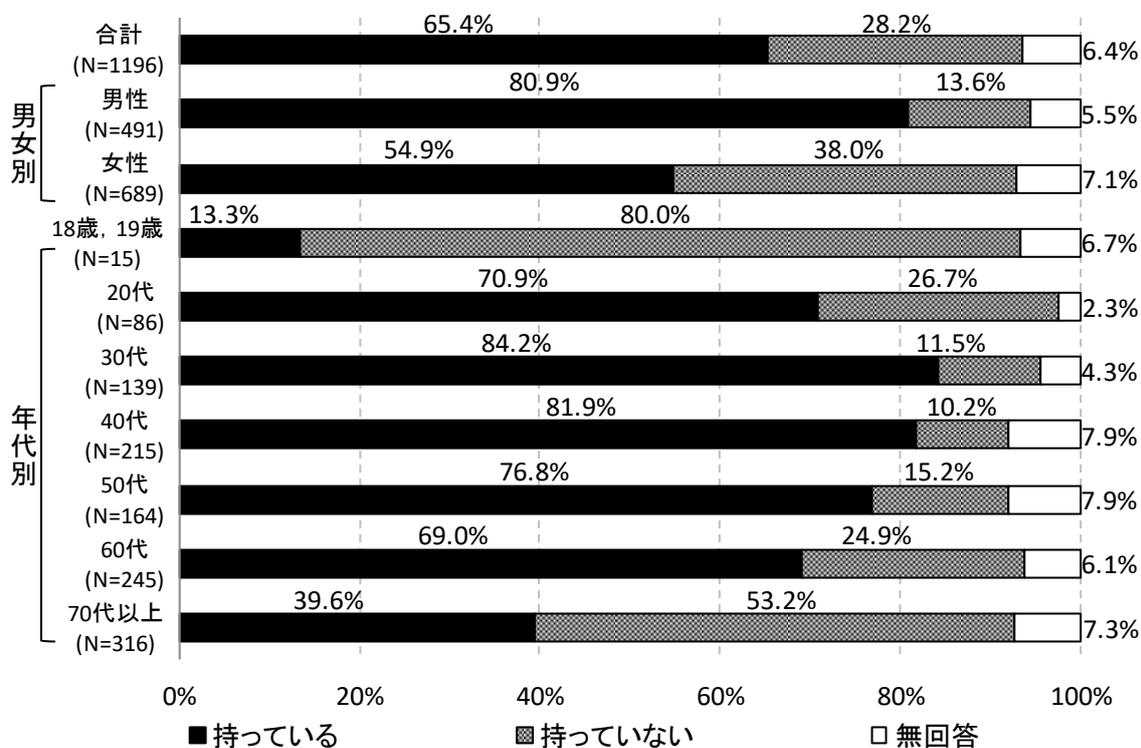


図22 Q9 自動車の運転免許の有無

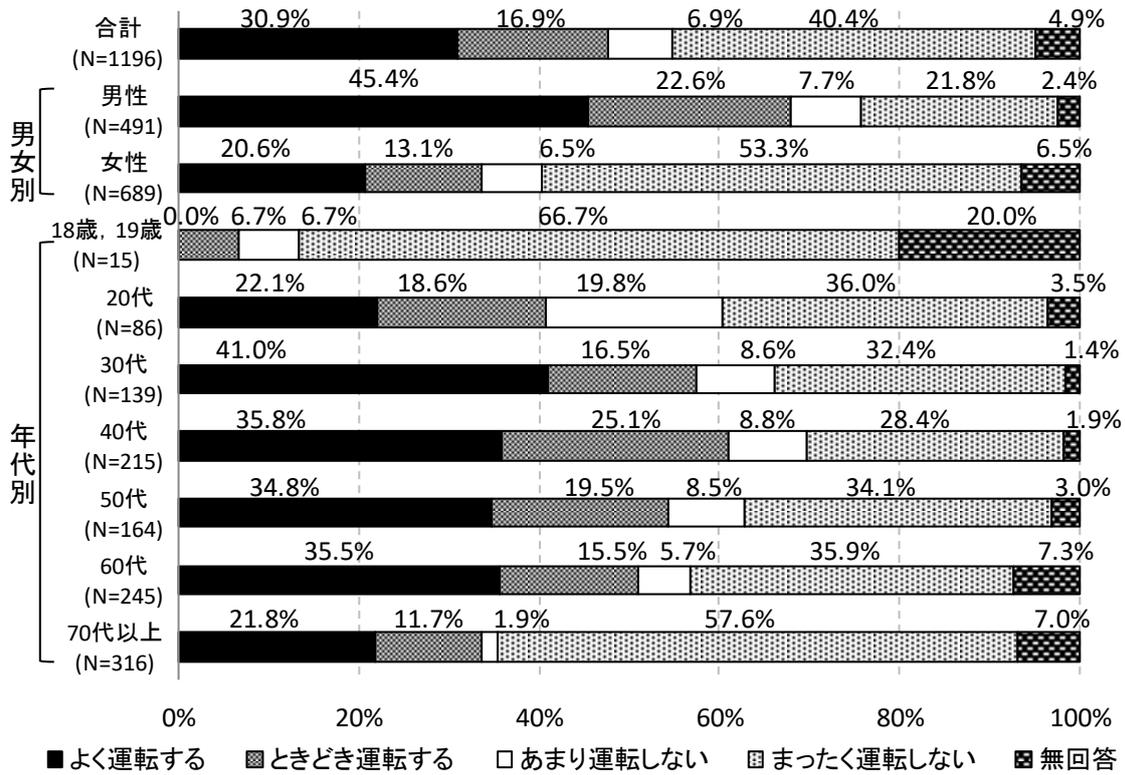


図 23 Q10 自動車の利用頻度

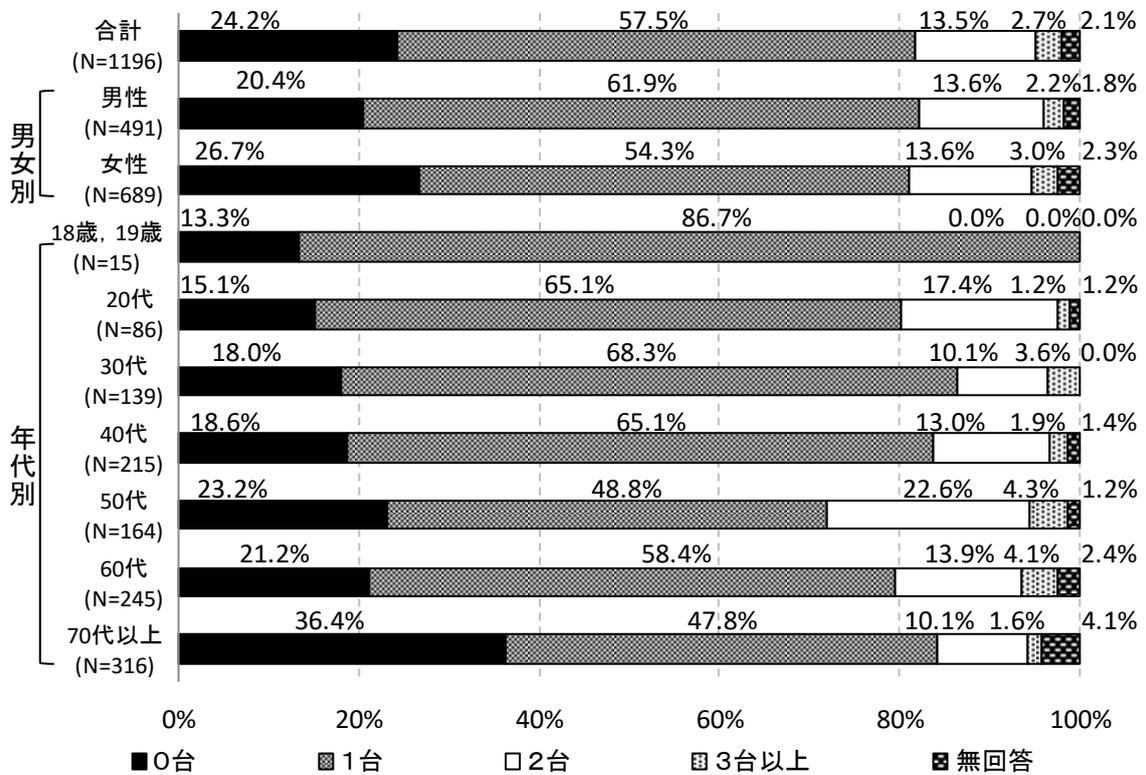


図 24 Q11 自動車の保有台数

Q12 のインターチェンジの利用状況に関して「高速道路を利用しない」以外では、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「茨木インターチェンジ」が 45.7% と最も高い。次いで、「大山崎インターチェンジ」で 34.6%、「摂津北又は摂津南インターチェンジ」で 25.5%の順に高い（図 25）。

Q12 を男女別で見ると、「摂津北又は摂津南インターチェンジ」が最も男女差が大きく、男性で 20.6%、女性で 28.7%と、女性の方が 8 ポイントほど高い割合である。また、次いで男女差が大きいのは「吹田インターチェンジ」であり、男性で 13.4%、女性で 5.5%と、男性の方が約 8 ポイントの差である（図 26）。

Q12 を年代別で見ると、「茨木インターチェンジ」の割合は、50 代未満が約 5 割以上であるが、50 代以上では 5 割未満である。「摂津北又は摂津南インターチェンジ」の割合は、18 歳、19 歳で最も高く 40.0%である。反対に、30 代は 16.5%と最も低い（図 27）。

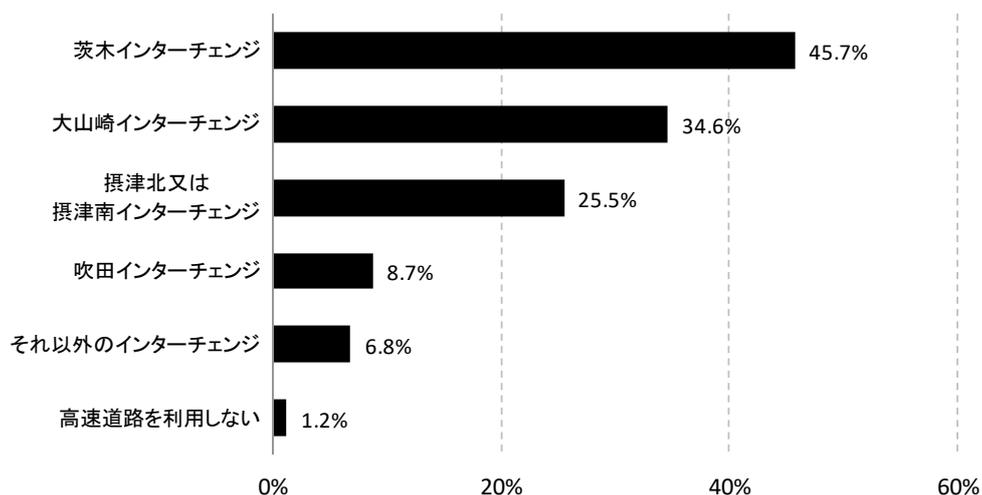


図 25 Q12 インターチェンジの利用状況（複数回答・全体 N=1196）

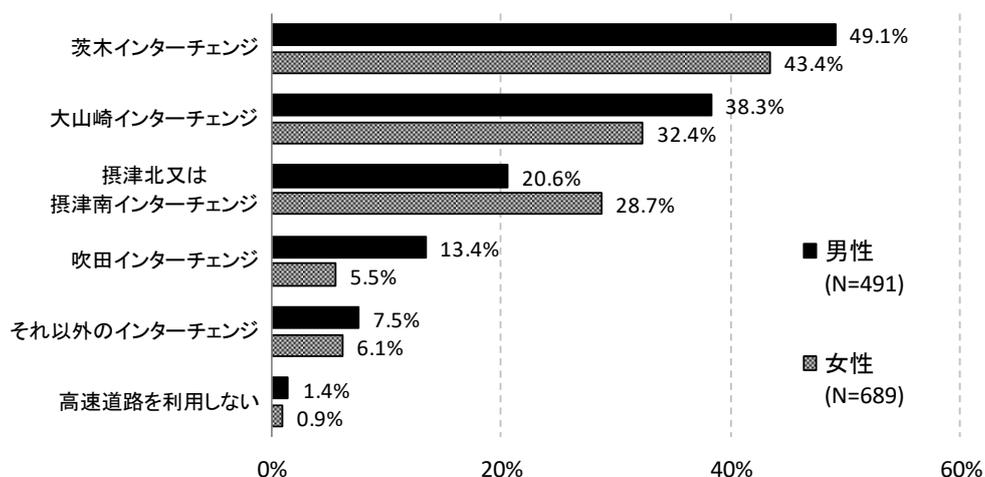


図 26 Q12 インターチェンジの利用状況（複数回答・男女別）

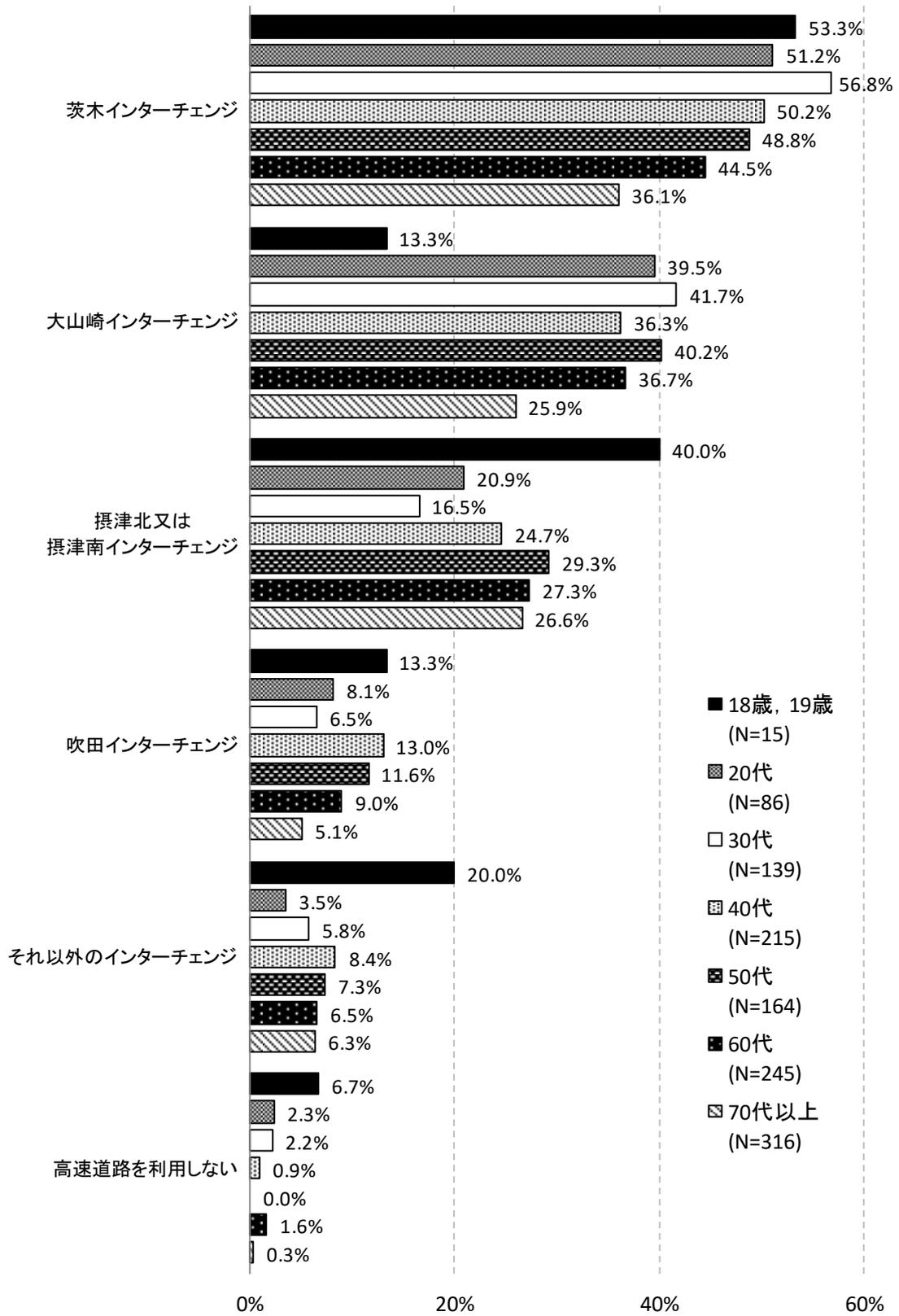


図 27 Q12 インターチェンジの利用状況（複数回答・年代別）

Q13 の高槻インターチェンジの開設認知度に関して、「知っている」と回答した人の割合は、年代別に見ると、18歳，19歳と20代が6割未満であるのに対し、30代から70代以上では7割以上である（図 28）。

Q14 の高槻インターチェンジの開設期待度に関して、「期待している」または「どちらかといえば期待している」と回答した人の割合は、年代別に見ると、18歳，19歳が86.7%であるが、20代を除いて年代が上がるごとに減少し、70代以上で64.2%になっている。（図 29）。

Q15 の高槻インターチェンジの利用予定に関して、「大いに利用する」または「ときどき利用する」と回答した人の割合は、年代別に見ると、30代が59.0%であるが、30代から70代以上にかけて年代が上がるごとに減少し、70代以上で34.5%になっている（図 30）。

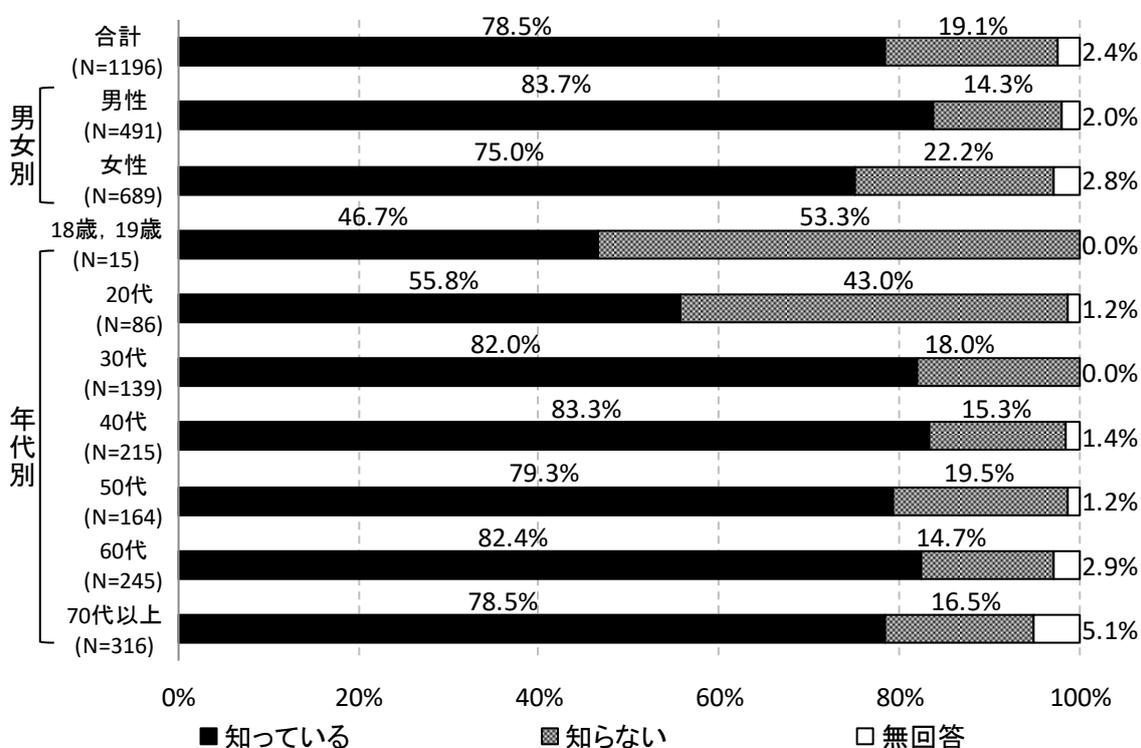


図 28 Q13 高槻インターチェンジの開設認知度

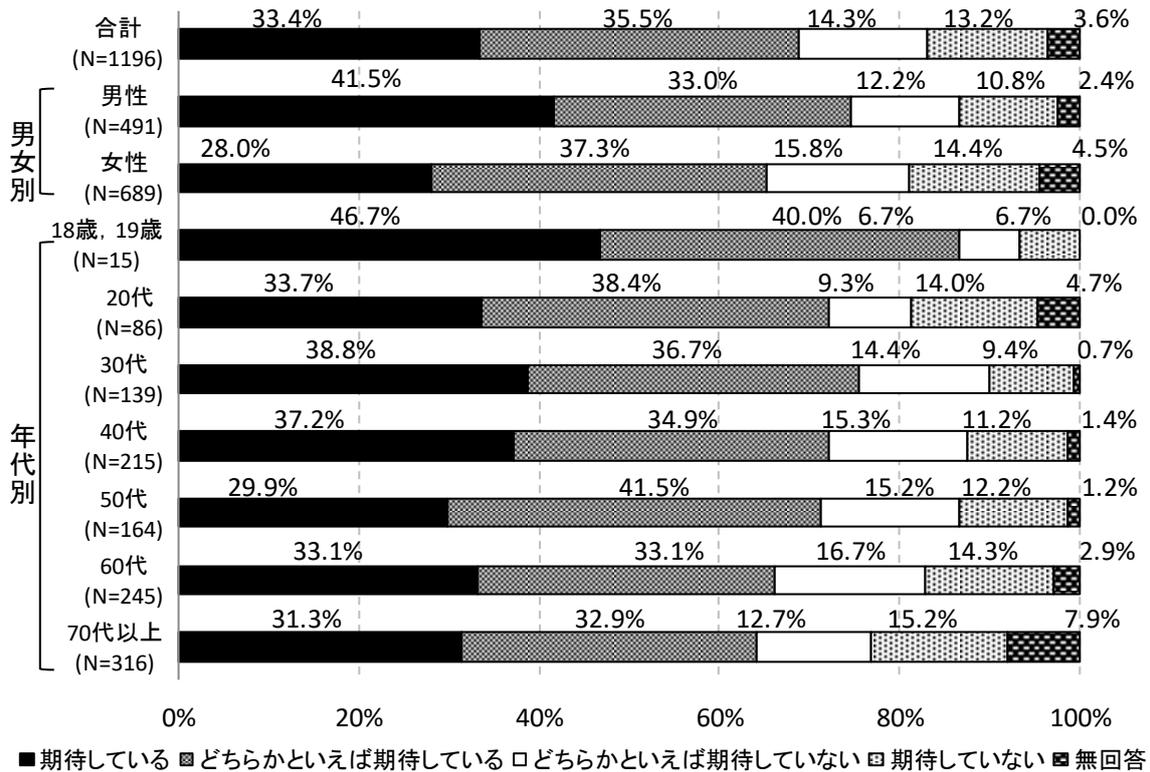


図 29 Q14 高槻インターチェンジの開設期待度

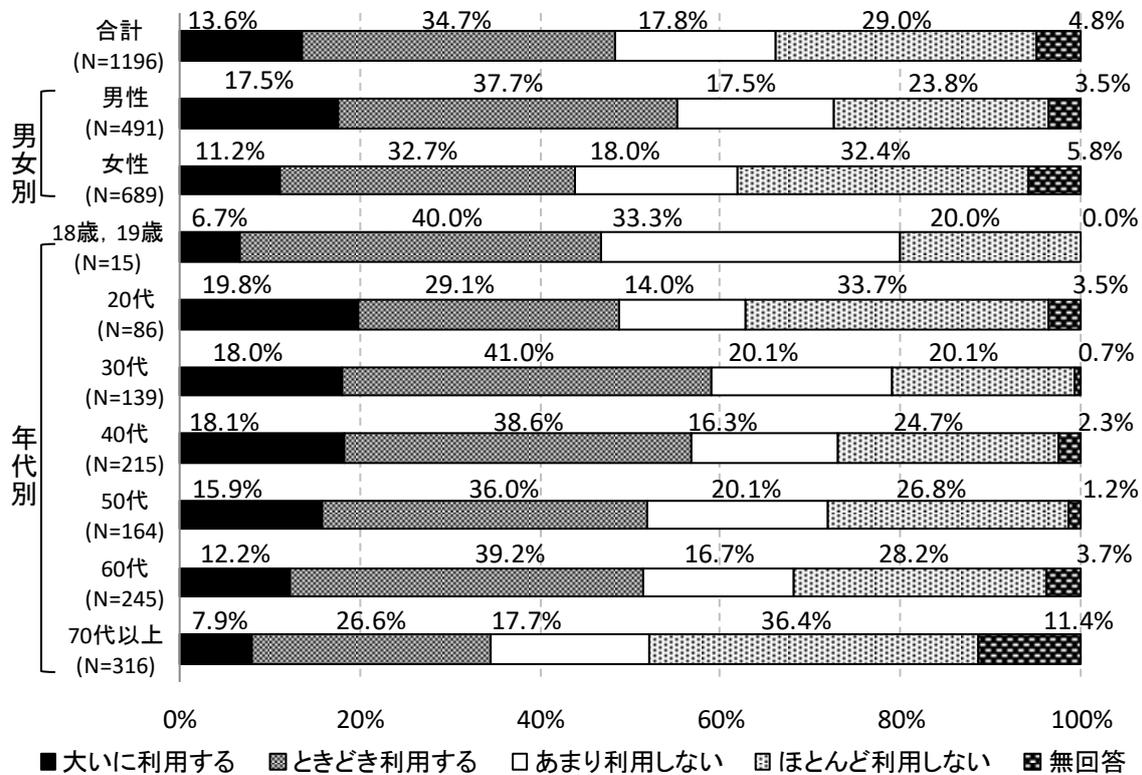


図 30 Q15 高槻インターチェンジの利用予定

Q16 の高槻インターチェンジ開設後の市内の道路交通状況に関しては、男女別・年代別のすべての層で3割以上が「よくなる」または「少しよくなる」と回答している。年代別で見ると、「少し悪くなる」または「悪くなる」と回答した人の割合は30代～60代が3割以上だが、それ以外の年代においては3割未満である（図 31）。

Q17 の「IoT（インターネット オブ シングス）」の認知度に関して、「知っている」と回答した人の割合は、男女別に見ると、男性で36.9%、女性で12.6%と、男性の方が24.3ポイント高い割合である。年代別に見ると、40代が30.2%と最も高く、18歳、19歳が6.7%と最も低い（図 32）。

Q18 の小学校でのプログラミング教育必修化の認知度に関しては、男女別・年代別のすべての層で2～3割程度が「知っている」と回答している。年代別に見ると、30代が36.0%と最も高く、50代が23.8%と、30代の方が12.2ポイント高い割合である（図 33）。

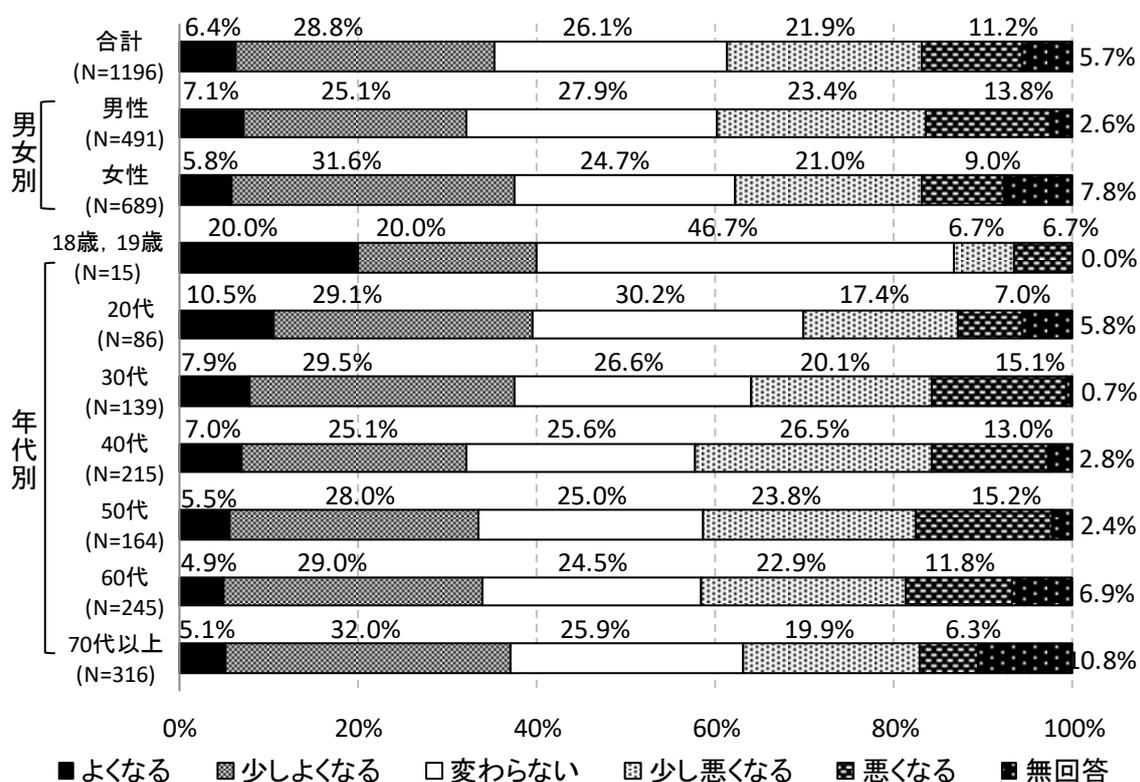


図 31 Q16 高槻インターチェンジ開設後の市内の道路交通状況

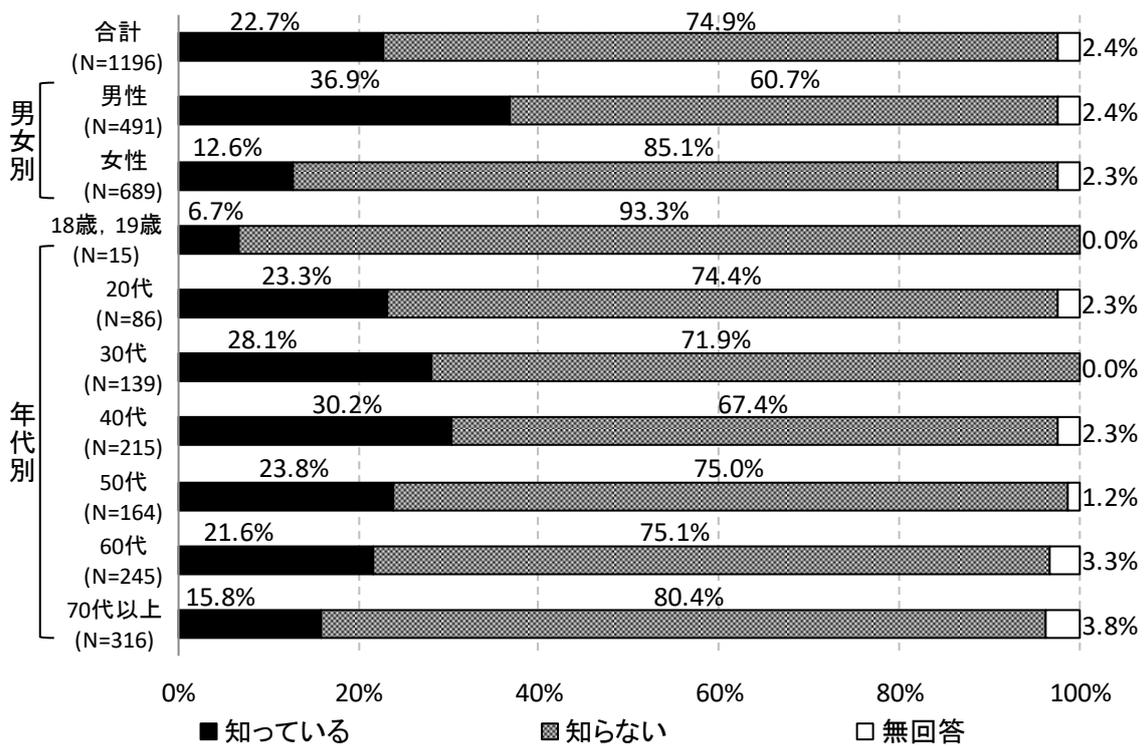


図 32 Q17 「IoT (インターネット オブ シングス)」の認知度

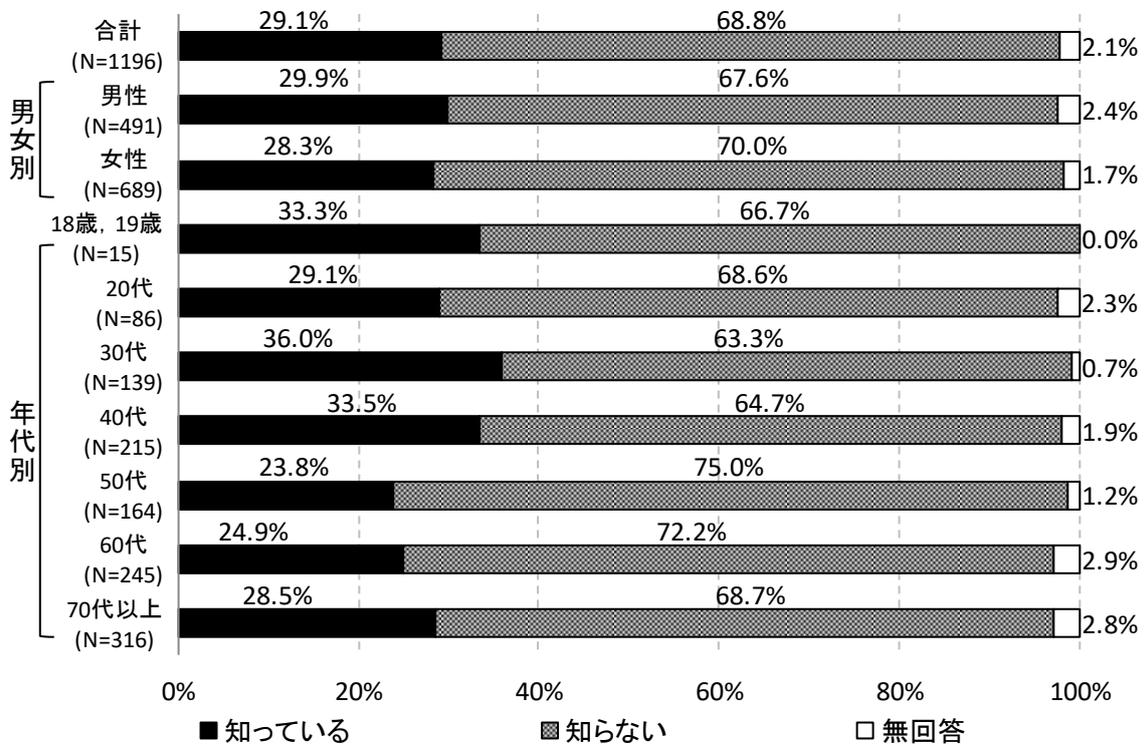


図 33 Q18 小学校でのプログラミング教育必修化の認知度

Q19 のプログラミング経験に関して、「ある」と回答した人の割合は、男女別に見ると、男性で 26.1%、女性で 13.2%と、男性の方が 12.9 ポイント高い割合である。年代別に見ると、20 代が 37.2%と最も高く、20 代から年代が上がるごとに減少し、70 代以上が 8.2%と最も低い（図 34）。

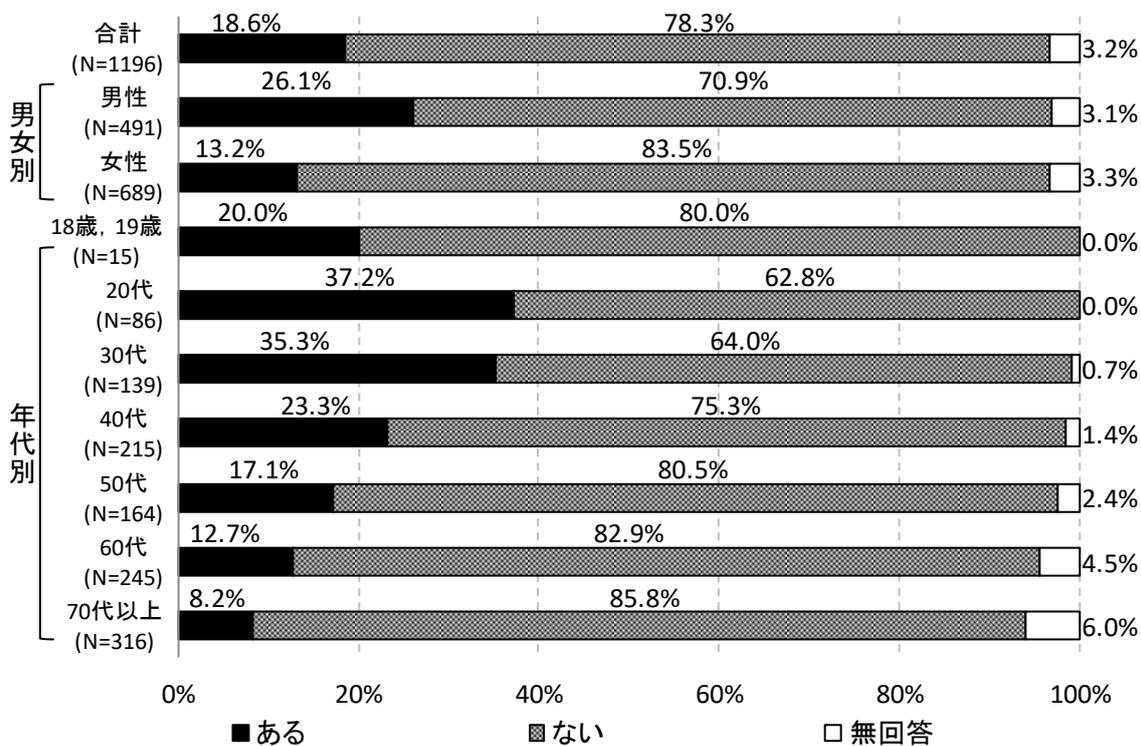


図 34 Q19 プログラミング経験

Q20 のプログラミングの利用場面に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「仕事」が 52.3%と最も高い。2 番目に高い「学校の授業」では 41.9%、次いで「趣味」が 22.5%である（図 35）。

Q20 を男女別で見ると、「仕事」が最も男女差が大きく、男性で 57.0%、女性で 46.2%と、男性の方が 10.8 ポイント高い割合である。反対に、「学校の授業」では男性で 39.8%、女性で 46.2%と、女性の方が 6.4 ポイント高い（図 36）。

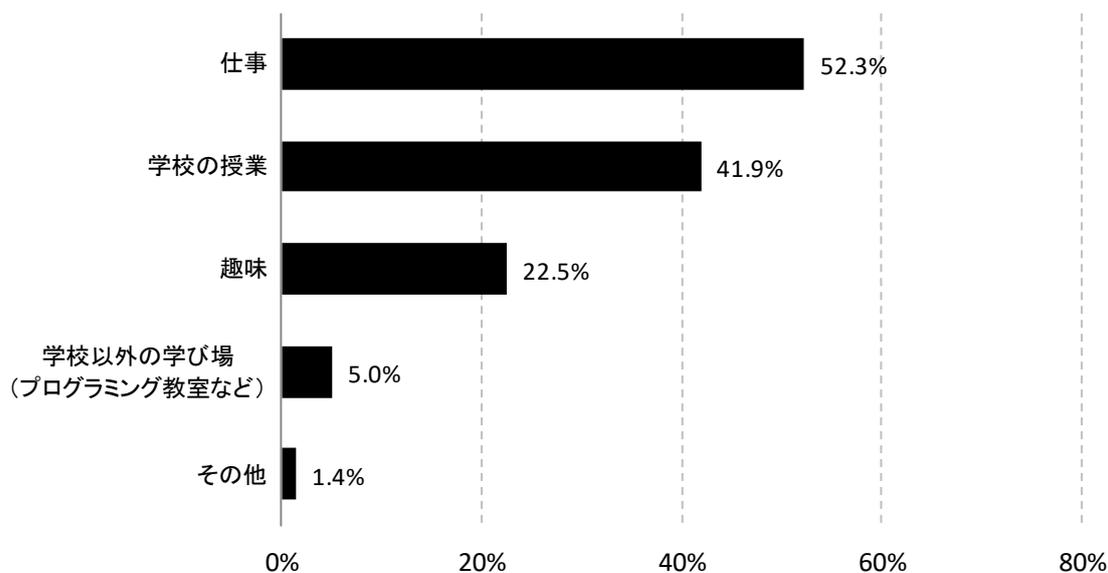


図 35 Q20 プログラミングの利用場面（複数回答・全体 N=222）

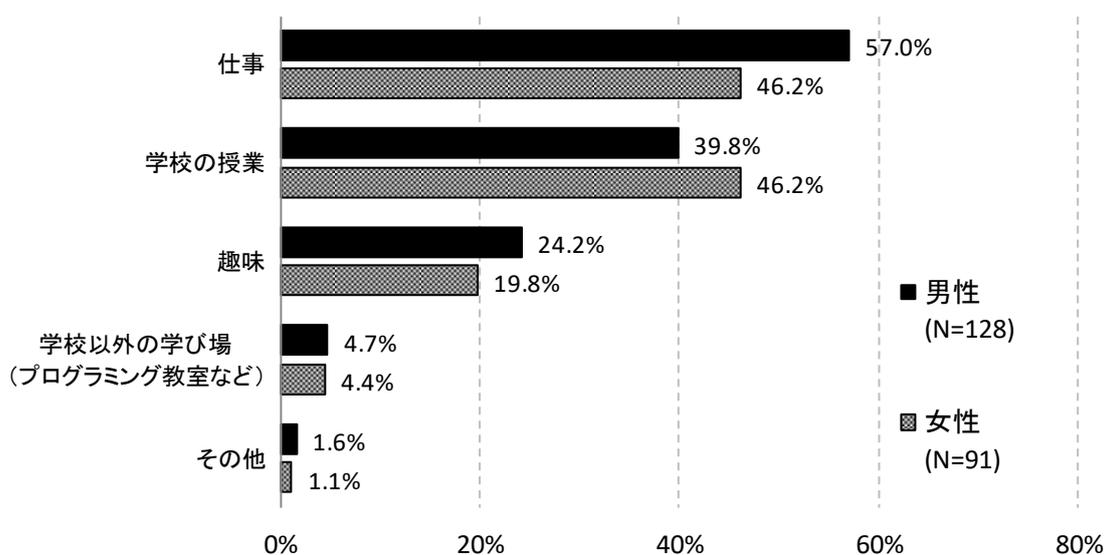


図 36 Q20 プログラミングの利用場面（複数回答・男女別）

Q20 を年代別で見ると、「仕事」の割合は、50代が75.0%と最も高く、60代が67.7%と2番目に高い。「学校の授業」の割合は、年代が上がるごとに減少する。「趣味」と回答した人の割合は20代では約12.5%であるが、50代を除いて年代が上がるごとに増加し、70代以上では42.3%と最も高い（図 37）。

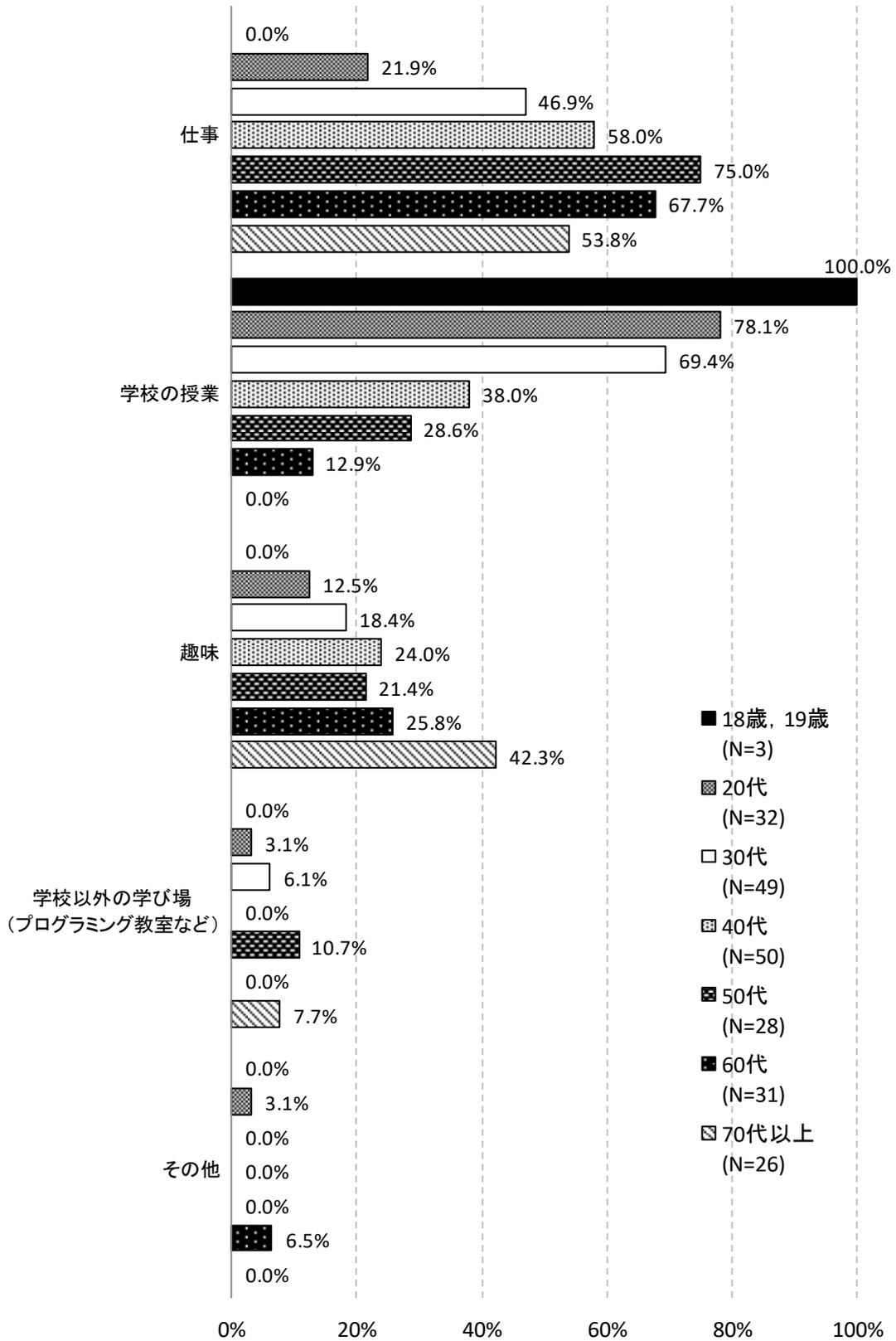


図 37 Q20 プログラミングの利用場面（複数回答・年代別）

Q21 のインターネットの利用状況に関して、「利用する」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代が98.8%と最も高く、年代が上がるごとに減少し、70代以上では32.6%と最も低くなっている（図38）。

Q22 のパソコンでのインターネットの1日あたり利用時間に関して、男女別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合が最も男女差が大きく、男性で29.8%、女性で46.7%と、女性の方が16.9ポイント高い。年代別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合は18歳、19歳で69.2%、20代で37.2%と、20代の方が32ポイント低い（図39）。

Q23 のスマートフォン・タブレット端末でのインターネットの1日あたり利用時間に関して、「30分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代以下において1割にも満たないが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では50.9%と最も高くなっている（図40）。

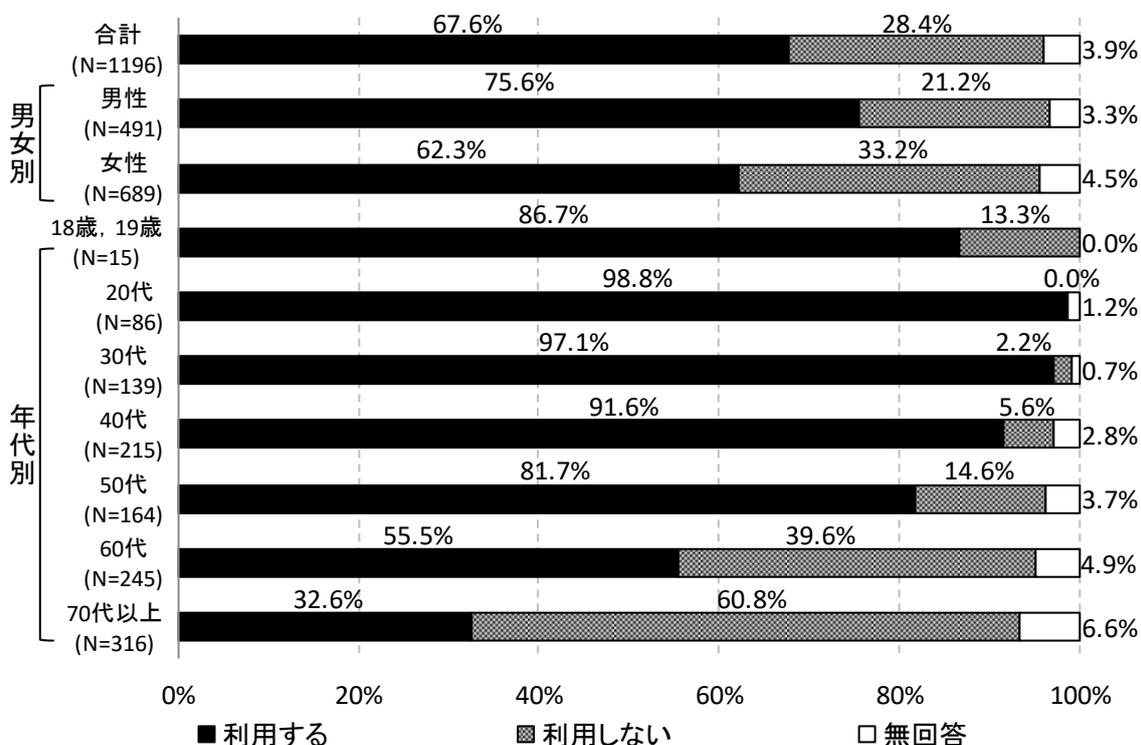


図38 Q21 インターネットの利用状況

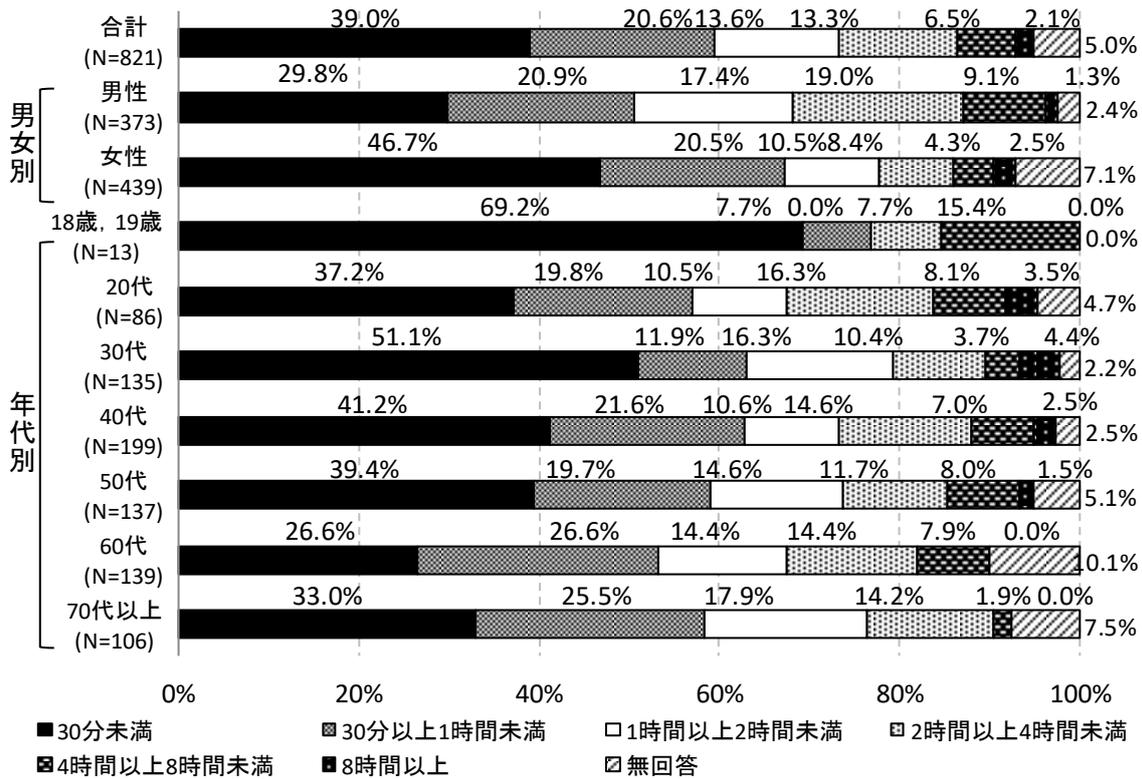


図 39 Q22 パソコンでのインターネットの1日あたり利用時間

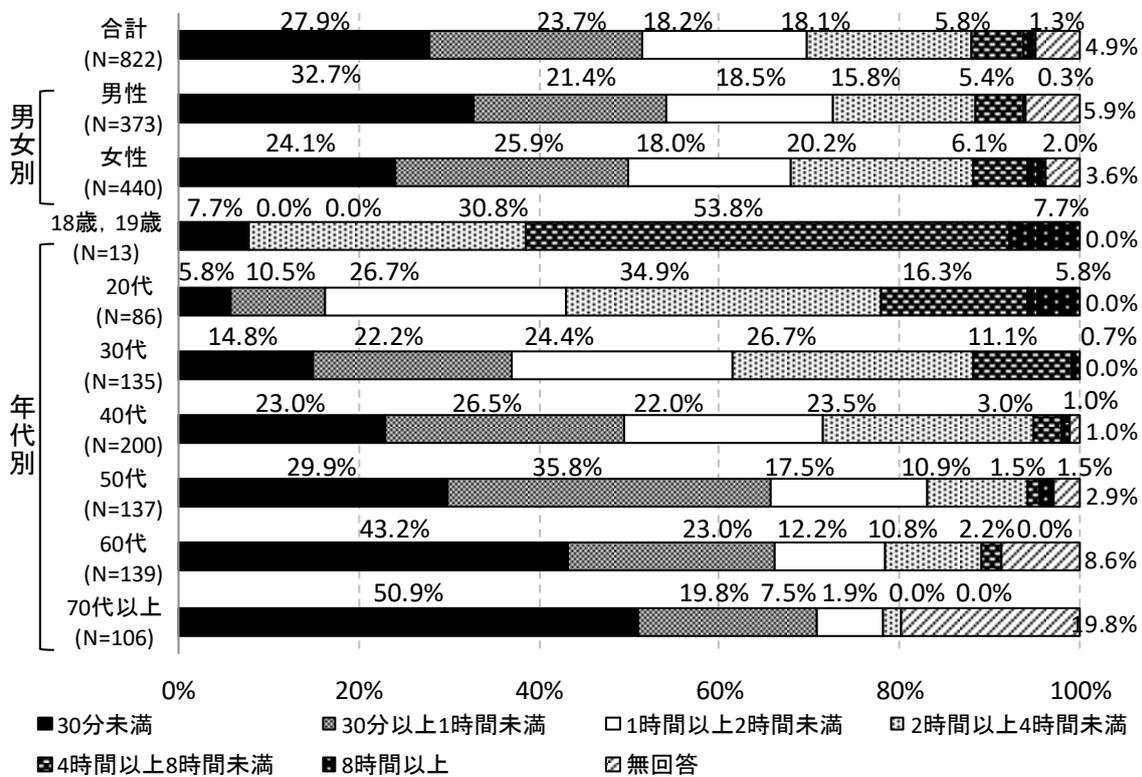


図 40 Q23 スマートフォン・タブレット端末でのインターネットの1日あたり利用時間

Q24 のインターネットの利用目的に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「ウェブ上での情報の収集」が 84.5%と最も高い。次いで「電子メールの送受信」が 66.9%である。「動画の視聴・投稿」「オンラインショッピングの利用」「SNS(Twitter,Line,Facebook など)の利用」は 4 割程度である（図 41）。

Q24 を男女別で見ると、「SNS(Twitter,LINE,Facebook など)の利用」が最も男女差が大きく、男性で 30.6%、女性で 50.3%と、女性の方が 20 ポイントほど高い割合である。反対に、「電子メールの送受信」では男性で 70.8%、女性で 63.6%と、男性の方が 7.2 ポイント高い（図 42）。

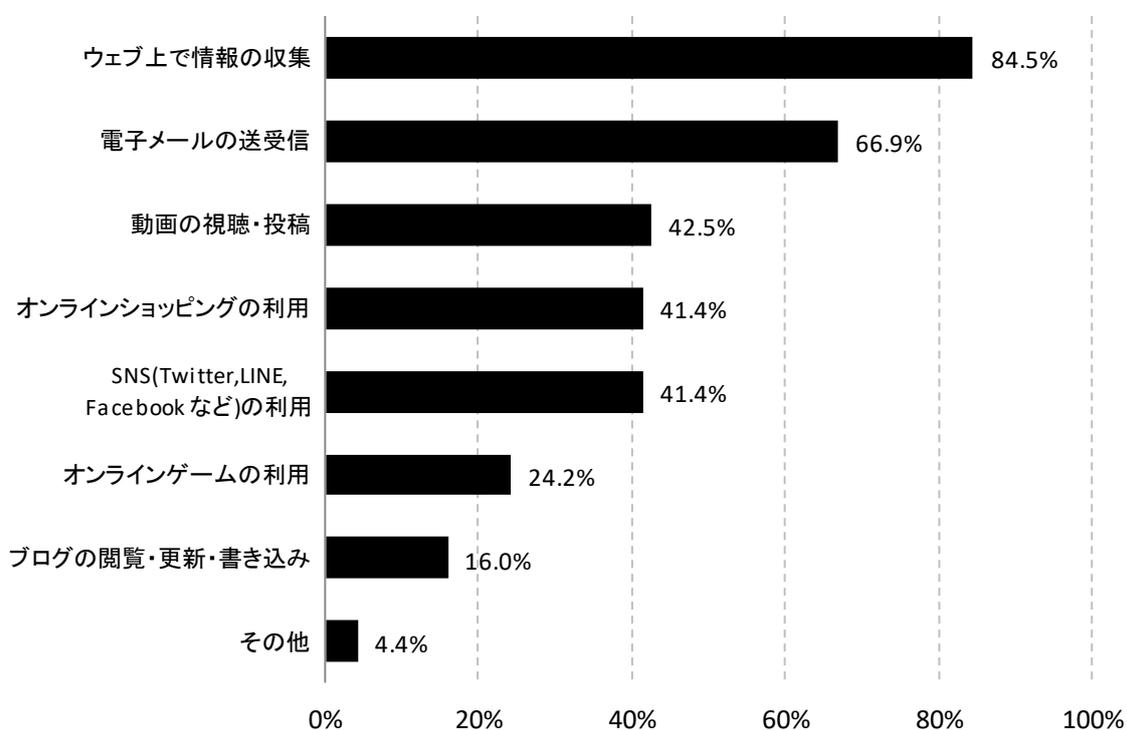


図 41 Q24 インターネットの利用目的（複数回答・全体 N=821）

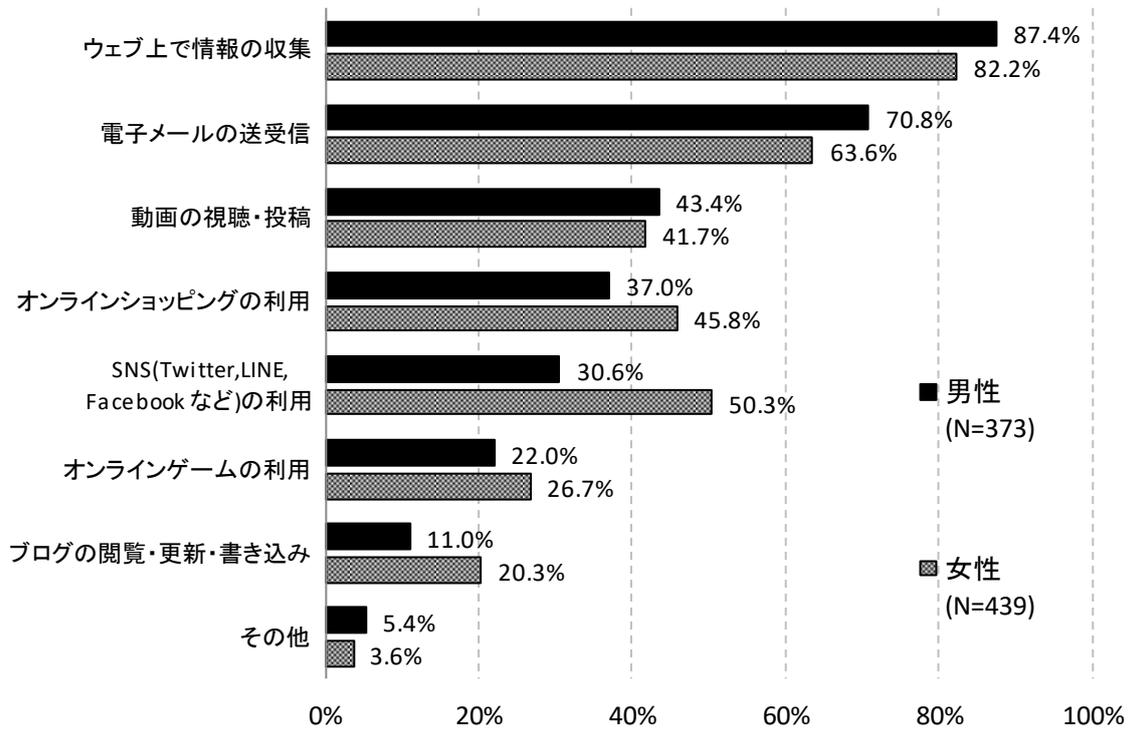


図 42 Q24 インターネットの利用目的（複数回答・男女別）

Q24 を年代別で見ると、「電子メールの送受信」の割合は、40 代以上において 6 割以上あるのに対し、40 代未満は 6 割にも満たない。「動画の視聴・投稿」と回答した人の割合は 18 歳、19 歳では 92.3%であるが、50 代を除いて年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 20.8%と最も低くなっている。「SNS(Twitter,LINE,Facebook など)の利用」の割合は、18 歳、19 歳が 92.3%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 14.2%と最も低い (図 43)。

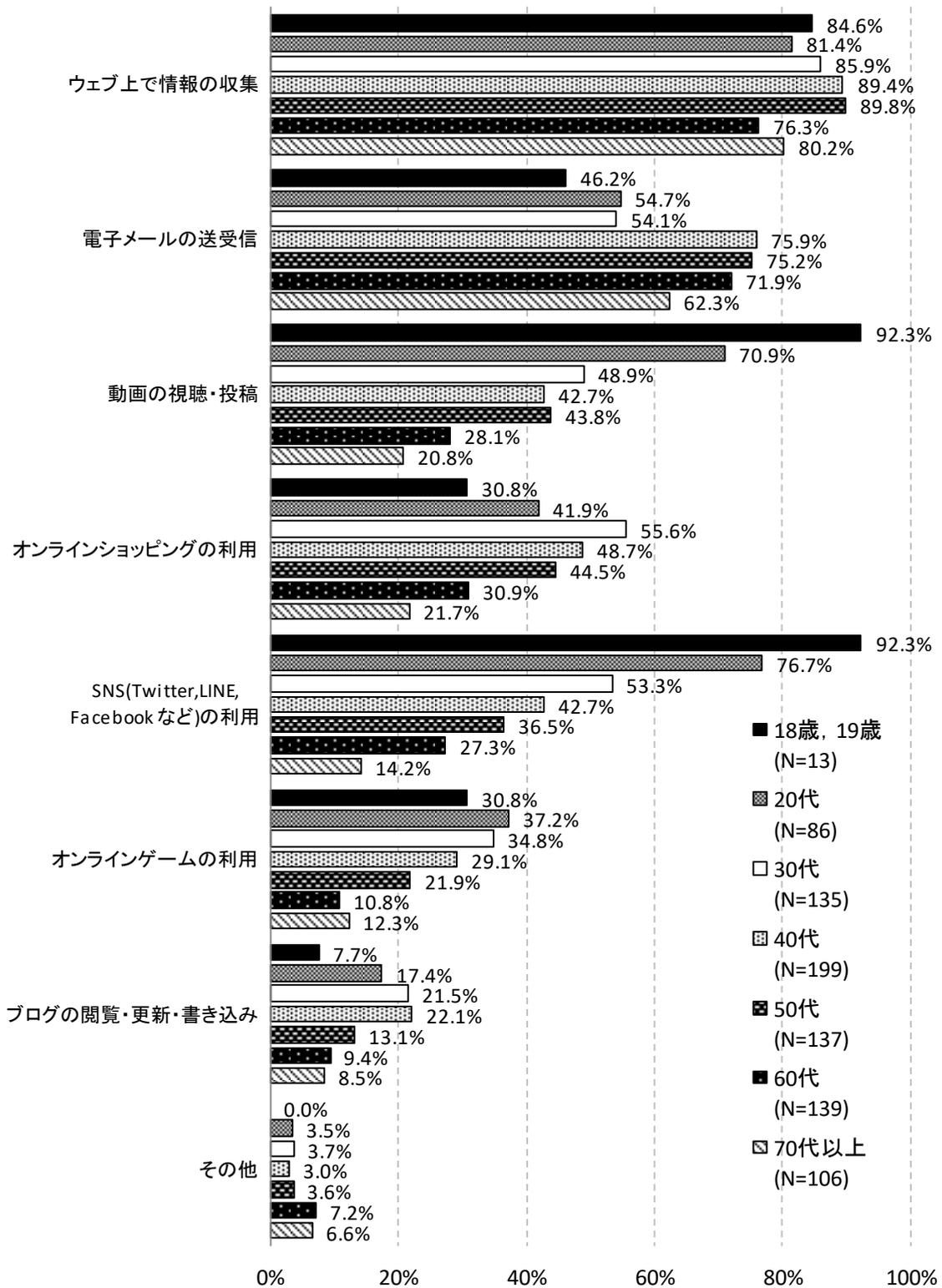


図 43 Q24 インターネットの利用目的（複数回答・年代別）

Q25A の情報をすぐに得ることができるという印象を持つ情報媒体に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「テレビ」が 69.6%と最も高い。次いで、「インターネット」が 63.6%と 2 番目に高い (図 44)。

Q25A を男女別で見ると、「インターネット」が最も男女差が大きく、男性で 68.0%、女性で 60.8%と、男性の方が 7.2ポイント高い割合である。反対に、「テレビ」では男性で 68.6%、女性で 70.2%と、女性の方が 1.6ポイント高い (図 45)。

Q25A を年代別で見ると、「テレビ」の割合は、20代が 48.8%と最も低いが、18歳、19歳を除いて年代が上がるごとに増加し、70代以上では 85.8%と最も高い。この傾向は「新聞」、「ラジオ」、「雑誌」も同様である。「インターネット」と回答した人の割合は 60代未満において 8割以上であるが、60代以上は 6割にも満たない (図 46)。

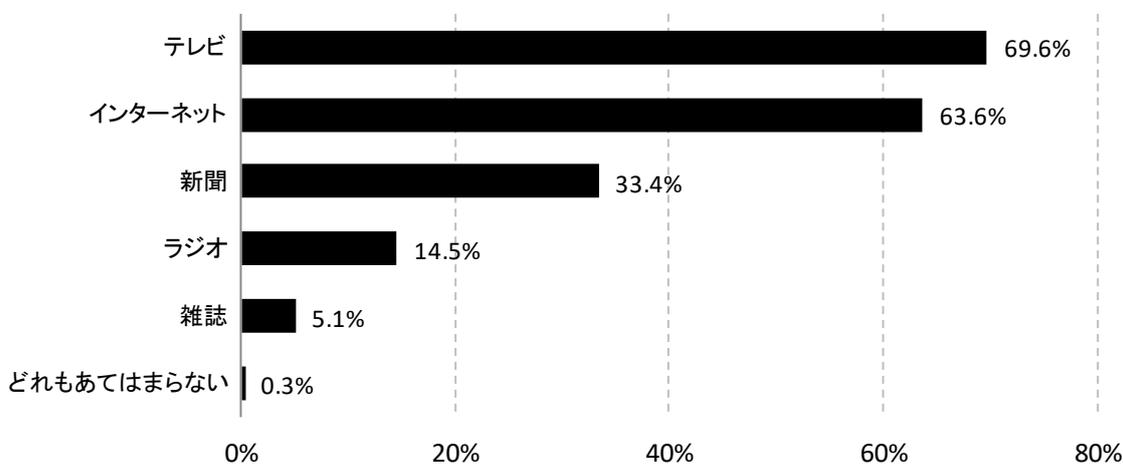


図 44 Q25A 情報媒体への印象：情報をすぐに得ることができる(複数回答・全体 N=1196)

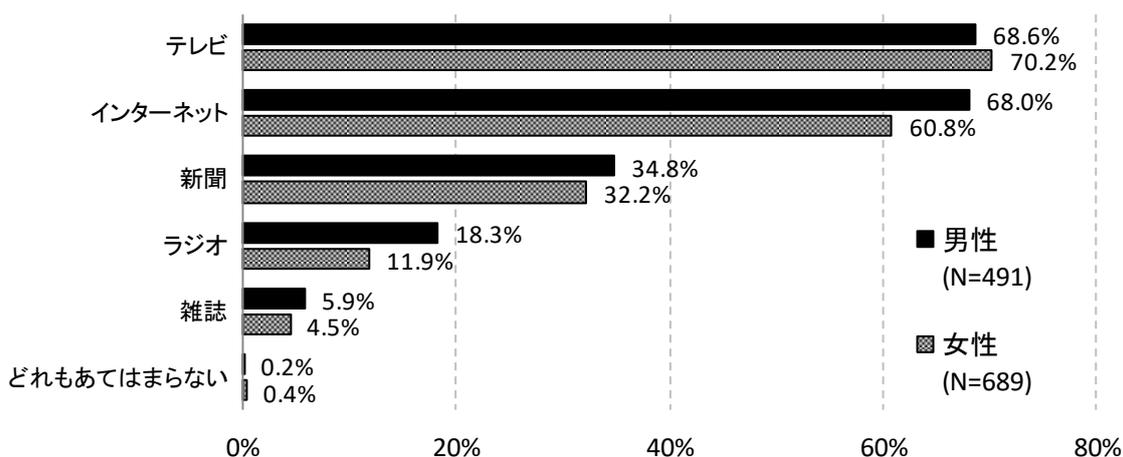


図 45 Q25A 情報媒体への印象：情報をすぐに得ることができる(複数回答・男女別)

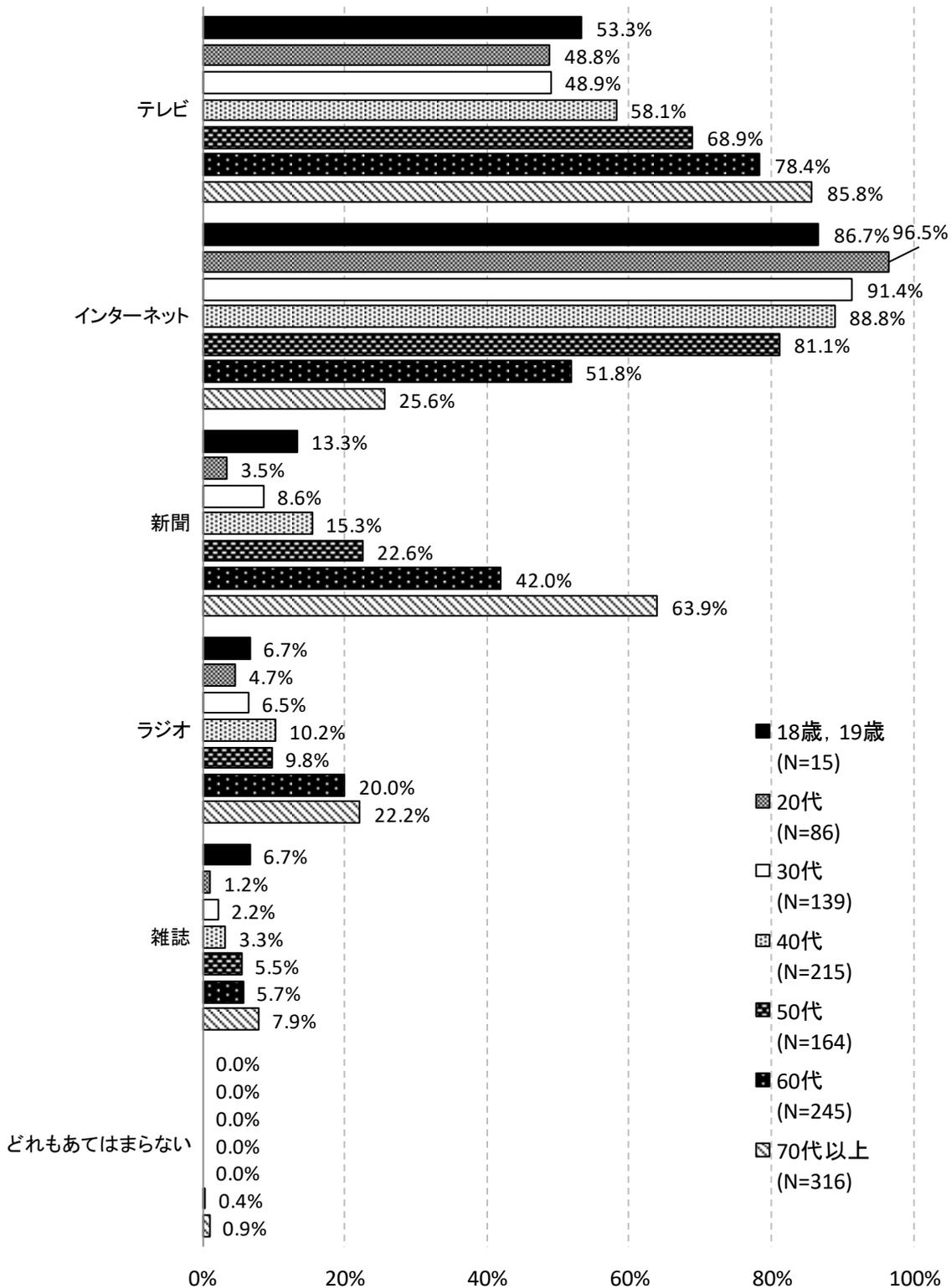


図 46 Q25A 情報媒体への印象：情報をすぐに得ることができる(複数回答・年代別)

Q25Bの情報を信頼できるという印象を持つ情報媒体に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「テレビ」と「新聞」で5割以上であり、その他の項目は2割にも満たない（図 47）。

Q25Bを男女別で見ると、「インターネット」が最も男女差が大きく、男性で18.9%、女性で11.9%と、男性の方が7ポイント高い割合である。反対に、「テレビ」では男性で51.1%、女性で55.0%と、女性の方が4ポイントほど高い（図 48）。

Q25Bを年代別で見ると、「テレビ」の割合は、20代が33.7%と最も低いが、18歳、19歳を除いて年代が上がるごとに増加し、70代以上では66.1%と最も高くなっている。この傾向は「新聞」、「ラジオ」も同様であるが、一部の年代で数ポイント前後している。また、「インターネット」と回答した人の割合は70代以上が9.5%と最も低いのにに対し、50代が20.1%と、50代の方が9.5ポイント高い（図 49）。

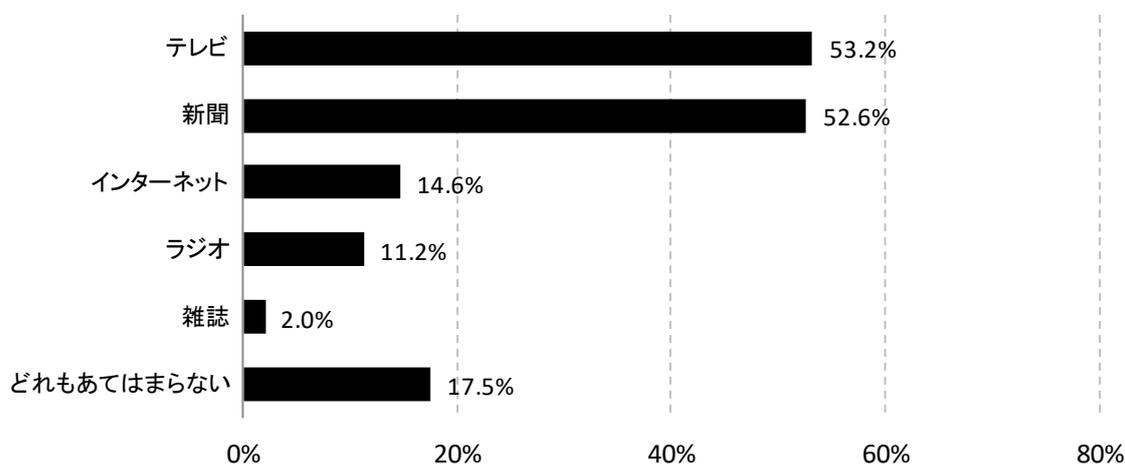


図 47 Q25B 情報媒体への印象：情報を信頼できる（複数回答・全体 N=1196）

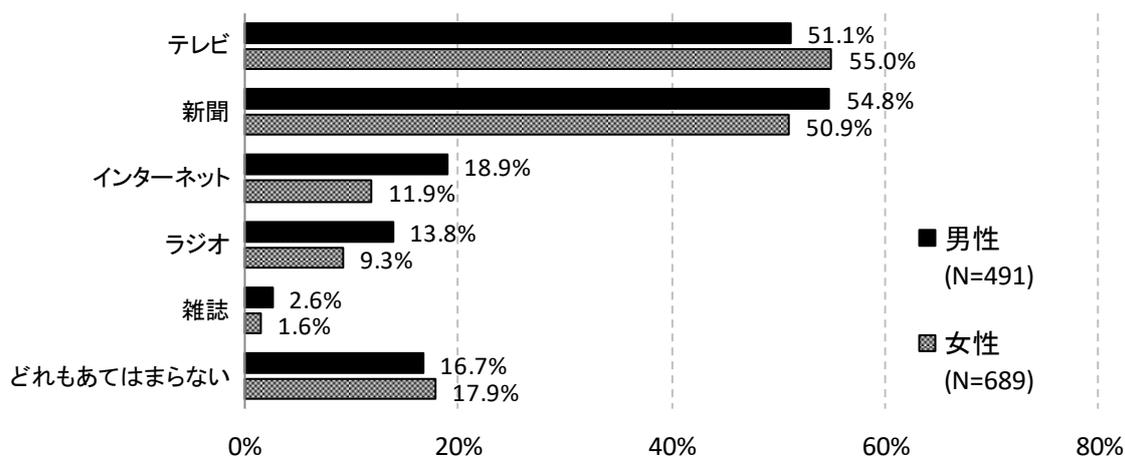


図 48 Q25B 情報媒体への印象：情報を信頼できる（複数回答・男女別）

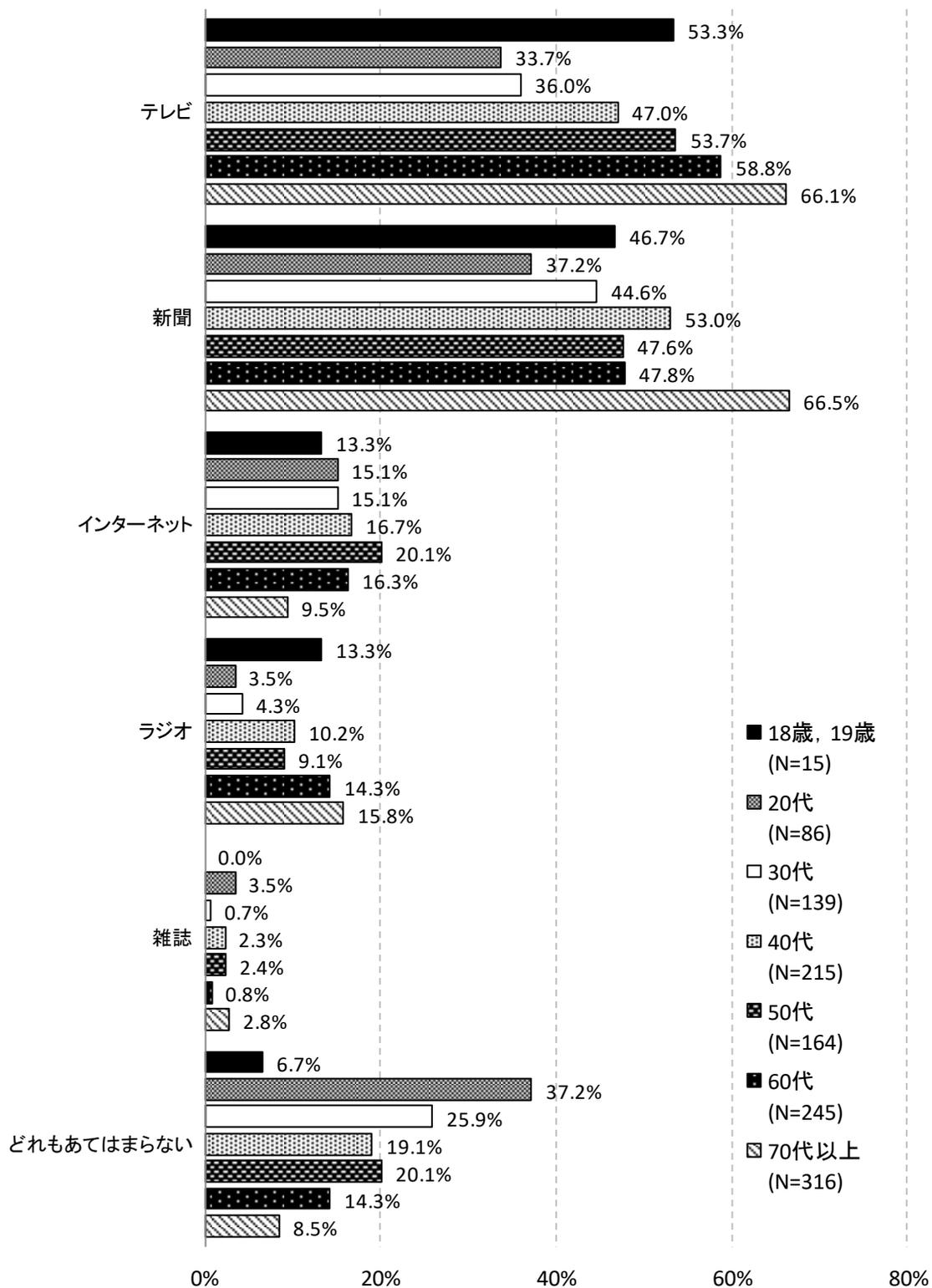


図 49 Q25B 情報媒体への印象：情報を信頼できる（複数回答・年代別）

Q25C の情報を簡単に手に入れることができるという印象を持つ情報媒体に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「インターネット」と「テレビ」で 6 割程度であり、その他の項目は 3 割にも満たない（図 50）。

Q25C を男女別で見ると、「テレビ」が最も男女差が大きく、男性で 54.0%、女性で 64.0%と、女性の方が 10 ポイント高い割合である。反対に、「インターネット」では男性で 68.2%、女性で 59.9%と、男性の方が 8.3 ポイント高い（図 51）。

Q25C を年代別で見ると、「インターネット」と回答した人の割合は 70 代以上が 24.1%と最も低いのにに対し、20 代が 97.7%と、20 代の方が 73.6 ポイント高い。「テレビ」の割合は、18 歳、19 歳が 33.3%と最も低いが、20 代を除いて年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 79.4%と最も高くなっている。この傾向は「新聞」、「ラジオ」も同様であるが、一部の年代で数ポイント前後している（図 52）。

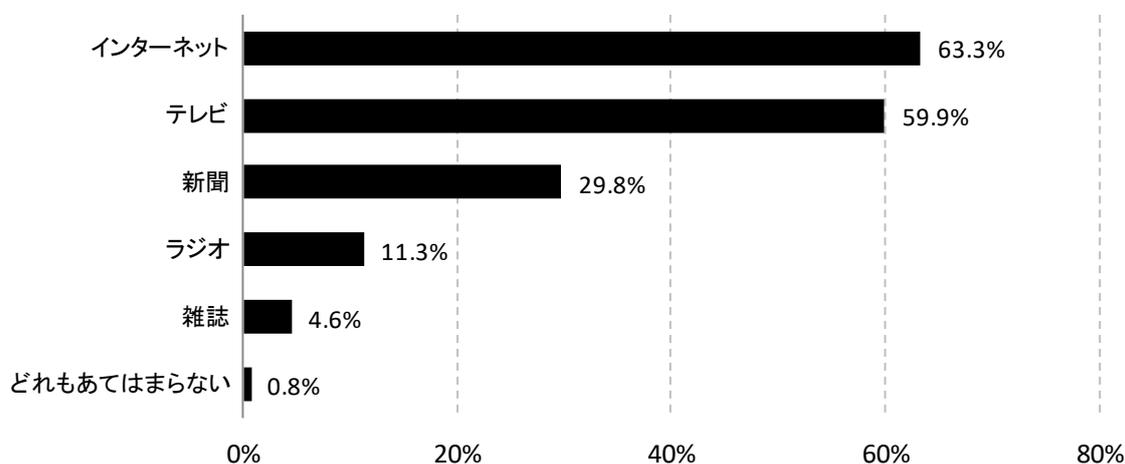


図 50 Q25C 情報媒体への印象：情報を簡単に手に入れることができる（複数回答・全体 N=1196）

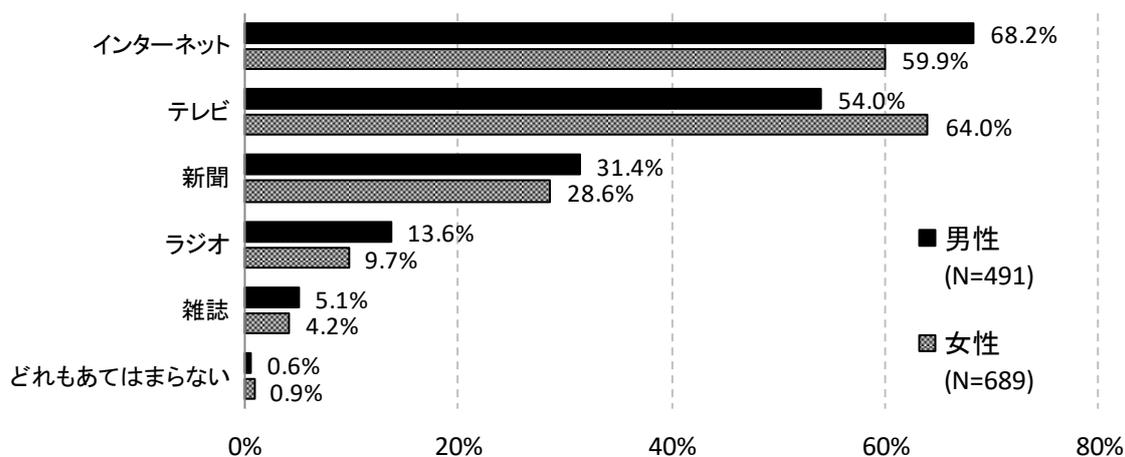


図 51 Q25C 情報媒体への印象：情報を簡単に手に入れることができる（複数回答・男女別）

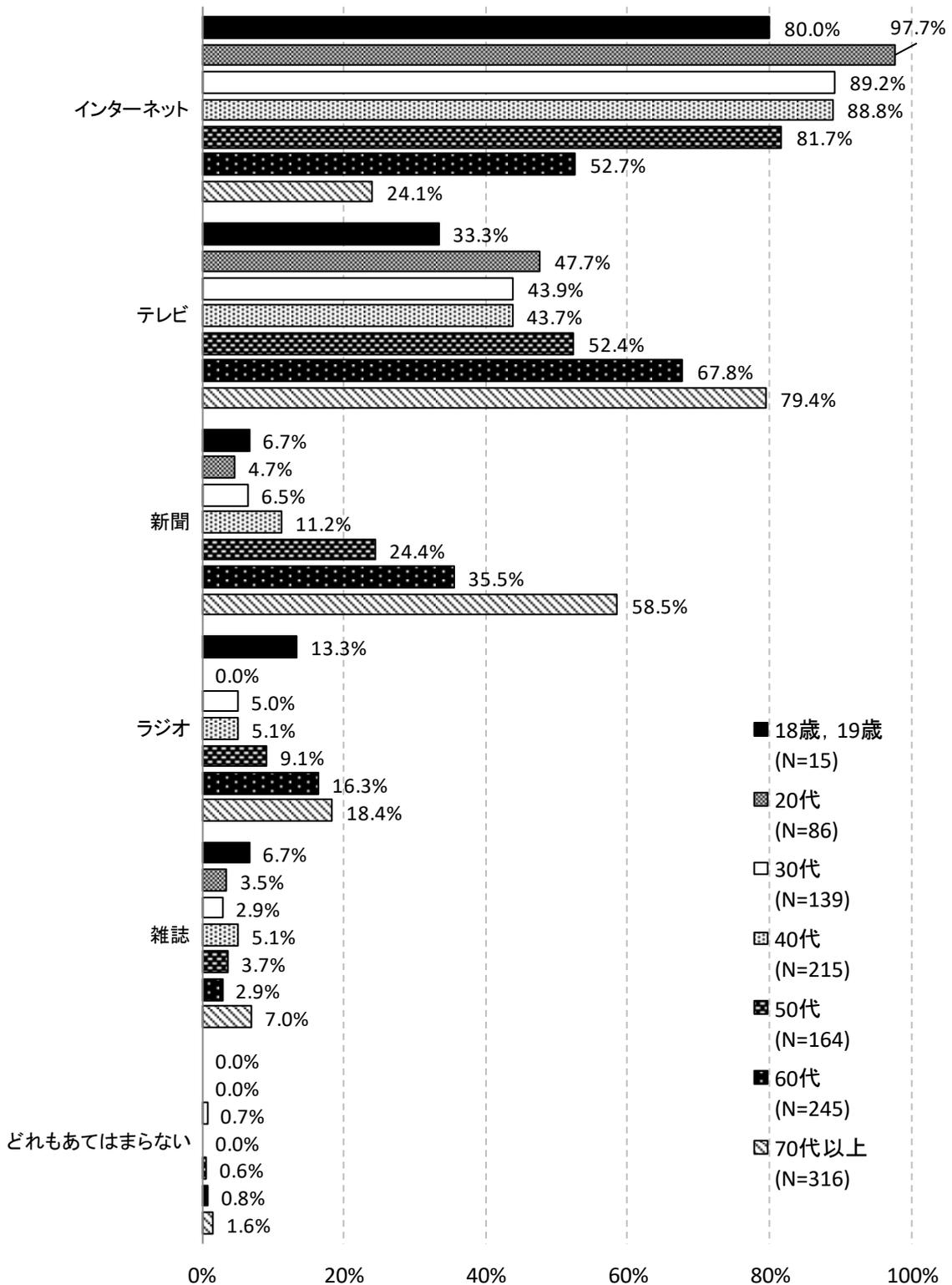


図 52 Q25C 情報媒体への印象：情報を簡単に手に入れることができる（複数回答・年代別）

Q25D の情報の量が多いという印象を持つ情報媒体に関しては、複数回答でその項目を選
 択した人の割合で見ると、全体では、「インターネット」が 60.8%と最も高く、次いで「テ
 レビ」で 43.6%、「新聞」で 27.0%の順に高い（図 53）。

Q25D を男女別で見ると、「テレビ」が最も男女差が大きく、男性で 37.9%、女性で 47.8%
 と、女性の方が 10 ポイントほど高い割合である。反対に、「新聞」では男性で 33.2%、女性
 で 22.6%と、男性の方が 10 ポイントほど高い（図 54）。

Q25D を年代別で見ると、「インターネット」と回答した人の割合は 70 代以上が 24.4%
 と最も低いのにに対し、20 代が 89.5%と、20 代の方が 65.1 ポイント高い。「テレビ」の割合
 は、18 歳、19 歳が 20.0%と最も低いが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 67.7%
 と最も高くなっている。この傾向は一部の年代を除いて「新聞」、「ラジオ」も同様である（図
 55）。

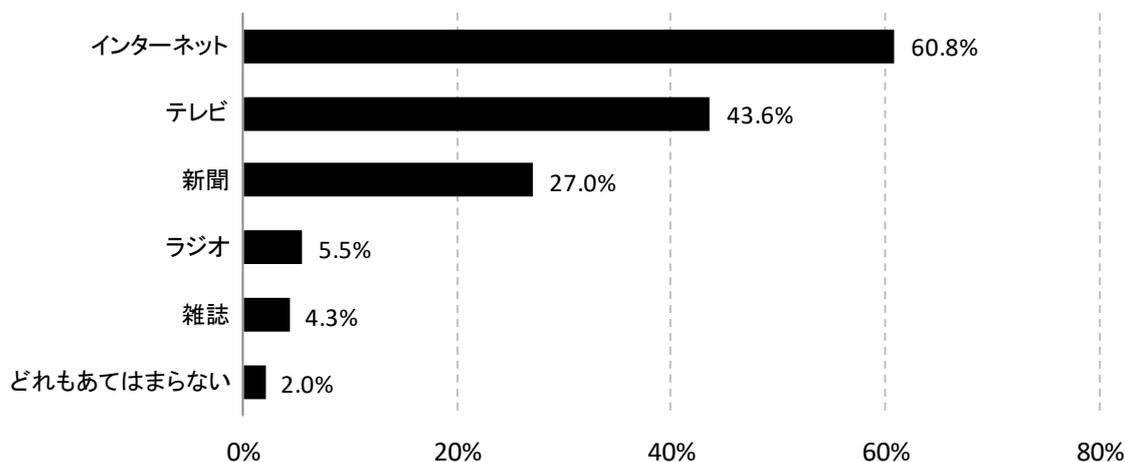


図 53 Q25D 情報媒体への印象：情報の量が多い（複数回答・全体 N=1196）

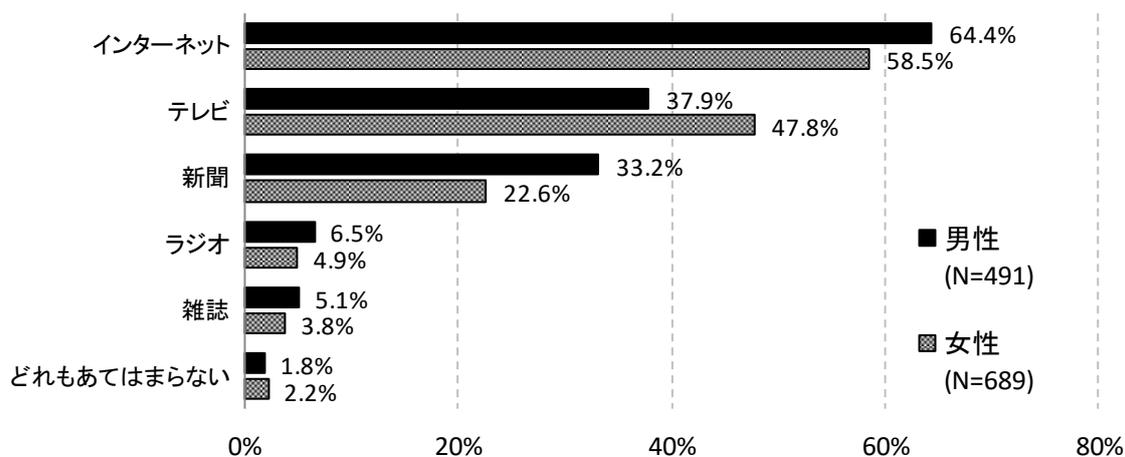


図 54 Q25D 情報媒体への印象：情報の量が多い（複数回答・男女別）

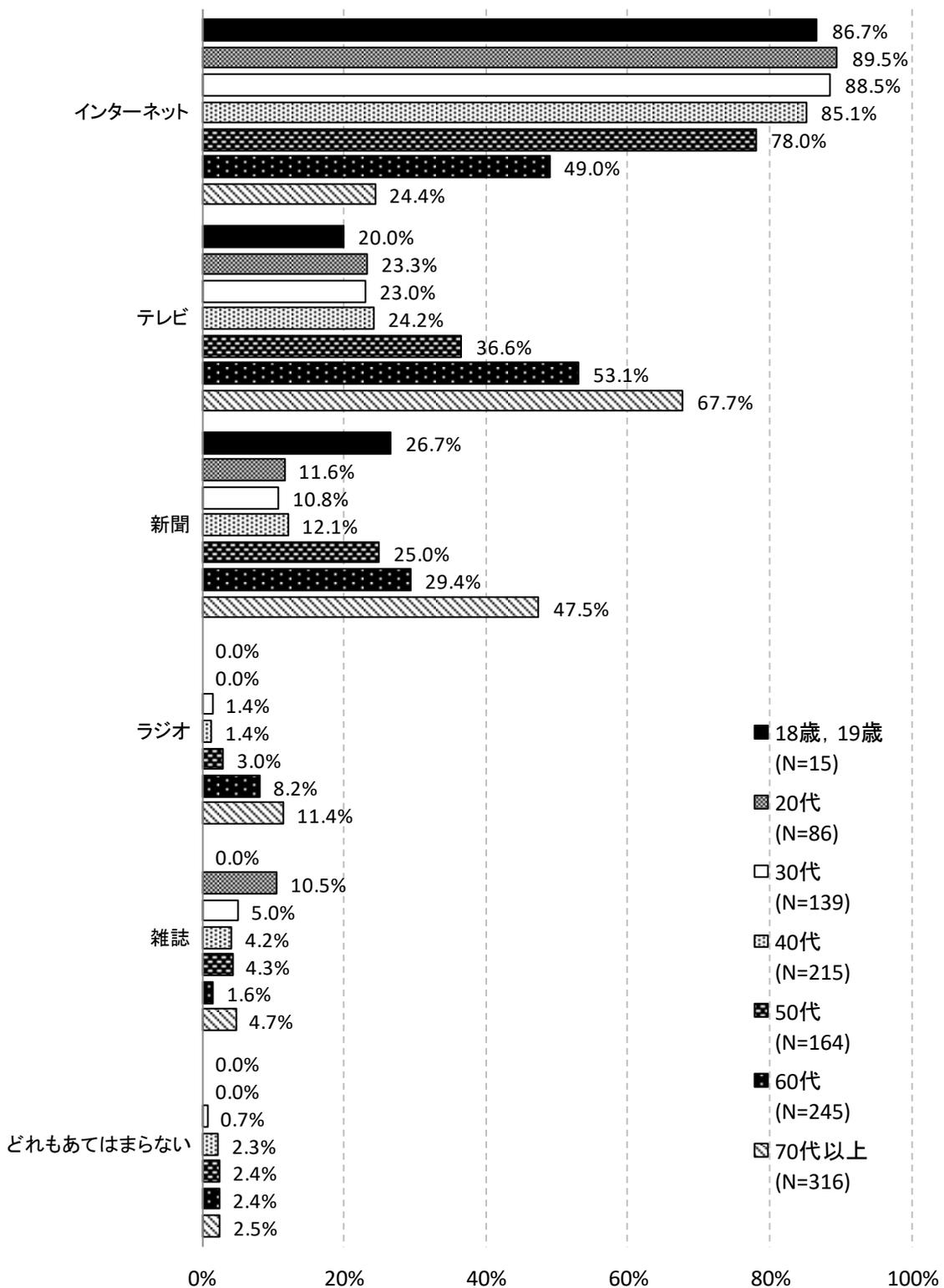


図 55 Q25D 情報媒体への印象：情報の量が多い（複数回答・年代別）

Q26 の日常的に利用する情報媒体に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「テレビ」が 84.8%と最も高く、次いで「インターネット」で 62.3%、「新聞」で 53.0%の順に高い（図 56）。

Q26 を男女別で見ると、「インターネット」が最も男女差が大きく、男性で 68.6%、女性で 58.1%と、男性の方が 10 ポイントほど高い割合である。反対に、「テレビ」では男性で 82.1%、女性で 86.8%と、女性の方が 4.7 ポイント高い（図 57）。

Q26 を年代別で見ると、「テレビ」の割合は、18 歳、19 歳が 66.7%と最も低いが、20 代を除いて年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 90.5%と最も高くなっている。この傾向は一部の年代を除いて「新聞」、「ラジオ」も同様である。また、「インターネット」と回答した人の割合は 70 代以上が 24.7%と最も低いのに対し、20 代が 98.8%と、20 代の方が 74.1 ポイント高い（図 58）。

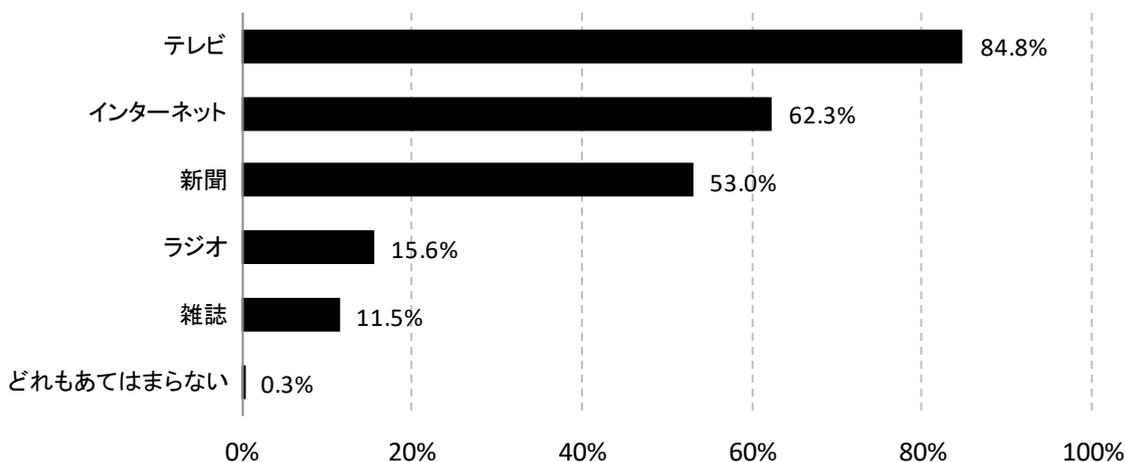


図 56 Q26 日常的に利用する情報媒体（複数回答・全体 N=1196）

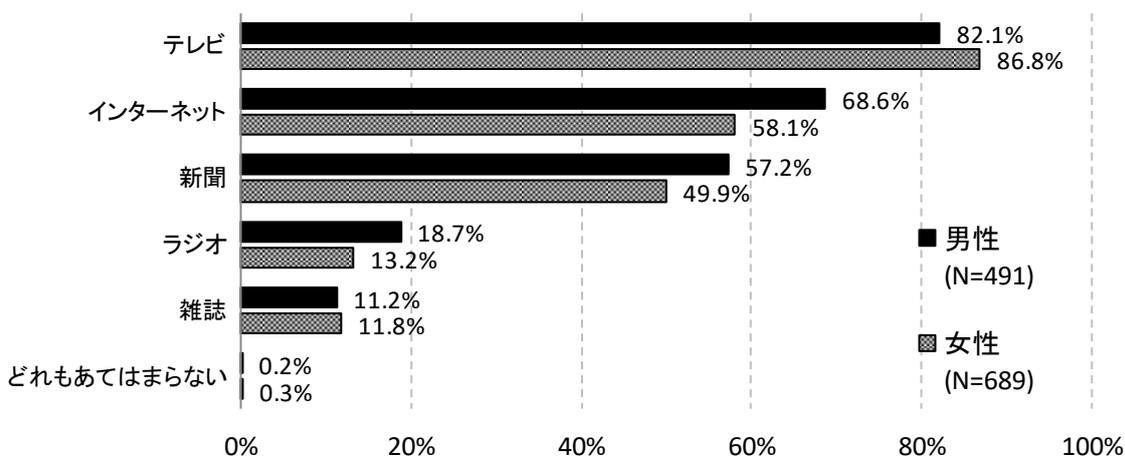


図 57 Q26 日常的に利用する情報媒体（複数回答・男女別）

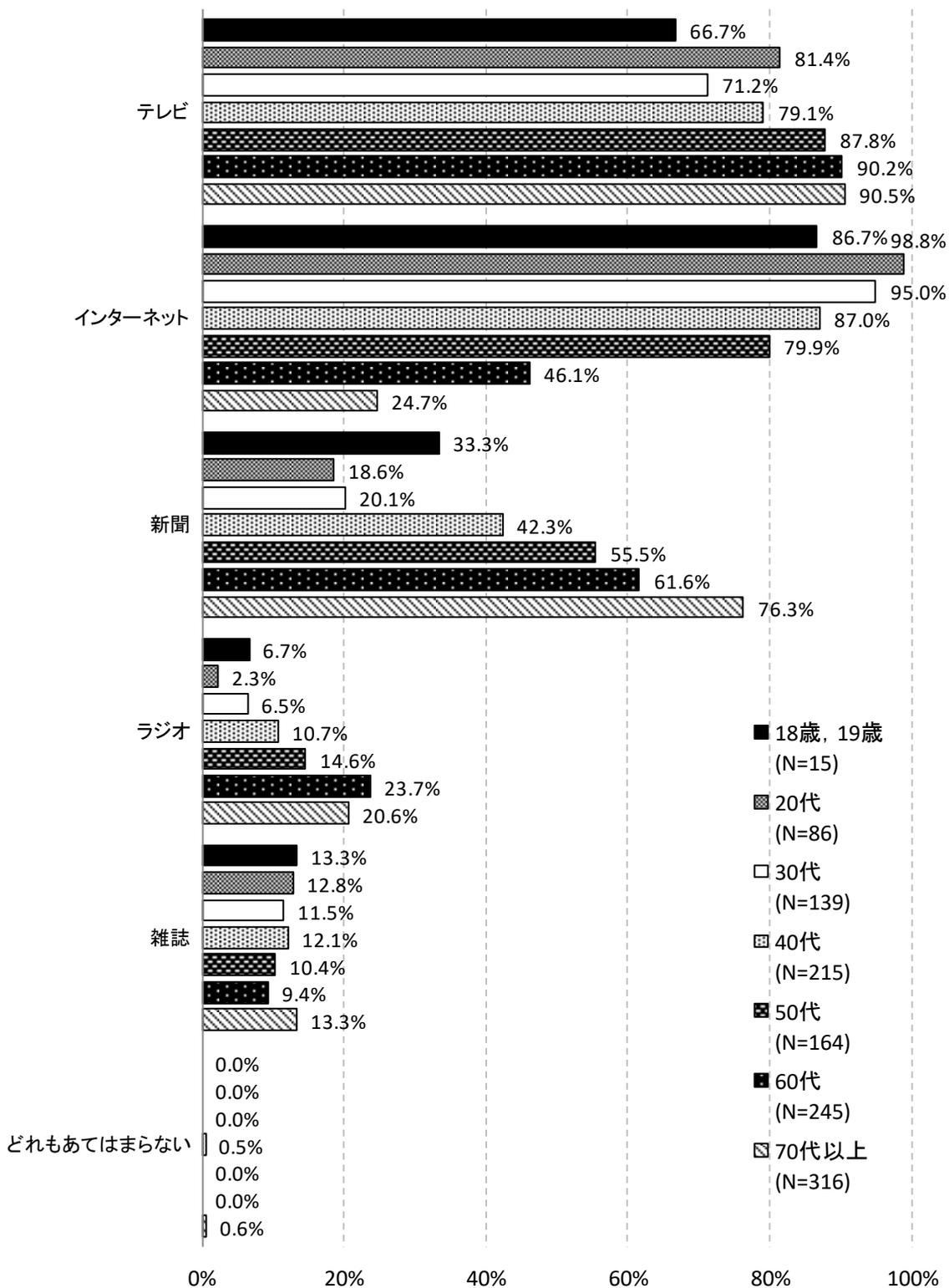


図 58 Q26 日常的に利用する情報媒体（複数回答・年代別）

Q27 の地域イベント情報の現在の入手方法に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「市の広報誌」が 70.2%と最も高く、次いで「回覧板」で 45.2%が 2 番目に高い。その他の項目は 4 割未満の割合である（図 59）。

Q27 を男女別で見ると、「家族や知人」が最も男女差が大きく、男性で 26.1%、女性で 36.6%と、女性の方が 10 ポイントほど高い割合である。反対に、「ホームページ」が男性で 11.4%、女性で 8.1%と、男性の方が 3.3 ポイント高い（図 60）。

Q27 を年代別で見ると、「市の広報誌」の割合は、18 歳、19 歳が 26.7%と最も低いが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 79.4%と最も高くなっている。この傾向は一部の年代を除いて「回覧板」も同様である。「SNS(Twitter,LINE など)」と回答した人の割合は 40 代以上が 1 割未満であるのに対し、30 代未満が 1 割以上である（図 61）。

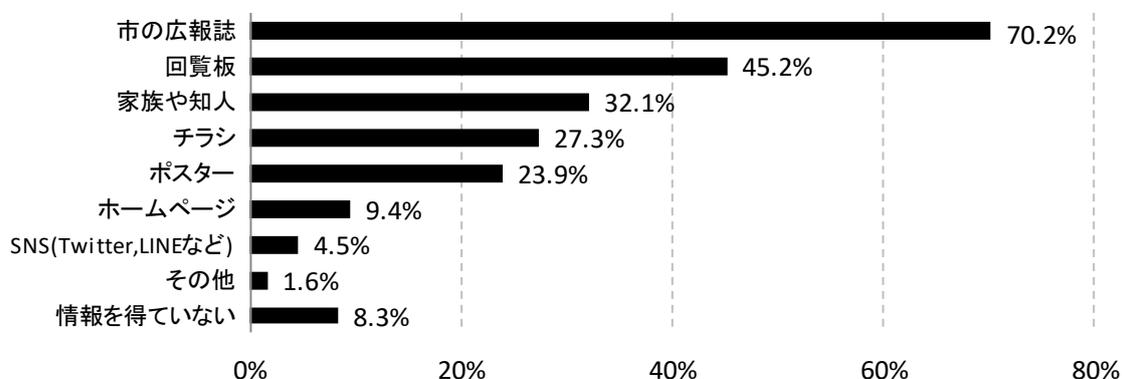


図 59 Q27 地域イベント情報の現在の入手方法（複数回答・全体 N=1196）

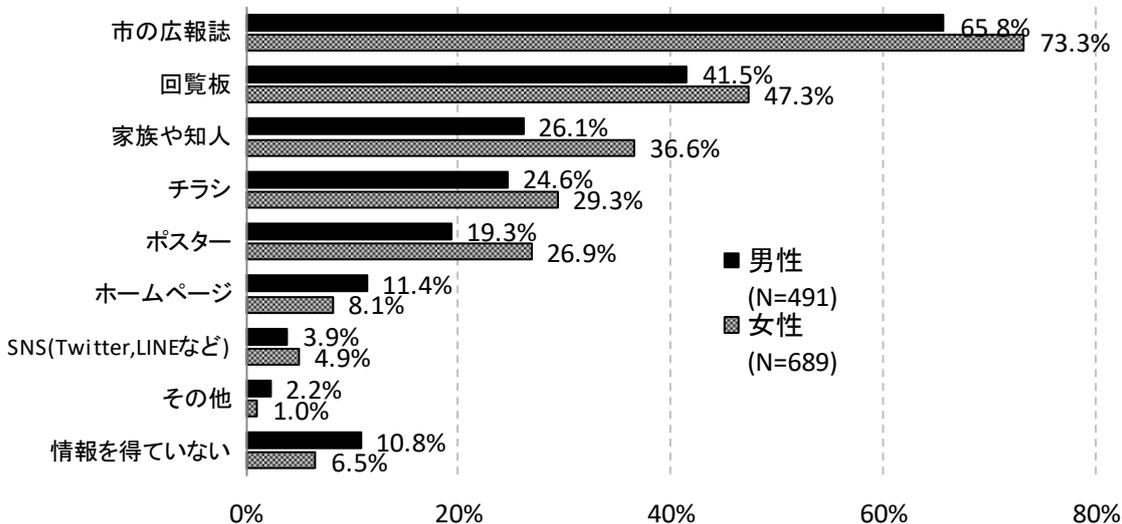


図 60 Q27 地域イベント情報の現在の入手方法（複数回答・男女別）

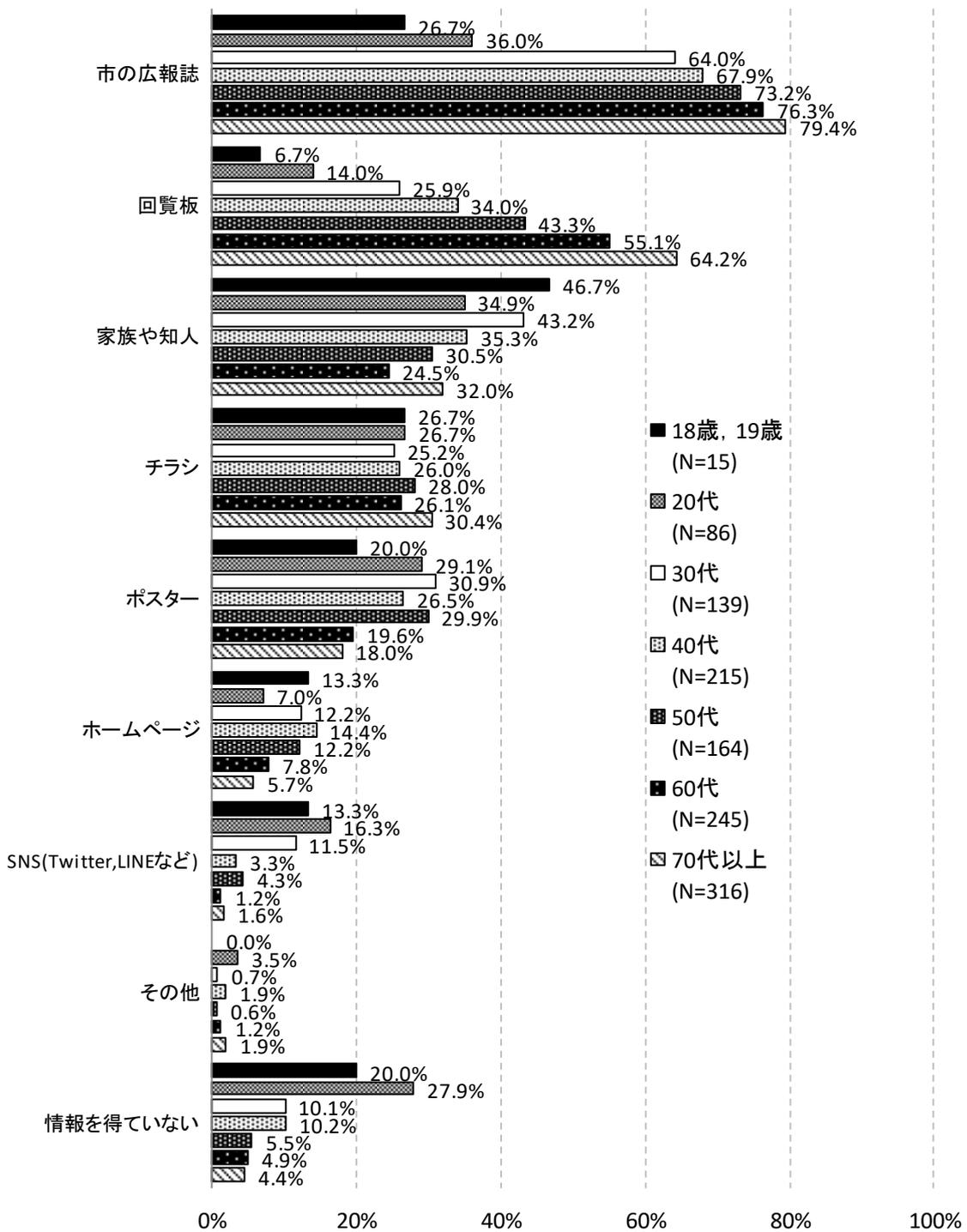


図 61 Q27 地域イベント情報の現在の入手方法（複数回答・年代別）

Q28 の地域イベント情報の今後の入手方法に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「市の広報誌」が 70.4%と最も高く、次いで「回覧板」が 36.7%と 2 番目に高い。その他の項目は 3 割以下の割合である（図 62）。

Q28 を男女別で見ると、「ホームページ」が最も男女差が大きく、男性で 25.1%、女性で 15.1%と、男性の方が 10 ポイント高い割合である。反対に、「チラシ」では男性で 23.6%、女性で 28.9%と、女性の方が 5.3 ポイント高い（図 63）。

Q28 を年代別で見ると、「市の広報誌」の割合は、18 歳、19 歳が 26.7%と最も低いが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 81.0%と最も高くなっている。この傾向は「回覧板」も同様である。反対に、「SNS(Twitter,LINE など)」と回答した人の割合は 18 歳、19 歳が 40.0%と最も高いのに対し、70 代以上が 2.5%と、18 歳、19 歳の方が 37.5 ポイント高い（図 64）。

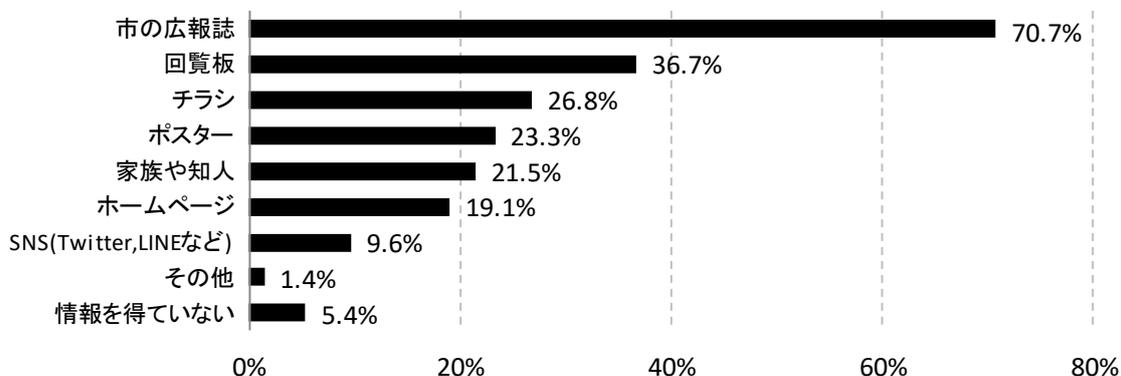


図 62 Q28 地域イベント情報の今後の入手方法（複数回答・全体 N=1196）

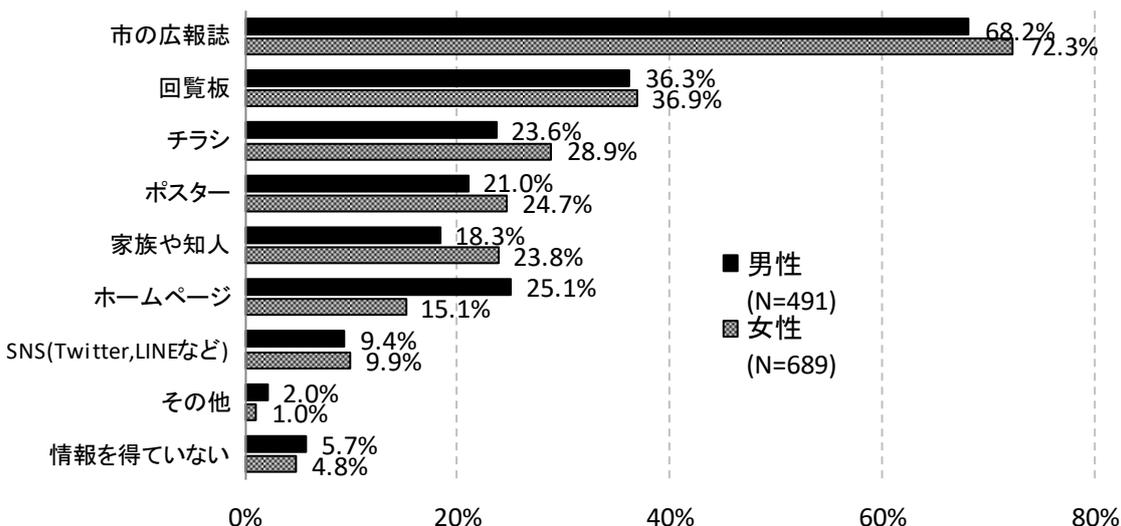


図 63 Q28 地域イベント情報の今後の入手方法（複数回答・男女別）

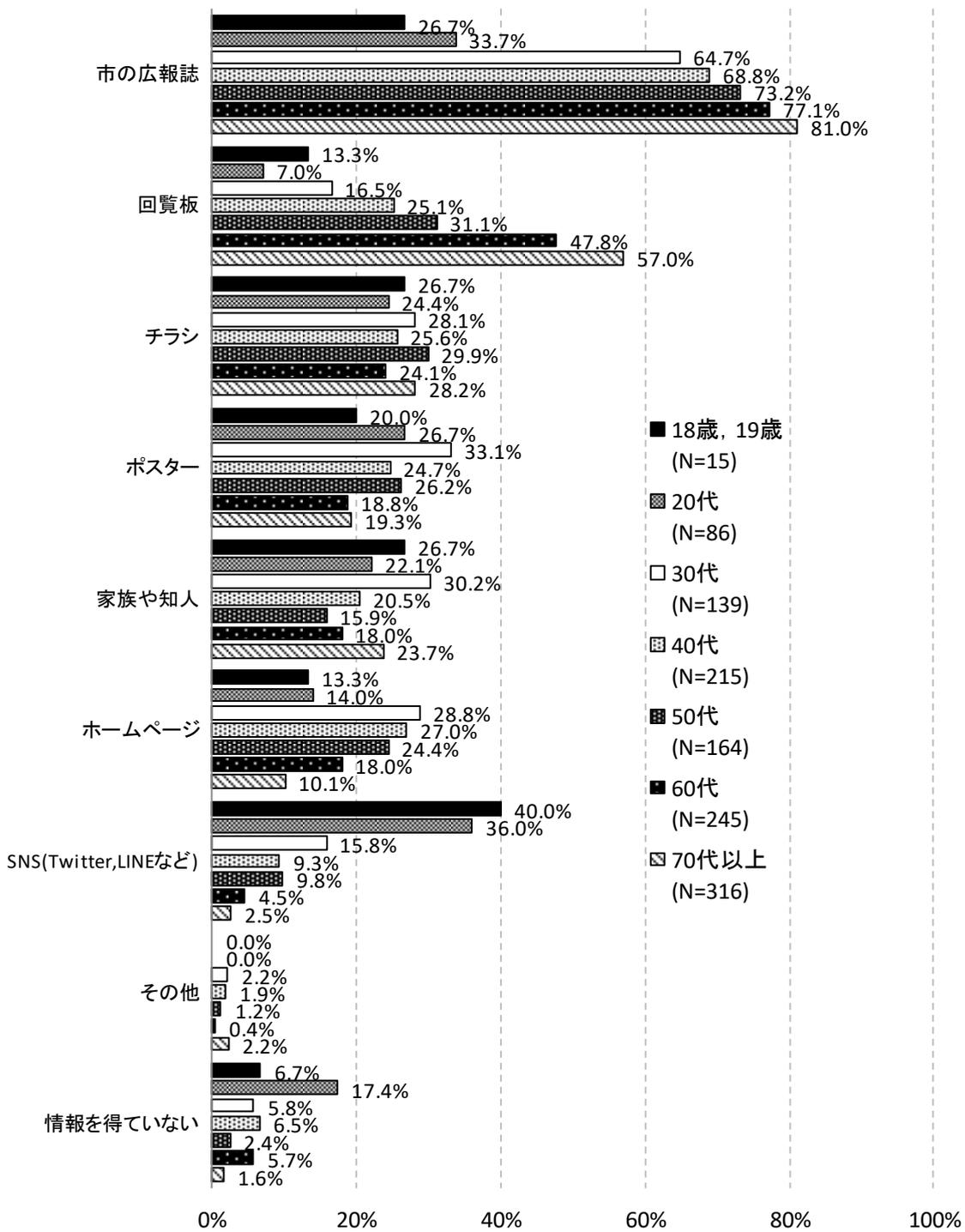


図 64 Q28 地域イベント情報の今後の入手方法（複数回答・年代別）

Q29 の地域イベントへの参加状況に関して、「よく参加する」または「ときどき参加する」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳、19歳が20.0%と最も低いのに対し、40代が37.2%と最も高い。なお、大きな男女差は見られない（図 65）。

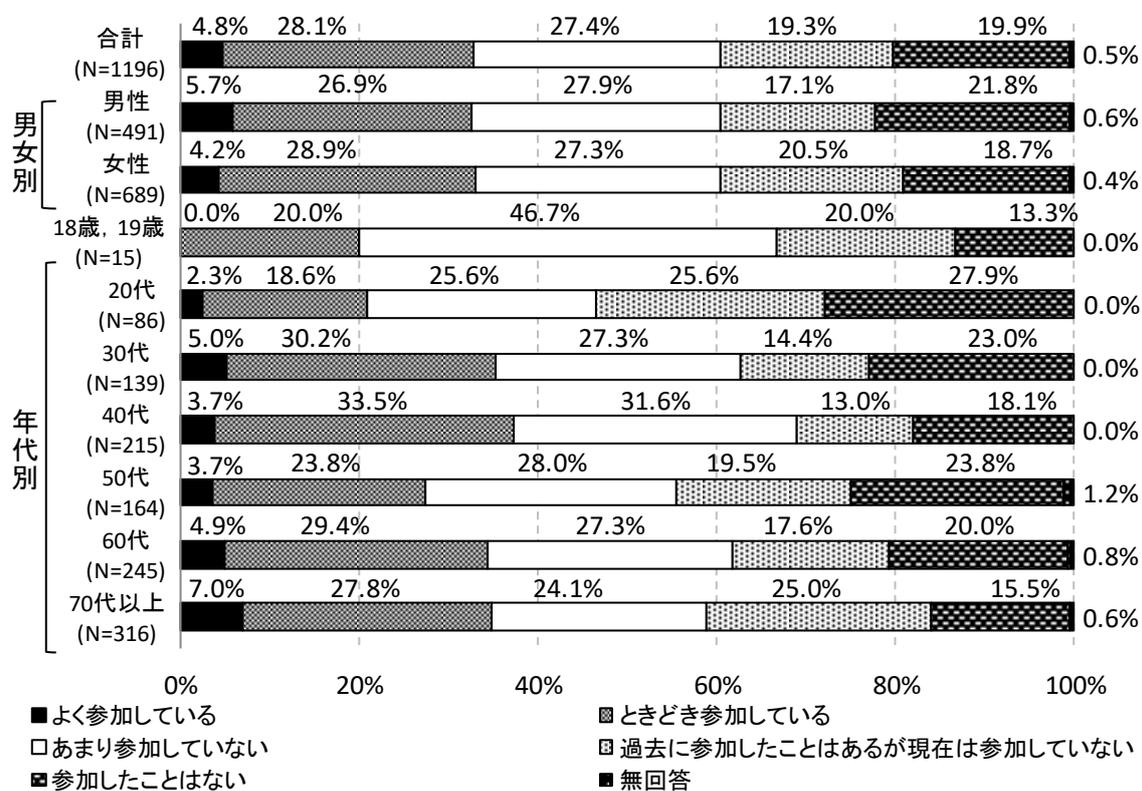


図 65 Q29 地域イベントへの参加状況

Q30A の高槻市に身近な自然環境とのふれあいがあるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で 6 割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」と回答した人の割合は 18 歳，19 歳と 20 代が 2 割未満であるのに対し、40 代から 70 代以上は 2 割以上である。なお、大きな男女差は見られない（図 66）。

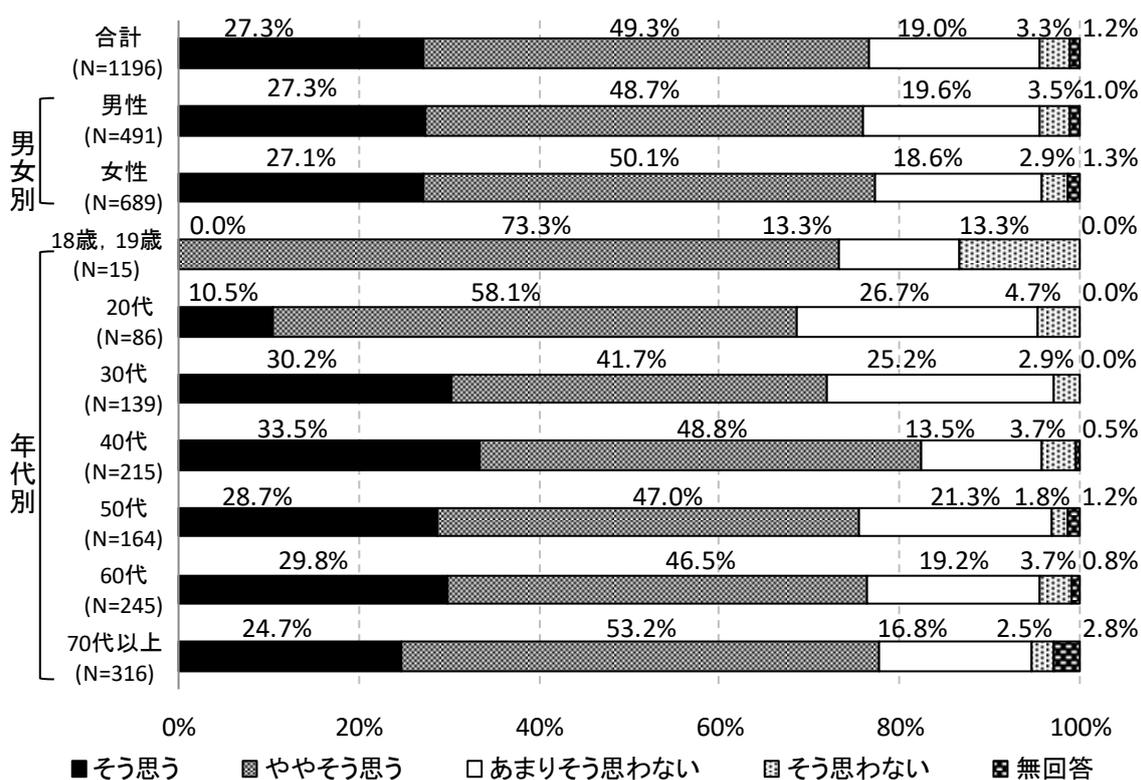


図 66 Q30A 高槻市に身近な自然環境とのふれあいがあるか

Q30Bの高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちかに関しては、男女別・年代別のすべての層で4割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は30代が45.3%と最も低い。反対に、70代以上が66.2%と最も高い(図67)。

Q30Cの高槻市は良好な環境づくりを目指した活動が豊富かに関しては、男女別・年代別のすべての層で4割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は50代が42.7%と最も低く、反対に40代が53.5%と最も高い(図68)。

Q30Dの高槻市は環境活動に関する情報や呼びかけが十分かに関しては、男女別・年代別のすべての層で2~4割程度が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は20代が23.3%と最も低く、反対に70代以上が40.5%と最も高い(図69)。

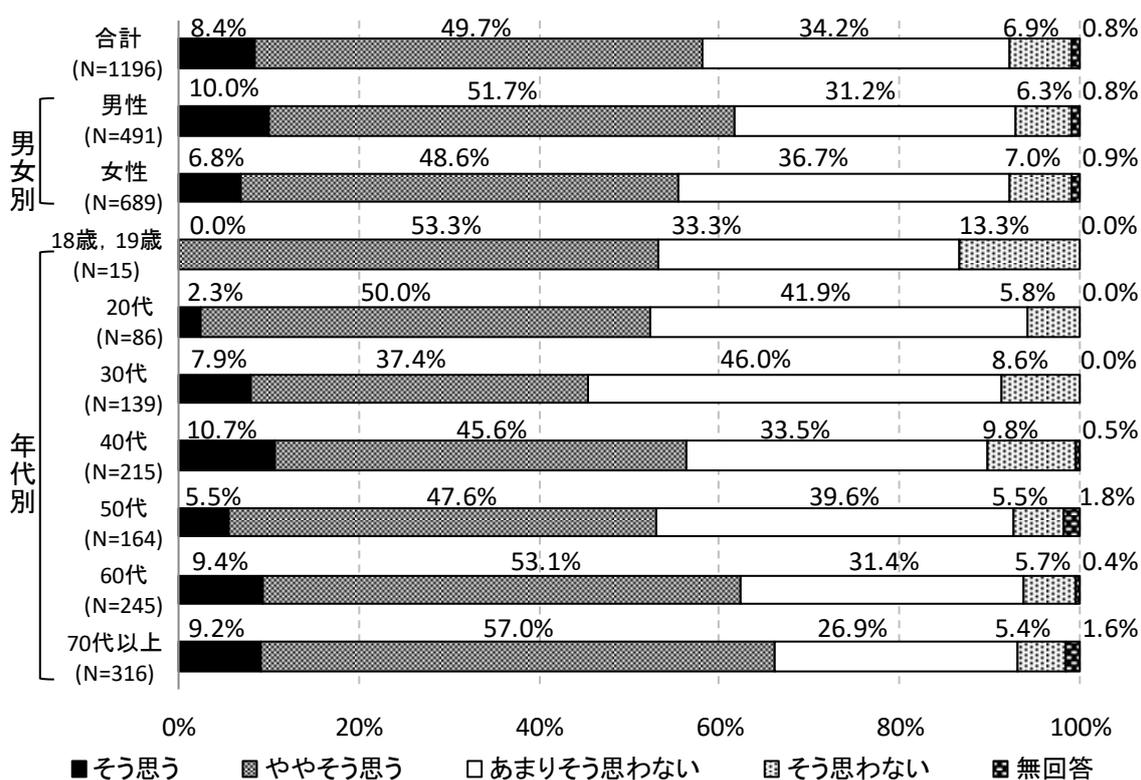


図 67 Q30B 高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか

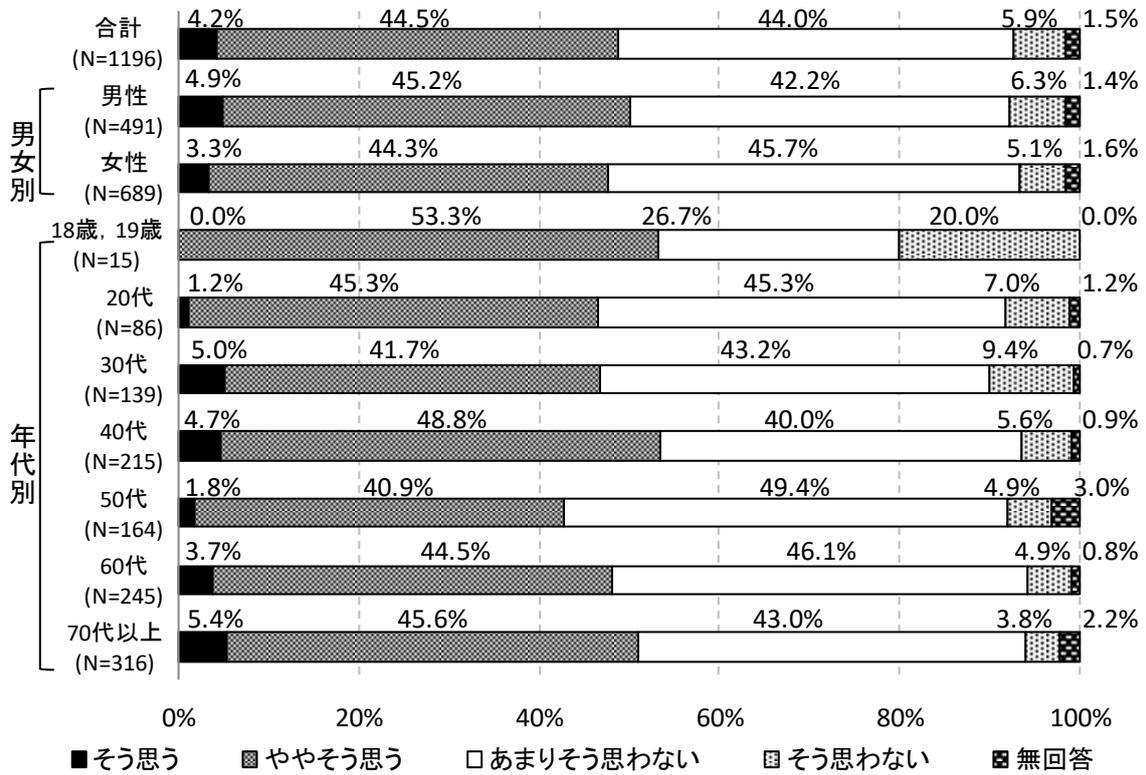


図 68 Q30C 高槻市は良好な環境づくりを目指した活動が豊富か

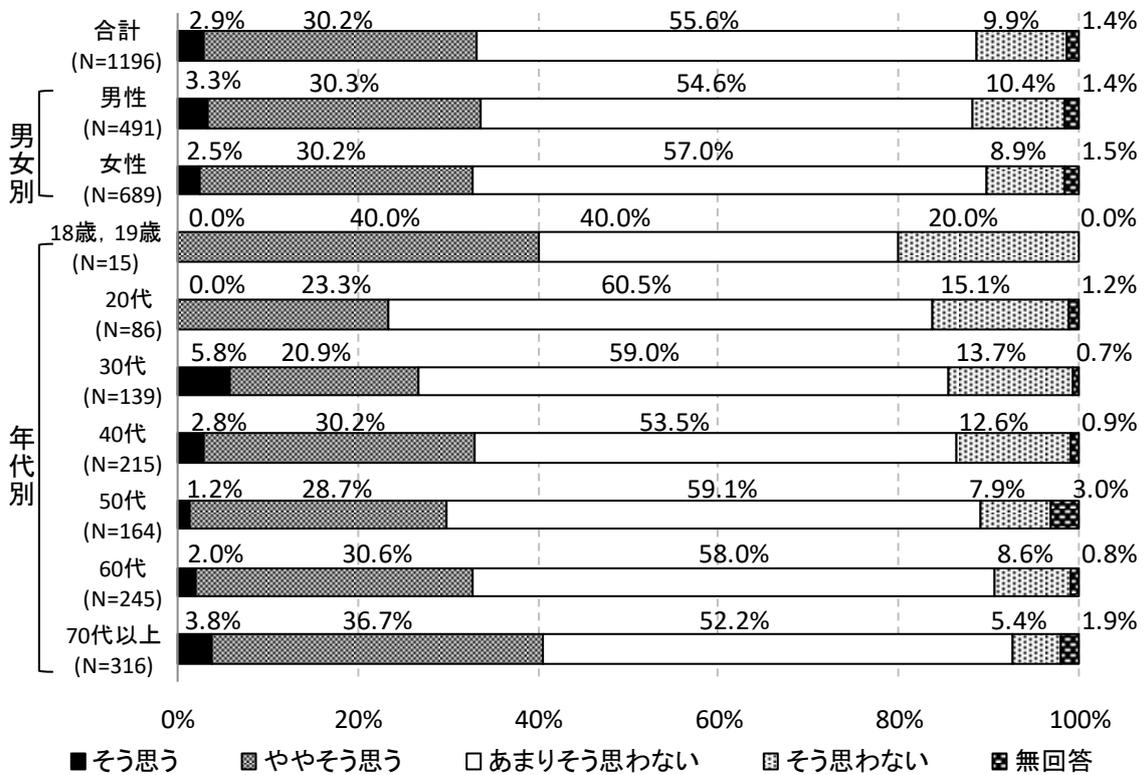


図 69 Q30D 高槻市は環境活動に関する情報や呼びかけが十分か

Q31A の高槻市の身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「そう思う」もしくは「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」と回答した人の割合は 18 歳, 19 歳が 53.3%と最も低く、反対に、40 代が 71.2%と最も高い (図 70)。

Q31B の園芸活動の頻度に関して、「日常的に行っている」もしくは「まれに行っている」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18 歳, 19 歳が 13.4%と最も低く、年代が上がるごとに増加し、70 代以上が 76.6%と最も高くなっている (図 71)。

Q31C の 1 年以内での自然保護活動やイベントへの参加状況に関して、「ある」と回答している人の割合は、年代別で見ると、18 歳, 19 歳が 0.0%と最も低く、年代が上がるごとに増加し、70 代以上が 11.4%と最も高くなっている (図 72)。

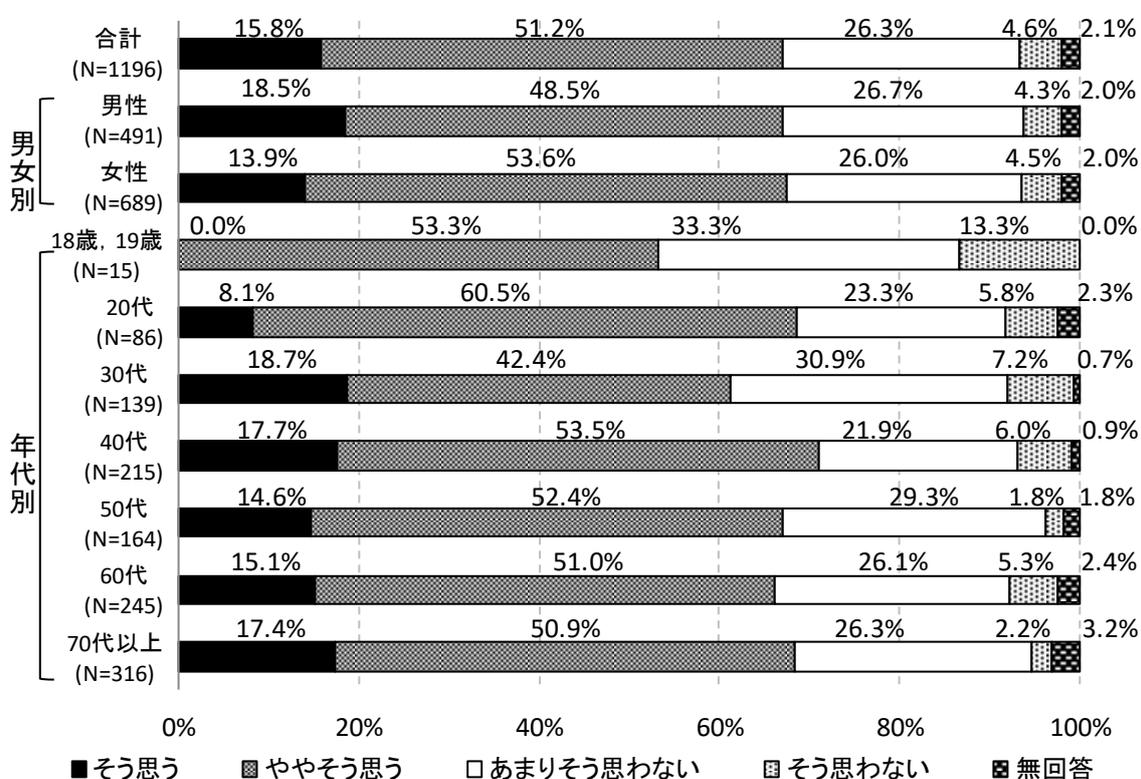


図 70 Q31A 高槻市の身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるか

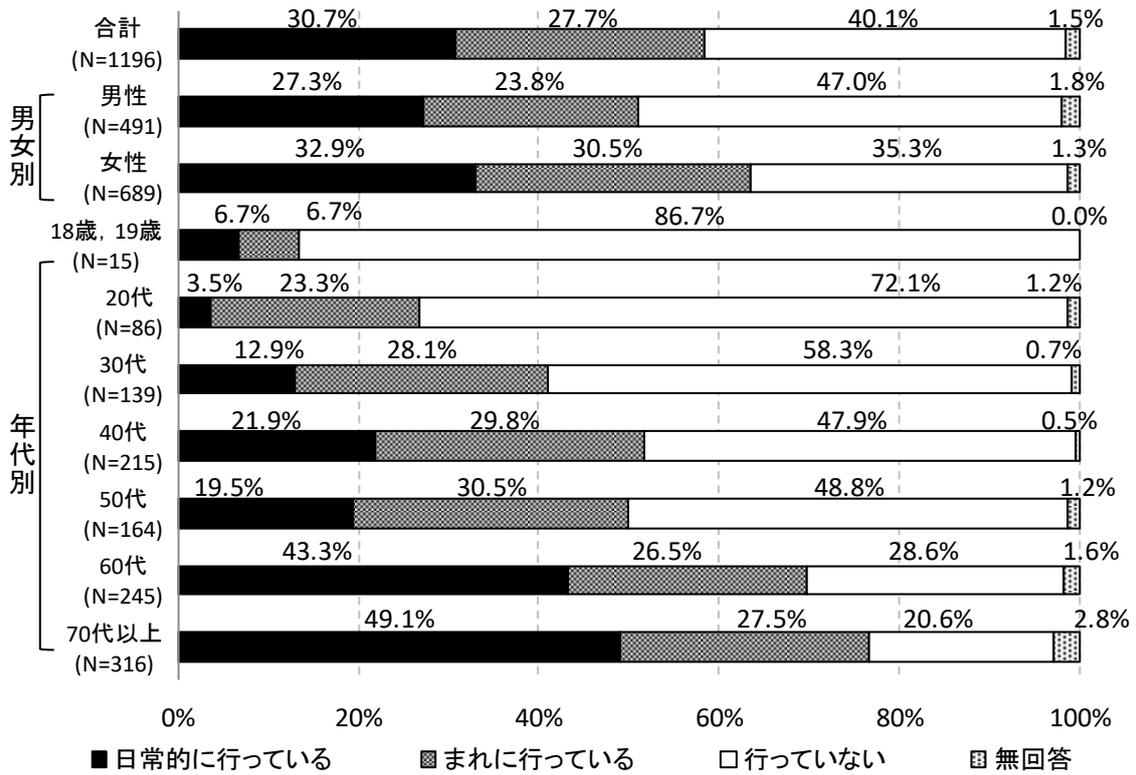


図 71 Q31B 園芸活動の頻度

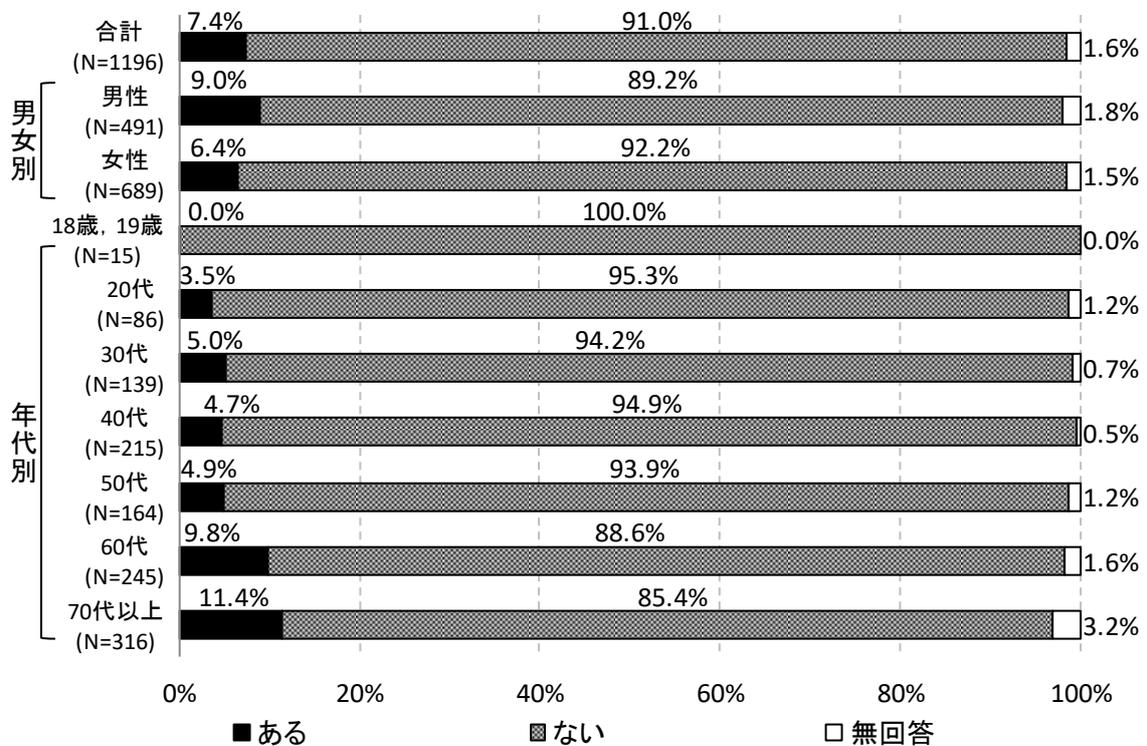


図 72 Q31C 1年以内での自然保護活動やイベントへの参加状況

Q32A の補助制度の対象機器の認知度に関しては、「1つもない」以外では、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「太陽光発電システム」が46.0%と最も高い。次いで「エコキュート」が19.3%であり、その他の項目は15%未満である（図73）。

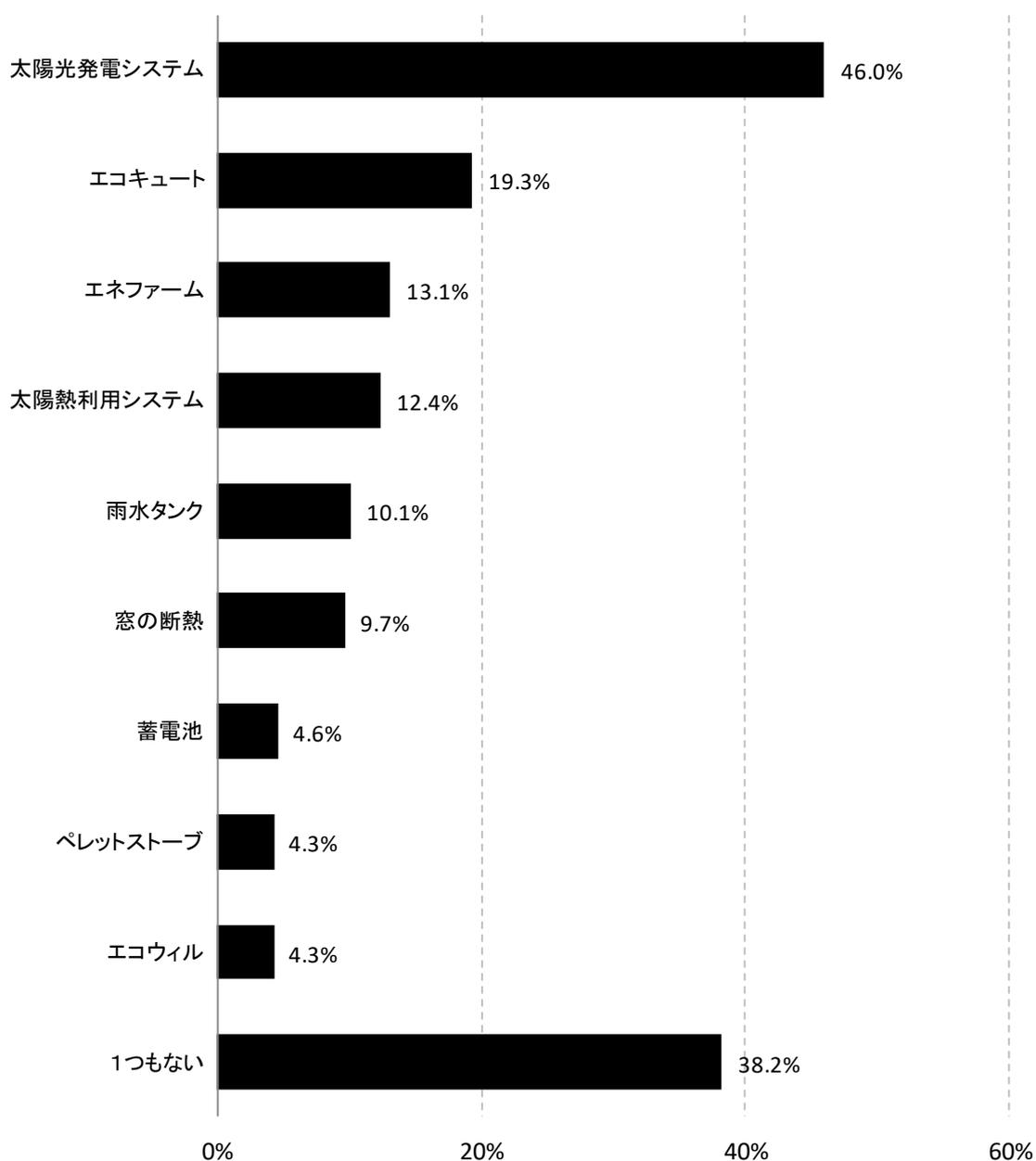


図 73 Q32A 補助制度の対象機器の認知度（複数回答・全体 N=1196）

Q32A を男女別で見ると、「蓄電池」が最も男女差が大きく、男性で 6.7%、女性で 3.2%と、男性の方が 3.5 ポイント高い割合である。反対に、「窓の断熱」では男性で 8.6%、女性で 10.4%と、女性の方が 2 ポイントほど高い (図 74)。

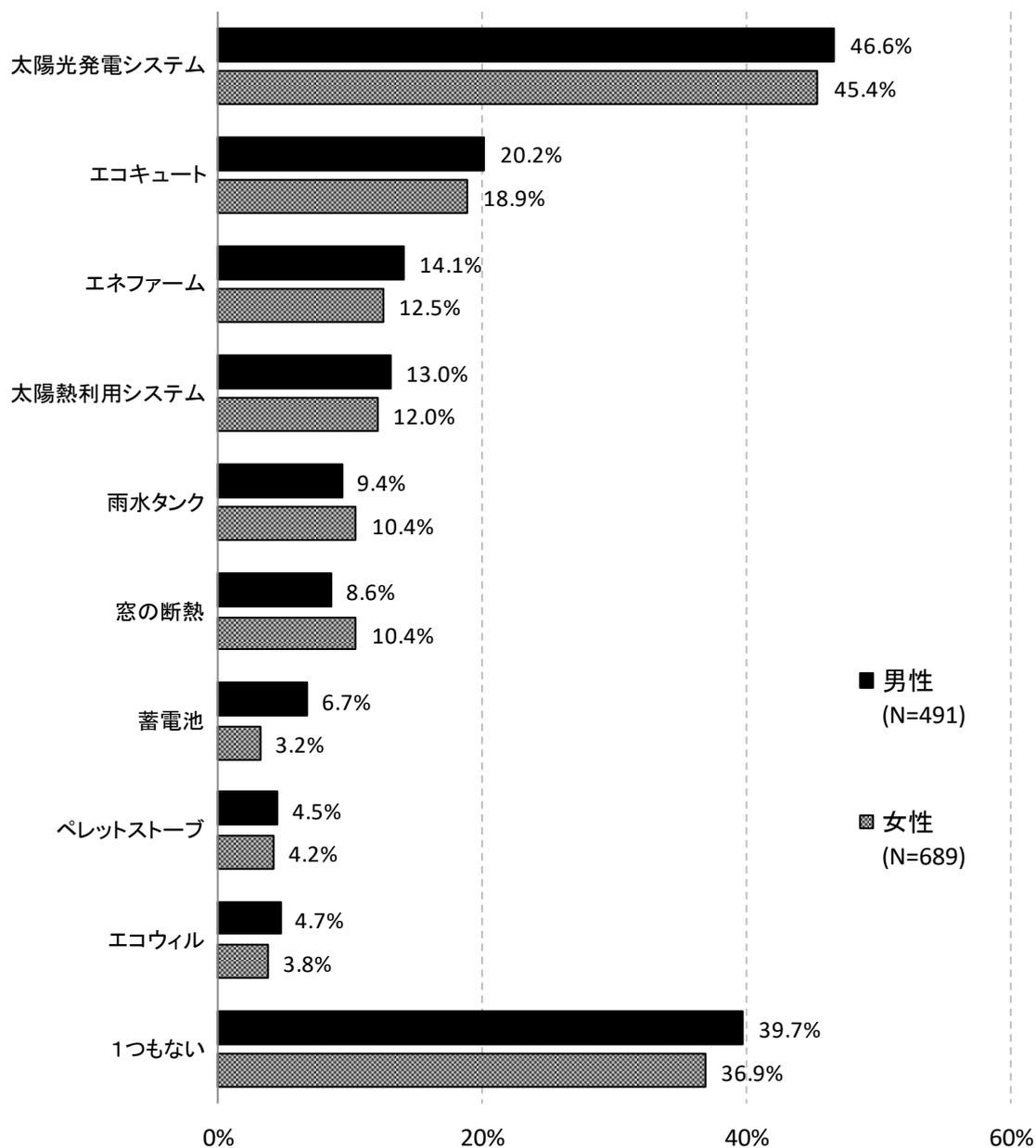


図 74 Q32A 補助制度の対象機器の認知度 (複数回答・男女別)

Q32A を年代別で見ると、「太陽光発電システム」の割合は、50代が59.8%と最も高いのに対し、20代が38.4%と最も低い。「エネファーム」の割合は、30代が23.7%と最も高く、次いで40代が20.9%である。「エコウィル」の割合は、30代～40代では1割弱であるが、それ以外の年代では4%にも満たない（図 75）。

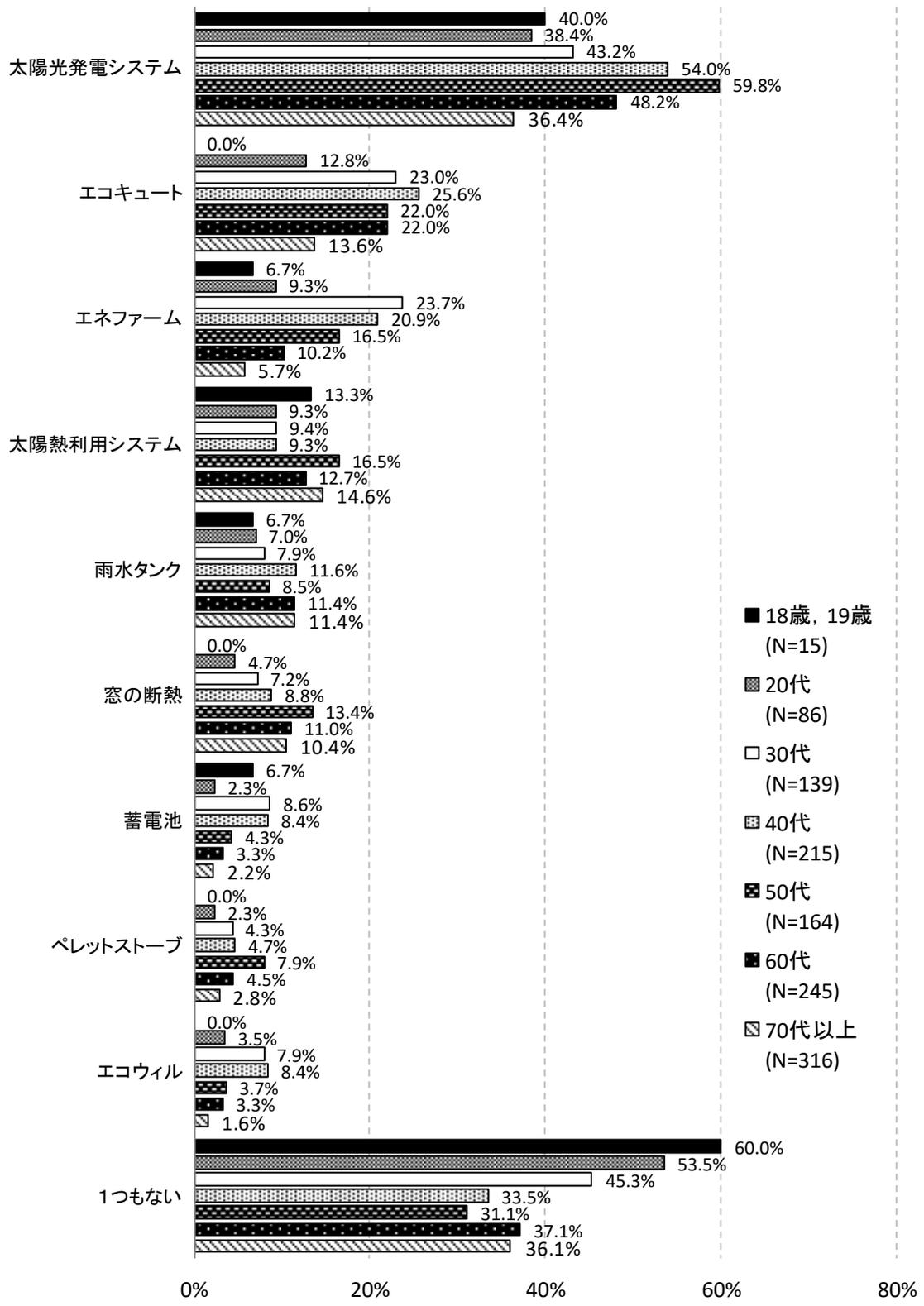


図 75 Q32A 補助制度の対象機器の認知度（複数回答・年代別）

Q32Bの補助制度の対象機器の導入希望状況に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「1つもない」以外で「窓の断熱」と「太陽光発電システム」が2割以上であり、その他の項目は2割にも満たない（図76）。

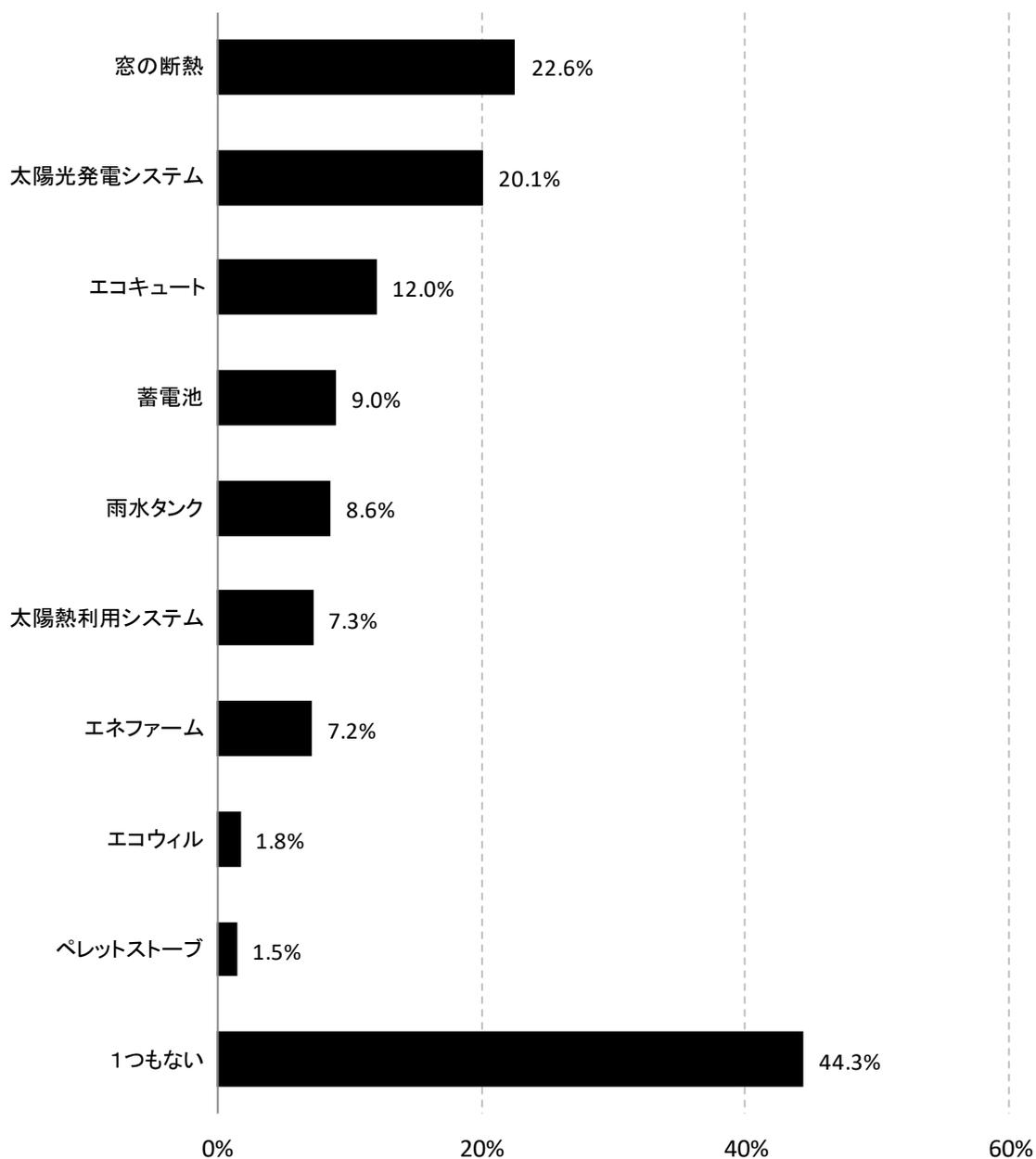


図 76 Q32B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・全体 N=1196）

Q32B を男女別で見ると、「蓄電池」が最も男女差が大きく、男性で 12.8%、女性で 6.2%と、男性の方が 6.6 ポイント高い割合である。反対に、「窓の断熱」では男性で 20.0%、女性で 24.2%と、女性の方が 4 ポイントほど高い（図 77）。

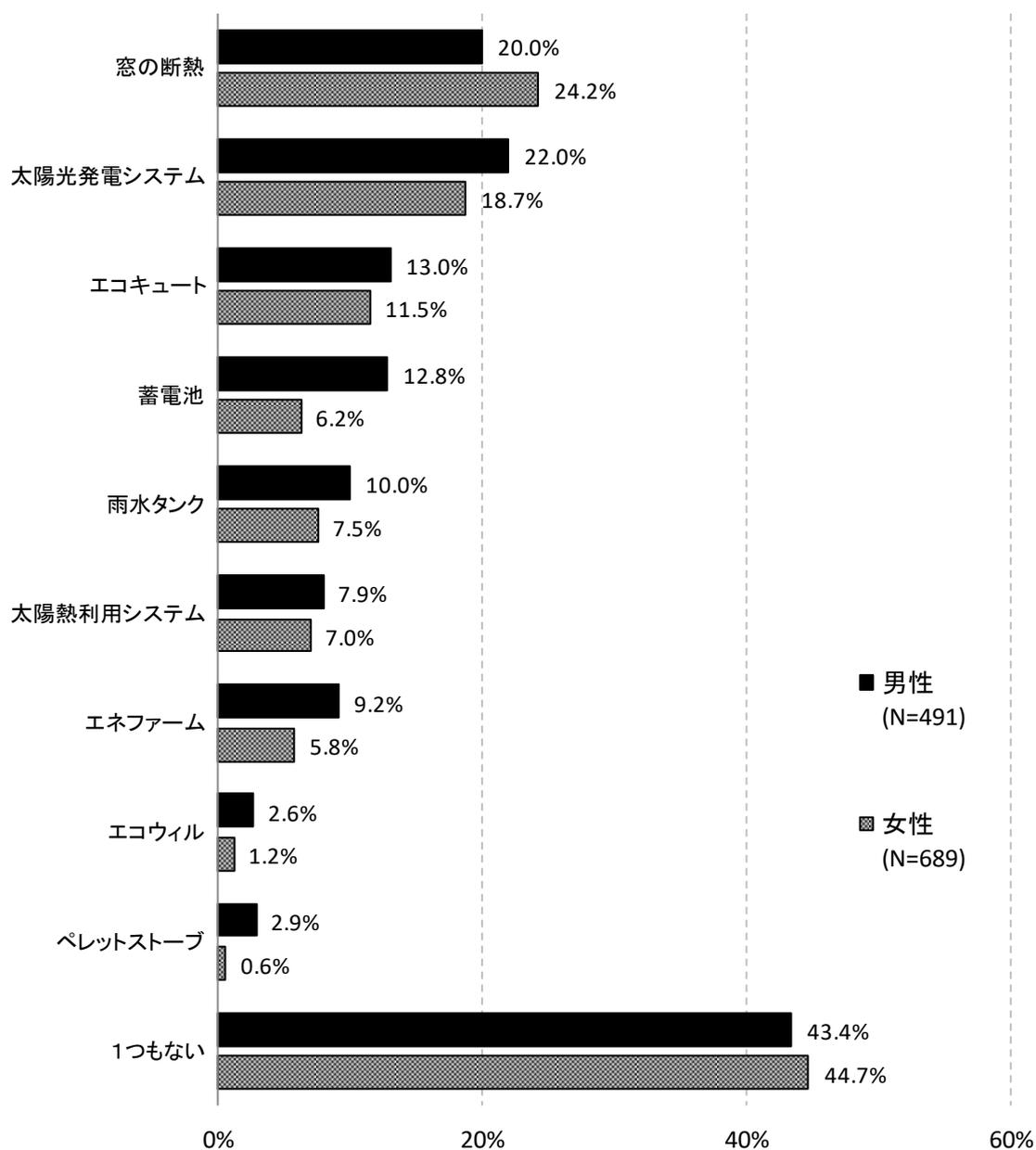


図 77 Q32B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・男女別）

Q32B を年代別で見ると、「窓の断熱」の割合は、50代では26.2%と最も高いのに対し、18歳、19歳が6.7%と最も低い。「太陽光発電システム」の割合は、20代が31.4%と最も高いのに対し、60代が13.1%と最も低い。「太陽熱利用システム」の割合は、30代では15.8%と最も高いのに対し、18歳、19歳を除いて40代が4.7%であり、30代と11.1ポイントの差である（図78）。

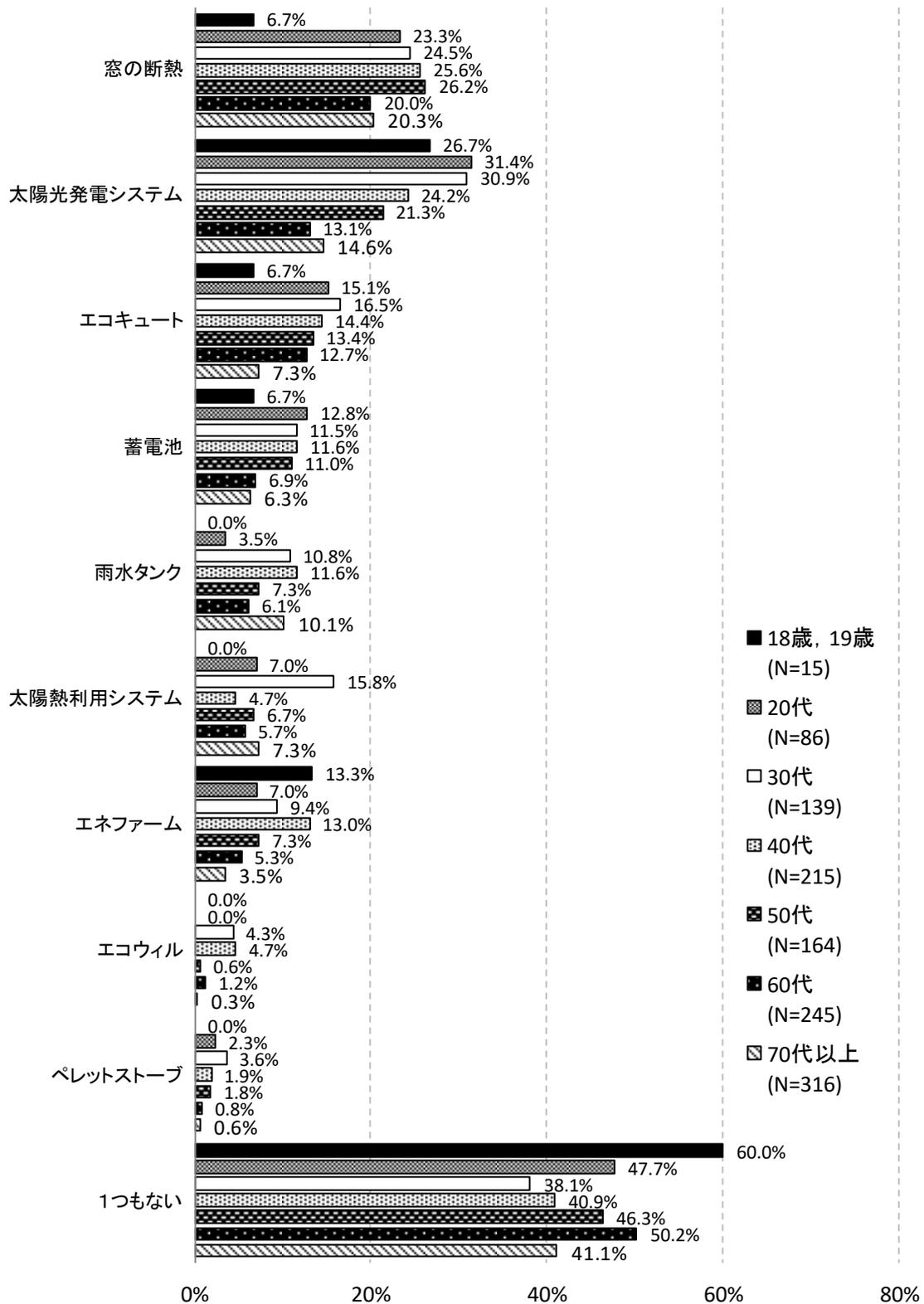


図 78 Q32B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・年代別）

Q33 の環境に関する問題への関心度に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「地球温暖化」と「異常気象」が 5 割程度であり、次いで、「食の安全性」で 36.0%、「大気汚染、PM2.5」で 27.8%である。その他の項目は 2 割にも満たない（図 79）。

Q33 を男女別で見ると、「食の安全性」が最も男女差が大きく、男性で 26.7%、女性で 42.5%と、女性の方が 15.8 ポイント高い割合である。反対に、「再生可能エネルギー」では男性で 15.9%、女性で 6.1%と、男性の方が 9.8 ポイント高い（図 80）。

Q33 を年代別で見ると、「食の安全性」の割合は、30 代では 42.4%と最も高いのに対し、20 代が 24.4%と最も低い。「再生可能エネルギー」の割合は、18 歳、19 歳では 26.7%と最も高いのに対し、70 代以上が 6.0%と最も低い（図 81）。

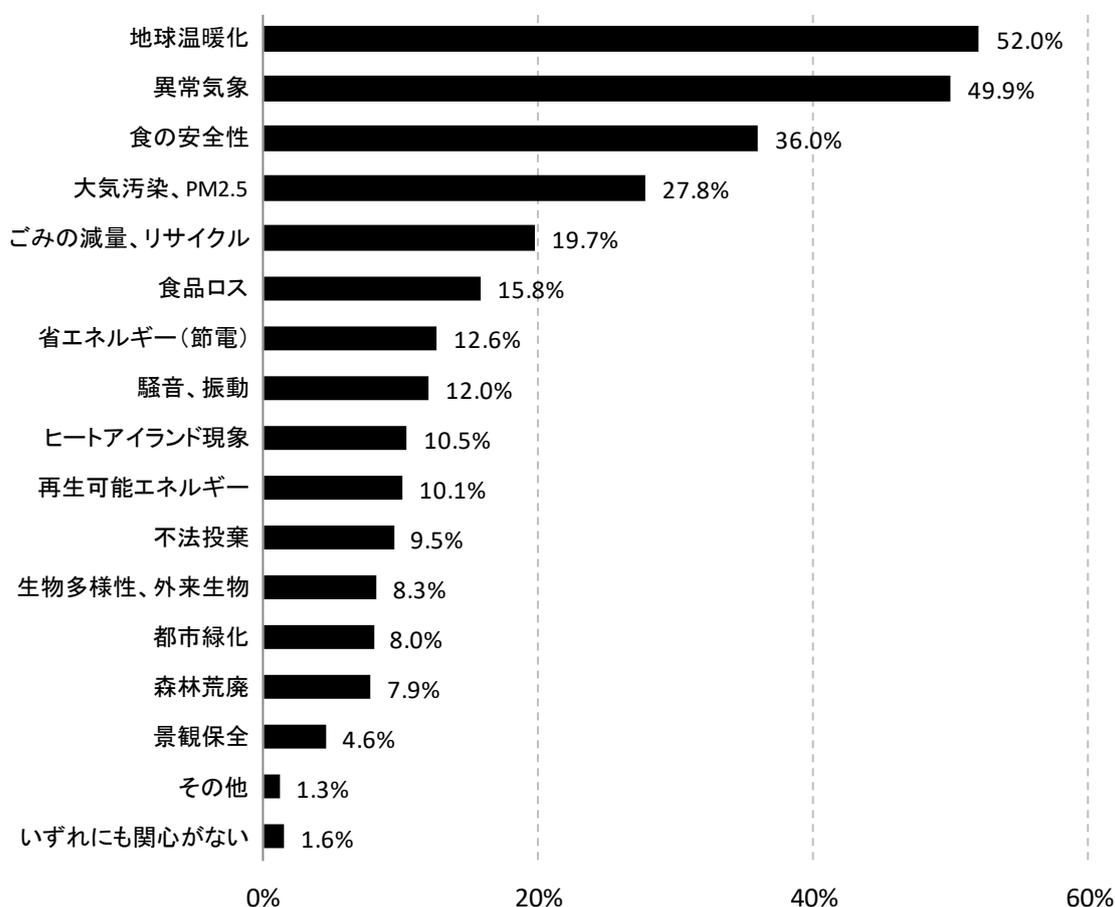


図 79 Q33 環境に関する問題への関心度（複数回答・全体 N=1196）

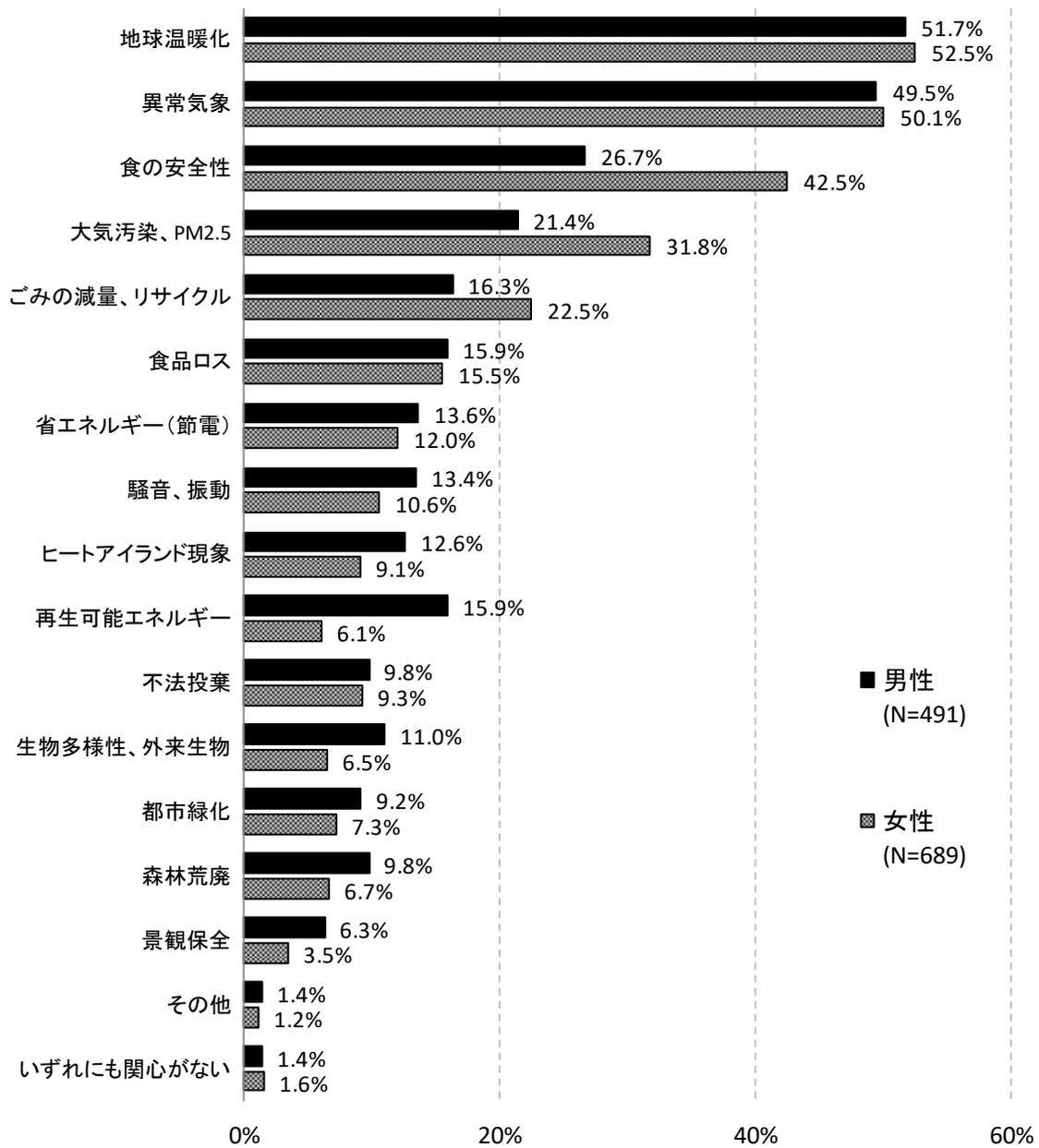
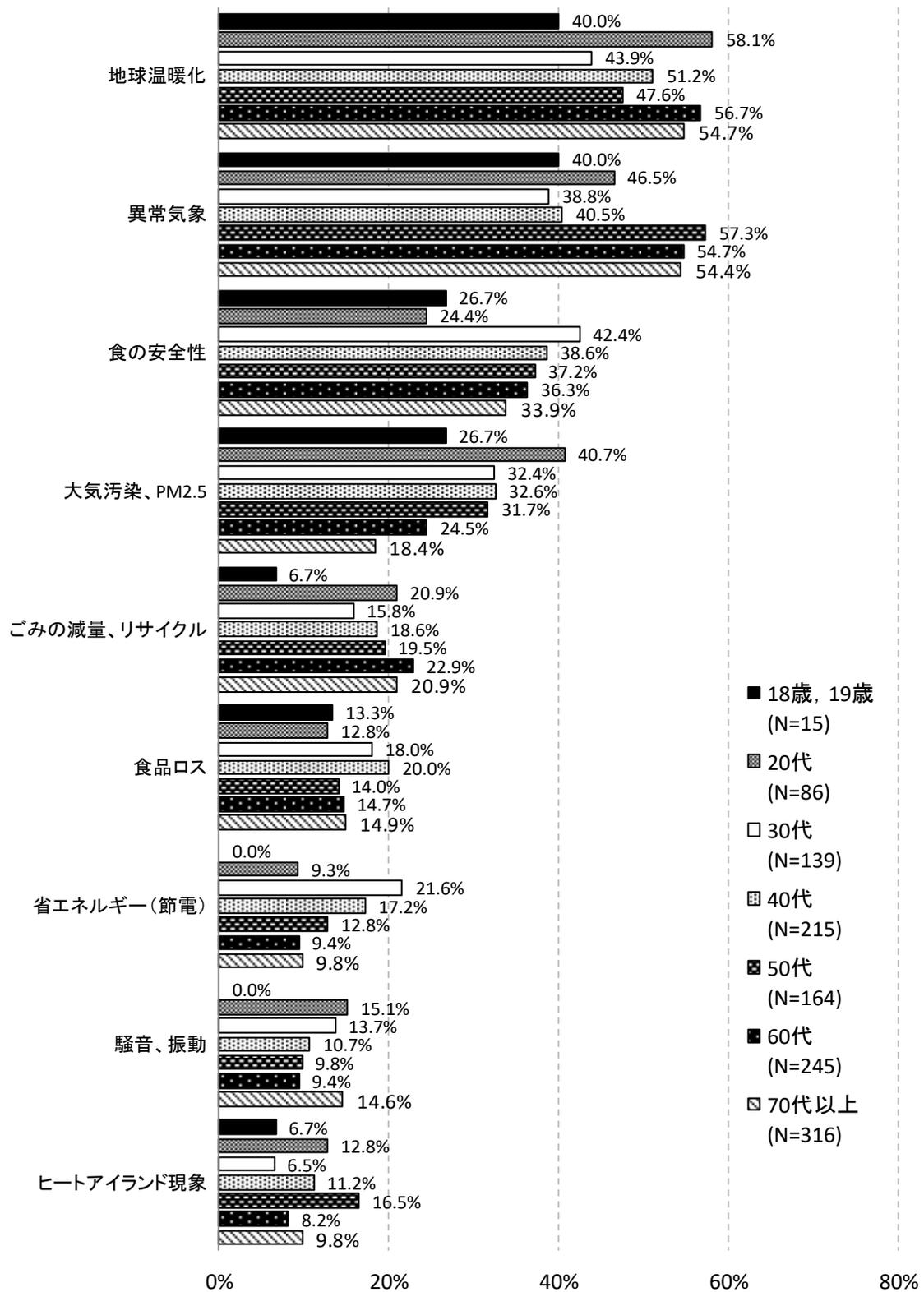


図 80 Q33 環境に関する問題への関心度（複数回答・男女別）



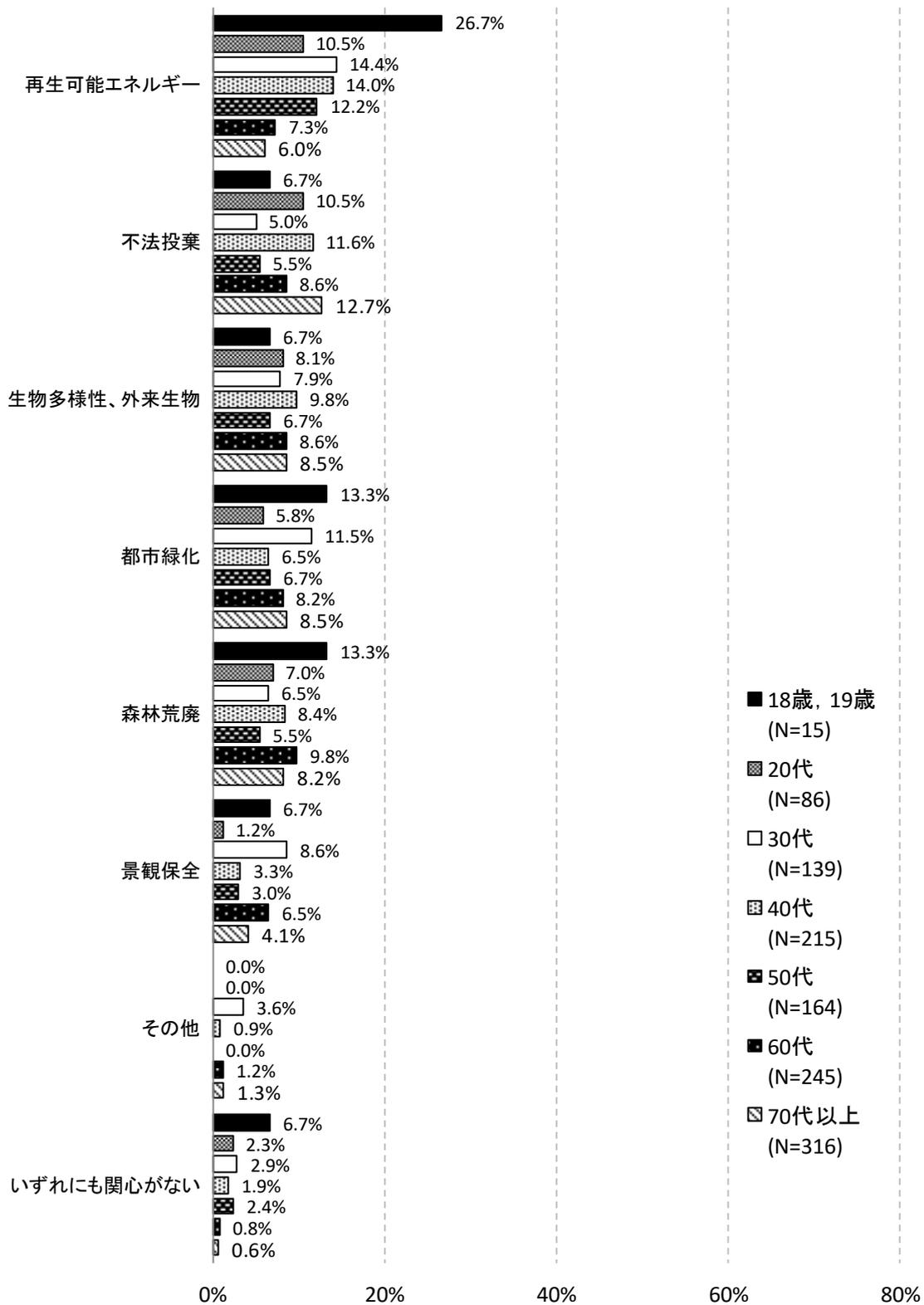


図 81 Q33 環境に関する問題への関心度（複数回答・年代別）

Q34 の直近 2 か月の世帯の使用水量に関しては、男女別・年代別のすべての層で 4 割以上が 50 m³未満と回答している。年代別で見ると、「50 m³以上 60 m³未満」と回答した人の割合は 18 歳, 19 歳が 33.3%と最も高いのに対し、反対に 50 代が 8.5%と最も低い(図 82)。

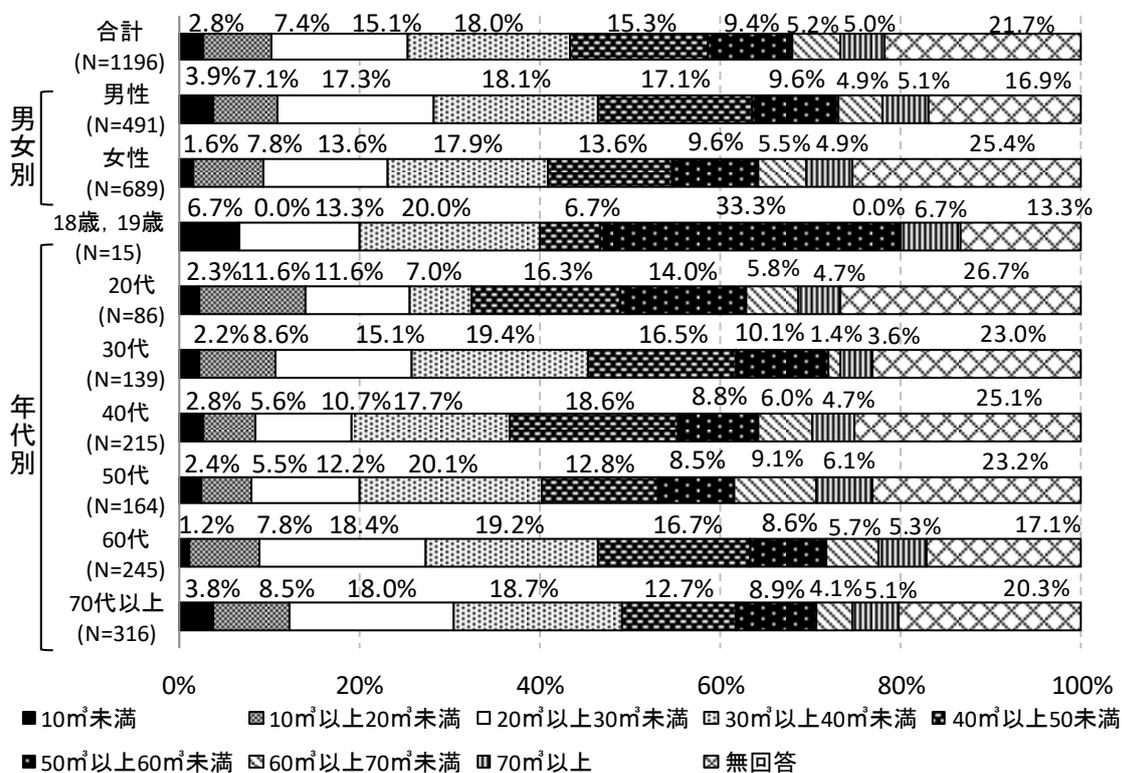


図 82 Q34 直近 2 か月の世帯の使用水量

Q35 の安全な水道水が安定して供給されており、安心できるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で8割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別で見ると、「そう思う」と回答した人の割合は20代が39.5%と最も低く、年代が上がるごとに増加し、70歳以上で58.9%である。なお、18歳、19歳が60.0%と最も高くなっている（図83）。

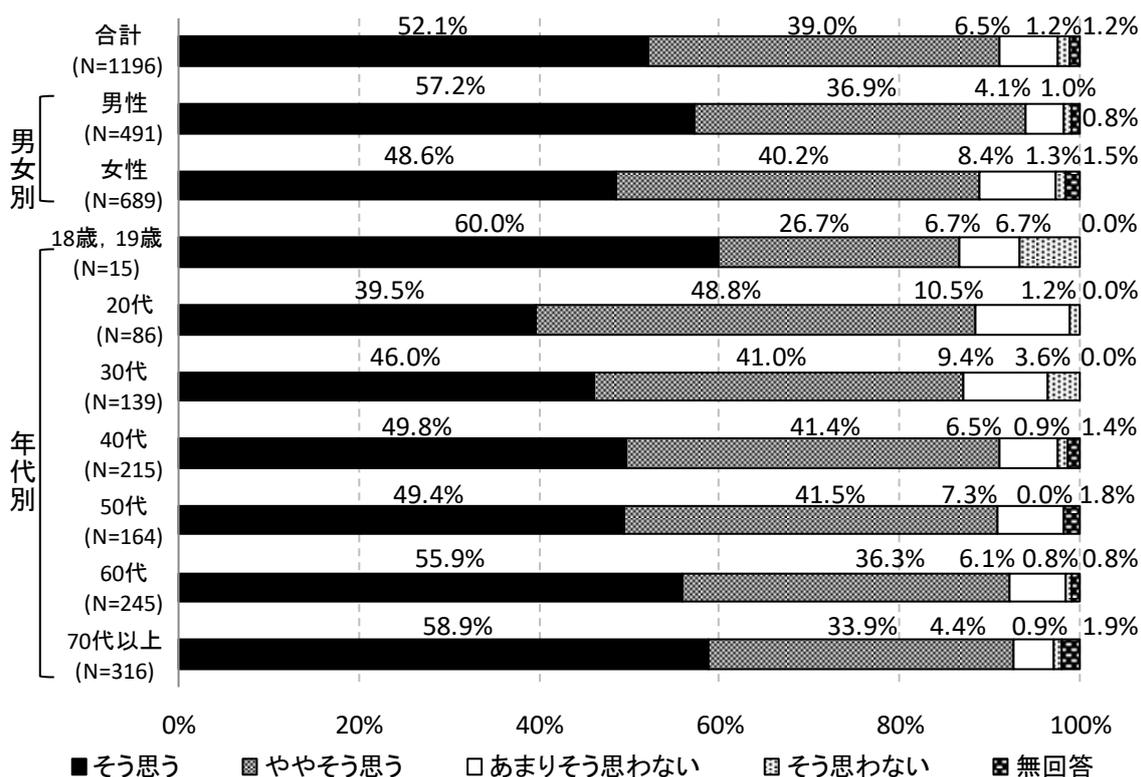


図 83 Q35 安全な水道水が安定して供給されており、安心できるか

Q36 の水道水への不安な点に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「不安がない」を除いて「水質」が 34.9%と最も高い。次いで、「におい」と「味」が 18%前後である。その他の項目は 15%にも満たない（図 84）。

Q36 を男女別で見ると、「不安がない」が最も男女差が大きく、男性で 43.2%、女性で 32.4%と、男性の方が 10.8 ポイント高い割合である。反対に、「水質」では男性で 30.1%、女性で 38.6%と、女性の方が 8.5 ポイントほど高い（図 85）。

Q36 を年代別で見ると、「水質」の割合は 60 代では 39.6%と最も高いのに対し、18 歳、19 歳が 13.3%と最も低い。「におい」の割合は、30 代では 28.8%と最も高いのに対し、50 代が 12.8%と最も低い。「味」の割合は、18 歳、19 歳が 40.0%と最も高いのに対し、60 代が 12.2%と最も低い（図 86）。

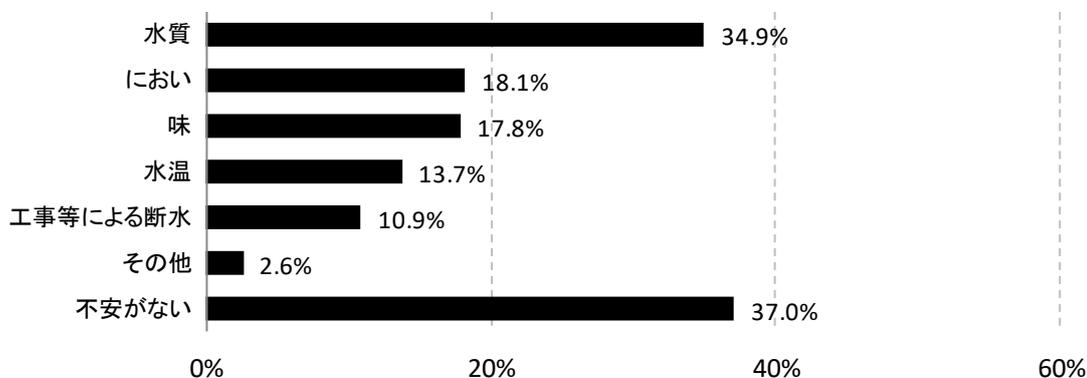


図 84 Q36 水道水への不安な点（複数回答・全体 N=1196）

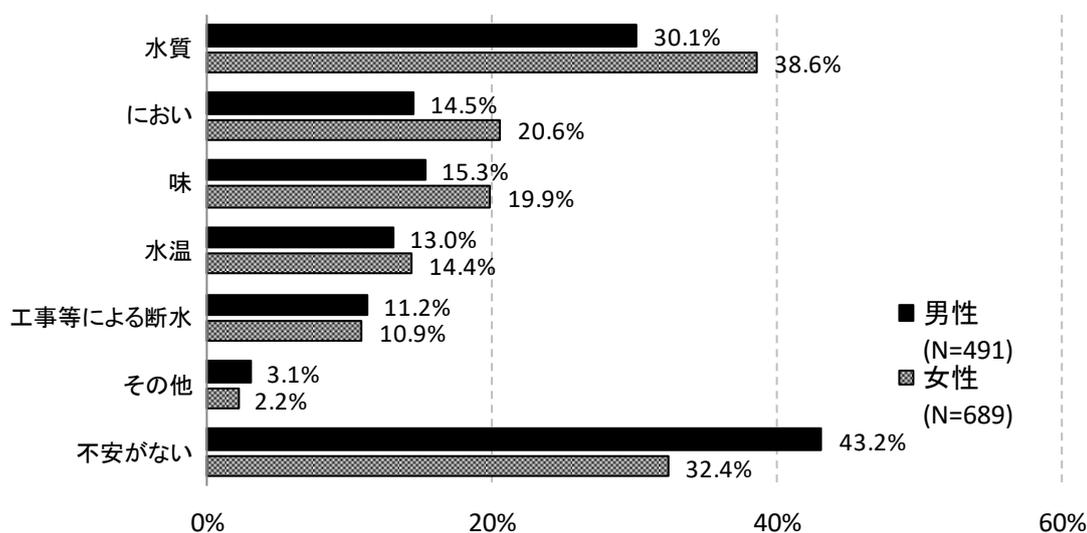


図 85 Q36 水道水への不安な点（複数回答・男女別）

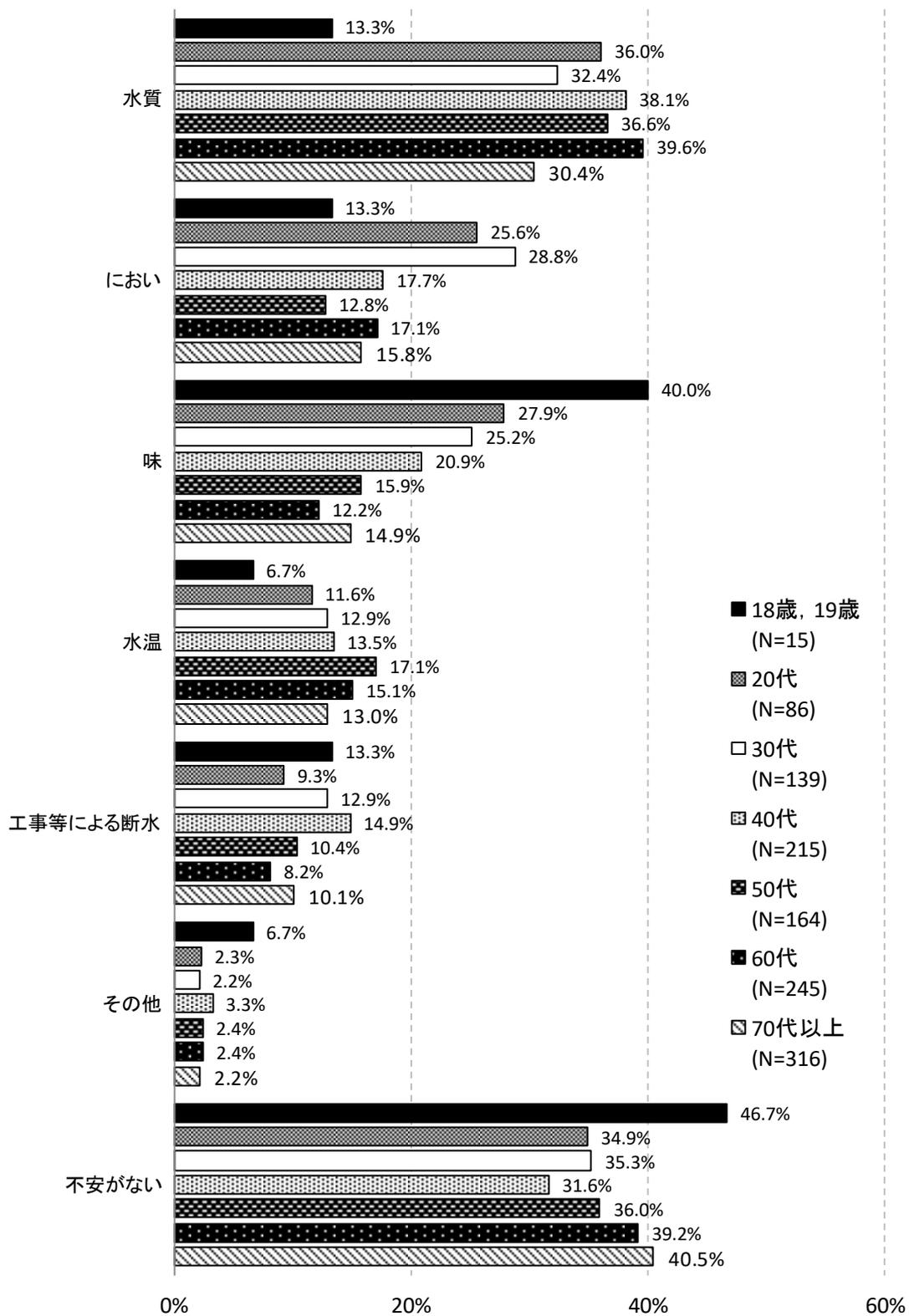


図 86 Q36 水道水への不安な点（複数回答・年代別）

Q37 の飲料水の家庭での備蓄状況に関して、「備蓄していない」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳、19歳が53.3%と最も高く、反対に70代以上が34.5%と最も低い（図87）。

Q38 の住宅用火災警報器の設置状況に関しては、男女別・年代別のすべての層で6割以上が「すべてに設置されている」または「一部設置されている」と回答している（図88）。

Q39 の住宅用火災警報器の作動確認の状況に関して、「確認した」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性で37.8%、女性で30.3%と、男性の方が7.5ポイント高い（図89）。

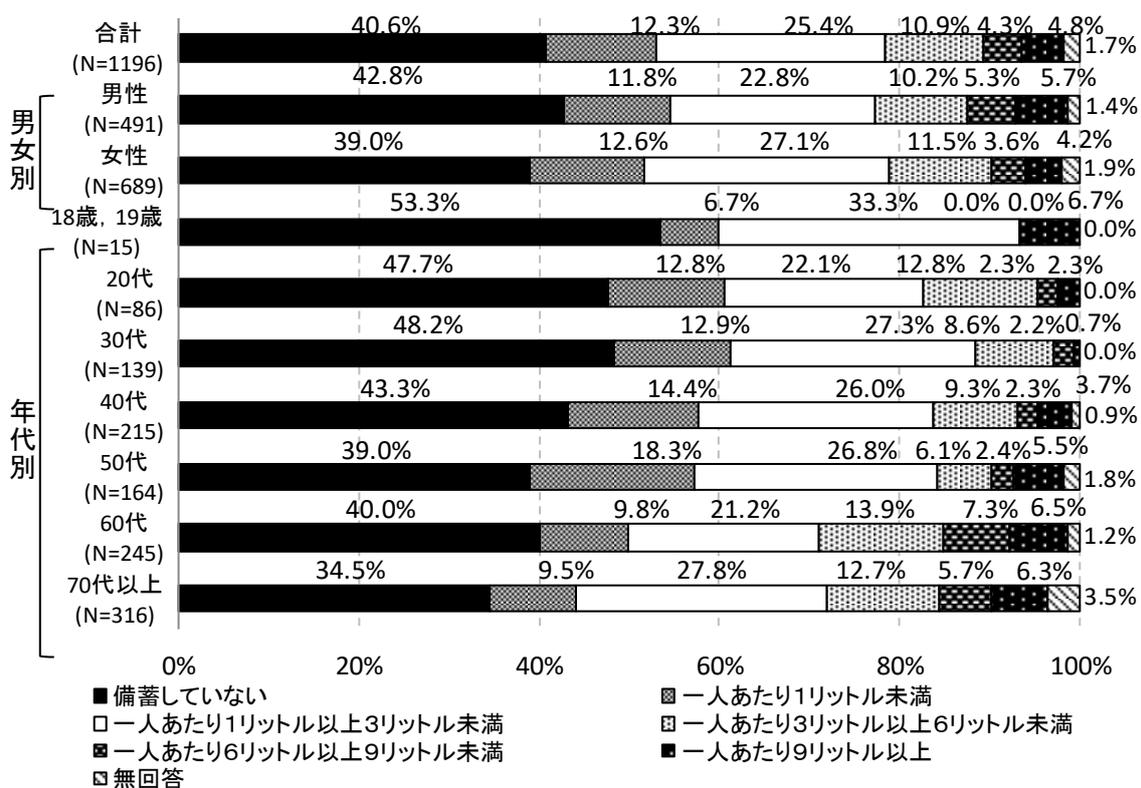


図 87 Q37 飲料水の家庭での備蓄状況

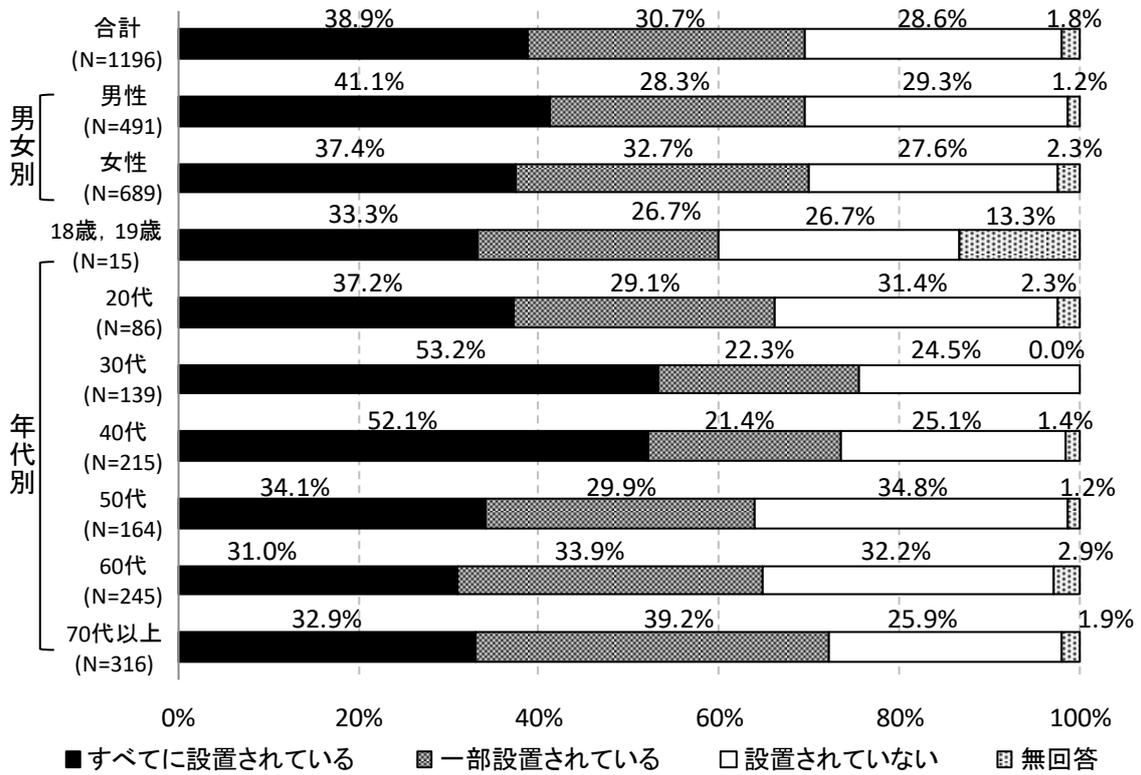


図 88 Q38 住宅用火災警報器の設置状況

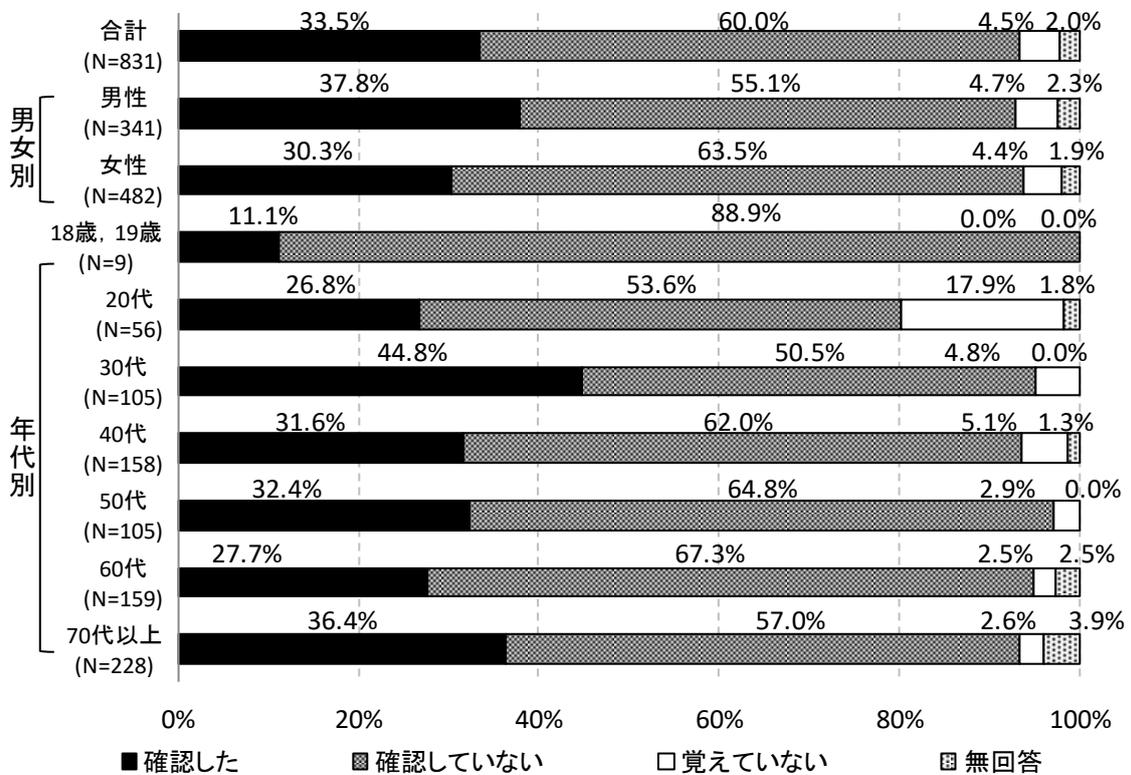


図 89 Q39 住宅用火災警報器の作動確認の状況

Q40 の住宅用火災警報器の作動確認の状況に関しては、男女別・年代別のすべての層で9割以上が「異常なし」と回答している（図 90）。

Q41 の体調悪化時の介助者がいると思うかに関しては、男女別・年代別のすべての層で7割以上が「思う」と回答している。年代別で見ると、「思う」と回答した人の割合は18歳、19歳が93.3%と最も高く、反対に70代以上が78.8%と最も低い（図 91）。

Q42 の体調悪化時に相談者がいると思うかに関しては、男女別・年代別のすべての層で8割以上が「思う」と回答している。年代別で見ると、「思う」と回答した人の割合は30代が97.8%と最も高く、反対に70代以上が88.0%と最も低い（図 92）。

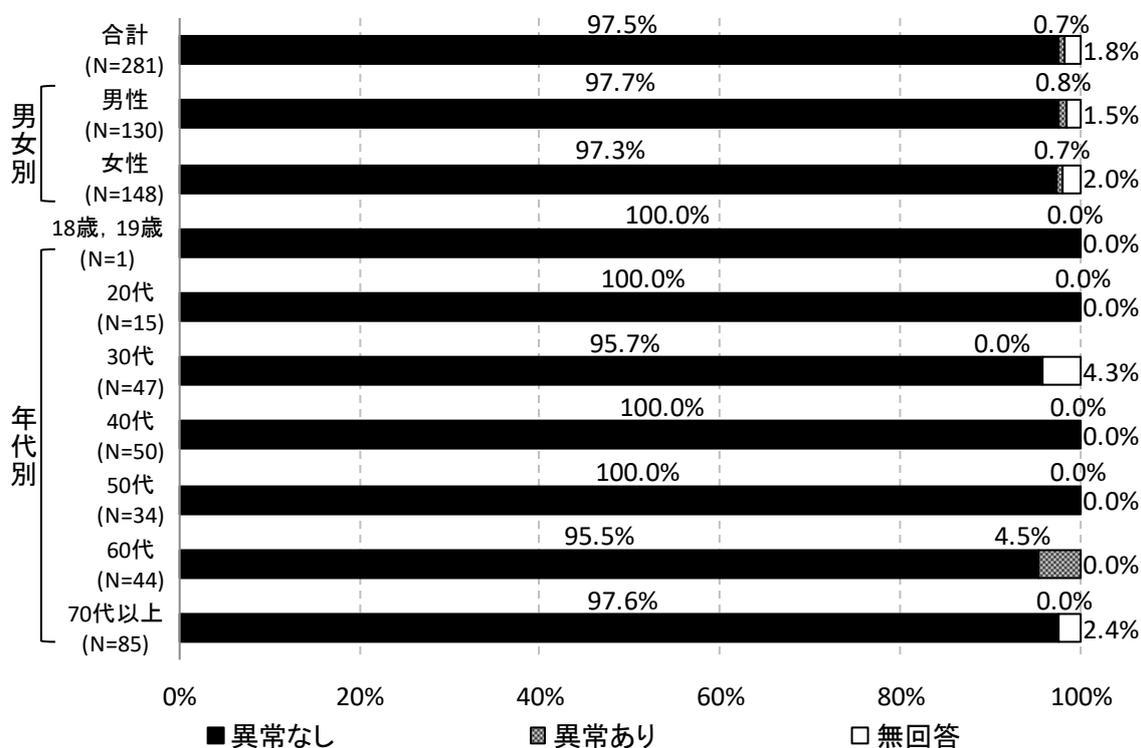


図 90 Q40 住宅用火災警報器の作動確認の状況

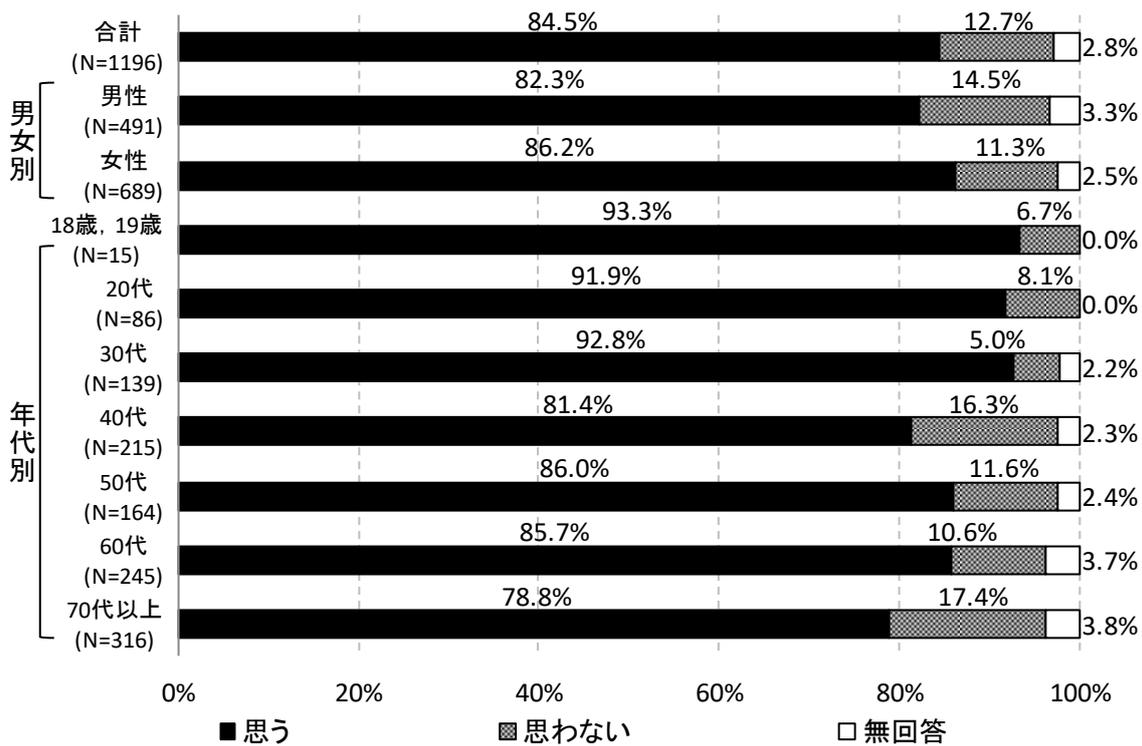


図 91 Q41 体調悪化時に介護者がいると思うか

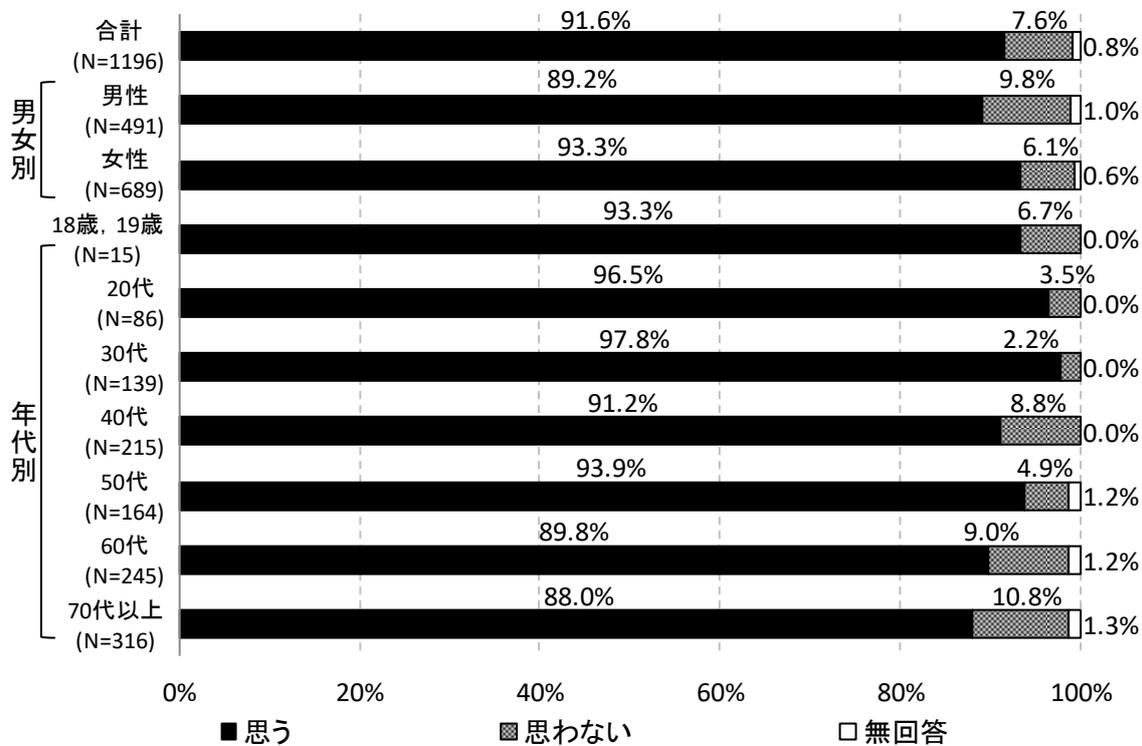


図 92 Q42 体調悪化時に相談者がいると思うか

Q43 の救急車の利用 1 回分への価値観に関して、「0 円」もしくは「1 円以上 1,000 円未満」「1,000 円以上 2,000 円未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18 歳, 19 歳が 40.0%と最も高く、それ以外の年代は 2 割未満である (図 93)。

Q44 の家庭での救急車の利用回数に関しては、男女別・年代別のすべての層で 4 割以上が「1 回」もしくは「2~3 回」、「4 回以上」と回答している。年代別で見ると、「利用したことがない」と回答した人の割合は 18 歳, 19 歳が 60.0%と最も高いのに対し、70 代以上が 40.8%と最も低い (図 94)。

Q45 の家庭での救急車利用時、入院せず帰宅したことがあるかに関して、「ある」と回答した人の割合は、年代別で見ると、30 代が 76.2%と最も高いのに対し、70 代以上が 43.4%と最も低い (図 95)。

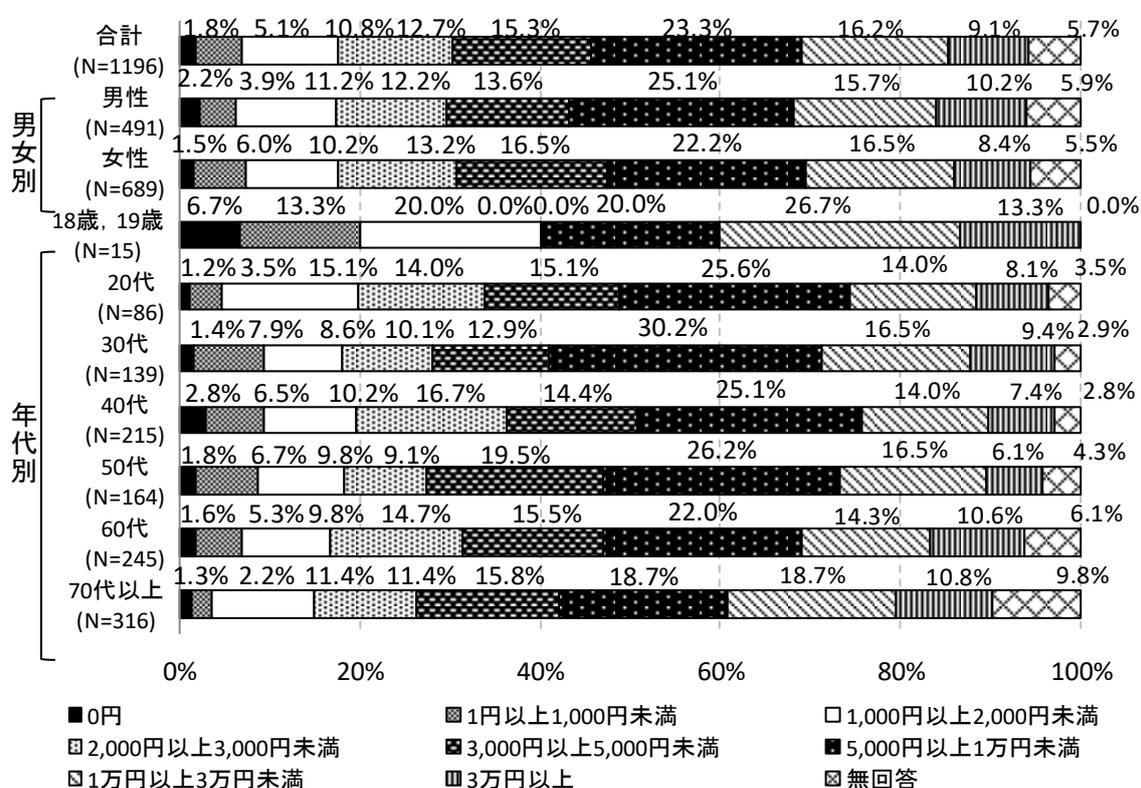


図 93 Q43 救急車の利用 1 回分への価値観

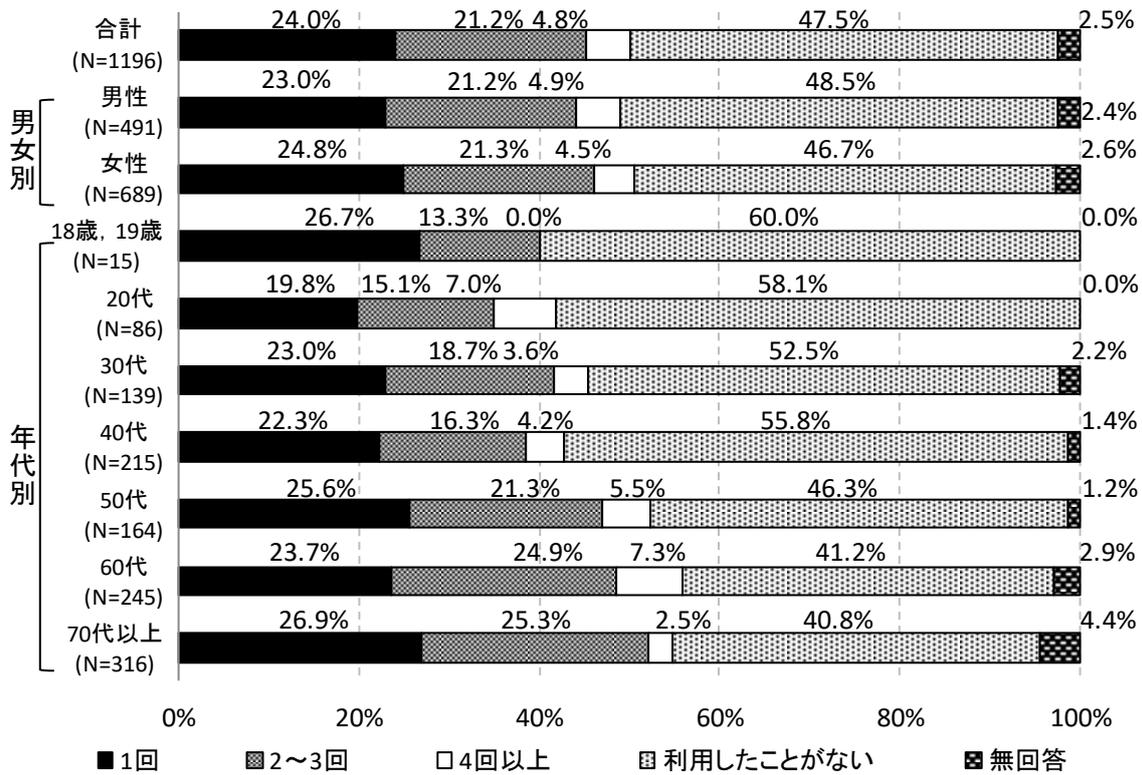


図 94 Q44 家庭での救急車の利用回数

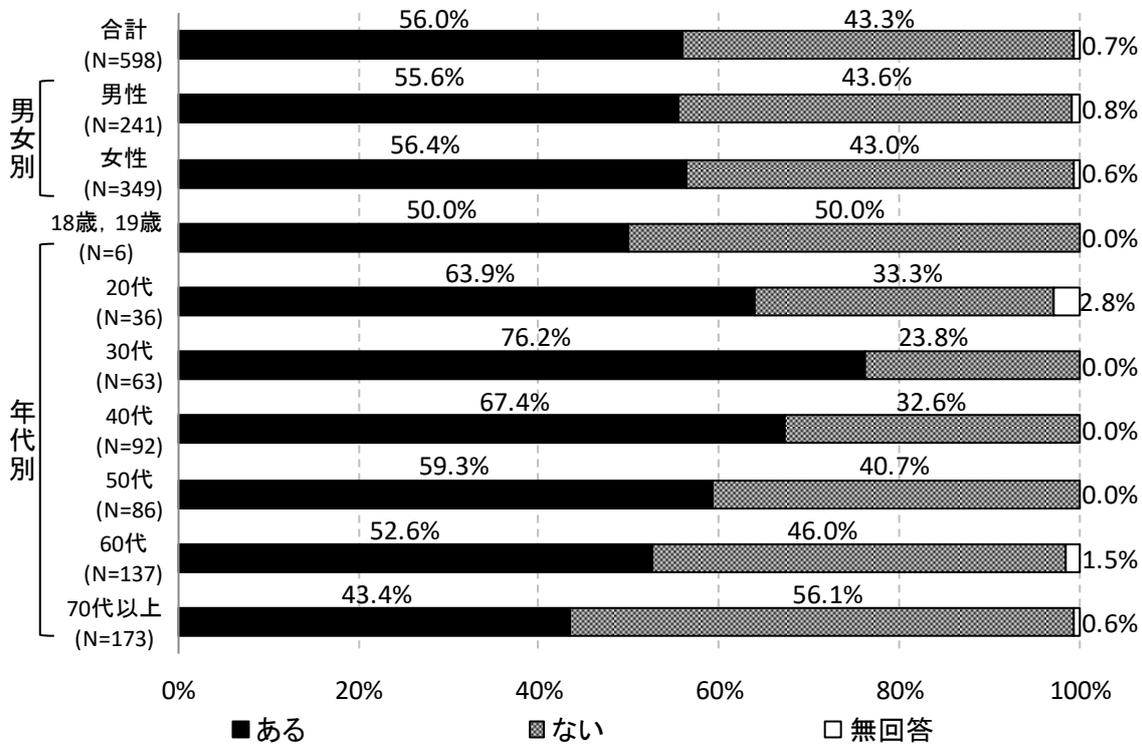


図 95 Q45 家庭での救急車利用時、入院せず帰宅したことがあるか

Q46 の家庭での救急車利用時、搬送されなかった経験はあるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で 9 割以上が「ない」と回答している (図 96)。

Q47 の年間の自殺者数の認知度に関しては、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「知っている」と回答している。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は 18 歳, 19 歳が 53.3%と最も低いのに対し、50 代が 64.0%と最も高い (図 97)。

Q48 の高槻市役所での自殺対策キャンペーンの認知度に関しては、男女別・年代別のすべての層で 8 割以上が「知らない」と回答している。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は 20 代が 8.1%と最も低いのに対し、70 代以上が 16.1%と最も高い (図 98)。

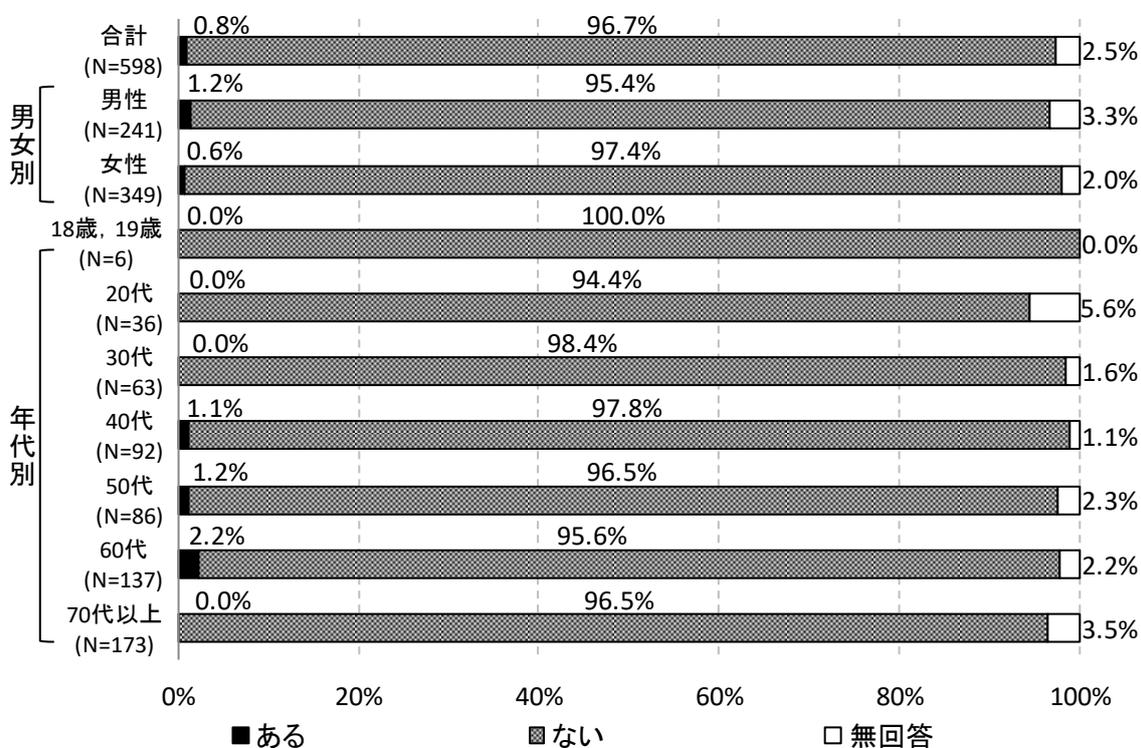


図 96 Q46 家庭での救急車利用時、搬送されなかった経験はあるか

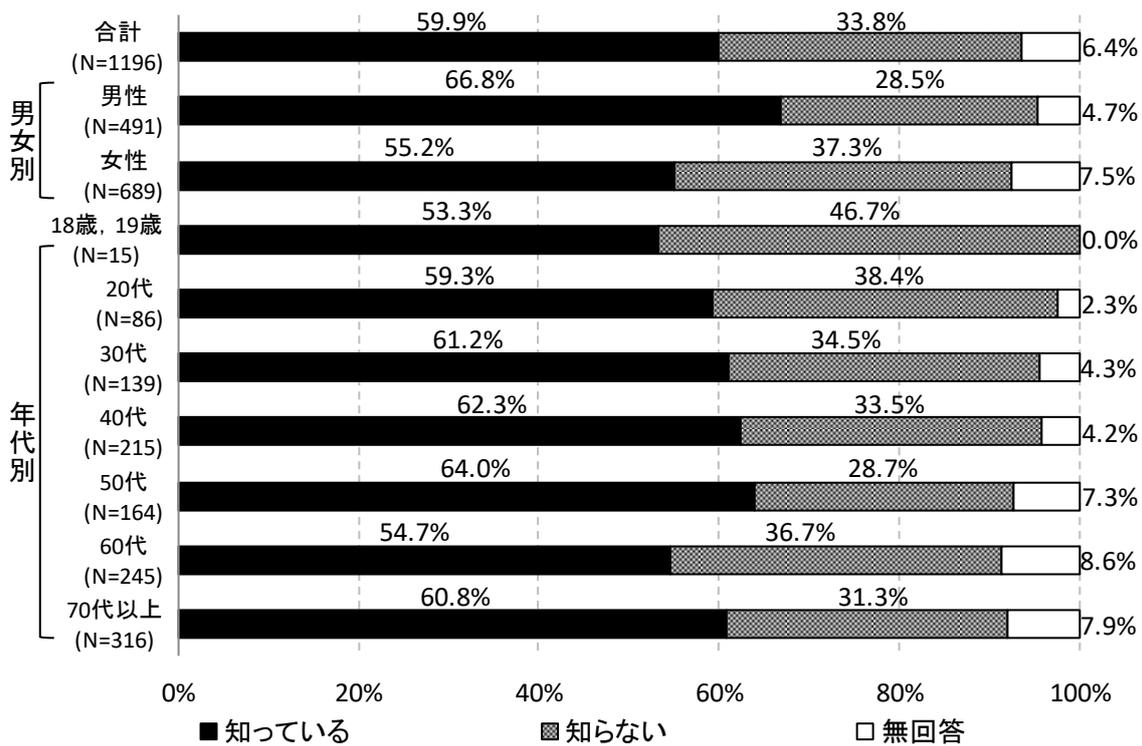


図 97 Q47 年間の自殺者数の認知度

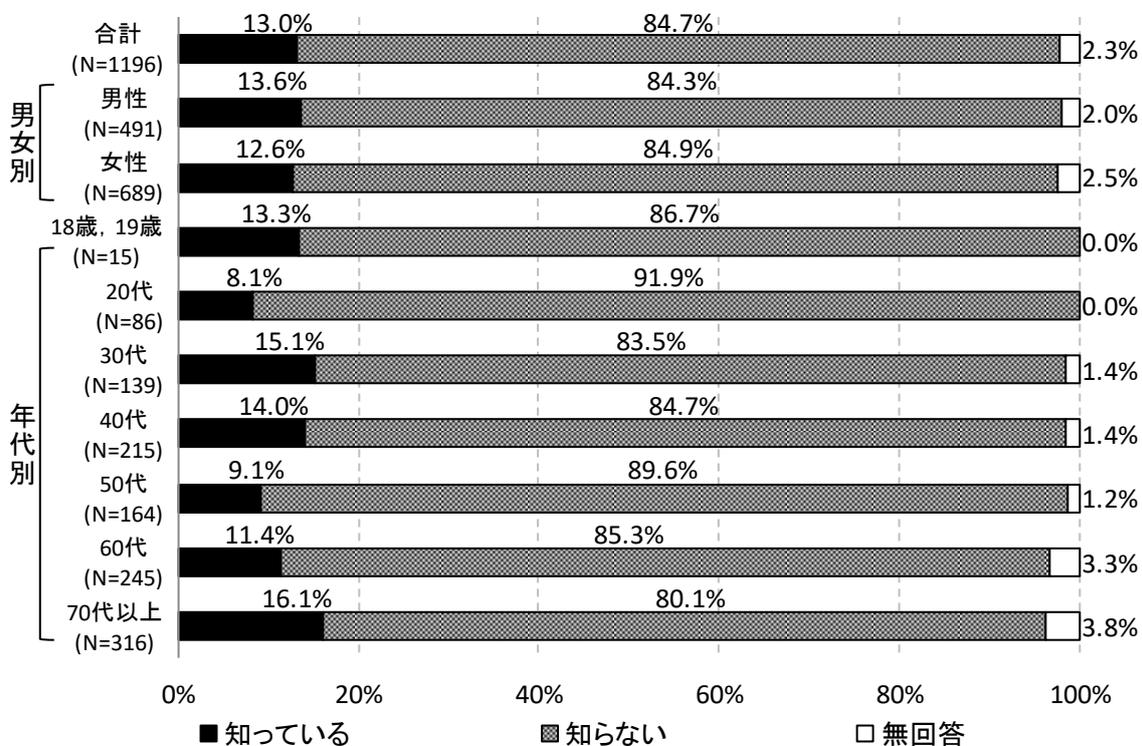


図 98 Q48 高槻市役所での自殺対策キャンペーンの認知度

Q49 の自殺に関する相談機関の認知度に関して、「知っている」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18 歳，19 歳では約 7 割以上であるのに対し、70 代以上では 33.2%と最も低い（図 99）。

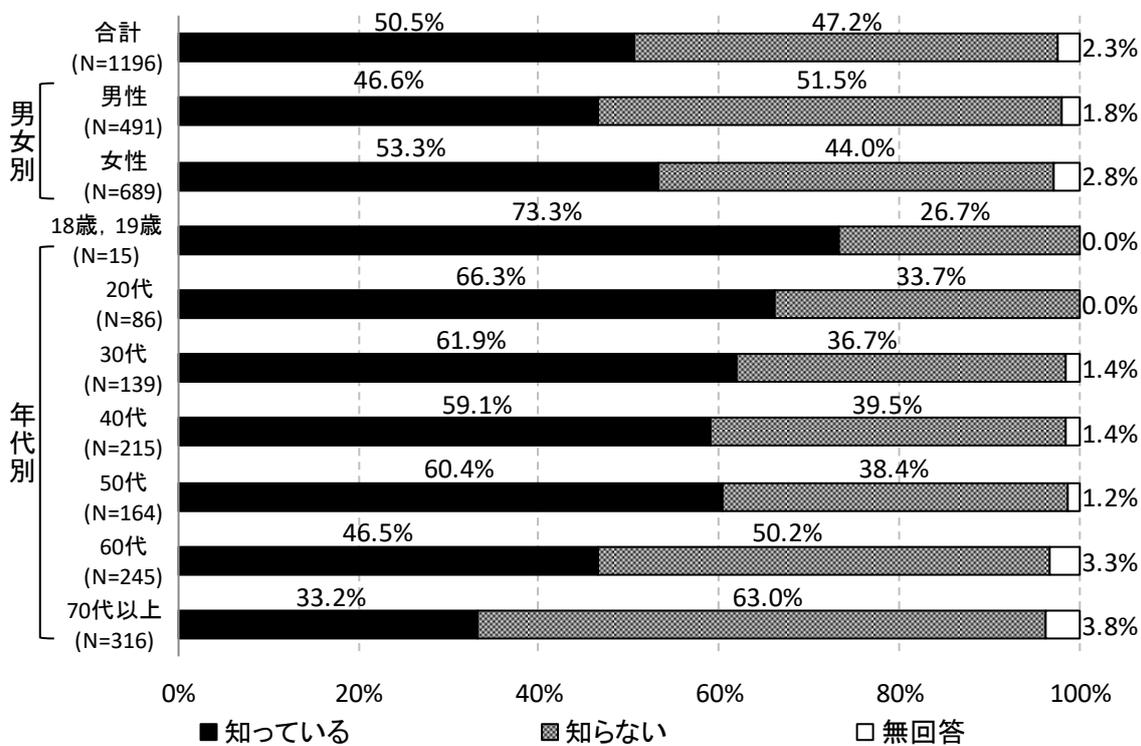


図 99 Q49 自殺に関する相談機関の認知度

Q50の自殺について、生死は本人の判断に任せるべきかに関して、「そう思う」もしくは「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代以下で5割以上であり、年代が上がるごとに減少し、70代以上が26.9%と最も低くなっている（図100）。

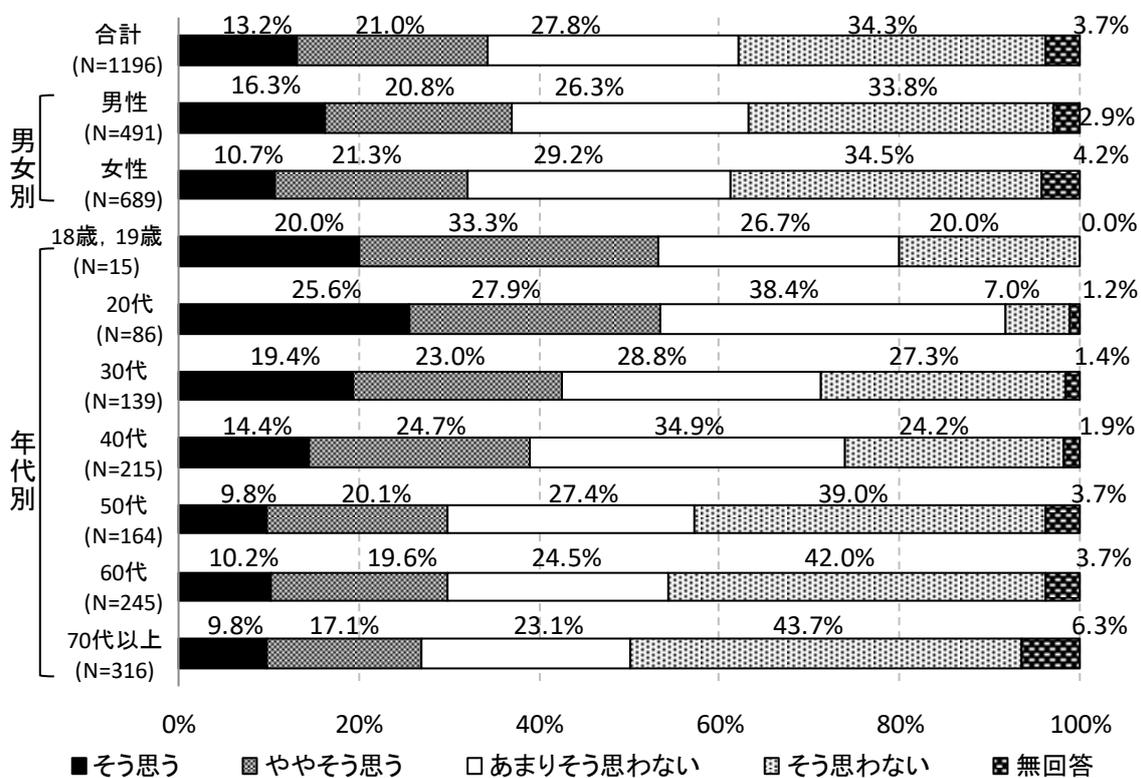


図100 Q50 自殺について、生死は本人の判断に任せるべきか

Q51 の自殺願望の気持ちの乗り越え方に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう」と「医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する」が6割以上である。次いで、「趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める」が41.4%である（図 101）。

Q51 を男女別で見ると、「医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する」が最も男女差が大きく、男性で56.6%、女性で66.0%と、女性の方が9.4ポイント高い割合である。反対に、「趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める」では男性で43.8%、女性で39.5%と、男性の方が4.3ポイント高い（図 102）。

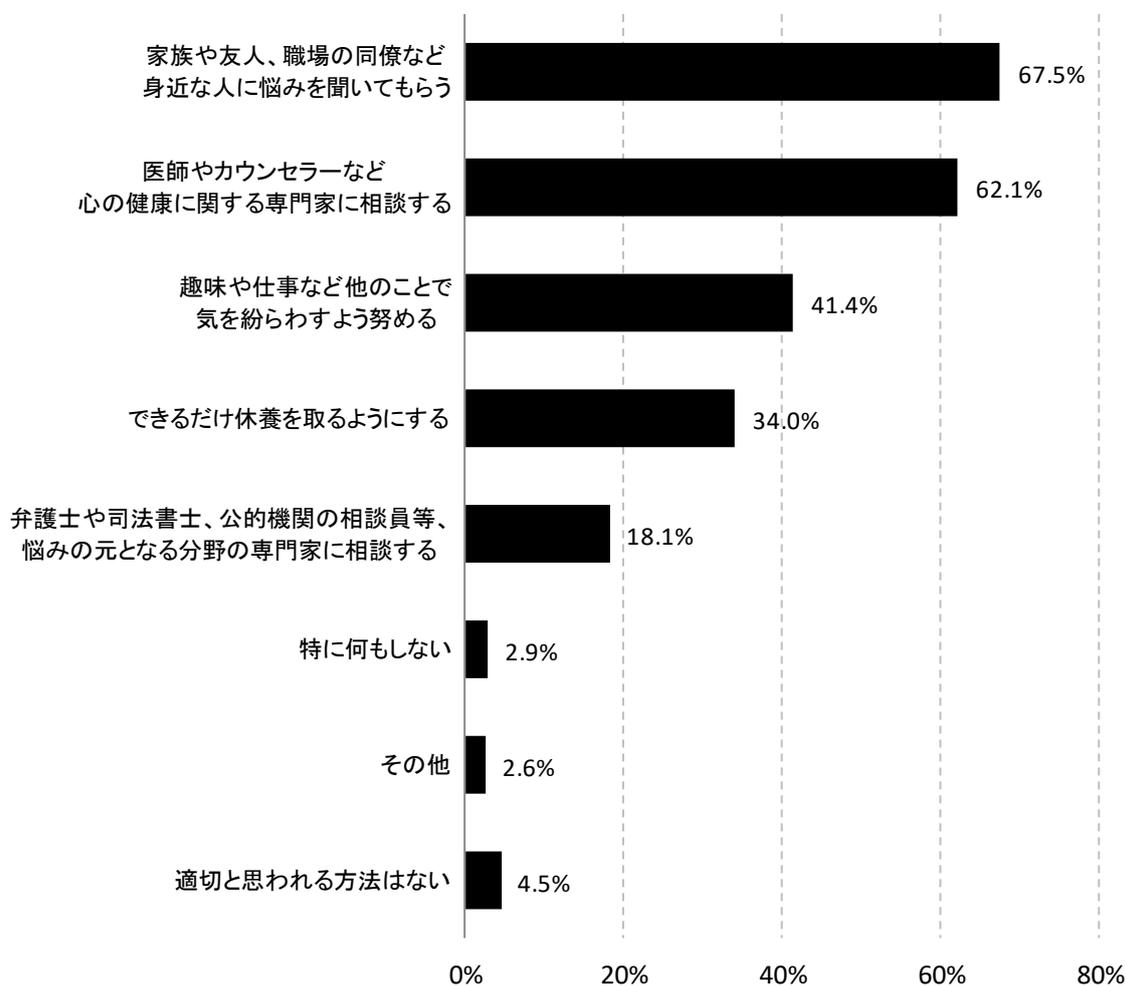


図 101 Q51 自殺願望の気持ちの乗り越え方（複数回答・全体 N=1196）

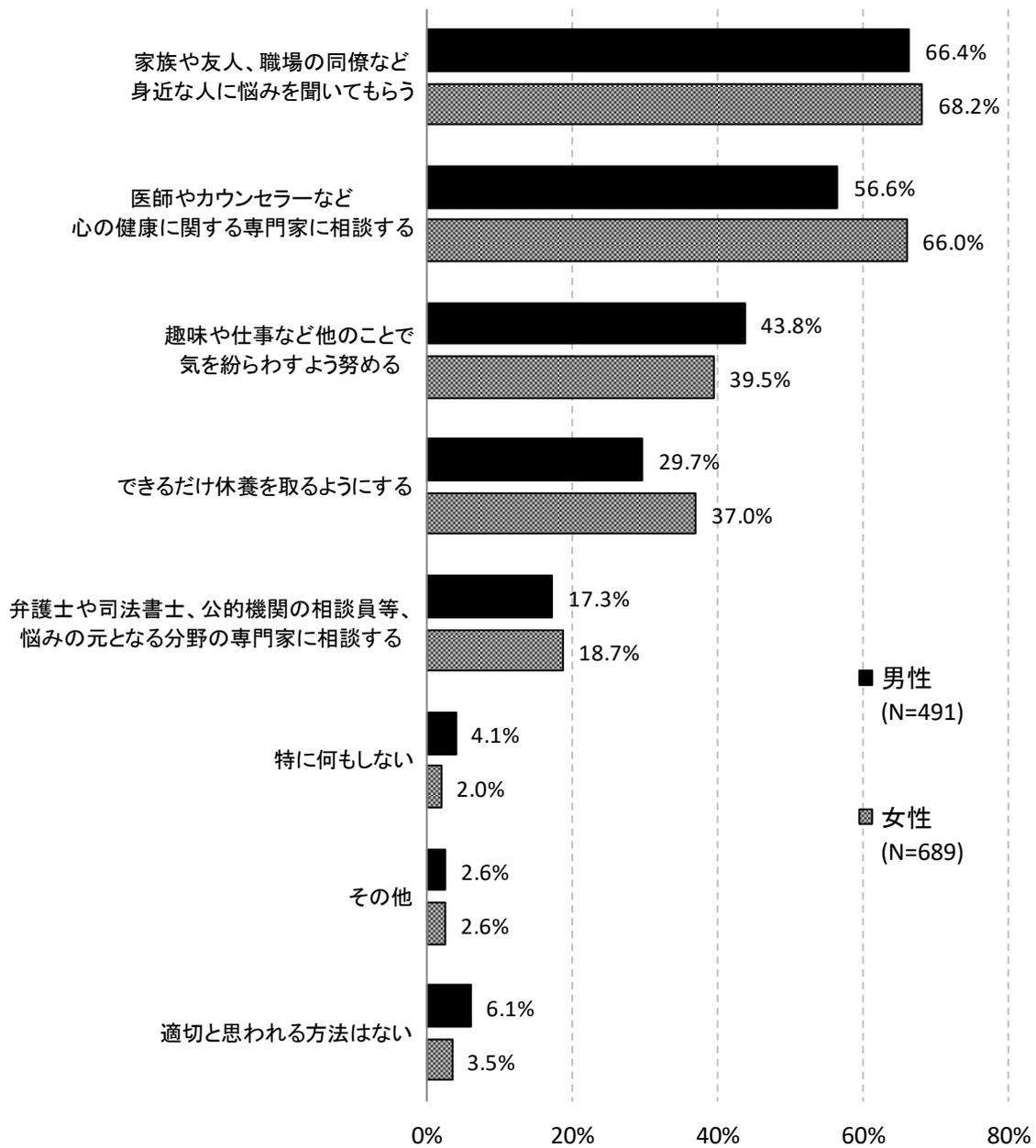


図 102 Q51 自殺願望の気持ちの乗り越え方（複数回答・男女別）

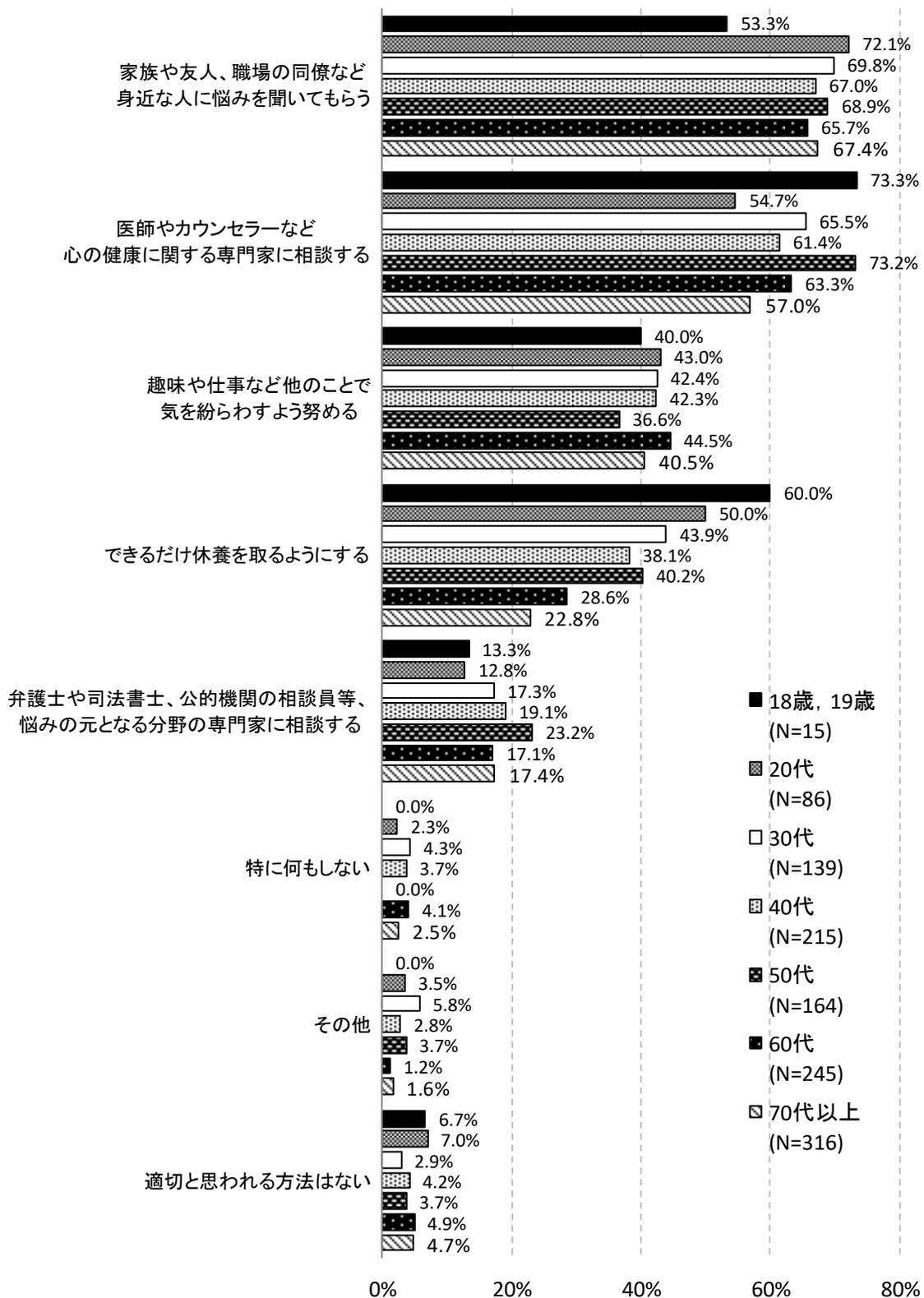


図 103 Q51 自殺願望の気持ちの乗り越え方（複数回答・年代別）

Q51 を年代別で見ると、「家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう」の割合は、20代以上においては6割以上であった。「医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する」の割合は、20代以上では50代が73.2%と最も高いのに対し、20代では54.7%と最も低い。「できるだけ休養を取るようにする」の割合は、18歳、19歳が60.0%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70代以上が22.8%と最も低くなっている（図103）。

Q52 の本気で自殺を考えたことがあるかに関して、男女別で見ると、男性が15.1%、女性が13.4%と、男性の方が1.7ポイント高い。年代別で見ると、「ある」と回答した人の割合は40代が20.5%と最も高いのに対し、70代以上が8.2%と最も低い（図104）。

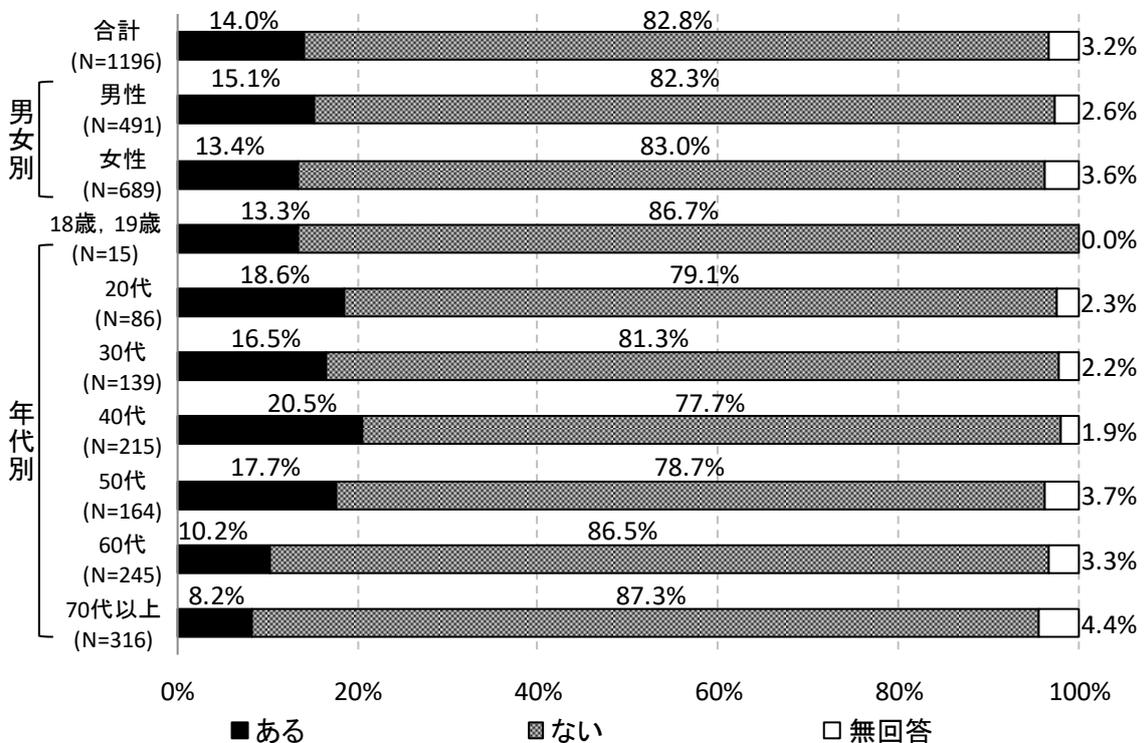


図104 Q52 本気で自殺を考えたことがあるか

Q53 の身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「ひたすら耳を傾けて聞く」が 55.4%と最も高い。次いで、「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す」または「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する」、「死んではいけない」と説得する」は 3~4 割程度である。(図 105)。

Q53 を男女別で見ると、「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す」が最も男女差が大きく、男性で 28.3%、女性で 44.3%と、女性の方が 16 ポイント高い割合である。反対に、「つまらないことを考えるな」と叱る」では男性で 13.8%、女性で 9.6%と、男性の方が 4.2 ポイント高い (図 106)。

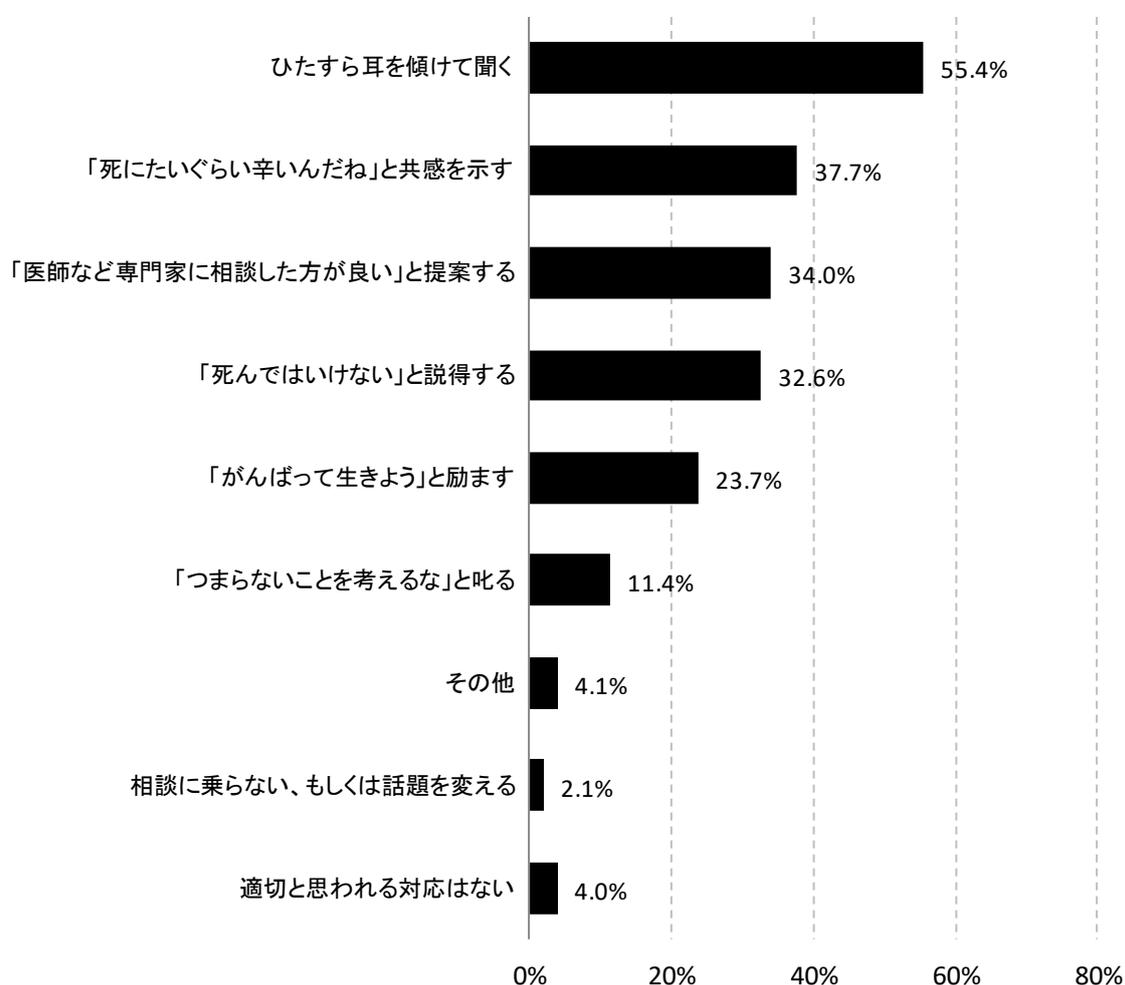


図 105 Q53 身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法 (複数回答・全体 N=1196)

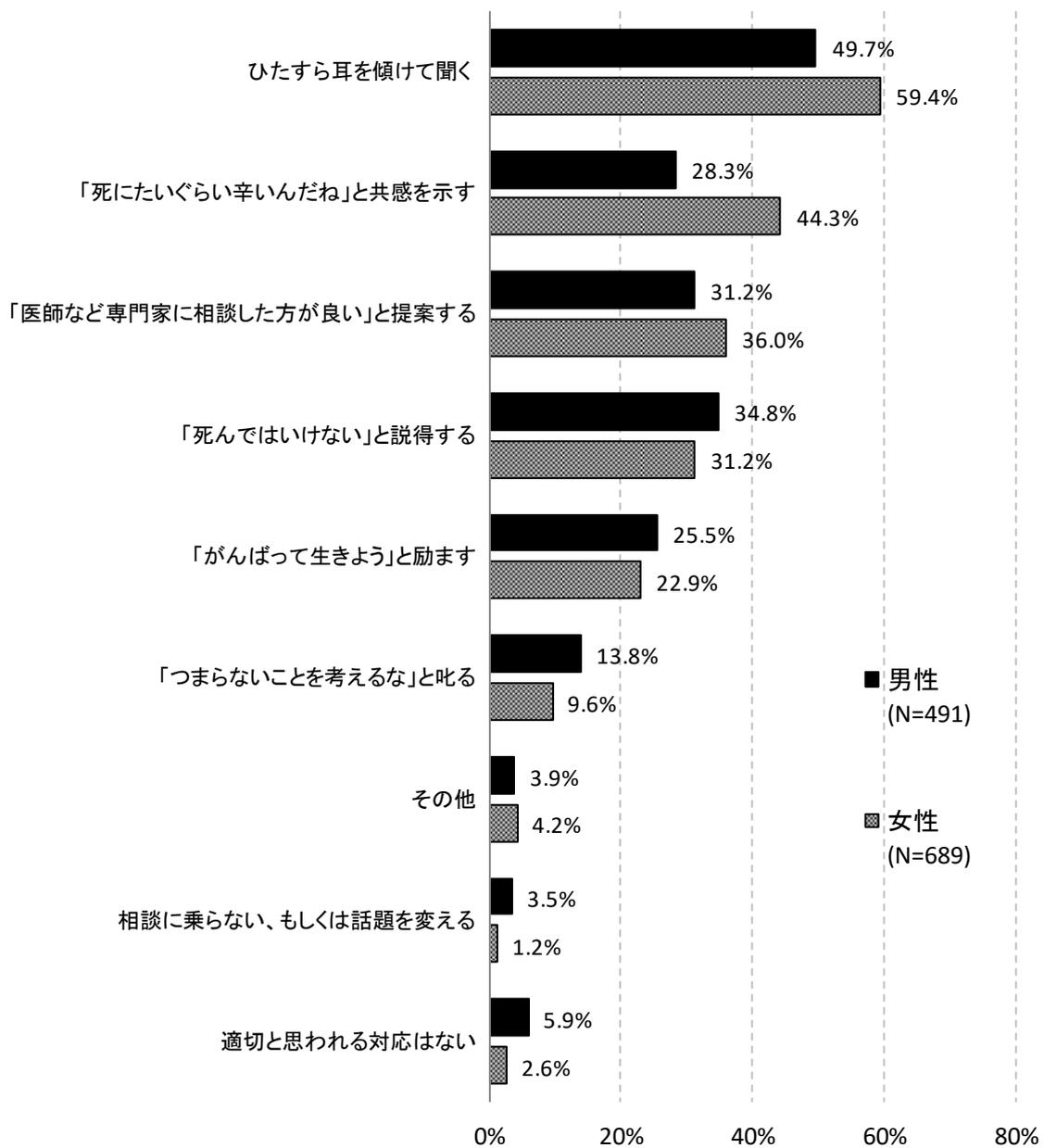


図 106 Q53 身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法（複数回答・男女別）

Q53を年代別で見ると、「ひたすら耳を傾けて聞く」の割合は、18歳，19歳は80.0%であるのに対し、一部年代を除いて年代が上がるごとに減少し、70代以上は44.0%と最も低くなっている。「死んではいけない」と説得する」の割合は、18歳，19歳が13.3%と最も低い。一部年代を除いて年代が上がるごとに増加し、70代以上が44.0%と最も高くなっている。この傾向は、「相談に乗らない、もしくは話題を変える」、「つまらないことを考えるな」と叱る」、「がんばって生きよう」と励ますも同様である（図 107）。

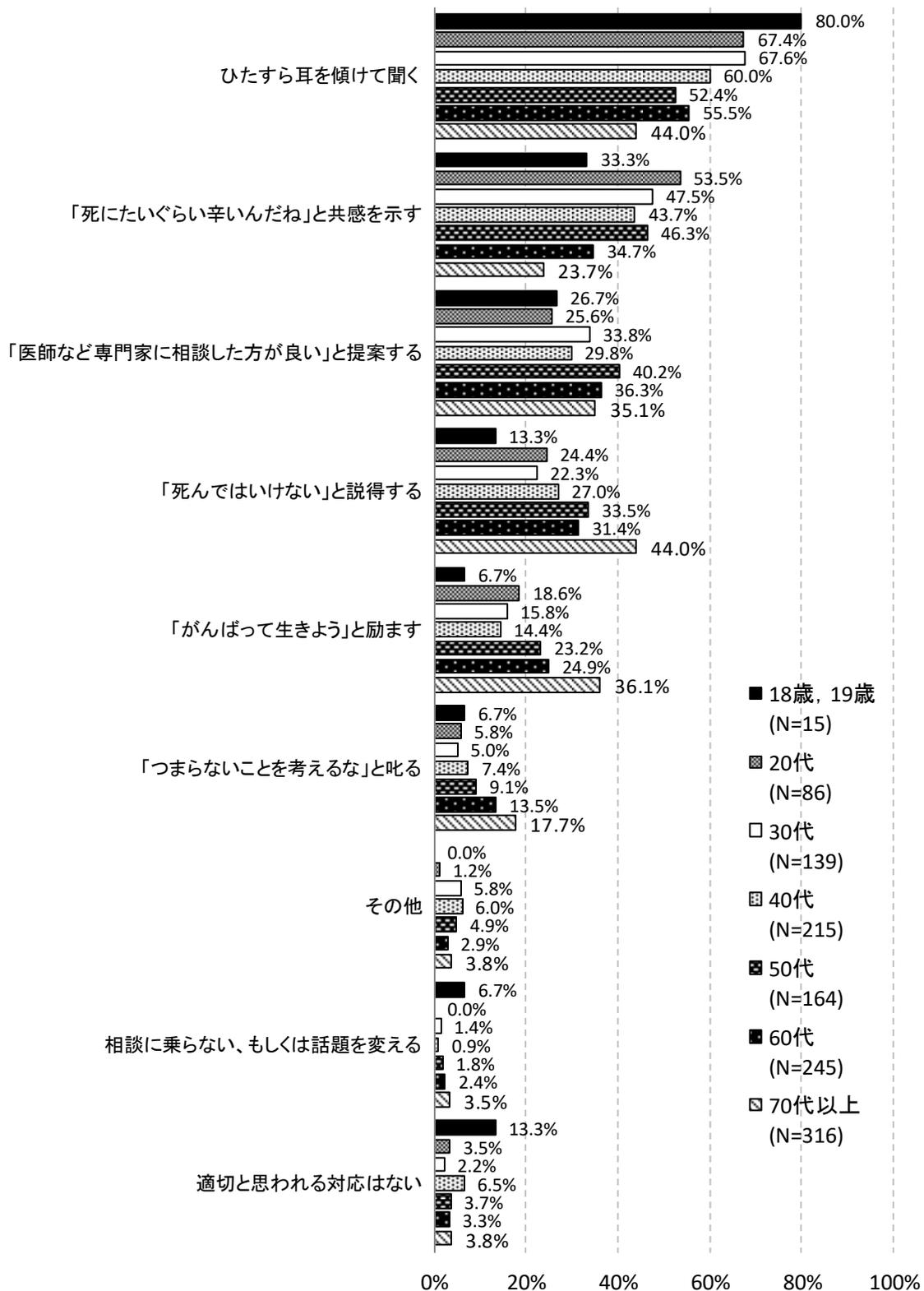


図 107 Q53 身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法（複数回答・年代別）

Q54①の最近良くなってきたと思うものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が35.5%と最も高い。次いで「図書館、博物館などの文化施設の整備」、「ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)」の順に高く、2割以上の割合である（図 108）。

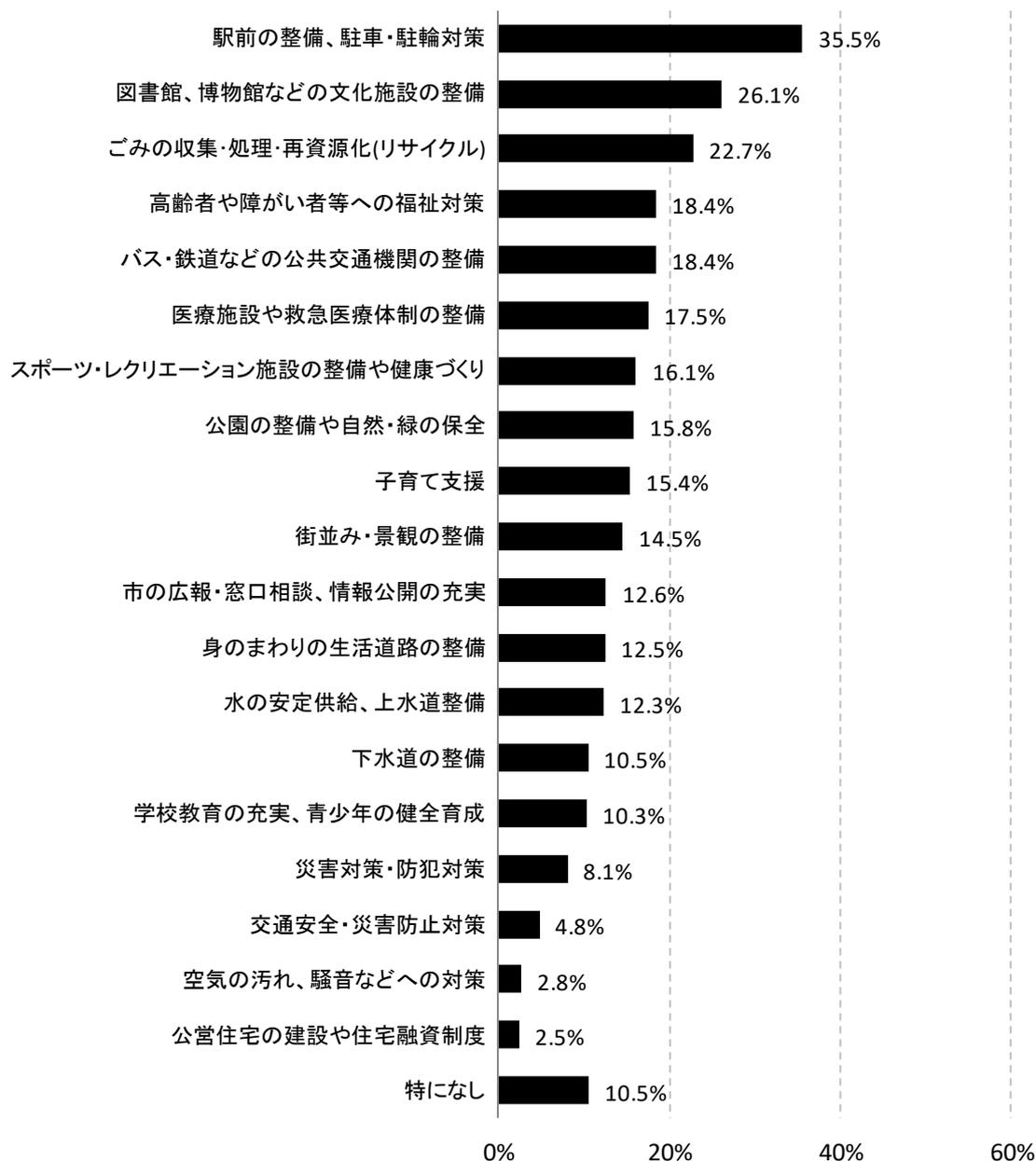


図 108 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・全体 N=1196）

Q54①を男女別で見ると、「子育て支援」が最も男女差が大きく、男性で 11.4%、女性で 18.1%と、女性の方が 6.7 ポイント高い割合である。反対に、「学校教育の充実、青少年の健全育成」では男性で 12.4%、女性で 8.7%と、男性の方が 3.7 ポイント高い（図 109）。

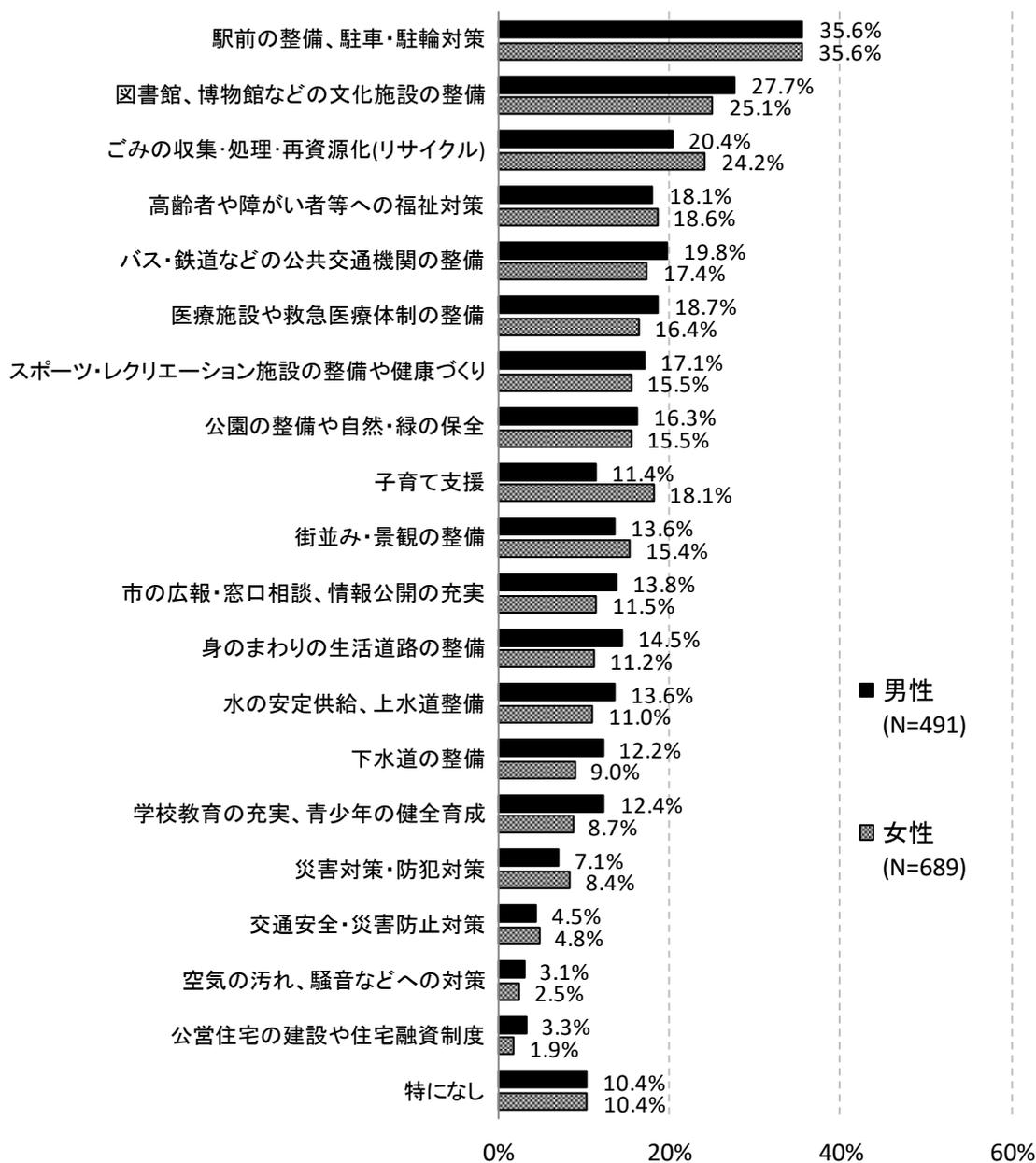


図 109 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・男女別）

Q54①を年代別で見ると、「ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)」の割合は、20代が9.3%と最も低く、70代以上が33.9%と最も高い。20代以上の若年層で低く高齢層で高いという傾向は、「医療施設や救急医療体制の整備」、「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」、「下水道の整備」も同様である。「子育て支援」の割合は、30代で23.7%と最も高く、40代は20.5%と2番目に高い(表5, 図110)。

表5 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの(複数回答・年代別)

	駅前 の整備、 駐車・駐輪 対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・処理 ・再資源化 (リサイクル)	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	バス・鉄道など の公共交通機関 の整備	医療施設や 救急医療 体制の整備	スポーツ・レク リエーション施 設の整備や健康 づくり
18歳、19歳 (N=15)	26.7	26.7	26.7	13.3	33.3	20.0	20.0
20代 (N=86)	22.1	20.9	9.3	10.5	23.3	9.3	7.0
30代 (N=139)	33.1	21.6	13.7	13.7	18.0	15.1	10.1
40代 (N=215)	42.3	34.0	16.7	13.5	12.1	17.2	15.3
50代 (N=164)	37.8	23.2	18.3	12.2	16.5	18.3	14.6
60代 (N=245)	37.1	27.8	25.3	21.2	16.7	19.6	20.0
70代以上 (N=316)	34.2	25.0	33.9	27.8	23.4	19.0	19.9

	公園の整備や 自然・緑の保全	子育て支援	街並み・ 景観の整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備	水の安定供給 、上水道整備	下水道の整備
18歳、19歳 (N=15)	13.3	6.7	13.3	6.7	20.0	13.3	0.0
20代 (N=86)	9.3	11.6	17.4	4.7	9.3	3.5	2.3
30代 (N=139)	17.3	23.7	14.4	8.6	16.5	8.6	5.0
40代 (N=215)	17.7	20.5	17.7	11.6	13.5	10.2	7.0
50代 (N=164)	15.2	16.5	12.8	9.1	13.4	4.9	6.7
60代 (N=245)	14.3	15.5	12.7	15.1	6.5	15.9	12.7
70代以上 (N=316)	17.1	9.5	14.6	17.4	14.9	18.4	18.0

	学校教育の 充実、青少年 の健全育成	災害対策・ 防犯対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
18歳、19歳 (N=15)	13.3	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0
20代 (N=86)	7.0	7.0	5.8	0.0	0.0	16.3
30代 (N=139)	11.5	7.9	4.3	2.9	3.6	14.4
40代 (N=215)	16.7	6.5	4.2	1.4	2.3	12.1
50代 (N=164)	5.5	10.4	4.9	1.2	1.8	17.7
60代 (N=245)	6.1	6.1	3.7	3.3	3.3	8.2
70代以上 (N=316)	12.0	9.5	6.0	4.7	2.8	4.4

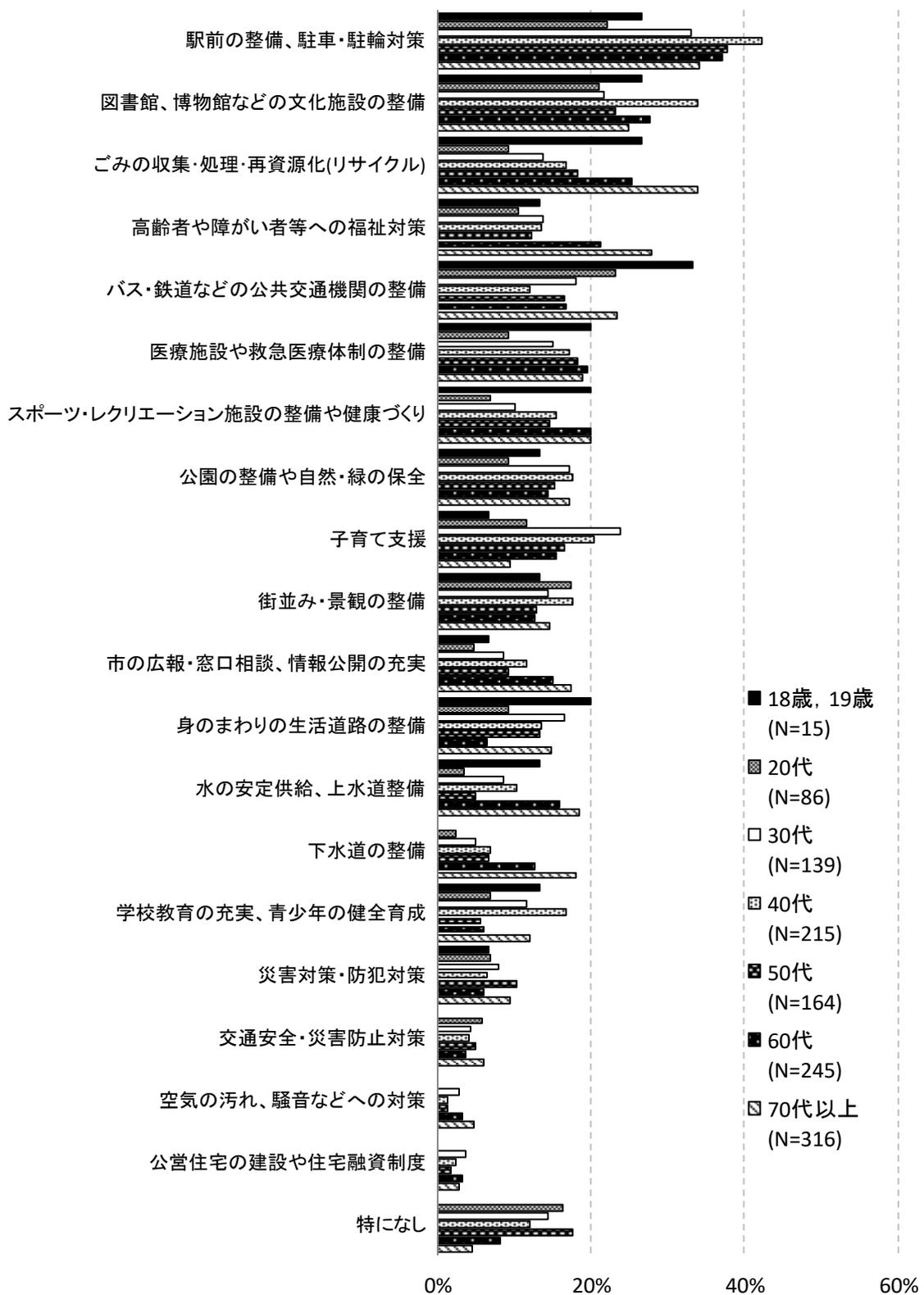


図 110 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・年代別）

次に提示する居住地域別に見たクロス集計では、檜田地区は除外してある。檜田地区は該当者が3人と極めて少なく、分析にそぐわないためである。

Q54①を居住地域別で見ると、「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」において、五領地区が2.2%だが、その他の地区では1~2割程度の割合である。また、「街並み・景観の整備」において、五領地区が4.3%だが、その他の地区では1~2割程度の割合である（表6、図111）。

表6 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

	駅前整備、 駐車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・処理 ・再資源化 (リサイクル)	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	バス・鉄道など の公共交通機関 の整備	医療施設や 救急医療 体制の整備	スポーツ・レク リエーション施 設の整備や健康 づくり
高槻北地区 (N=341)	44.6	34.3	24.6	19.9	22.6	17.9	19.1
高槻西地区 (N=194)	34.0	33.0	23.7	20.1	17.5	20.6	14.4
五領地区 (N=46)	39.1	13.0	15.2	10.9	23.9	15.2	2.2
高槻南地区 (N=303)	37.0	17.5	23.8	21.5	21.1	17.8	13.9
如是・富田地区 (N=236)	25.8	25.8	22.5	15.3	11.9	16.1	21.2
三箇牧地区 (N=28)	25.0	14.3	10.7	10.7	14.3	17.9	14.3

	公園の整備や 自然・緑の保全	子育て支援	街並み・ 景観の整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備	水の安定供給 、上水道整備	下水道の整備
高槻北地区 (N=341)	16.7	15.5	18.2	15.2	17.3	11.7	12.0
高槻西地区 (N=194)	16.0	14.9	13.9	13.9	13.9	13.4	8.2
五領地区 (N=46)	17.4	10.9	4.3	8.7	8.7	8.7	17.4
高槻南地区 (N=303)	12.5	15.2	15.5	11.9	11.9	14.5	10.6
如是・富田地区 (N=236)	18.2	16.9	12.3	11.9	8.5	9.3	8.1
三箇牧地区 (N=28)	14.3	14.3	10.7	7.1	0.0	17.9	14.3

	学校教育の 充実、青少年 の健全育成	災害対策・ 防犯対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
高槻北地区 (N=341)	12.3	9.7	4.4	4.1	1.2	7.6
高槻西地区 (N=194)	8.2	7.7	6.7	2.1	2.6	11.3
五領地区 (N=46)	6.5	8.7	2.2	4.3	2.2	8.7
高槻南地区 (N=303)	11.2	5.3	4.0	3.3	4.0	10.2
如是・富田地区 (N=236)	7.6	10.6	5.1	0.8	3.0	13.1
三箇牧地区 (N=28)	7.1	7.1	7.1	0.0	0.0	7.1

注) 檜田地区の回答者は3人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

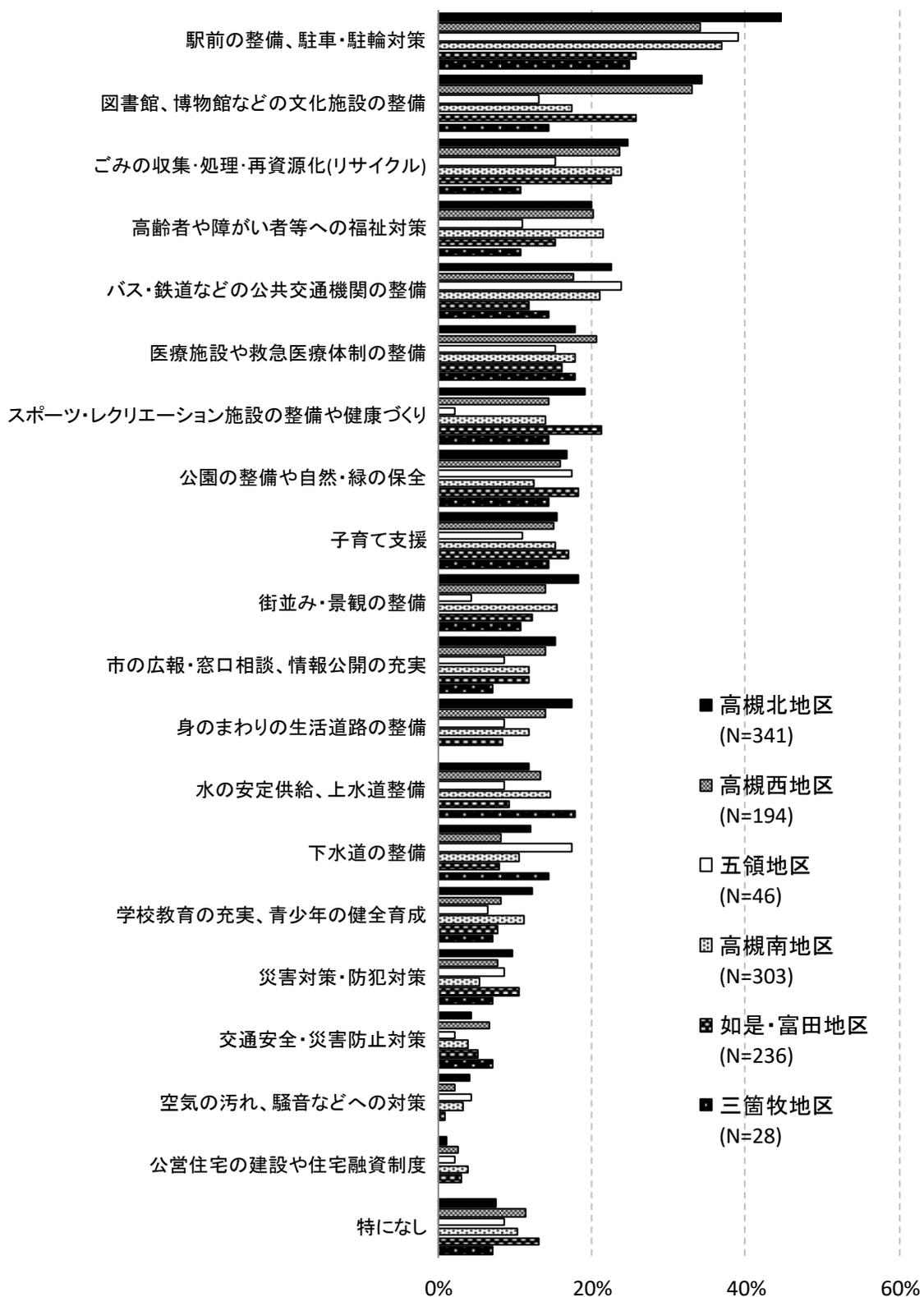


図 111 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

Q54①を居住年数別で見ると、「下水道の整備」において、50年以上の居住者が21.6%と、その他の年数の居住者よりも6.4ポイント以上高い割合である（表7、図112）。

表7 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・処理 ・再資源化 (リサイクル)	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	バス・鉄道など の公共交通機関 の整備	医療施設や 救急医療 体制の整備	スポーツ・レク リレーション施 設の整備や健康 づくり
1年未満 (N=27)	14.8	11.1	7.4	3.7	7.4	7.4	3.7
1年以上3年未満 (N=35)	14.3	20.0	22.9	20.0	17.1	14.3	11.4
3年以上5年未満 (N=31)	16.1	29.0	19.4	9.7	12.9	12.9	6.5
5年以上10年未満 (N=67)	38.8	26.9	14.9	11.9	19.4	13.4	10.4
10年以上20年未満 (N=170)	32.9	19.4	12.9	11.8	20.0	17.1	14.1
20年以上30年未満 (N=197)	36.0	27.4	20.8	14.2	15.7	17.3	15.7
30年以上40年未満 (N=239)	43.5	28.9	23.8	21.3	17.6	16.7	21.8
40年以上50年未満 (N=283)	36.0	29.7	28.3	25.1	20.5	20.5	20.5
50年以上 (N=134)	35.8	25.4	30.6	22.4	20.9	20.1	9.7

	公園の整備や 自然・緑の保全	子育て支援	街並み・ 景観の整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備	水の安定供給 、下水道整備	下水道の整備
1年未満 (N=27)	3.7	11.1	14.8	0.0	3.7	7.4	3.7
1年以上3年未満 (N=35)	11.4	14.3	17.1	8.6	14.3	8.6	2.9
3年以上5年未満 (N=31)	16.1	9.7	3.2	12.9	16.1	9.7	6.5
5年以上10年未満 (N=67)	20.9	23.9	14.9	10.4	11.9	4.5	1.5
10年以上20年未満 (N=170)	10.0	16.5	12.9	10.6	16.5	5.9	0.6
20年以上30年未満 (N=197)	20.3	10.7	18.8	9.6	9.1	11.2	9.6
30年以上40年未満 (N=239)	15.9	18.4	12.1	13.4	13.4	13.4	10.9
40年以上50年未満 (N=283)	16.3	16.6	15.2	16.6	13.4	15.5	15.2
50年以上 (N=134)	16.4	11.9	15.7	14.9	9.7	18.7	21.6

	学校教育の 充実、青少年 の健全育成	災害対策・ 防犯対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
1年未満 (N=27)	3.7	0.0	3.7	0.0	0.0	25.9
1年以上3年未満 (N=35)	0.0	2.9	2.9	2.9	5.7	28.6
3年以上5年未満 (N=31)	6.5	0.0	0.0	0.0	0.0	19.4
5年以上10年未満 (N=67)	10.4	9.0	7.5	1.5	0.0	11.9
10年以上20年未満 (N=170)	12.4	11.2	2.9	0.6	2.9	15.9
20年以上30年未満 (N=197)	8.6	8.6	5.1	1.5	2.0	8.6
30年以上40年未満 (N=239)	10.9	5.9	4.6	4.6	3.8	7.5
40年以上50年未満 (N=283)	12.7	11.7	6.0	3.2	2.8	7.8
50年以上 (N=134)	7.5	3.0	4.5	4.5	1.5	6.7

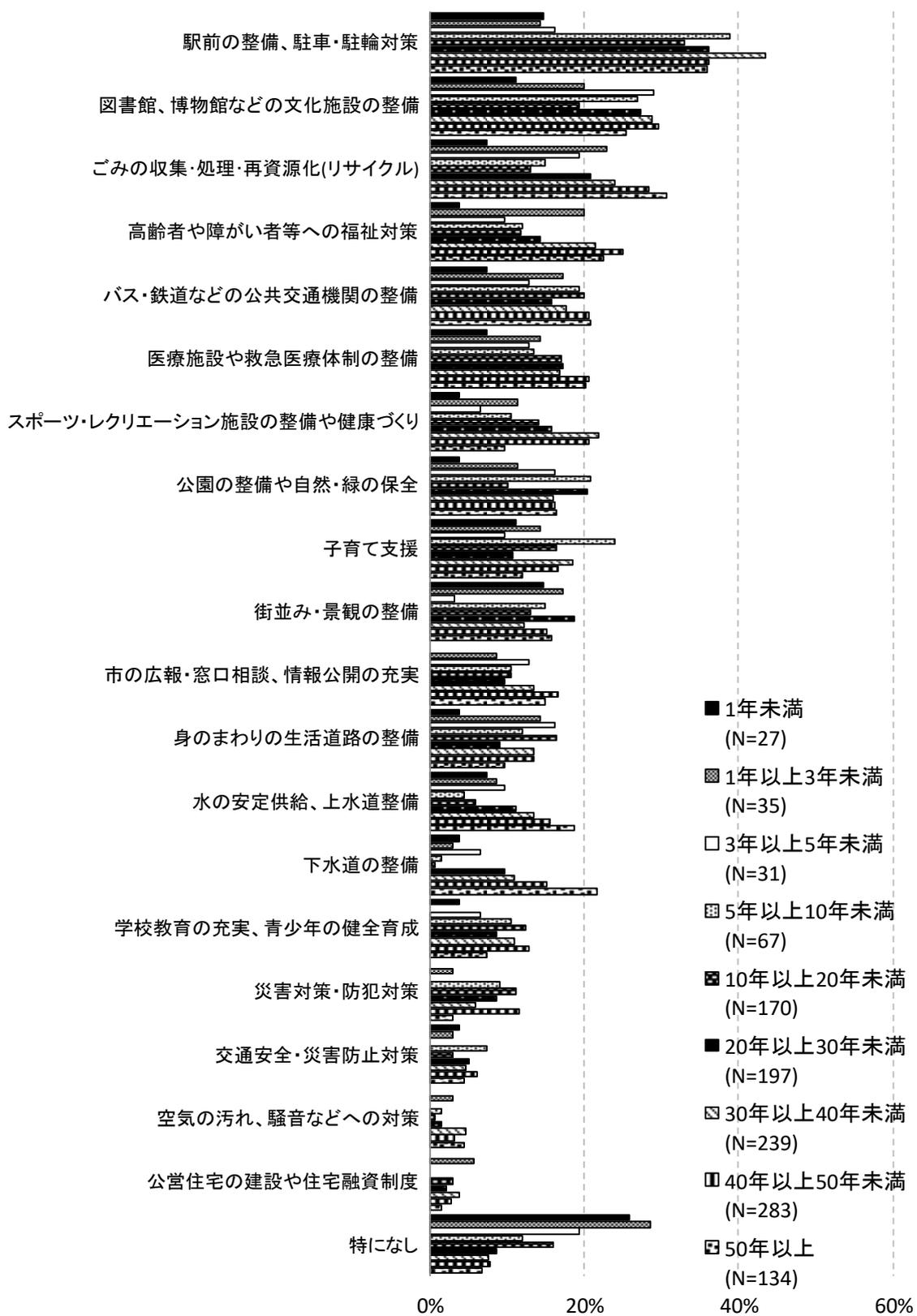


図 112 Q54① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

Q54②の今後力を入れてほしいものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「高齢者や障がい者等への福祉対策」や「医療施設や救急医療体制の整備」、「学校教育の充実、青少年の健全育成」、「災害対策・防犯対策」、「子育て支援」が2割以上を占めている。特に、「高齢者や障がい者等への福祉対策」の割合が最も高い(図 113)。

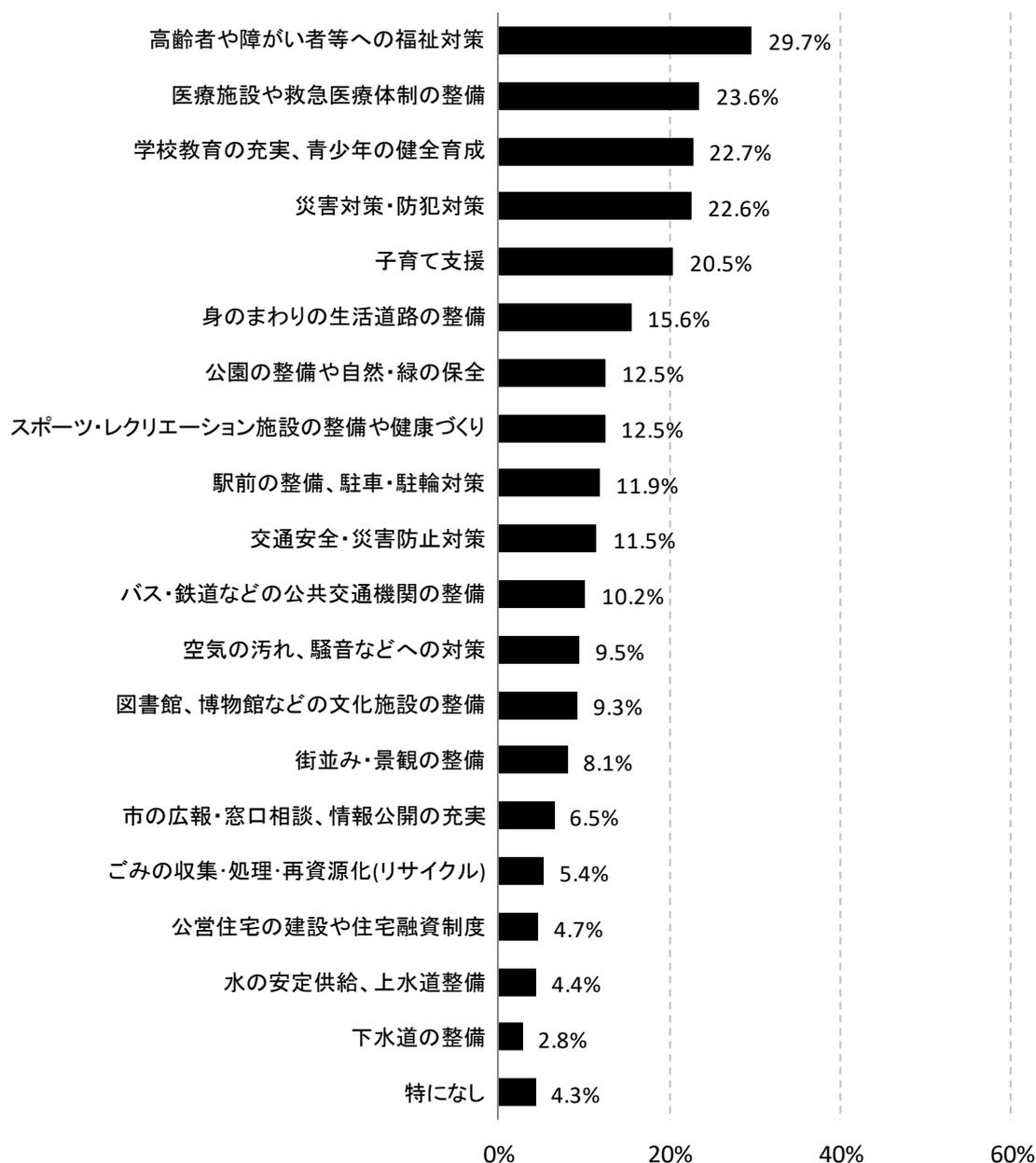


図 113 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・全体 N=1196）

Q54②を男女別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」が最も男女差が大きく、男性で25.7%、女性で32.8%と、女性の方が7.1ポイント高い割合である。反対に、「学校教育の充実、青少年の健全育成」では男性で26.1%、女性で20.6%と、男性の方が5.5ポイント高い（図114）。

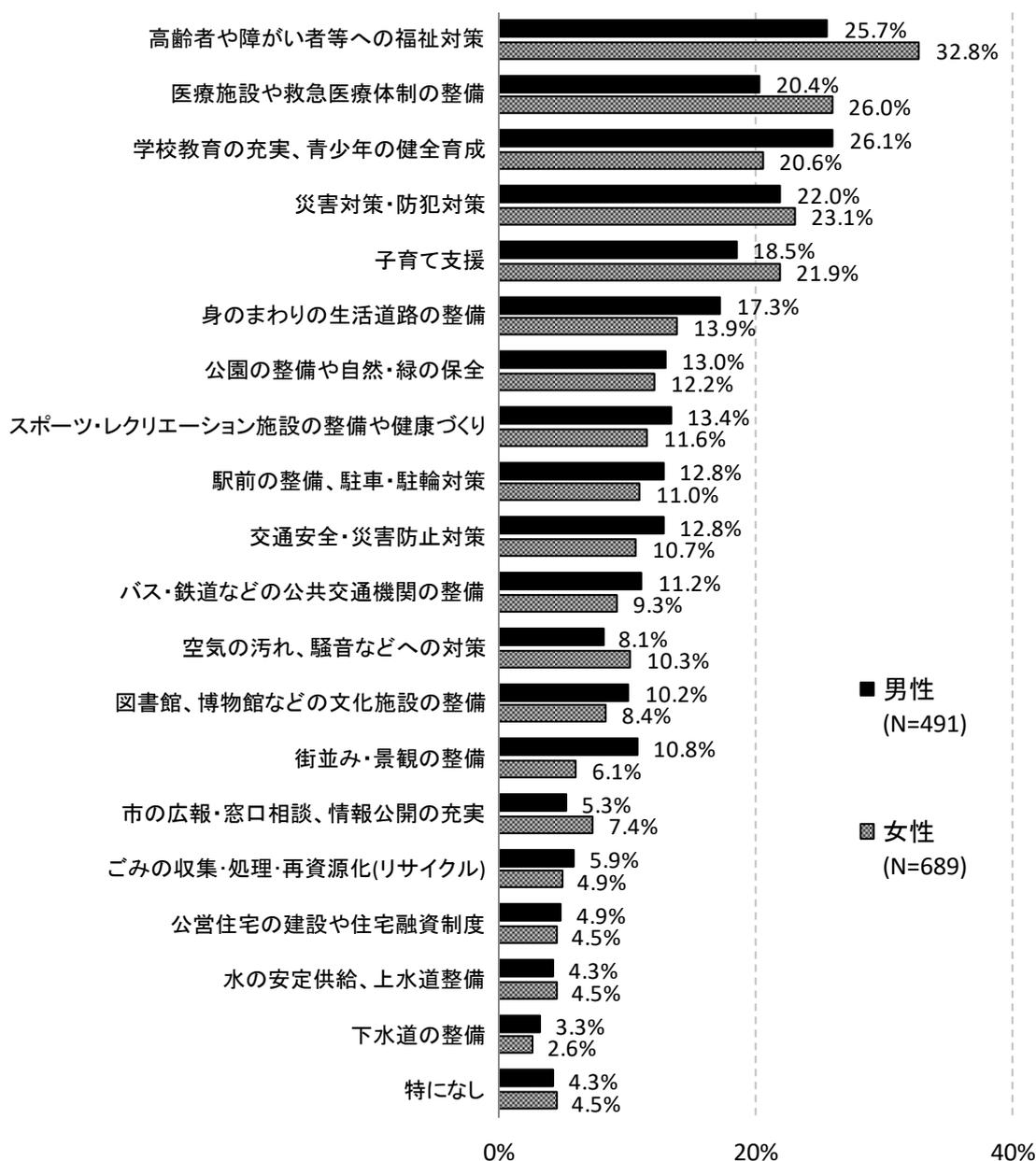


図 114 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q54②を年代別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」の割合は、18歳、19歳が13.3%と最も低いが、一部年代を除いて年代が上がるごとに増加し、70代以上が40.2%と最も高くなっている。「災害対策・防犯対策」の割合は、20代は17.4%と最も低いが、その他の世代では2割以上である。「空気の汚れ、騒音などへの対策」の割合は、30代が14.4%と最も高く、60代が6.1%と最も低い（表8、図115）。

表8 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	公園の整備や自然・緑の保全
18歳、19歳 (N=15)	13.3	13.3	13.3	20.0	33.3	13.3	13.3
20代 (N=86)	14.0	22.1	14.0	17.4	30.2	12.8	17.4
30代 (N=139)	14.4	18.7	35.3	20.9	43.9	12.9	18.7
40代 (N=215)	25.1	23.7	32.6	21.4	33.5	17.7	16.7
50代 (N=164)	33.5	27.4	17.7	26.2	12.2	18.3	8.5
60代 (N=245)	32.7	21.2	19.2	23.7	11.8	15.5	11.4
70代以上 (N=316)	40.2	26.6	19.6	22.8	9.8	14.2	8.9

	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	駅前の整備、駐車・駐輪対策	交通安全・災害防止対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備
18歳、19歳 (N=15)	0.0	6.7	13.3	13.3	13.3	13.3	6.7
20代 (N=86)	19.8	18.6	14.0	15.1	14.0	16.3	7.0
30代 (N=139)	12.9	7.9	14.4	10.1	14.4	12.2	10.8
40代 (N=215)	12.6	16.3	11.6	13.0	10.2	8.4	8.4
50代 (N=164)	15.2	14.0	7.9	11.6	9.8	11.6	9.1
60代 (N=245)	9.4	10.2	13.5	8.2	6.1	9.0	7.8
70代以上 (N=316)	12.0	8.9	9.8	7.3	7.6	5.4	6.6

	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上水道整備	下水道の整備	特になし
18歳、19歳 (N=15)	0.0	13.3	0.0	0.0	6.7	6.7
20代 (N=86)	3.5	3.5	3.5	5.8	2.3	9.3
30代 (N=139)	5.8	7.2	5.0	3.6	3.6	5.0
40代 (N=215)	6.0	4.2	6.5	2.8	2.8	3.3
50代 (N=164)	9.8	4.9	6.1	2.4	2.4	7.9
60代 (N=245)	6.5	7.8	5.3	2.9	1.6	3.7
70代以上 (N=316)	6.6	3.8	2.2	7.6	3.5	2.2

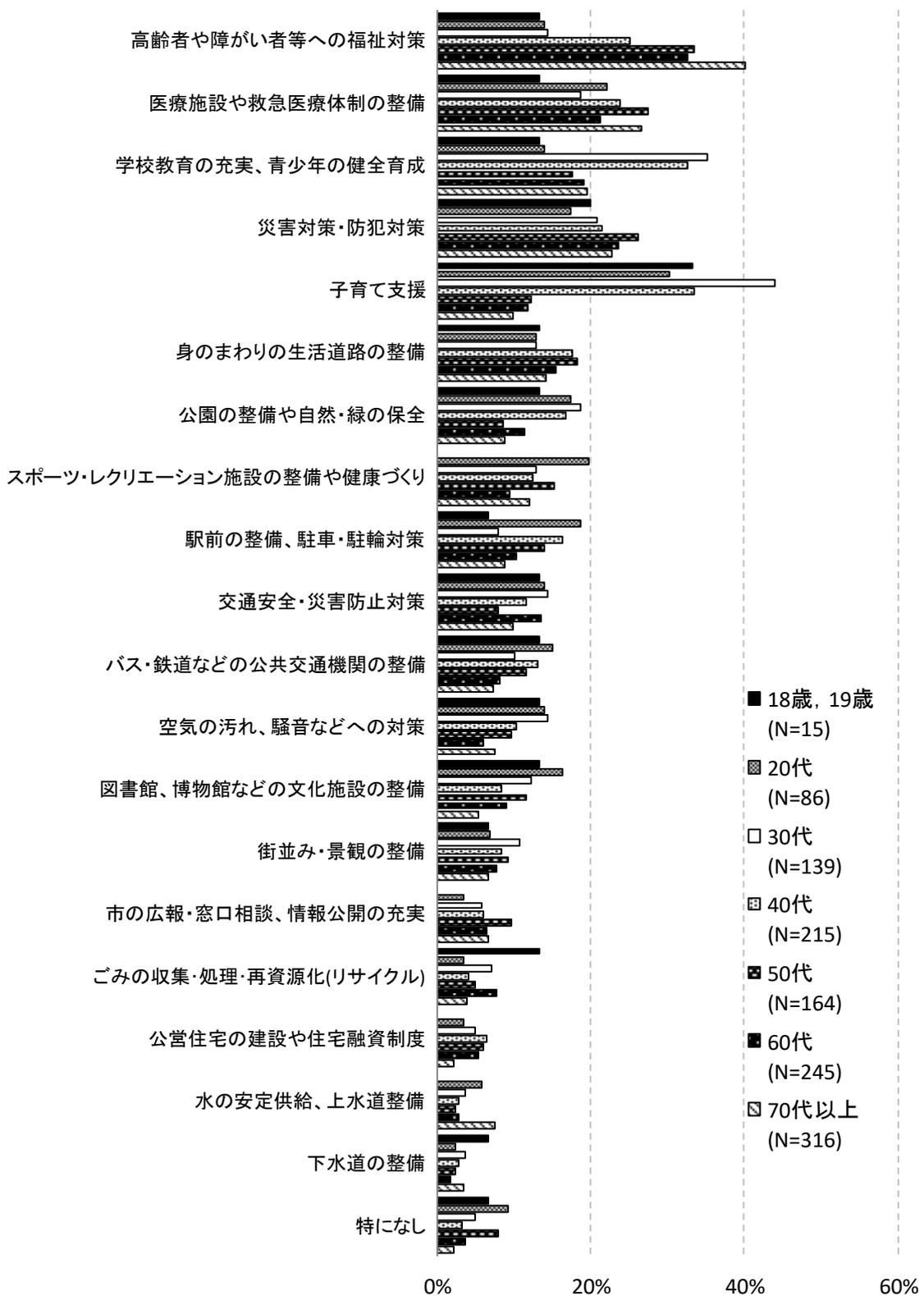


図 115 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

次に提示する居住地域別に見たクロス集計では、檜田地区は除外してある。檜田地区は該当者が3人と極めて少なく、分析にそぐわないためである。

Q54②を居住地域別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」において、五領地区が6.5%だが、その他の地区では1割以上の割合である。また、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、三箇牧地区が25.0%と、その他の地区よりも8.5ポイント以上高い割合である(表9, 図116)。

表9 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(複数回答・居住地域別)

	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	公園の整備や自然・緑の保全
高槻北地区(N=341)	31.1	26.4	24.6	25.5	20.2	16.1	14.1
高槻西地区(N=194)	29.9	23.7	24.2	24.7	20.1	14.4	14.9
五領地区(N=46)	15.2	17.4	19.6	23.9	23.9	17.4	8.7
高槻南地区(N=303)	29.7	19.5	21.5	22.1	20.8	17.2	13.2
如是・富田地区(N=236)	30.9	27.1	21.6	19.1	21.6	14.8	9.7
三箇牧地区(N=28)	25.0	21.4	25.0	14.3	25.0	10.7	3.6

	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	駅前の整備、駐車・駐輪対策	交通安全・災害防止対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備
高槻北地区(N=341)	13.8	10.9	14.4	9.1	9.4	9.1	9.1
高槻西地区(N=194)	11.9	12.4	11.3	16.5	9.8	12.4	7.7
五領地区(N=46)	17.4	6.5	19.6	10.9	4.3	15.2	8.7
高槻南地区(N=303)	11.6	12.2	9.2	7.6	12.2	9.6	7.9
如是・富田地区(N=236)	11.4	13.1	10.6	8.1	6.8	5.9	8.1
三箇牧地区(N=28)	14.3	14.3	0.0	25.0	3.6	7.1	0.0

	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上水道整備	下水道の整備	特になし
高槻北地区(N=341)	6.5	2.9	3.2	5.0	3.5	2.9
高槻西地区(N=194)	7.7	7.2	4.6	2.1	1.0	3.6
五領地区(N=46)	8.7	4.3	4.3	6.5	0.0	2.2
高槻南地区(N=303)	5.0	5.6	4.6	4.0	2.6	4.6
如是・富田地区(N=236)	8.1	7.6	7.6	5.5	5.1	6.4
三箇牧地区(N=28)	0.0	3.6	0.0	0.0	0.0	7.1

注) 檜田地区の回答者は3人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

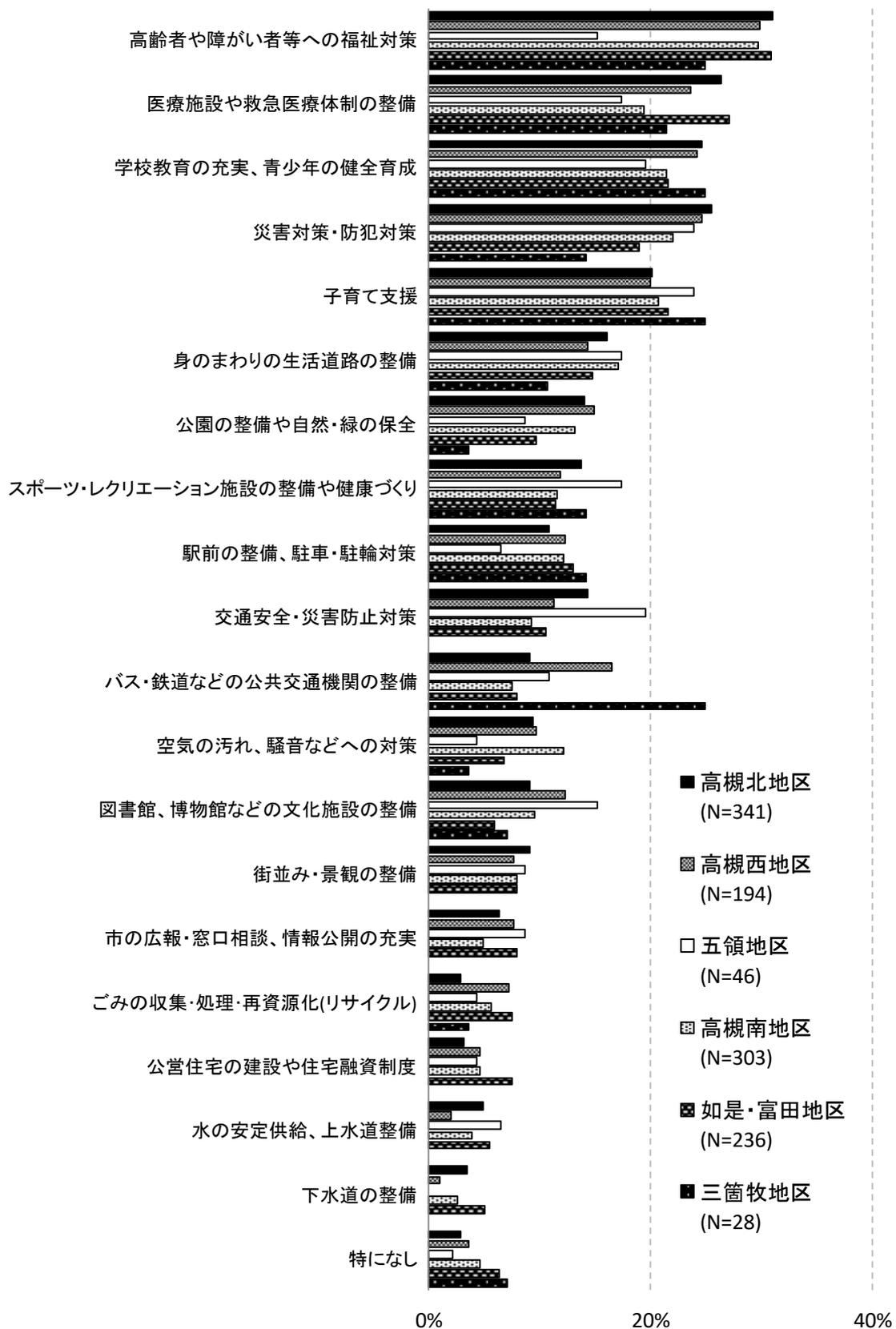


図 116 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q54②を居住年数別で見ると、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、1年未満の居住者が22.2%と、その他の年数の居住者よりも9.8ポイント以上高い割合である（表10、図117）。

表 10 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	公園の整備や自然・緑の保全
1年未満 (N=27)	14.8	11.1	25.9	25.9	37.0	14.8	7.4
1年以上3年未満 (N=35)	22.9	25.7	20.0	11.4	42.9	8.6	17.1
3年以上5年未満 (N=31)	19.4	25.8	16.1	25.8	25.8	19.4	25.8
5年以上10年未満 (N=67)	14.9	13.4	38.8	26.9	40.3	19.4	10.4
10年以上20年未満 (N=170)	24.7	24.7	27.6	21.8	25.9	19.4	14.1
20年以上30年未満 (N=197)	31.5	24.4	15.7	19.8	17.8	17.3	12.2
30年以上40年未満 (N=239)	32.2	22.2	25.1	23.4	22.6	14.6	13.8
40年以上50年未満 (N=283)	33.9	24.7	23.7	21.2	13.1	11.7	11.0
50年以上 (N=134)	34.3	29.1	14.9	29.1	11.2	17.9	9.7

	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	駅前の整備、駐車・駐輪対策	交通安全・災害防止対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備
1年未満 (N=27)	25.9	18.5	14.8	22.2	11.1	11.1	11.1
1年以上3年未満 (N=35)	17.1	17.1	8.6	8.6	14.3	14.3	5.7
3年以上5年未満 (N=31)	22.6	19.4	16.1	9.7	22.6	9.7	12.9
5年以上10年未満 (N=67)	16.4	10.4	14.9	11.9	4.5	16.4	10.4
10年以上20年未満 (N=170)	12.9	13.5	13.5	12.4	7.6	11.8	7.6
20年以上30年未満 (N=197)	12.7	9.1	11.7	12.2	10.2	10.7	10.2
30年以上40年未満 (N=239)	13.8	9.6	11.3	10.5	11.7	10.0	8.4
40年以上50年未満 (N=283)	9.2	13.8	9.2	7.4	6.0	4.6	6.0
50年以上 (N=134)	9.0	11.2	11.2	8.2	11.2	7.5	6.0

	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上水道整備	下水道の整備	特になし
1年未満 (N=27)	0.0	11.1	3.7	0.0	0.0	0.0
1年以上3年未満 (N=35)	11.4	2.9	8.6	5.7	8.6	2.9
3年以上5年未満 (N=31)	9.7	12.9	3.2	9.7	3.2	3.2
5年以上10年未満 (N=67)	1.5	1.5	0.0	3.0	4.5	4.5
10年以上20年未満 (N=170)	5.3	5.9	4.7	1.8	1.2	4.1
20年以上30年未満 (N=197)	6.1	6.6	6.6	6.6	2.0	7.1
30年以上40年未満 (N=239)	7.9	6.7	6.3	2.5	3.3	4.2
40年以上50年未満 (N=283)	6.7	3.5	4.2	4.9	2.5	3.5
50年以上 (N=134)	7.5	4.5	1.5	6.0	3.7	3.7

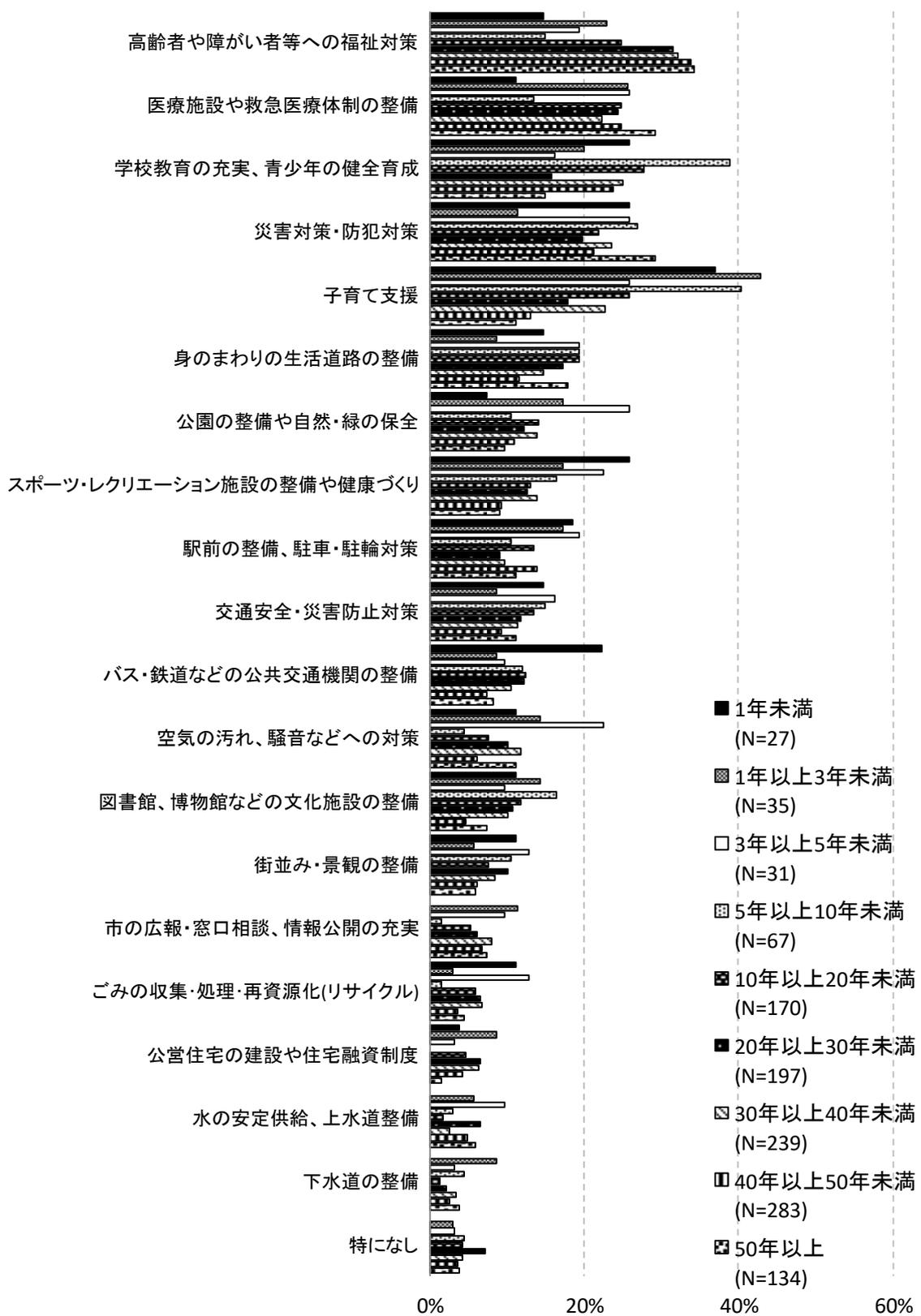


図 117 Q54② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q55 の一般的に、結婚はすべきかに関して、「すべき」または「した方がよい」と回答した人の割合は、年代別に見ると、18歳，19歳が46.7%と最も低いが、年代が上がるごとに上昇し、70代以上が87.3%と最も高くなっている（図118）。

Q56 の日常生活の中でゆっくり過ごせるような時間はあるかに関して、「十分持っている」または「かなり持っている」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳，19歳が80.0%と最も高く、次いで70代以上が76.9%である。反対に、30代が39.6%と最も低く、次いで40代が40.5%である（図119）。

Q57 の経済的なゆとりに関しては、男女別・年代別のすべての層で4割以上が「ゆとりがある」または「ややゆとりがある」と回答している。年代別で見ると、「ゆとりがある」または「ややゆとりがある」と回答した人の割合は18歳，19歳が66.6%と最も高いのに対し、50代が40.2%と最も低い（図120）。

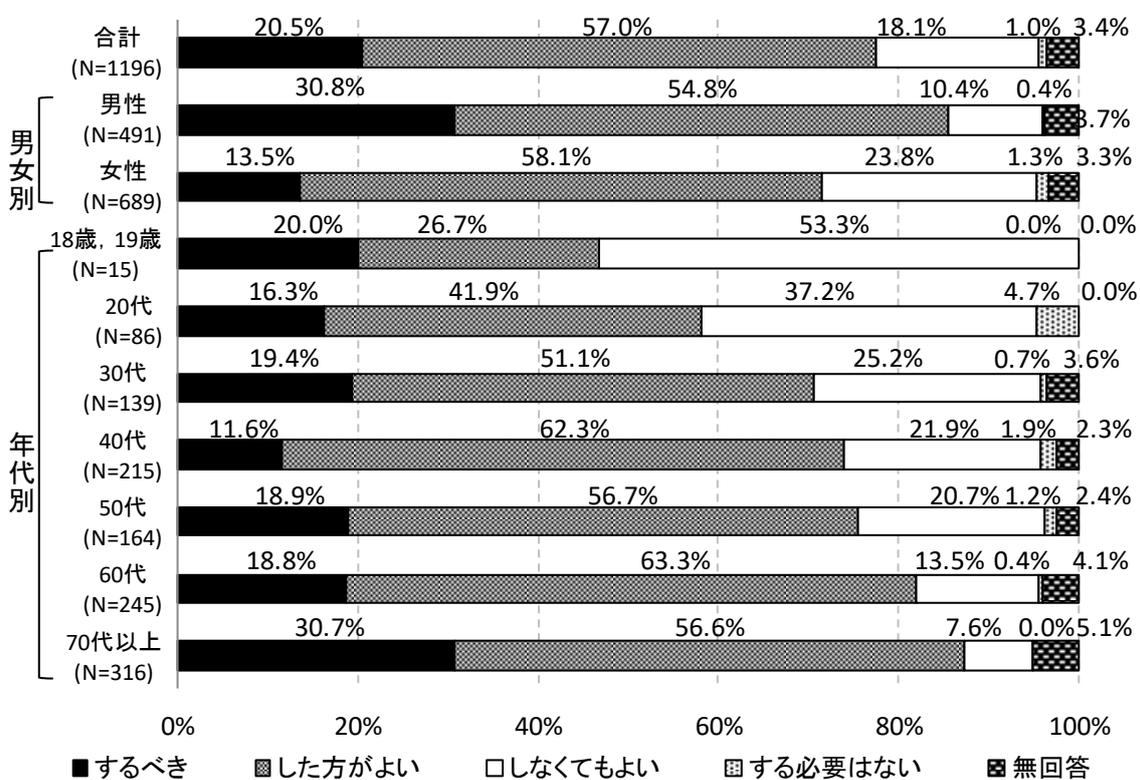


図118 Q55 一般的に、結婚はすべきか

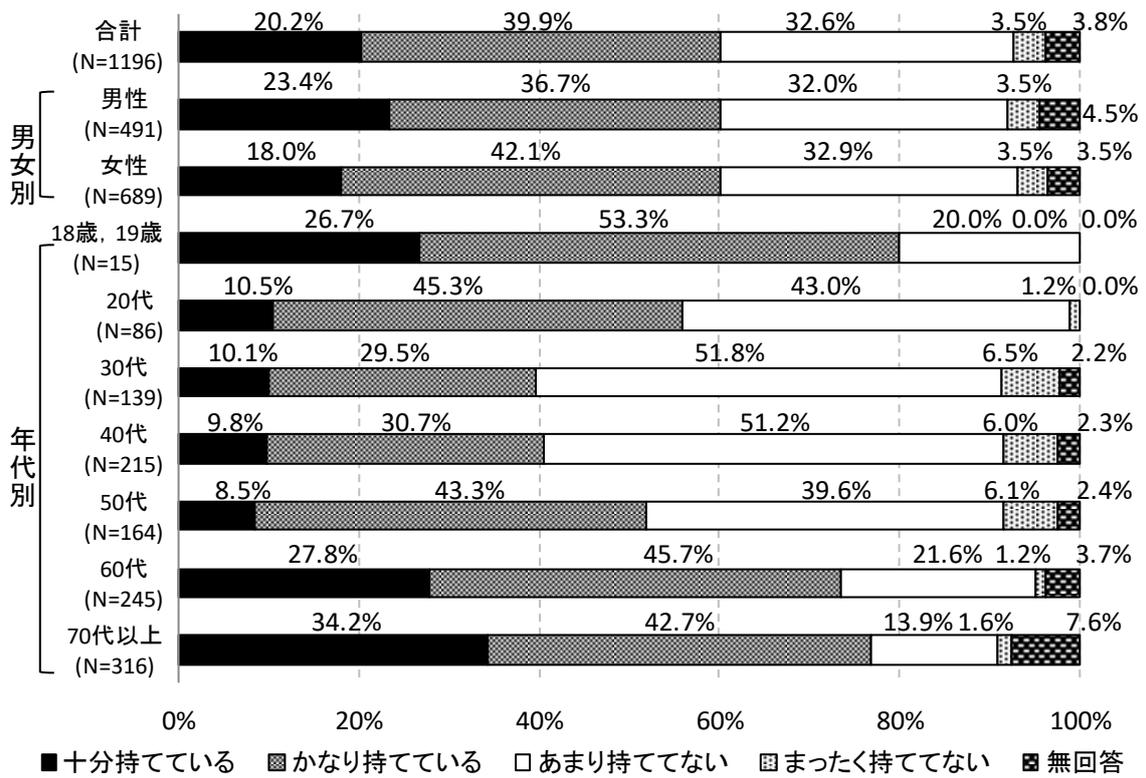


図 119 Q56 日常生活の中でゆっくり過ごせるような時間はあるか

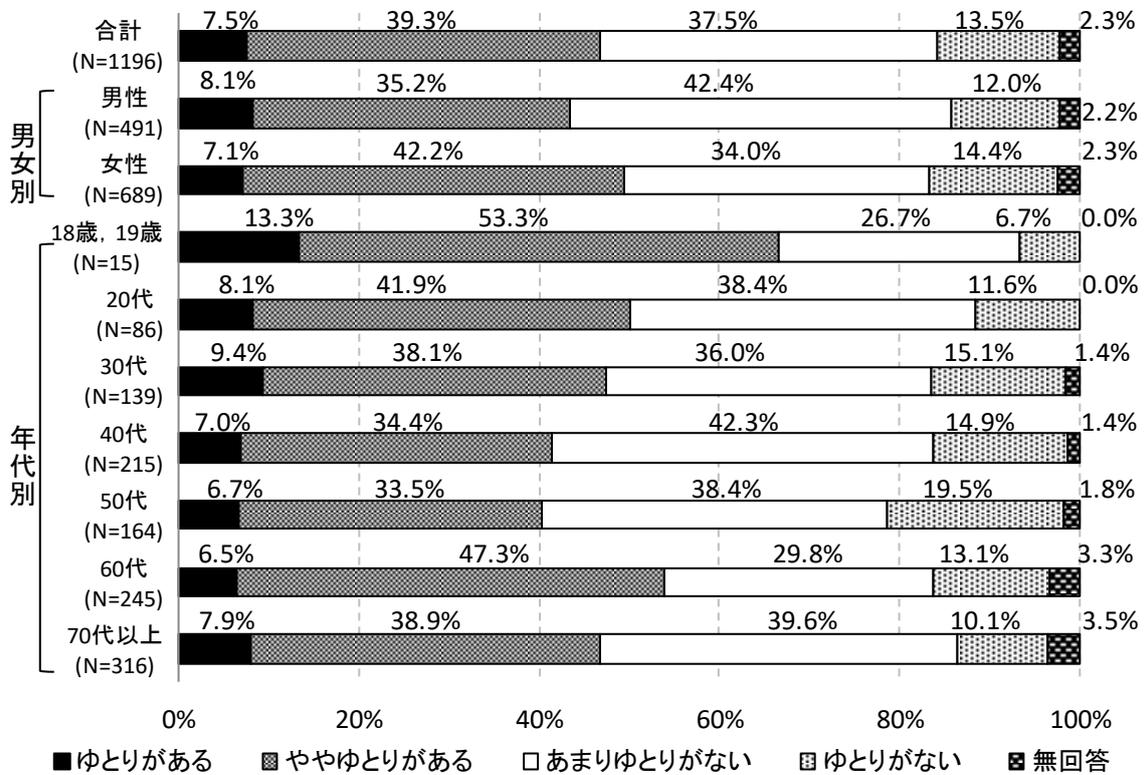


図 120 Q57 経済的なゆとり

Q58 のチャンスが平等なら貧富の差を許容するかに関しては、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は男性が69.8%、女性が56.6%と、男性の方が13.2ポイント高い(図121)。

Q59 の競争の自由よりも格差解消のほうが大切だと思うかに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、18歳, 19歳が60.0%と最も高く、次いで70代以上が59.5%である。反対に、40代が36.3%と最も低く、次いで30代が38.1%である(図122)。

Q60 の1日あたりの家事に充てる時間に関して、「3時間以上4時間未満」もしくは「4時間以上5時間未満」、「5時間以上」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性が6.1%、女性が40.9%と、女性の方が34.8ポイント高い。年代別で見ると、「30分未満」もしくは「30分以上1時間未満」と回答した人の割合は18歳, 19歳が73.3%と最も高く、年代が上がるごとに減少し、70代以上が25.3%と最も低くなっている(図123)。

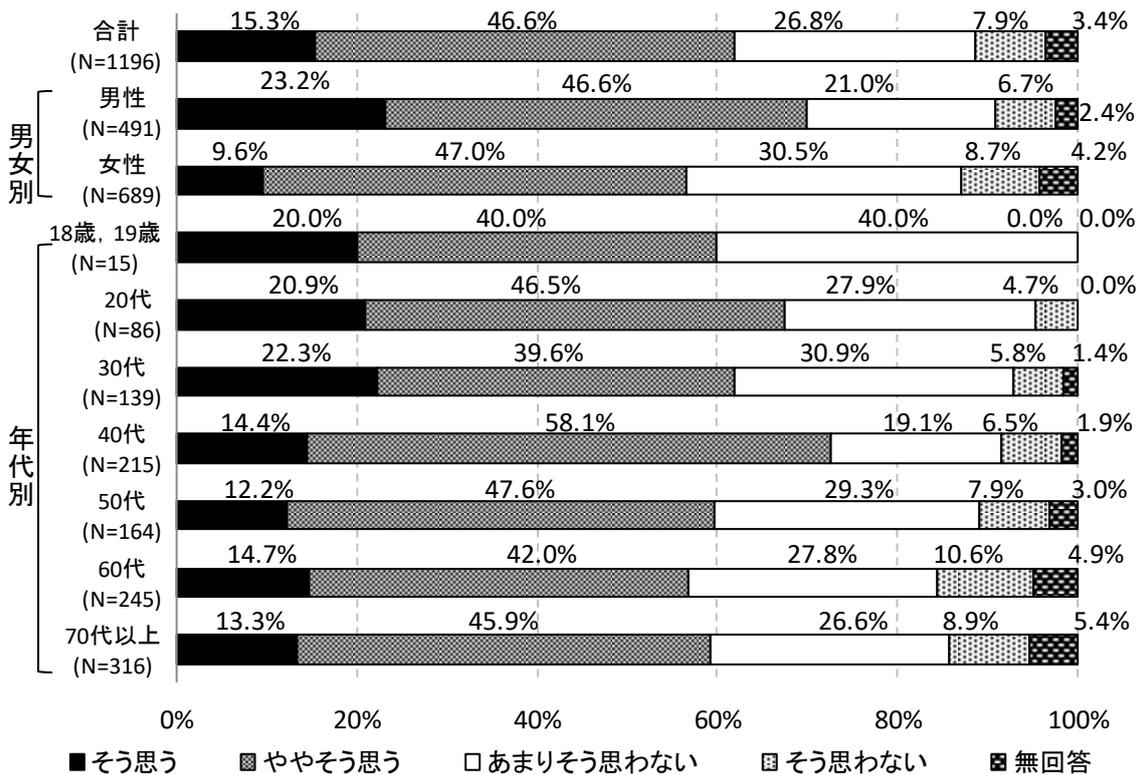


図 121 Q58 チャンスが平等なら貧富の差を許容するか

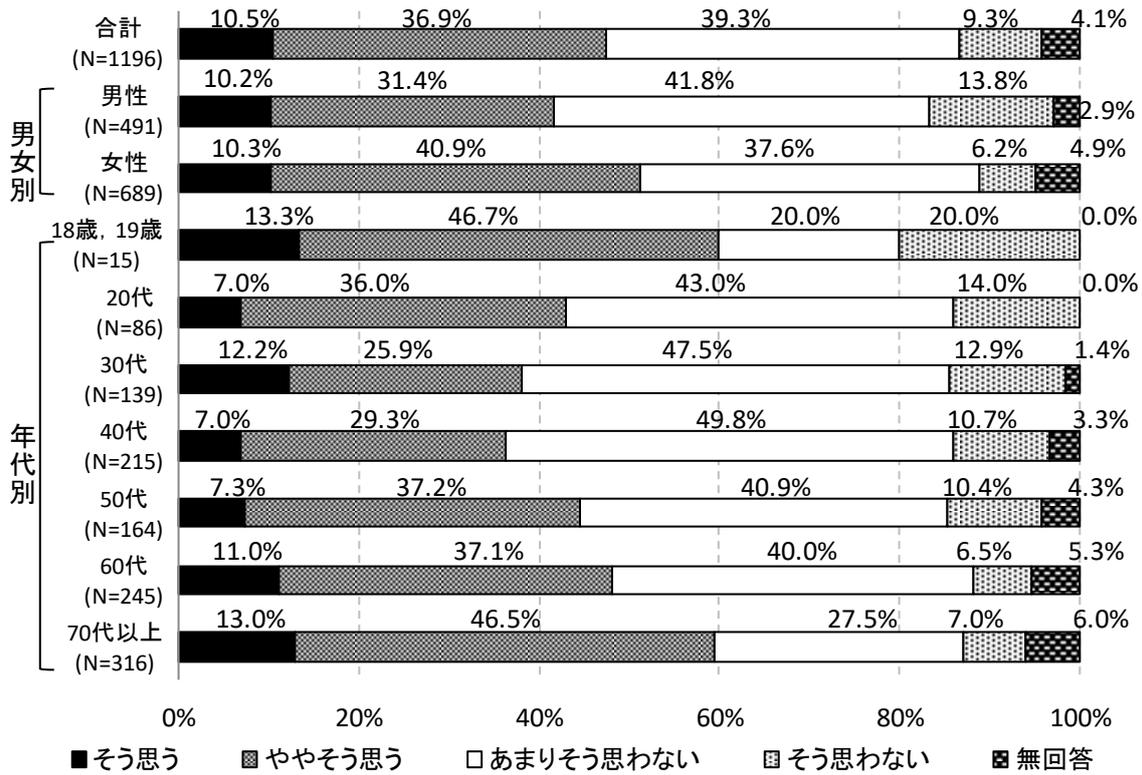


図 122 Q59 競争の自由よりも格差解消のほうが大切だと思うか

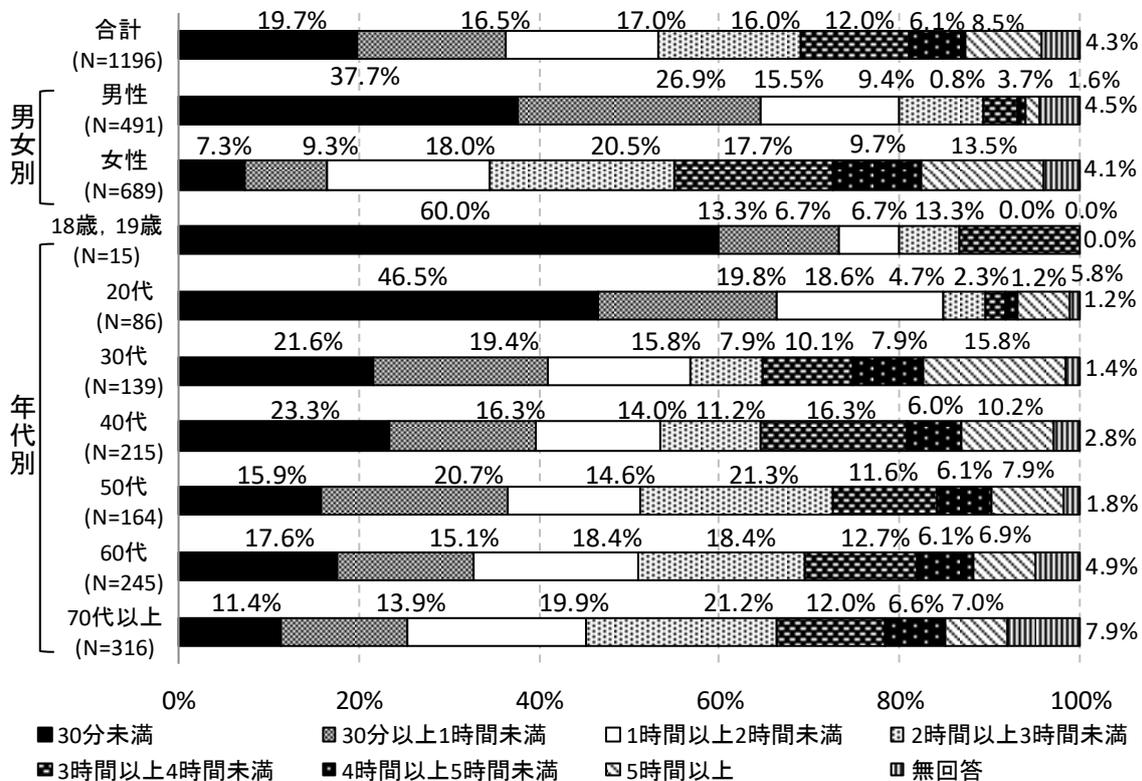


図 123 Q60 1日あたりの家事に充てる時間

Q61の1日の平均睡眠時間に関して、「5時間未満」または「5時間以上6時間未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代以下においては4割にも満たないが、40代においては59.1%と最も高い（図124）。

Q62の喫煙状況に関しては、男女別・年代別のすべての層で8割以上が「していない」と回答している。男女別で見ると、「している」と回答した人の割合は男性が22.6%、女性が8.6%と、男性の方が14ポイント高い（図125）。

Q63の裸眼での視力（左右平均）に関して、「0.1未満」もしくは「0.1以上0.5未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代が60.4%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70代以上が26.6%と最も低くなっている（図126）。

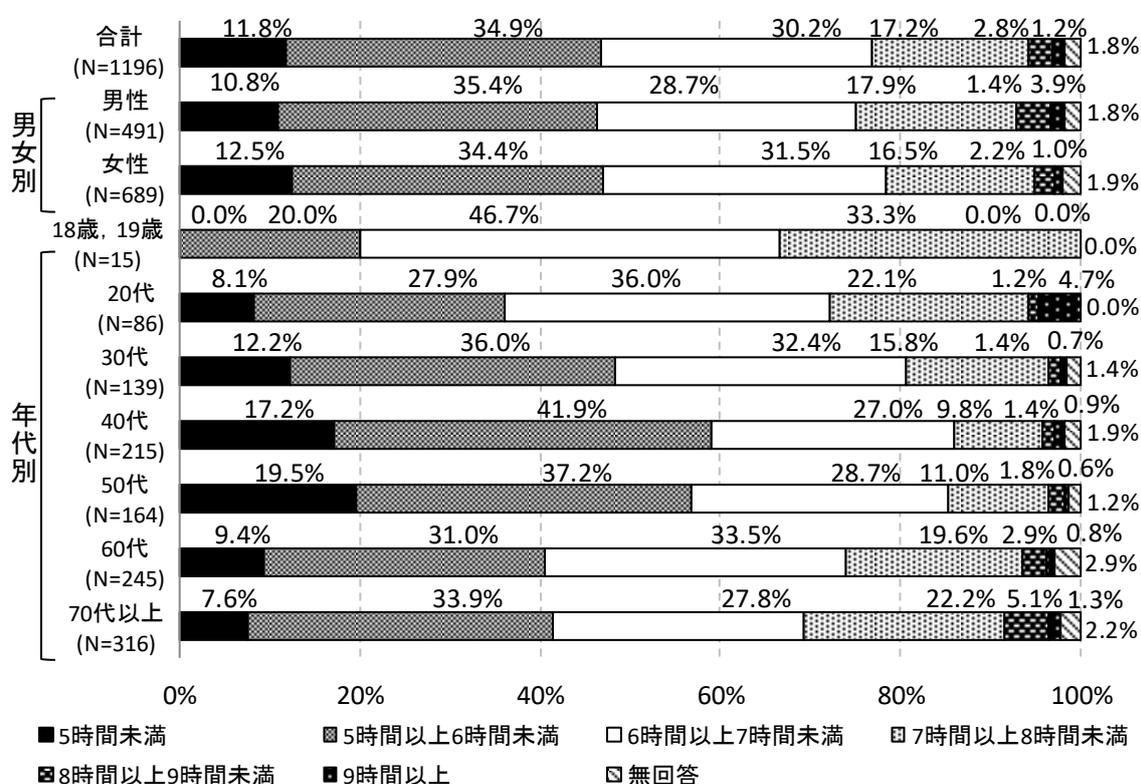


図124 Q61 1日の平均睡眠時間

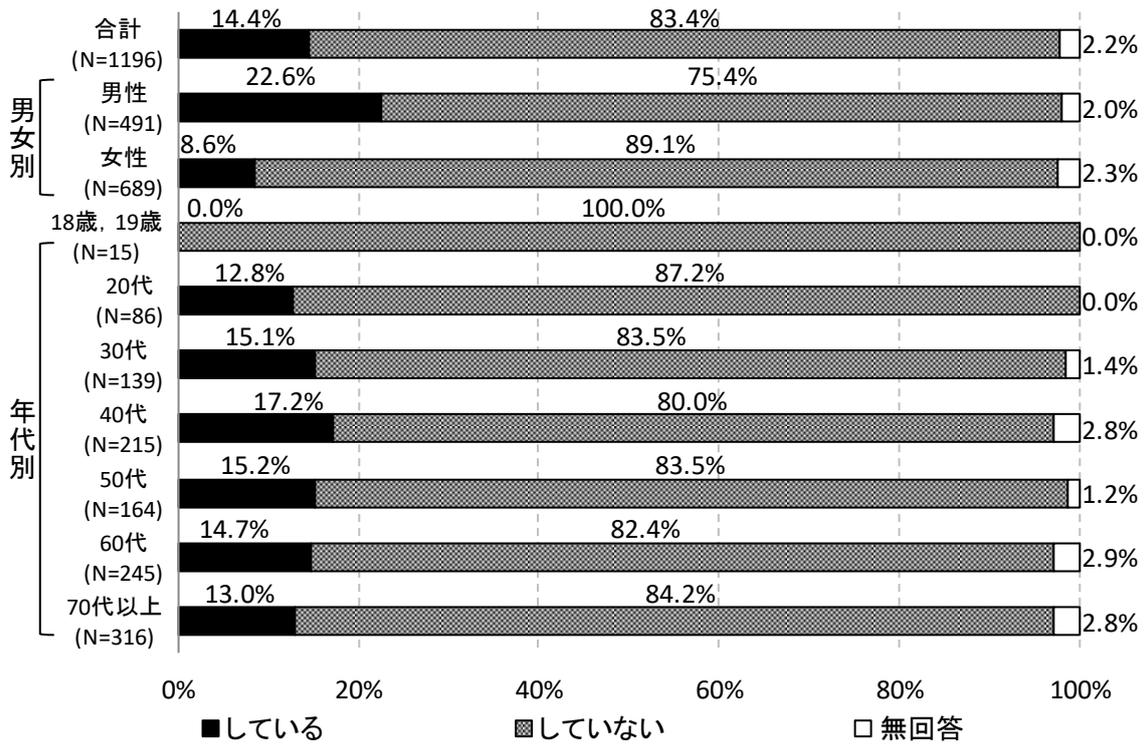


図 125 Q62 喫煙状況

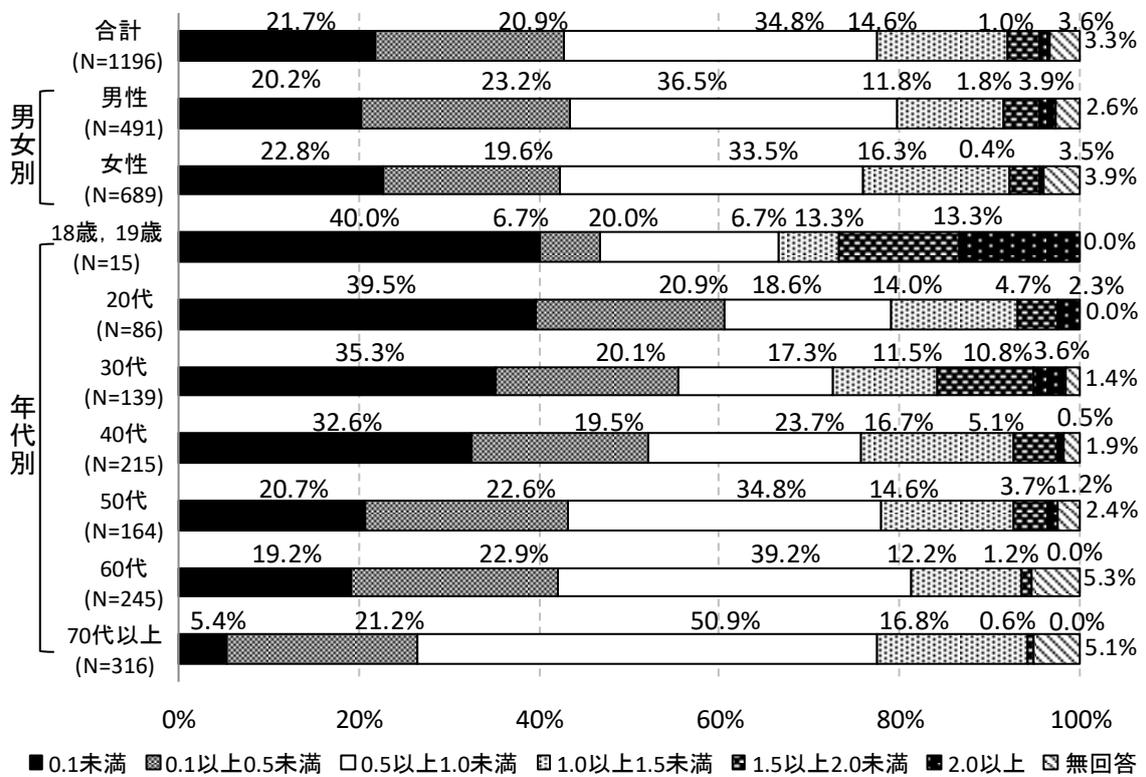


図 126 Q63 裸眼での視力 (左右平均)

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H28	H27	H26	H25	H24	H23
Q1	生活満足度		○	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	
Q2	居住地域は暮らしやすいか		○	Q2	Q2	Q3	Q2	Q2	
Q3	地域に愛着を感じるか		○	Q6	Q8	Q19			
Q4	地域の役に立ちたいか		○			Q5	Q4		
Q5A	高槻市営バス満足度:運行時間帯		○	Q8J					
Q5B	高槻市営バス満足度:路線・系統		○	Q8I			Q10*		
Q5C	高槻市営バス満足度:バス停		○	Q8K					
Q5D	高槻市営バス満足度:乗務員の対応		○						
Q5E	高槻市営バス満足度:運賃		○						
Q6	高槻市営バスの利用頻度		○		Q12	Q25	Q11		Q13
Q7	外出頻度		○	Q14					
Q8	外出時の自家用車・レンタカーの利用頻度		○						
Q9	自動車の運転免許の有無		○						Q14
Q10	自動車の利用頻度		○			Q44			Q15
Q11	自動車の保有台数		○						
Q12	インターチェンジの利用状況		○						
Q13	高槻インターチェンジの開設認知度		○						
Q14	高槻インターチェンジの開設期待度		○						
Q15	高槻インターチェンジの利用予定		○	Q13					
Q16	高槻インターチェンジ開設後の市内の道路交通状況		○						
Q17	「IoT(インターネット オブ シングス)」の認知度		○						
Q18	小学校でのプログラミング教育必修化の認知度		○						
Q19	プログラミング経験		○						
Q20	プログラミングの利用場面		○						
Q21	インターネットの利用状況		○					Q31	Q28
Q22	パソコンでのインターネットの1日あたり利用時間		○	Q34					
Q23	スマートフォン・タブレット端末でのインターネットの1日あたり利用時間		○	Q33					
Q24	インターネットの利用目的		○						Q29
Q25A	情報媒体への印象:情報をすぐに得ることができる		○						
Q25B	情報媒体への印象:情報を信頼できる		○						

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H28	H27	H26	H25	H24	H23
Q25C	情報媒体への印象:情報を簡単に手に入れることができる		○						
Q25D	情報媒体への印象:情報の量が多い		○						
Q26	日常的に利用する情報媒体		○		Q44*				
Q27	地域イベント情報の現在の入手方法		○				Q23		
Q28	地域イベント情報の今後の入手方法		○						
Q29	地域イベントへの参加状況		○	Q20	Q21	Q33	Q21	Q7	
Q30A	高槻市に身近な自然環境とのふれあいがあるか	○			Q5	Q7			
Q30B	高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか	○							
Q30C	高槻市は良好な環境づくりを目指した活動が豊富か	○							
Q30D	高槻市は環境活動に関する情報や呼びかけが十分か	○							
Q31A	高槻市の身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるか	○			Q5	Q7			
Q31B	園芸活動の頻度	○							
Q31C	1年以内での自然保護活動やイベントへの参加状況	○			Q27①				
Q32A	補助制度の対象機器の認知度	○			Q32A				
Q32B	補助制度の対象機器の導入希望状況	○			Q32B				
Q33	環境に関する問題への関心度	○			Q26				
Q34	直近2か月の世帯の使用水量	○			Q31	Q38			
Q35	安全な水道水が安定して供給されており、安心できるか	○							
Q36	水道水への不安な点	○							
Q37	飲料水の過程での備蓄状況	○							
Q38	住宅用火災警報器の設置状況	○				Q34		Q24	
Q39	住宅用火災警報器の作動確認の状況	○							
Q40	住宅用火災警報器の作動確認の状況	○							
Q41	体調悪化時に介助者がいると思うか		○						
Q42	体調悪化時に相談者がいると思うか		○						
Q43	救急車の利用1回分への価値観		○						
Q44	家庭での救急車の利用回数		○						
Q45	家庭での救急車利用時、入院せず帰宅したことがあるか		○						
Q46	家庭での救急車利用時、搬送されなかった経験はあるか		○						
Q47	年間の自殺者数の認知度	○							
Q48	高槻市役所での自殺対策キャンペーンの認知度	○							

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H28	H27	H26	H25	H24	H23
Q49	自殺に関する相談機関の認知度	○							
Q50	自殺について、生死は本人の判断に任せるべきか	○							
Q51	自殺願望の気持ちの乗り越え方	○							
Q52	本気で自殺を考えたことがあるか	○							
Q53	身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法	○							
Q54①	市の仕事のうち良くなってきたもの	○			Q40①	Q49①	Q36①	Q28①	
Q54②	市の仕事のうち力を入れてほしいもの	○			Q40②	Q49②	Q36②	Q28②	
Q55	一般的に、結婚はすべきか		○						
Q56	日常生活の中でゆっくり過ごせるような時間はあるか		○	Q40		Q52	Q45		
Q57	経済的なゆとり		○						
Q58	チャンスが平等なら貧富の差を許容するか		○						
Q59	競争の自由よりも格差解消のほうが大切だと思うか		○						
Q60	1日あたりの家事に充てる時間		○						
Q61	1日の平均睡眠時間		○	Q38				Q46	Q53
Q62	喫煙状況		○						
Q63	裸眼での視力(左右平均)		○						
Q64	性別	○	○	Q58	Q53	Q72	Q64	Q61	Q64
Q65	年齢	○	○	Q59	Q54	Q73	Q65	Q62	Q65
Q66	職業	○	○	Q60	Q55	Q74	Q66	Q63	Q66
Q67	最終学歴		○	Q62	Q57	Q76	Q69	Q65	Q67h
Q68	居住地域	○	○	Q63	Q58	Q77	Q70	Q66	Q69
Q69	市内居住年数	○		Q64	Q59	Q78	Q71	Q67	Q68
Q70	住居	○	○	Q65	Q60	Q79	Q72	Q68	Q70
Q71	居住形態	○	○	Q66	Q61	Q80	Q73	Q69	Q71
Q72	婚姻状況		○	Q51	Q51	Q67	Q53	Q52	Q59a
Q73	子どもの有無		○	Q54	Q52	Q71	Q58	Q56	Q73
Q74	世帯人数	○	○	Q67	Q62	Q81	Q63	Q70	Q72
Q75	世帯年収		○	Q68	Q63	Q82	Q74	Q71	Q74

注) *印は、質問文の表現・形式が大きく異なるため、比較する際に注意が必要である。

第3章 高槻市の結婚と生活満足度の関係性

山根 優花

1. はじめに

結婚は、人生におけるライフイベントのひとつであり、男性・女性とわず人生における大切なことである。これまで、結婚が人々にどのような影響を与えるか、さまざまな研究・調査がなされてきた。筒井・亀坂(2013)は先行研究から、既婚者は未婚者よりも幸福であることと、子どもを持つ人は持たない人より幸福度が低いことが多くの研究で明らかになっていると示している。本章では、幸福は結婚で得られるものと考え、幸福をはかる指標として生活満足度を用いて検証することとした。既婚者の生活満足度を高くする要因を子どもの有無、経済的ゆとり、時間的ゆとり、家事時間から明らかにする。本調査では、既婚者は未婚者よりも生活満足度が高くなると考えたため、生活満足度を高くする要因は既婚者だけのものを分析することとした。

2. 仮説

2.1. 先行研究

行動経済学の亀坂・吉田・大竹(2010)は20歳以上の男女6000人を調査対象とした「ライフステージの変化と男女の幸福度」より、男性も女性も未婚者よりも既婚者のほうが幸福度が高いと明らかにしている。また、小さい子どもがいる人の幸福度が高くなっているという結果が出ていた。

よって、高槻市市民も同様に未婚者よりも既婚者のほうが幸福度(生活満足度)が高いといえるのではないかと推測される。

2.2. 仮説

先行研究の亀坂・吉田・大竹(2010)では、未婚者よりも既婚者の方が生活満足度が高い傾向があるといわれている。この傾向が高槻市の人々にも当てはまるものであるのかを検証したい。また、既婚者の生活満足度が高くなる要因も明らかにする。仮説1は亀坂ら(2010)の子どもを持つ人は子どもを持たない人に比べて幸福度が低いという結果から考えた仮説である。筒井ら(2013)の先行研究では小さい子どもを持つ人は幸福度が高いと示していたが、本調査では子どもの年齢を聞いていないためこの仮説をたてた。仮説2は、生活していくには金銭面が大事になると考えたため考えた仮説である。仮説3は、ゆっくり過ごせる時間があることが、心にゆとりを持つことができ、生活満足度を高めるのではないかと考えたからである。仮説4は、家事時間が長いことは負担が大きいと考え生活満足度に影響を与えると考えたからである。今回、既婚者であるが死別や離別である場合は現在夫婦(家族)生活が

配偶者のいない未婚者と同等と考えるため、既婚者の死別や離別は未婚者と同じように扱うものとする。

仮説 1:既婚者のうち、子どもがいない人はいる人に比べて生活満足度が高い

仮説 2:既婚者のうち、経済的にゆとりのある人はゆとりがない人と比べて生活満足度が高い

仮説 3:既婚者のうち、時間にゆとりがある人はゆとりがない人に比べて生活満足度が高い

仮説 4:既婚者のうち、家事時間が短い人は長い人より生活満足度が高い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 29 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1196 票、回収率は 59.8%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下のとおりである。本分析では、すべての変数において欠損値理を施している。

1) Q1:現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほど生活満足度が高いように、1.不満 2.やや不満 3.どちらともいえない 4.やや満足 5.満足とした。

2) Q55:人生における結婚について、あなたの意見をお聞かせください。一般的に、結婚はすべきだと思いますか。

1.すべき 2.した方がよい 3.しなくてもよい 4.する必要はない

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほど結婚をすべきだと考えているように、1.する必要はない 2.しなくてもよい 3.した方がよい 4.すべきとした。

3) Q56:あなたは日常生活の中で、仕事や学業に追われない、ゆっくりと過ごせるような時間はありますか。

1.十分持てている 2.かなり持てている 3.あまり持てていない 4.全く持てていない

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほどゆっくりと過ごせる時間があるように、1.全く持てていない 2.あまり持てていない 3.かなり持てている 4.十分持てているとした。

4) Q57:暮らしの中で経済的なゆとりはありますか。

1.ゆとりがある 2.ややゆとりがある 3.あまりゆとりがない 4.ゆとりがない

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほど経済的にゆとりがあるように、1.ゆとりがない 2.あまりゆとりがない 3.ややゆとりがある 4.ゆとりがあるとした。

- 5) Q60:あなたが1日のうち家事(育児や介護も含む)にあてる時間はどのぐらいですか。
1.30分未満 2.30分以上1時間未満 3.1時間以上2時間未満 4.2時間以上3時間未満
5.3時間以上4時間未満 6.4時間以上5時間未満 7.5時間以上
- 6) Q64:あなたの性別はどちらですか。
1.男性 2.女性
この選択肢を0.女性 1.男性とし「男性ダミー」を作成した。
- 7) Q65:あなたの年齢をお答えください。
1.18、19歳 2.20代 3.30代 4.40代 5.50代 6.60代 7.70代以上
- 8) Q72:あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。
1.既婚(配偶者あり) 2.既婚(死別・離別) 3.未婚
2.既婚(死別・離別)と3.未婚の選択肢を0.未婚とし、1.(配偶者あり)を1.既婚として「結婚ダミー」を作成した。
- 9) Q73:同居していない場合も含めて、現在お子様がおりますか。
1.いる 2.いない
この選択肢を0.いない 1.いるとし「子どもダミー」を作成した。
- 10) Q75:過去一年間のあなたの世帯年収はどれぐらいですか。
1.100万円未満 2.100万円~200万円未満 3.200万円~400万円未満 4.400万円~600万円未満
5.600万円~800万円未満 6.800万円~1000万円未満 7.1000万円~1500万円未満
8.1500万円以上 9.わからない
この選択肢を 1.200万円未満 2.200万円~400万円未満 3.400万円~600万円未満
4.600万円~800万円未満 5.800万円~1000万円未満 6.1000万円以上の6項目にし、
9.わからないは欠損値とし、「q75_1世帯年収」を作成した。

4. 分析

まず、クロス表を用いて婚姻状態と生活満足度の関連性を検討する。反転生活満足度と結婚ダミー変数を用いてクロス表を作成した(表1)。

表1 結婚ダミーと反転生活満足度のクロス表

		反転生活満足度					合計	
		不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	満足		
結婚ダミー	未婚者	度数	22	46	88	146	67	369
	死別・離別	行パーセント	6%	12%	24%	40%	18%	100%
	既婚	度数	21	79	149	386	164	799
		行パーセント	3%	10%	19%	48%	21%	100%
合計			43	125	237	532	231	1168
			4%	11%	20%	46%	20%	100%

χ^2 (df=4, N=1196)=17.506**, Cramer V=.122**

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

検定の結果カイ2乗の値が17.506で、有意確率1%水準で有意であり、CramerのVの

値が 0.122 で、有意確率 1%水準で有意なので、この 2 変数は関連性があるといえる。既婚者のうち生活満足度の「やや満足」と「満足」を選択している人は 69%であり、未婚者（死別・離別）のうち生活満足度の「やや満足」と「満足」を選択している人は 58%であり、既婚者のほうが生活に満足していると思っている人が多い。また、「やや不満」と「不満」を選択している既婚者は 13%であり、未婚者（死別・離別）は 18%と既婚者よりも少し多い。よって、既婚者のほうが生活満足度は高くなるといえるだろう。

続いては、結婚すべきと考えている人は結婚しているのかということも検証したい。Q55 結婚するべきかどうかの選択肢を反転させた変数と結婚ダミー変数の 2 変数を用いてクロス表を作成した（表 2）。

表2 反転結婚するべきかどうかと結婚ダミーのクロス表

		結婚ダミー		合計	
		死別・未婚	既婚		
反転 結婚するべき	する必要は	度数	10	1	11
	ない	行パーセント	91%	9%	100%
	しなくても	度数	98	110	208
	よい	行パーセント	47%	53%	100%
	した方が	度数	192	483	675
	よい	行パーセント	28%	72%	100%
	すべき	度数	62	181	243
		行パーセント	26%	74%	100%
	合計		362	775	1137
			32%	68%	100%

$\chi^2 (df=3, N=1196)=48.117^{***}, \text{Cramer } V=.206^{***}$

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

検定の結果カイ 2 乗の値が 48.117 で、有意確率 0.1%水準で有意であり、Cramer の V の値が 0.206 で、有意確率 0.1%水準で有意なので、この 2 変数は関連性があるといえる。既婚者で結婚を「すべき」と考えている人は 74%で「した方がよい」と考えている人は 72%である。また、未婚者で結婚を「する必要はない」と考えている人は 91%である。結婚を「する必要はない」と考えている人のほとんどが未婚者であるといえる。

続いて、経済的ゆとりと世帯年収には関連性があるのか検証したい。Q75 の世帯年収と Q57 を反転させた反転経済的ゆとりの 2 変数クロス表を作成した（表 3）。

表3 q75_1世帯年収 と 反転経済的ゆとりのクロス表

		反転経済的ゆとり				合計
		ゆとりが ない	あまり ゆとりがない	やや ゆとりがある	ゆとりが ある	
世帯年収	200万円 度数	43	72	46	3	164
	未満 行パーセント	26%	44%	28%	2%	100%
	200万円～ 度数	53	157	112	10	332
	400万円未満 行パーセント	16%	47%	34%	3%	100%
	400万円～ 度数	17	65	95	12	189
	600万円未満 行パーセント	9%	34%	50%	6%	100%
	600万円～ 度数	14	42	57	11	124
	800万円未満 行パーセント	11%	34%	46%	9%	100%
	800万円～ 度数	1	26	42	19	88
	1000万円未満 行パーセント	1%	30%	48%	22%	100%
	1000万円 度数	3	11	53	19	86
	以上 行パーセント	3%	13%	62%	22%	100%
	合計	131	373	405	74	983
		13%	38%	41%	8%	100%

χ^2 (df=15, N=1196)=157.134***, Cramer V=.231***

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

検定の結果カイ 2 乗の値が 157.134 で、有意確率 0.1%水準で有意であり、Cramer の V の値が 0.231 で、有意確率 0.1%水準で有意なので、この 2 変数は関連性があるといえる。経済的にゆとりがあると答えた人の 44%が年収 800 万円以上であることが読み取れる。経済的にゆとりがないと答えている人の 51%が 800 万円以下であることが読み取れる。一番回答者が多い世帯年収 200 万円～400 万円未満で、「あまりゆとりがない」と答えている人は 47%と一番多い。全体的にみると、経済的ゆとりに「ゆとりがない」と「あまりゆとりがない」と回答している人の合計が 51%で「ゆとりがある」と「ややゆとりがある」と回答している人の合計が 49%で、ほぼ半々であることもわかる。

最後に、既婚者の生活満足度に関わる要因を検証したい。Q1 反転生活満足度を従属変数とし、独立変数は子どもダミー変数、男性ダミー変数、Q65 年齢、Q56 反転ゆっくり過ごせる時間、Q60 家事時間、Q57 反転経済的ゆとり、Q55 反転結婚するべきかどうか、q75 世帯収入を 6 項目にした変数の 8 変数を用いて重回帰分析を行った。また、既婚者のデータだけを用いている（表 4）。

表4 既婚者の反転生活満足度の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
既婚 (定数)	1.66 ***	0.26	
男性ダミー	0.02	0.07	0.01
子供ダミー	-0.01	0.10	-0.01
q65 年齢	-0.02	0.03	-0.03
反転結婚するべき	0.06	0.06	0.04
反転ゆっくり過ごせる時間	0.14 **	0.05	0.11
反転経済的ゆとり	0.57 ***	0.05	0.46
世帯年収	0.05 *	0.03	0.08
調整済み R ²	0.262 ***		
N	660		

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05, †:p<.10

分析結果は調整済み決定係数が 0.26 であり、従属変数である生活満足度の分散の 26%が投入した独立変数によって説明されている。「反転ゆっくり過ごせる時間」と「反転経済的ゆとり」が有意であるため仮説 2 の「結婚していて経済的にゆとりのある人はゆとりのない人と比べて生活満足度が高い」と仮説 3「結婚していて時間にゆとりがある人はゆとりのない人に比べて生活満足度が高い」が成立したことを示す。既婚者の生活満足度に一番影響を与えているのは β 値より「反転経済的ゆとり」($\beta=0.47$) であり、その次に「反転ゆっくり過ごせる時間」($\beta=0.11$)、「男性ダミー」($\beta=0.07$)、「年齢」($\beta=-0.05$)、「家事時間」($\beta=0.05$)、「反転結婚するべき」($\beta=0.04$) という順になっている。「子どもダミー」の影響はなかった。

5. 考察

本調査では高槻市市民の生活満足度と結婚の関係性を調査するために分析を行った。既婚者ほど生活満足度は高いという仮説を立て、婚姻状況、生活満足度、経済状態、子どもの有無、時間的ゆとりなどの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、既婚者ほど生活満足度は高くなるといえるため、「既婚者は生活満足度が高い」という仮説は証明された。既婚者の生活満足度が高くなる一番の要因が経済的ゆと

りであると重回帰分析からいえる。また、表3から経済的ゆとりは世帯年収が高い人ほどゆとりがあるといえるため、既婚者の世帯年収が高い人ほど生活満足度が高くなるといえるだろう。子どもの有無が既婚者の生活満足度に関連していると考えていたが、重回帰分析の結果から関連がないことがわかった。筒井・亀坂(2013)では、子どもがいない人はいる人より幸福であると示されていたが、今回は子どもの有無は生活満足度に関連がないという結果であった。ゆっくり過ごせる時間をもつことが、既婚者の生活満足度を高めることが明らかになった。

この調査では、仮説1「結婚していて子どもがいない人はいる人に比べて生活満足度が高い」と仮説4「結婚していて家事時間が短い人は長い人より生活満足度が高い」は成立しなかったが、仮説2「結婚していて経済的にゆとりのある人はゆとりがない人と比べて生活満足度が高い」と仮説3「結婚していて時間にゆとりがある人はゆとりがない人に比べて生活満足度が高い」は成立した。

現在、晩婚化や非婚化などが問題になっているが、結婚をしても生活満足度が必ずしも高まるとは限らないことが原因の一つとしてあげられる。しかし本調査では、結婚することで生活満足度が高くなるという結果が得られた。この結果から、すべての人々が結婚することで生活満足度が高まるとは言えないが、結婚することで生活満足度が高まる傾向があるということが明らかになった。晩婚化や非婚化の原因である、結婚をしても生活満足度が必ずしも高まるとは限らないことと一致していた。

6. 文献

- [1]…萩原里紗(2012)『結婚・出産前後の女性の生活満足度・幸福度の変化:「消費生活に関するパネル調査」を用いた実証分析』慶応義塾大学出版会
- [2]…岩間暁子(2000)「パネルデータからみた現代女性・結婚・出産・消費・貯蓄」『家族社会学研究』12(1), pp.26-26
- [3]…筒井義郎, 亀坂安紀子(2013)「どのような人が結婚・出産を決意するのか? : アンケート調査の結果」『大阪大学経済学』63(3), pp.1-38
- [4]…亀坂安紀子, 吉田恵子, 大竹文雄(2010)「ライフステージの変化と男女の幸福度」『行動経済学』3, pp.183-186

第4章 地域イベントの宣伝方法と参加について

中川 雅貴

1. はじめに

現在日本は少子高齢化が進行しており、地方の過疎化や村の消滅などの問題を抱えている。人口の減少は地域を衰退させる原因の一つとなる（梶谷，2016）。地域の活性化、さらなる発展のためには地域の人々が交流する機会を増やしていくことが重要ではないだろうか。たとえば、地域の活性化の手段のひとつとして、地域イベントの開催が考えられる。地域イベントの参加者を増加させることは多くの人々との交流の機会を増やすことができるため、地域を活性化させる方法の一つであると考えられる。

高槻市の代表的なイベントに「高槻祭り」がある。高槻市の人であれば知らない人はいないといっても過言ではないだろう。毎年多くの高槻市民が参加している代表的なイベントである。毎年「高槻祭り」の時期が近づくと、駅や町の掲示板に広告が掲示され、回覧板などでもイベントの情報が回る。宣伝の方法は多種多様であり、現在ではSNSなどでもイベント情報を発信している。駅の掲示板や広告などの紙の広告のみであった時代と比べ、インターネットの登場により、宣伝方法が変わりつつある。インターネット利用者が増加する中で、現在の地域イベントの情報の宣伝方法は多様に存在するが、インターネットを介した宣伝の効果は本当に地域イベントの参加につながるのだろうか。

そこで、本研究では、高槻市民の方々の地域活動への参加のきっかけとして用いた広告を確認し、それが参加に繋がっているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

総務省の調査によると、インターネットの利用者数は、2006年ではインターネットの利用者数は8754万人であったが、2016年では10084万人に上昇している。

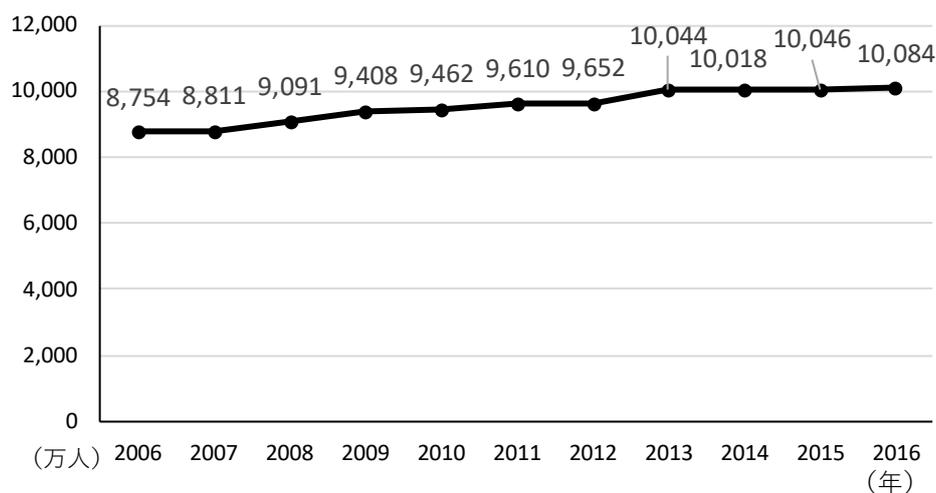


図1 インターネット利用者数の推移
 (出典) 総務省「平成28年通信利用動向調査の結果」

このことから、高槻市においても、インターネット利用者数は上昇し普段からインターネットを利用する人が近年増加の傾向にあることが考えられる。

豊福(2006)によると、地域情報は、住民の適切な価値判断に資し「住民が情報を読み解く」ことができるように、様々な仕組みを整備していく必要があると述べている。現在の日本では、インターネット利用者の増加に加え、様々なコミュニティが増えつつある状態にある。多様化するコミュニティにおいて情報収集の方法は異なる。そのため、地域イベント情報においても、従来の紙の宣伝方法のみではなく地域の活性化を図るために適した宣伝方法を選択していくことが重要であると考えられる。

2.2. 仮説

メディアの多様化によって情報は様々な媒体から入手できる時代となった。インターネット利用者の増加から、地域イベントへの参加者は、地域イベントの情報についてもインターネットから入手していることが考えられる。そのため、紙の宣伝よりも、インターネットでの宣伝が地域イベントの参加に繋がっていることを確認する。以下、仮説を立てる。

仮説1：地域イベントの情報を広報誌から得ている人は地域イベントへ参加しやすい。

仮説2：地域イベントの情報をホームページから得ている人は地域イベントへ参加しやすい。

仮説3：地域イベントの情報をSNSから得ている人は地域イベントへ参加しやすい。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成29年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1196票、回収率は59.8%である。

3.2. 変数

今回の分析に使用した変数は以下の通りである。

Q27__1. 「地域イベント情報を何から入手しているか 市の広報誌」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__2. 「地域イベント情報を何から入手しているか ホームページ」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__3. 「地域イベント情報を何から入手しているか SNS」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__4. 「地域イベント情報を何から入手しているか チラシ」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__5. 「地域イベント情報を何から入手しているか ポスター」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__6. 「地域イベント情報を何から入手しているか 家族や知人」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__7. 「地域イベント情報を何から入手しているか 回覧板」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__8. 「地域イベント情報を何から入手しているか その他」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q27__9. 「地域イベント情報を何から入手しているか 情報を得ていない」

0.あてはまらない 1.あてはまる

Q29. 「地域イベントに参加しているか」

1.よく参加している 2.ときどき参加している 3.あまり参加していない

4.過去に参加したことはあるが現在は参加していない 5.参加したことはない

ここで、「よく参加している」と「ときどき参加している」を1、「あまり参加していない」「過去に参加したことはあるが現在は参加していない」「参加したことはない」を0として「地域イベントの参加度ダミー」を作成した。

また、すべての変数において欠損値処理を行った。

4. 分析

3つの仮説を検討するために2項ロジスティック回帰分析を行う。この分析では、従属変数を「地域イベント参加度ダミー」、共変量を「q27_1 市の広報誌」「q27_2 ホームページ」「q27_3 SNS」「q27_4 チラシ」「q27_5 ポスター」「q27_6 家族や知人」「q27_7 回覧板」「q27_8 その他」、とした。「地域イベントの参加度ダミー」から、情報入手媒体別に2項ロジスティック回帰分析を行った。

表1.地域イベント参加度ダミーの2項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>Exp(B)</i>
定数	-1.549 ***	.183	.213
q27_1 市の広報誌	.424 ***	.164	1.527
q27_2 ホームページ	.492 ***	.210	1.635
q27_3 SNS	.304	.302	1.356
q27_4 チラシ	.247	.151	1.280
q27_5 ポスター	.138	.157	1.148
q27_6 家族や知人	.566 ***	.137	1.761
q27_7 回覧板	.454 ***	.133	1.575
q27_8 その他	.478	.493	1.613
Cox-Snell R ²	.081		
Nagelkerke R ²	.113		
model X ² (df=9)	90.450		
N	1182		

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

表1は高槻市民が「地域イベント情報を何から入手しているか」という質問に対して、様々な種類の広告の中から複数回答した結果と、地域イベントの参加度について2項ロジスティック回帰分析を行った結果である。表1の結果は、Cox-Snell R²は0.081、Nagelkerke R²は0.113である。また、Model X²は90.45でありこのモデルはあてはまりがよいといえる。Nは1182であった。

表1によると、独立変数に有意に影響を与えている変数は、0.1%水準で有意な「q28_1 市の広報誌」「q28_2 ホームページ」「q28_6 家族や知人」「q28_7 回覧板」の4つである。「q28_3 SNS」「q28_4 チラシ」「q28_5 ポスター」「q28_8 その他」の4つ

は有意ではない。「q28__1 市の広報誌」が有意であることから、地域イベント情報を市の広報誌から入手していない人に比べて、市の広報誌から情報を入手している人のほうが高槻市の地域イベントに 1.527 倍参加していることが言える。同様に、ホームページ、家族や知人、回覧板に関して、それぞれから地域イベントの情報を得ている人はそうでない人に比べて、高槻市の地域イベントに参加していることが言える。しかし、SNS においては、有意ではなく、SNS での宣伝で地域イベントの参加を促すことに効果があることは説明ができなかった。

5. 考察

本研究では、高槻市民の方々の地域活動への参加のきっかけとして用いた広告を確認し、それが参加に繋がっているのかを明らかにすることを目的としてきた。そのため、高槻市民の地域イベントの参加のきっかけについて、様々な種類の広告の中から複数回答していただいた結果を確認した。その結果を用いて、それぞれの広告が、地域イベントの参加度に与える影響を明らかにした。データは、Q27「地域イベント情報を何から入手しているか」と Q29「地域イベントに参加しているか」を使用した。

分析の結果から、仮説 1「地域イベントの情報を広報誌から得ている人は地域イベントへ参加しやすい。」について、地域イベントの情報を広報誌から得ている人は、そうでない人に比べ、1.527 倍地域イベントに参加していることが明らかとなった。地域の広報誌を読む人は地域のイベントについて知る機会が多いため、地域イベントへの参加が増えたと考えられる。

次に、仮説 2「地域イベントの情報をホームページから得ている人は地域イベントへ参加しやすい。」について、地域イベントの情報をホームページから得ている人はそうでない人に比べ、1.635 倍地域イベントに参加していることが明らかとなった。地域のホームページを読む人は地域のイベントについて知る機会が多いため、地域イベントへの参加が増えたと考えられる。また、市の広報誌を読んでいる人よりも、ホームページを読むの方が地域イベントへ参加しやすいということが明らかとなった。

最後に、仮説 3「地域イベントの情報を SNS から得ている人は地域イベントへ参加しやすい。」について、有意ではない結果となった。以上のことから、仮説 1、仮説 2 は支持されたが、仮説 3 は支持されなかった。

現在の高槻市の人々は、地域イベントの参加のきっかけとして高槻市 HP を選ぶ人々が、最も地域イベントに参加しやすいということが明らかとなった。このことから、現在において高槻市の方々は、インターネットの宣伝方法を好んでいることが考えられる。しかし、広報誌をきっかけとする人々は、高槻市 HP の次に地域イベントに参加しやすいことがわかった。高槻市の人々は、紙の宣伝を好む人々も未だ多いことがわかった。ただ、これからインターネット利用者は増加していくことが考えられるため、地域イベントを開催する際には、インターネットでの宣伝を好む人々が増加していくことが考えられる。地域の活性化を

図る上でも、地域イベントの参加者を増加させることは非常に重要である。高槻市の人々は、地域イベント情報を HP から入手した場合、最も参加しやすいことが明らかとなったことから、高槻市で地域イベントを行う際は、インターネットでの宣伝が、参加者の増加をより効果的に発揮でき、地域をより活性化させることにつながるのではないだろうか。

6. 文献

- [1] 梶谷克彦, 2016, 『地域ブランド創生に寄与する地域イベントの戦略構造に関する研究-北九州市の地域イベントを事例として-』第 13065 号九州大学 2015 年度博士論文.
- [2] 総務省総務省, 2017, 「平成 28 年通信利用動向調査の結果」.
- [3] 豊福真由美, 2006, 『多様化するコミュニティ活動を支援するための保健師の役割』第 5 号日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report , 63-70.

第5章 高槻市の自然環境と暮らしやすさの関係

播磨 遼

1. はじめに

都会と田舎、どちらの暮らしがより充実できるか。今日でも議論されていることだが、どちらもメリット・デメリットがあり最終的にはそこで暮らす覚悟が必要だ、もしくは都会の方が暮らしやすいという結果になっている内容が多く、田舎での暮らしは難しいものとされていた。

そこで、本研究では、身近に自然環境があることによって地域の暮らしやすさが良くなることを明らかにすることを目的としたい。

2. 先行研究と仮説

2-1 先行研究

共同で実施したアンケート調査を行った。575人の対象者の地域別にみた回答者の内訳は、都会に住んでいる人が約7割、地方に住んでいるのは約3割だった。(日本経済新聞・みんなのウェディング, 2012)

調査によると田舎で憧れることで回答が多くされていた項目は「庭や駐車場がある一戸建ての生活」「忙しさと無縁の生活」「自然に囲まれた生活」である。逆に、耐えられないことで回答が多くされていた項目は「水洗トイレのない生活」「交通機関の本数が少ない生活」「近所付き合いが多い生活」である。

このように、田舎に憧れはありながらも、便利な都会暮らしも捨てがたいという結果が出た。そこで、これを両立できる地域がないのかと調べてみた。高槻定住コラム「どっちもたかつき」(迫, 2015)によると高槻市最北部に「檜田地区」という場所がある。そこでは空き家への定住制度が行われており大都市から約1時間のところで「田舎暮らし」が実現できて、なおかつ車だと約30分で商店街や百貨店、ショッピングモールで賑わう中心地街へと移動できる。ゆえに、買い物などの不便もない、と記されていた。

また、都市近郊に位置する小面積の自然保護地域における利用特性と満足度(富田, 2016)によると、自然保護がされている場所での運営で保護すべき動植物などについての知識や観察方法を的確に教えてくれることが利用者の高い満足度につながった。また、湿原の植物の種類が変化することや動植物が減少するといった自然保護の上で問題視されていることが利用者の満足度にも悪影響を及ぼしていることが分かった。

2-2 仮説

本調査では先行研究とコラムより、身近に自然環境とのふれあいがあることによって、地

域の暮らしやすさにも影響があるのではないかと考え、以下の2つの仮説を立てる。

(仮説)1:高槻市の自然環境と身近にふれあえると思っている人ほど地域の暮らしやすさに満足している。

2:高槻市の自然環境と身近にふれあえると思っている人ほど生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1 データ

データは平成29年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数1196票、回収率は59.8%である。

3.2 変数

今回の分析で使用した変数は以下の通りである。

Q1「生活満足度」

「1.満足」「2.やや満足」「3.どちらともいえない」「4.やや不満」「5.不満」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど満足度が高くなるようにした。

「1.不満」「2.やや不満」「3.どちらともいえない」「4.やや満足」「5.満足」

Q2「居住地域の暮らしやすさ」

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど思う度合いが高くなるようにした。

「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.そう思う」

Q30_A「自然環境との身近なふれあい」

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど思う度合いが高くなるようにした。

「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.そう思う」

Q30_B「ポイ捨ての少ない美しいまち」

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど思う度合いが高くなるようにした。

「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.そう思う」

Q30_C「環境への活動豊富さ」

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど思う度合いが高くなるようにした。

「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.そう思う」

Q31_A「水やみどりの潤いがあると思うか」

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど思う度合いが高くなるようにした。

「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.そう思う」

Q64 「性別」

「1.男性」「2.女性」

男性=1、女性=0 にリコードし、「男性ダミー」を作った

Q67 「最終学歴」

「1.中学(旧小学校など)」「2.高校(または旧制中学など)」「3.専門学校」「4.短大・高専(5年制)」「5.大学(旧専門)・大学院」

それぞれ下のように各項目をリコードし、ダミー作成した

1.中学(旧小学校など) 2.高校(または旧制中学など)を「初等学歴ダミー」、3.専門学校
4.短大・高専(5年制)を「中等学歴ダミー」、「5.大学(旧専門)・大学院」を「高等学歴ダミー」とした。

Q69 「市内居住年数」

「1.1年未満」「2.1年未満3年以上」「3.3年以上5年未満」「4.5年以上10年未満」

「5.10年以上20年未満」「6.20年以上30年未満」「7.30年以上40年未満」

「8.40年以上50年未満」「9.50年以上」

Q75 「世帯収入」

「1.100万円未満」「2.100万円～200万円未満」「3.200万円～400万円未満」「4.400万円～600万円未満」「5.600万円～800万円未満」「6.800万円～1000万円未満」「7.1000万円～1500万円未満」「8.1500万円以上」「9.わからない」

「9.わからない」は欠損値処理をした

4. 分析

自然環境が住まいから身近にあることにより、暮らしやすいという回答が多いのかどうか。これを調べるために Q2「居住地域の暮らしやすさ」を従属変数とし、Q30「自然環境とのふれあい」を含む複数の変数を用いて重回帰分析を行った。それにより、表1のような結果が得られた。

表1 暮らしやすさの重回帰分析

	B		SE	β
(定数)	2.466	***	.182	
q30_A_r反転自然環境との身近なふれあい	.171	***	.046	.141
q30_B_r反転ポイ捨ての少ない美しいまち	.153	***	.046	.123
q30_C_r反転環境活動の豊富さ	.100	†	.053	.073
q31_A_r反転水やみどりの潤い	.049		.048	.040
男性ダミー	-.212	***	.060	-.116
q75 世帯収入	.067	***	.019	.120
q69 市内居住年数	.021		.0156	.044
自然保護イベントダミー	.154		.103	.046
初等学歴ダミー	-.076		.075	-.041
高等学歴ダミー	.099		.083	.051
調整済みR2二乗	.127	***		
N	955			

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10

この分析の結果から「暮らしやすさ」の分散のうちの12.7%を説明できている。また、従属変数に有意な結果を与えている変数は0.1%水準で有意な「反転自然環境との身近なふれあい」「反転ポイ捨ての少ない美しいまち」「男性ダミー」「世帯収入」、10%水準で有意な「反転環境活動の豊富さ」の5つである。「反転水や緑の潤い」「市内居住年数」「自然保護イベントダミー」「初等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」は有意ではない。

「反転自然環境との身近なふれあい」が有意であることから、自然環境とのふれあいがあると思っている人ほど地域の暮らしやすさに満足していることがわかる。「反転ポイ捨ての少ない美しいまち」が有意であることから、ポイ捨ての少ない美しいまちだと思っている人ほど地域の暮らしやすさに満足している事がわかる。「男性ダミー」が有意であることから、男性よりも女性の方が地域の暮らしやすさに満足していることが読み取れる。「世帯収入」が有意であることから世帯収入が高い人ほど地域の暮らしやすさに満足していることがわかる。「反転環境活動の豊富さ」が有意であることから環境活動が豊富にあると思っている人ほど地域の暮らしやすさに満足していることがわかる。

また、有意な独立変数の中で「反転自然環境との身近なふれあい」($\beta=.141$)「反転ポイ捨ての少ない美しいまち」($\beta=.123$)に続き、「男性ダミー」($\beta=-.116$)「世帯収入」($\beta=.120$)が暮らしやすさに非常に強い影響を与えている。

自然環境がお住まいの身近にあることにより、暮らしやすいという回答が多いのかどうか。

これを調べるために Q1「生活満足度」を従属変数とし、Q30「自然環境との身近なふれあい」を含む複数の変数を用いて重回帰分析を行った。それにより、表 2 のような結果が得られた。

表2 生活満足度の重回帰分析

	B		SE	β
(定数)	2.054	***	.204	
q30_A_r反転自然環境との身近なふれあい	.143	**	.052	.105
q30_B_r反転ポイ捨ての少ない美しいまち	.202	***	.052	.145
q30_C_r反転環境活動の豊富さ	.042		.059	.027
q31_A_r反転水やみどりの潤い	.030		.055	.022
男性ダミー	-.124	†	.067	-.060
q75 世帯収入	.115	***	.021	.182
q69 市内居住年数	.009		.017	.018
自然保護イベントダミー	.314	**	.116	.084
初等学歴ダミー	-.083		.085	-.040
高等学歴ダミー	.137		.093	.063
調整済みR2乗	.122	***		
N	953			

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10

この分析結果から、「生活満足度」の分散のうち 12.2%を説明できる。また、従属変数に有意な影響を与えている変数は 0.1%水準で有意な「反転ポイ捨ての少ないまち」「世帯収入」1%水準で有意な「反転自然環境との身近なふれあい」「自然保護イベントダミー」10%水準で有意な「男性ダミー」の 5 つである。「反転環境活動の豊富さ」「反転水やみどりの潤い」「市内居住年数」「初等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」は有意ではない。

「反転ポイ捨ての少ないまち」が有意であることから、ポイ捨てがない美しいまちだと思っている人ほど生活満足度が高いとわかる。「世帯収入」が有意であることから、世帯収入が高い人ほど生活満足度が高いとわかる。「反転自然環境との身近なふれあい」有意であることから、自然環境との身近なふれあいがあると思っている人ほど生活満足度が高いと読み取れる。「自然保護イベントダミー」が有意であることから自然保護に関する活動に参加をしていない人よりも参加した人の方が生活満足度も高いとわかる。「男性ダミー」が有意であることから、男性よりも女性の方が生活満足度も高いとわかる。

また、有意な独立変数の中で「反転ポイ捨ての少ないまち」($\beta=.145$)「世帯収入」($\beta=.182$)

が生活満足度に非常に強い影響を与えている。

5. 考察

自然環境が身近にあることにより人々の暮らしやすさや生活への満足感に影響を与えるかどうかを調べてみた。そのために、住んでいる地域の暮らしやすさや生活への満足度を従属変数とし、高槻市の自然環境への考え方に関するデータを用いて重回帰分析を行った。

以下の分析より、自然環境との身近なふれあいがあると思っている人ほど暮らしやすさに満足しているという結果を読み取ることができ、仮説①「高槻市の自然環境と身近にふれあえると思っている人ほど地域の暮らしやすさに満足している」仮説②「高槻市の自然環境と身近にふれあえると思っている人ほど生活満足度が高い」が支持された。

高槻市の自然環境がかなり身近にあることにより、生活に満足しているところから自然と折り合いをつけながら暮らしができていて生活に満足している。もしくはそれ以外の要因があることにより、自然環境が身近にあったとしても暮らしに満足しているのではないかと考えられる。

身近な自然は天然のものではない。人の手が必ず加わっている。人が美しいと思う自然は人がそう思いたいと思って直接・間接問わず行動をし続けているものが多い。逆に不法投棄・村から放棄されて荒れた里山といった人の管理から離れた自然は美しくないと思われることが多い。このように、身近な自然も継続的な関わりがなければ、あっという間に美しさを失う。このことから仮説の結果より、高槻の身近な自然はしっかりと人の管理が行き届いた、暮らしやすい素晴らしい場所であると言える。

普段から自然に対してどのようなことを行っているのかを知るのに今回の質問項目では不十分であったので自然に対する行動の質問項目も加えて行うことが課題である。

6. 文献

[1]経済新聞 2012年3月30日 半数が「田舎に暮らしたい」、500人調査(若者、地方へ)
低所得世代の経済学パート4(4)

[https://www.nikkei.com/article/DGXNASFK23032_X20C12A3000000/\(2017/1/28 閲覧\)](https://www.nikkei.com/article/DGXNASFK23032_X20C12A3000000/(2017/1/28%20閲覧))

[2]迫 亮太 2015年3月9日 高槻定住コラム「どっちもたかつき」 高槻の持つ二面性をフル活用した新しいライフスタイルの可能性

[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/welcome/column/10/\(2018/1/28 閲覧\)](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/welcome/column/10/(2018/1/28%20閲覧))

[3]富田 啓介 2016年 都市近郊に位置する小面積の自然保護地域における利用特性と満足度：愛知県の湧水湿地における事例。

http://hoshikusa.jpn.org/works/riyotokusei_tekiyo.html

(2018/2/5 閲覧)

第6章 地域への思いと実際の貢献度の関係

真鍋 和紗

1. はじめに

「コミュニティ」とは、「同じ目的や問題意識を持つ人の集まり」のことであるが、昔は主なコミュニティといえば「近所」であった。しかし、インターネットの普及により、私たちは地域と関わるよりも簡単にコミュニティに参加できるようになった。さらに、これらのコミュニティは地域社会とはちがひ、自分好みのものを選ぶことができ、そこへの出入りに関しても自由度が高い。つまり、ストレスが少ないと考えられる。そして、スマートフォンやSNS等の普及による「個人主義」の加速が、地域と個人の関わりをより希薄にしている。こうして地域住民同士の交流の機会が減少したことにより、地域社会がかつて担っていた役割が薄れつつあるのが現状である。

ここで、全国のあらゆる地域社会に存在する「地域イベント」について取り上げる。実際の調査では、マイナビ Web アンケート(2013)において、「地域活動に参加している」と回答した人が全体のわずか1割程度に留まった。ここから、地域活動に興味を持たず、参加する意義を見出せない人が増えたということが読み取れる。

2. 仮説

2.1 先行研究

上記の Web アンケート(2013)や、マイボイスコムによる地域活動のアンケート調査(2012)によると、地域活動に参加する人は、そもそも地域に知人が多い人、普段から地域の動向に関心を持っている人が多いことがわかった。また、「家族と同居」、「持ち家」の形態である人の参加率が多いようである。これは、「一人暮らし」の形態に代表される、後からその地に移り住んだ人は、基本的に地域活動には参加しない傾向にあるということである。また、よく参加されている活動として上位に挙げたのは、「祭り」、「清掃」であった。これらは、他の様々な地域活動に比べて比較的参加しやすいのだという。

次に、地域イベントの開催にはどういったメリットがあるのかを調査した。こうち人づくり広域連合の「地域イベント活性化への一提案」によると、地域にあるお宝(個性やブランド)をもとに、それを広く発信し、まちのイメージアップを図る(知名度の向上、産業振興)、楽しませる(住民意識向上)や、地域の和を確認し合う(地域間交流)、出店による販売(マーケティングコミュニケーション)、またそういった刺激により地域を元気にする(地域の活力)、等様々な効果が期待できるようである。

以上のように地位活動に関する資料に目を通したが、地域活動の存在以前に重大な問題があることがわかった。それは、そもそも地域のひとりひとりが自分の居住する地域にさほ

ど関心がないということである。これでは、自治体がいくら地域活動の企画に力を入れても、自治体のひとりよがりようになりかねない。

2.2 仮説

本調査では先行研究から少し視野を広げ、地域に貢献したいと考える人ほど地域との関わりが強いのではないかと考えた。地域の活性化というのは地域の永遠の課題であり、この課題の解決のためにはやはり地元住民による地域への働きかけが重要である。地域住民の活動の例としては、積極的に地域イベント（地域運動会、餅つき大会、地域清掃 etc）に参加する、地域の交通機関（市バス etc）を利用する等である。これらを想定して以下の仮説を立てる。

仮説1「地域イベントによく参加している人ほど、地域社会の一員として地域に貢献したいと考えている」

仮説2「市バスの利用頻度が高い人ほど、地域社会の一員として地域に貢献したいと考えている」

3. データと変数

3.1. データ

データは平成29年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1196票、回収率は59.8%である。

3.2. 変数

本章の分析には以下の変数を使用した。（すべての変数において無回答の回答は欠損値処理を行った。）

Q4「あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。」
（「地域の役に立ちたいか」）

「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらともいえない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」という選択肢に以下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど同意度が高くなるように「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらともいえない」「4. ややそう思う」「5. そう思う」と置き換えた。

Q6「あなたは、高槻市バスをどれくらいの頻度で利用していますか。」（「高槻市バス利用頻度」）

「1. ほぼ毎日」「2. 週に3～4日」「3. 月に1～2回」「4. 年に1～2回」

「5. 利用しない」という選択肢に反転処理を行い、「1. 利用しない」「2. 年に1～2回」「3. 月に1～2回」「4. 週に1～2日」「5. 週に3～4日」「6. ほぼ毎日」と置き換えた。

Q29 「あなたは現在、お住まいの地域で、地域イベントに参加していますか」（「地域イベント参加率」）

「1. よく参加している」「2. ときどき参加している」「3. あまり参加していない」「4. 過去に参加したことはあるが現在は参加していない」「5. 参加したことはない」という選択肢に反転処理を行い、数値が高くなるほど地域イベントへの参加率が高くなるように「1. 参加したことはない」「2. 過去に参加したことはあるが現在は参加していない」「3. あまり参加していない」「4. ときどき参加している」「5. よく参加している」と置き換えた。

Q64 「性別」

「1. 男性」「2. 女性」という選択肢であるが、男性を1、女性を0としてダミー変数「男性ダミー」を作成した。

Q65 「年齢」

「1. 18歳、19歳」「2. 20代」「3. 30代」「4. 40代」「5. 50代」「6. 60代」「7. 70代以上」という元の選択肢をそのまま使用した。

Q69 「高槻市には現在までどのくらいお住まいですか」（「高槻市内居住年数」）

「1. 1年未満」「2. 1年以上3年未満」「3. 3年以上5年未満」「4. 5年以上10年未満」「5. 10年以上20年未満」「6. 20年以上30年未満」「7. 30年以上40年未満」「8. 40年以上50年未満」「9. 50年以上」という元の選択肢をそのまま使用した。

4. 分析

「地域の役に立ちたいと思っているか」と「高槻市バス利用頻度」、「地域イベント参加率」の関係を検証するために重回帰分析を行った。

表1 「Q4 地域の役に立ちたいと思っているか」の重回帰分析

	B		SE	β
(定数)	2.338	***	.122	
q65 年齢	.026		.019	.045
q69 高槻市内居住年数	.013		.016	.026
男性ダミー	-.030		.054	-.015
q6 高槻市バス利用頻度 (反転)	.053	**	.019	.078
q29 地域イベント参加率 (反転)	.296	***	.022	.365
調整済みR ²	.149	***		
N	1139			

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

分析の結果より調整済み決定係数が.149であり、従属変数である「q4 地域の役に立ちたいと思っているか」の分散の15%が投入した独立変数によって説明できることがわかる。「q6 高槻市バス利用頻度」、「q29 地域イベント参加率」は有意であり、仮説1と仮説2はともに成立することがわかる。また、その他の独立変数の影響を確認すると、「q69 高槻市内居住年数」の影響は有意ではなかった。「q6 高槻市バス利用頻度」($\beta=.078$)が1%水準、「q29 地域イベント参加率」($\beta=.365$)が0.1%水準で有意な正の影響を及ぼしていた。

5. 考察

重回帰分析の結果より、仮説1「地域イベントによく参加している人ほど、地域社会の一員として地域に貢献したいと考えている」、仮説2「市バスの利用頻度が高い人ほど、地域社会の一員として地域に貢献したいと考えている」はともに成立した。

仮説1について、地域イベントによく参加する人がそうでない人よりも地域に関心や愛着があることは間違いない。そのため、この仮説が成立したのは予想通りであった。

仮説2について、こちらの仮説も成立はしたが、「地域イベント参加率」の方が「高槻市バス利用頻度」よりも、従属変数「地域の役に立ちたいか」に大きな影響を及ぼしているということが読み取れる。これは、バスの利用が必要な地域の住民は、「地域の役に立ちたい」と思うか思わないかに関わらず、バスを利用せざるを得ないからであると考えられる。

6. 文献

[1]マイナビニュース, 2013「どれぐらい差がある? 「地域活動」に参加している人・していない人の割合」(2018年1月8日閲覧)

<https://news.mynavi.jp/article/20130424-a212/>

[2]マイボイスコム株式会社, 2012「自主企画アンケート結果 [17315] 地域活動」(2018年

1月8日閲覧)

<http://www.myvoice.co.jp/biz/surveys/17315/index.html>

[3]サザエさんから見る人とのつながり「なぜこんなにも人とのつながりが希薄な時代になったのか」(2018年1月8日閲覧)

<http://www.sazae-links-people.com/ties-with-people/lean-period/>

[4] こうち人づくり広域連合「地域イベント活性化への一提案」(2018年1月30日閲覧)

<http://www.kochi-hitozukuri.or.jp/seisaku/kikakusho/kikaku1-3.pdf>

第7章 高槻市における救急車の利用とその意識

高橋 えり

1. はじめに

近年、救急車の出場件数増加に伴い、その増加要因として高齢化と救急車の不適切利用が注目されるようになった。注目される理由のひとつは、出動要請の増加で生じる到着時間の遅延と救急活動の妨げへの懸念である。もうひとつは、救急車の出動費用に対する人々の関心である。救急事業は税金投入型事業であり、その行政サービス提供に伴う必要経費は基本的に税金でまかなわれるからである。東京都財務局（2004）によって公開、報道された救急車の1回あたりの出動費用はおよそ45000円とされ、この金額は、人々に救急車の利用を再考させるのに十分な金額であった。このことをきっかけに、入院加療を必要としない程度の軽症の傷病で救急車を利用や一部の利用者による頻回な利用は社会問題として認識されるようになった。

しかしながら、「平成28年版救急・救助の現況」によると、交通事故は減少傾向にあり、急病と一般負傷がその搬送理由の7割以上を占める中、不適切利用と認識されているはずの軽症程度の救急車の利用（以下、軽症搬送とする）は約5割と依然横ばい傾向にある（総務省,2016）。高槻市の救急出動件数も年々増加している。「平成28年火災・救急活動の概要」では、搬送理由は急病64.7%(全国63.6%)、一般負傷14.9%(全国14.8%)と概ね全国レベルであったが、軽症搬送は66.3%(全国49.4%)と、全国を大きく上回った（高槻市消防本部,2016）。

これらのことから、本章では、救急車の利用価値に対する市民の意識と軽症程度の救急車の利用の状況を明らかにするため、平成29年度「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」データの分析を行った。

2. 仮説

2.1 先行研究

川上他(2005)は、横浜市で救急車有料化の是非について質問紙調査を行っている。その結果は、有料化には65.8%が賛成、現状維持が31.0%と賛成が多いものの、救急搬送にかかる費用を利用者が負担する場合の1回当たりの金額は3000円から5000円の回答が多く、実際の出動費用とは大きく乖離したものであった。また、救急車の利用歴の有無、経済状況及び年齢に影響されており、その金額は、利用歴のある人の方が低く、80歳以上では低く回答する傾向があり、世帯収入の多いほど負担金額を多く回答する傾向があった。

安川（2008）は救急医療に対して近畿圏の住民にインターネットによる調査を行い、救急搬送の機会費用の要因を分析している。その調査では、1人当たりの医療費額の低い地域

に居住するものほど有意に救急医療体制の公費負担に対する意見が出ていることから、医療費をあまり使わない健康な人ほど救急搬送の利用者負担に肯定的にみる可能性を指摘している。また、救急時の行動における選択として、まず救急車を呼ぶという人ほど有意に全額を公費負担とするべきと考え、救急車を呼ぶ前に家族や医師、看護師などに相談したいと考える人ほど、一部あるいは全額利用者負担の導入に積極的とした。さらに 119 番通報の電話で救急車の必要性を判断することが望ましいと考えるほど利用者負担について肯定的である反面、全額公費負担には否定的であり、年齢が若く男性であるほど 119 番自体に相談機能を希望するとした。一方で、既婚女性ほど医師への電話相談を希望するとした。さらに医療を自己責任の問題としてとらえる傾向があるほど利用者負担に前向きな可能性を示唆した。

石井（2001）は、救急搬送率の都道府県格差に影響するのが軽症者の利用であることをあげ、軽症者の利用に影響する社会的要因の分析を行った。その中で、急病・一般負傷による軽症搬送率と正の相関があったのは「核家族の割合」「単独世帯の割合」「生活保護被保護老人率」「生活保護申請率」「行政訴訟事件率」で、負の相関を示したのは「老人人口の割合」「人口集中地区以外の人口割合」「共働き・子有り世帯率」「自家用車保有率」であった。

これらのことから、救急車の価値を表す金額に影響する要因では、経済的な状況、救急車を利用する可能性の高さ、身近で救急車を利用した経験をあげた。また、軽症搬送への影響として年齢、経済状況、急病時の移送手段や協力するマンパワーの不足、状況を判断するための情報や知識の不足を考えた。

2.2 仮説

先行研究から、救急車の出動 1 回当たりの費用として考えられる金額をその人の考える救急車の利用価値とみなし、それに影響する要因として、経済状況に関連する年収や学歴、利用の可能性に影響する年齢や急病時の搬送の有無や相談相手の有無、搬送手段の有無や判断材料としての自家用車の保有状況、世帯構成にあると考えた。また、軽症搬送には利用者の考える救急車の価値の高さが影響すると考えた。さらに、軽症搬送が生じる要因に、家族構成、自家用車の保有、急病時の搬送の有無や相談相手の有無が影響すると考えた。

これらをもとに仮説を立て、関連する変数を用いて分析し説明することを試みる。

仮説 1 「経済的に余裕のある人ほど、救急車の利用価値の金額は高く見積もる」

仮説 2 「救急車を利用する可能性が高い人ほど、救急車の利用価値の金額を低く見積もる」

仮説 3 「その人の考える救急車の利用価値が、救急車の軽症搬送に影響する」

仮説 4 「急病時に十分対処できないことが、救急車の軽症搬送に影響する」

3. データと変数

3.1. データ

データは平成29年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1196票、回収率は59.8%である。

3.2. 変数

本章の分析で使用した変数と変数の操作については以下のとおりである。各変数の度数分布を確認し、5%未満のものは統合、無回答は欠損値処理を行った。

Q11.自動車の保有台数

0:0台 1:1台 2:2台 3:3台以上

0を0台、1を1:「保有台数1台」、2と3を2:「保有台数2台以上」の3カテゴリとし、ダミー変数「車保有1台ダミー」「車保有2台以上ダミー」を作成した。

Q41.急病時に医療機関へ連れて行ってくれる人の有無

1:思う 2:思わない

1を1、2を0としてダミー変数「急病搬送ダミー」を作成した。

Q42 急病時に相談できる人の有無

1:思う 2:思わない

1を1、2を0としてダミー変数「急病相談ダミー」を作成した。

Q43 救急車の利用一回分の価値(金額)

0:0円 1:1円以上1000円未満 2:1000円以上2000円未満 3:2000円以上3000円未満 4:3000円以上5000円未満 5:5000円以上10000円未満 6:1万円以上3万円未満 7:3万円以上

度数5%未満を統合するため、0と1を1:「0円以上1000円未満」、6と7を6:「1万円以上」とした。

Q44 家庭で救急車を利用したのべ回数

1:1回 2:2~3回 3:4回以上 4:利用したことがない

4を0:「利用したことがない」とし、1を1:「救急車利用1回」、2と3を2:「救急車利用2回以上」の3カテゴリとし、さらにダミー変数「救急車利用1回ダミー」「救急車利用2回以上ダミー」を作成した。

Q45 救急車で病院へ搬送されたが入院せずに帰宅した経験

1：ある 2：ない

Q64 性別

1：男性 2：女性

男性を1、女性を0としてダミー変数「男性ダミー」を作成した。

Q65 年齢

1：18、19歳 2：20代 3：30代 4：40代 5：50代 6：60代 7：70代以上

度数5%未満を統合するため、1と2を1：「20代以下」、2以上をそれぞれ2：30代 3：40代 4：50代 5：60代 6：70代以上とした。さらに、60代以上と60歳未満の2値変数にするため、1～5を0、6と7を1とした「年齢2値」を作成した。

Q67 最終学歴

1. 中学（旧小学校など） 2：高校（または旧制中学など） 3：専門学校 4：短大・高専（5年制） 5：大学（旧高専）・大学院 6：わからない

1と2を1：「初等学歴」、3と4を2：「中等学歴」、5を3：「高等学歴」の3カテゴリとし、ダミー変数「初等学歴ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」を作成した。6は欠損値処理とした。

Q69 高槻市での居住年数

1：1年未満 2：1年以上3年未満 3：3年以上5年未満 4：4年以上10年未満 5：10年以上20年未満 6：20年以上30年未満 7：30年以上40年未満 8：40年以上50年未満 9：50年以上

度数5%未満を統合し、データ区間を均等にするため、1～4を1：「10年未満」、5を2：「10年以上20年未満」、6を3：「20年以上30年未満」、7を4：「30年以上40年未満」、8を5「40年以上50年未満」、9を6「50年以上」とした。

Q74 世帯人数

実数で回答されており、最大値9であった。そのため、度数5%未満を統合し、1を1：「1人」、2を2：「2人」、3を3：「3人」、4を4：「4人」、5～9を5：「5人以上」の世帯人数5分類カテゴリを作成した。さらに、1と2を1、3～5を2とし、世帯人数2分類のカテゴリを作成した。

Q75 世帯収入

1：100万円未満、2：100万円～200万円未満、3：200万円～400万円未満、4：400万円

～600万円未満、5：600万円～800万円未満、6：800万円～1000万円未満、7：1000万円～1500万円未満、8：1500万円以上、9：わからない

度数5%未満を統合するために、1と2を1：200万円未満、3を2：「200万円～400万円未満」、4を3：「400万円～600万円未満」、5を4：「600万円～800万円未満」、6を5：「800万円～1000万円未満」、7と8を6：「1000万円以上」とした。9は欠損値処理とした。

従属変数に変数操作後のQ43「救急車の利用一回分の価値(金額)」及びQ45「救急車で病院へ搬送されたが入院せずに帰宅した経験(有無)」を用いる。消防白書(2016)によると傷病程度が入院加療を必要としないものを軽症と定義されており、軽症利用の経験の有無を「救急車の利用経験あり」の分岐質問として「入院しなかった」ことを問うQ45を設定した。なお、Q43は、Q75同様、金額を回答する回答者の心理的負担を取り除くため選択肢による回答にした。

変数として用いるのは、大きく二つに分けて、個人の属性に関連する変数と救急車の利用に直接影響する変数である。前者は性別、年齢、学歴、年収、世帯人数である。先行研究ですでに世帯年収による影響が明らかになっているが、収入に影響を与える性別と学歴も投入する。後者は、自動車の保有、救急車の利用経験、急病時の不安に関連する質問項目とした。急病時の不安は直接観測できないので代理変数として、救急車を呼んでくれる人の有無と相談する人の有無を質問項目に設定、ダミー変数として使用した。また、居住年数は長ければ近隣にかかりつけの医療機関を持つことや、近所の手前救急車の利用をはばかるなどの心理的な影響もあるため、変数として加えた。年齢は共変量として扱うため区間を均等にしよう変数操作を行った。年齢の変数操作とは別に、60歳以上と60歳未満のカテゴリを作成した。これは後述するが、学歴を用いたクロス分析で年齢の影響の可能性を考えたためである。さらに、60歳を境にリタイヤによる年収の減少や加齢による健康不安などの影響が顕在化することが多い。そこで、60歳以上は60歳未満2つのカテゴリを作成した。軽症搬送においては説明変数ごとに60歳以上と60歳未満の比較し、併せて全体の考察を行う。今回の調査における質問では救急車の要請が誰に対するものかがわからない。そこで、判断する人間を絞り込む目的で世帯人数2分類も作成した。2人以下であれば自分のためかあるいはもう一人に対しての要請、高齢の同居の夫婦や親子のペアを想定し、3人以上と区別するためである。

4. 分析

まず、仮説1、仮説2を検証するため、救急車の利用価値の全体での傾向について回帰分析で把握した。従属変数「救急車利用1回分の価値」は金額ではあるが、カテゴリ変数であることを考慮し順序回帰分析を行った。年収、年齢、居住年数は度数5%未満の統合処理を行い共変量として投入、その他のカテゴリ変数も全てダミーを作成し共変量として投入し

た。次に、仮説 3、仮説 4 に使用する変数に、順序回帰の結果から影響が考えられた変数を追加して独立変数とし、軽症搬送を示す「救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験の有無」を従属変数とし、クロス表で分析を行った。いずれも、分析にはすべて統計解析ソフト IBM SPSS Statistics (バージョン 24) を用いた。

救急車の利用価値の傾向について表 1 に示すとおりである。有意水準 10%において急病時に相談する人がいないと思うと答えた人よりもいると答えた人、有意水準 5%において初等学歴比べて中等学歴、有意水準 0.1%において初等学歴に比べて高等学歴、有意水準 0.1%において年齢が高いほど救急車利用価値 1 回分の金額を高く見積もる傾向があることが示された。一方で、低く見積もる傾向があるのは、有意水準 5%において救急車の利用回数 0 回と答えた人に比べて 1 回と答えた人であった。年収については影響が見られなかった。よって、仮説 1 は支持されなかった。また、利用の可能性の高い年齢の高い人ほど金額を高く見積もっており、仮説 2 は支持されなかった。なお、このモデルの適合度は、 χ^2 (df=10, N=894) =41.621***、疑似 R²=.045、であったため、モデルとしての説明力は乏しい。

表 1 救急車利用価値の順序回帰分析結果

	B	SE
急病搬送ダミー	-.277	.224
急病相談ダミー	.491 †	.275
救急車利用1回ダミー	-.296 *	.149
救急車利用2回ダミー	.143	.143
年収	.066	.045
中等学歴ダミー	.33 *	.161
高等学歴ダミー	.665 ***	.157
年齢	.161 ***	.046
車保有ダミー	.111	.144
居住年数	.036	.045
Cox と Snell	.045	
Nagelkerke	.047	
model X ² (df=10)	41.621 ***	
Pearson X ² (df=3317)	3957.126	
N	894	

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10

次に救急車の軽症利用と先の利用価値で有意であった項目を中心にクロス表で分析した。軽症利用と学歴 3 分類では、有意水準 10%において $\chi^2=5.979$ 、CramerV=0.102 とわず

かながらの関連を見せた（表 2）。しかし、学歴と関連の深い性別においては $\chi^2=.29$ 、**CramerV=0.007** と関連があるといえなかった（表 3）。学歴に関連する世帯年収と軽症搬送では $\chi^2=.8.506$ 、**CramerV=0.131** と関連があるとはいえなかった（表 5）。また、軽症搬送と救急車利用 1 回分の価値とも $\chi^2=7.702$ 、**CramerV=0.116** と関連があるとはいえなかった（表 6）。よって仮説 3 は支持されなかった。

仮説 4 に対して、軽症利用と年齢は $\chi^2=27.660$ 、**CramerV=0.217** と明らかな関連を示した（表 4）。軽症搬送と世帯人数に関しては、有意水準 10%において $\chi^2=9.440$ 、**CramerV=0.129** を示した（表 7）。搬送手段に直接影響すると考えられた自動車の保有と軽症搬送については $\chi^2=.902$ 、**CramerV=0.039** と関連はあるとはいえなかった（表 8）。急病時の不安に関する項目の 2 つについてクロス表による分析を行った。知識や判断という上では学歴も相当するが、先に経済状況と共に確認したので省略する。急病時に医療機関に連れていってくれる人がいると思うかどうかと軽症搬送のクロスでは $\chi^2=.354$ 、**CramerV=0.024** と関連があるとはいえなかった（表 9）。救急車の利用価値においてはわずかに影響した急病時相談ダミーも軽症搬送では $\chi^2=.417$ 、**CramerV=0.026** と関連があるとはいえなかった（表 10）。

学歴のクロス表を確認したところ、救急車の利用度数から初等学歴 274、中等学歴 138、高等学歴 166 と、中等学歴が少ないことがわかる。年収で影響がないのに学歴だけ出るのであれば、世代間の最終学歴の差による影響を考えて、年齢について、再度 60 歳以上と 60 歳未満で分割し軽症搬送との関連を確認した。その結果、 $\chi^2=20.335$ 、**CramerV=0.185** でいずれも 1%水準で有意であり、このことから 60 歳未満の方が 60 歳以上よりも軽症搬送の経験が多いことがはっきりとした（表 11）。

このことから、60 歳以上と 60 歳未満に分割し、それぞれについて学歴、性別、年収、救急車の利用価値、世帯人数、車の保有、急病時の不安の関連項目 2 つについてクロス表で分析したが、60 歳以上、60 歳未満とも明らかな関連のある項目はなかった（表 12）。よって仮説 4 は支持されなかった。

表2 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と学歴3分類のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
学歴3分類	初等学歴	度数	142	132	274
		行%	51.8%	48.2%	100.0%
	中等学歴	度数	89	49	138
		行%	64.5%	35.5%	100.0%
	高等学歴	度数	93	73	166
		行%	56.0%	44.0%	100.0%
合計		度数	324	254	578
		行%	56.1%	43.9%	100.0%

$\chi^2(df=2, N=578)=5.979†, Cramer V=0.102$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表3 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と性別のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
性別	男性	度数	134	105	239
		行%	56.1%	43.9%	100.0%
	女性	度数	197	150	347
		行%	56.8%	43.2%	100.0%
合計		度数	331	255	586
		行%	56.5%	43.5%	100.0%

$\chi^2(df=1, N=586)=.029, Cramer V=0.007$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表4 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と年収のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
年収	200万円未満	度数	51	34	85
		行%	60.0%	40.0%	100.0%
	200万円～400万円未満	度数	89	99	188
		行%	47.3%	52.7%	100.0%
	400万円～600万円未満	度数	52	35	87
		行%	59.8%	40.2%	100.0%
	600万円～800万円未満	度数	36	26	62
		行%	58.1%	41.9%	100.0%
	800万円～1000万円未満	度数	19	15	34
		行%	55.9%	44.1%	100.0%
	1000万円以上	度数	26	13	39
		行%	66.7%	33.3%	100.0%
	合計	度数	273	222	495
		行%	55.2%	44.8%	100.0%

$\chi^2(df=5, N=495)=8.506, \text{Cramer } V=0.131$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表5 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と救急車価値1回分のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
救急車価値 1回分	1000円未満	度数	26	18	44
		行%	59.1%	40.9%	100.0%
	1000円以上2000円未満	度数	37	17	54
		行%	68.5%	31.5%	100.0%
	2000円以上3000円未満	度数	57	34	91
		行%	62.6%	37.4%	100.0%
	3000円以上5000円未満	度数	52	46	98
		行%	53.1%	46.9%	100.0%
	5000円以上1万円未満	度数	75	62	137
		行%	54.7%	45.3%	100.0%
	1万円以上3万円未満	度数	49	43	92
		行%	53.3%	46.7%	100.0%
	3万円以上	度数	29	32	61
		行%	47.5%	52.5%	100.0%
合計	度数	325	252	577	
	行%	56.3%	43.7%	100.0%	

$\chi^2(df=6, N=577)=7.702, \text{Cramer } V=0.116$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表6 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と年齢のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
年齢	30歳未満	度数	26	15	41
		行%	63.4%	36.6%	100.0%
	30代	度数	48	15	63
		行%	76.2%	23.8%	100.0%
	40代	度数	62	30	92
		行%	67.4%	32.6%	100.0%
	50代	度数	51	35	86
		行%	59.3%	40.7%	100.0%
	60代	度数	72	63	135
		行%	53.3%	46.7%	100.0%
	70代	度数	75	97	172
		行%	43.6%	56.4%	100.0%
	合計	度数	334	255	589
		行%	56.7%	43.3%	100.0%

$\chi^2(df=5, N=589)=27.660**, \text{Cramer } V=0.217$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表7 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と世帯人数のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
世帯人数5分類	1人	度数	28	29	57
		行%	49.1%	50.9%	100.0%
	2人	度数	105	104	209
		行%	50.2%	49.8%	100.0%
	3人	度数	77	53	130
		行%	59.2%	40.8%	100.0%
	4人	度数	73	38	111
		行%	65.8%	34.2%	100.0%
	5人以上	度数	38	24	62
		行%	61.3%	38.7%	100.0%
合計		度数	321	248	569
		行%	56.4%	43.6%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=569)=9.440†, Cramer V=0.129$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表8 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と車保有のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
自家用車	ある	度数	239	188	427
		行%	56.0%	44.0%	100.0%
	ない	度数	93	61	154
		行%	60.4%	39.6%	100.0%
合計		度数	332	249	581
		行%	57.1%	42.9%	100.0%

$\chi^2(df=1, N=581)=.902, Cramer V=0.039$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表9 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と急病時に医療機関に連れていってくれる身近な人の有無のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
急病時に医療機関に連れていってくれる身近な人はいると思うか	思う	度数	287	215	502
		行%	57.2%	42.8%	100.0%
	思わない	度数	44	38	82
		行%	53.7%	46.3%	100.0%
合計		度数	331	253	584
		行%	56.7%	43.3%	100.0%

$\chi^2(df=1, N=584)=.354, Cramer V=0.024$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表10 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と急病時にすぐに相談できる人の有無のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
急病時にすぐに相談できる人はいるか	思う	度数	309	234	543
		行%	56.9%	43.1%	100.0%
	思わない	度数	25	23	48
		行%	52.1%	47.9%	100.0%
合計		度数	334	257	591
		行%	56.5%	43.5%	100.0%

$\chi^2(df=1, N=591)=.417, \text{Cramer } V=0.026$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表11 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験と年齢(60歳以上60歳未満)のクロス表

		救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験		合計	
		ある	ない		
年齢	60歳未満	度数	187	95	282
		行%	66.3%	33.7%	100.0%
	60歳以上	度数	147	160	307
		行%	47.9%	52.1%	100.0%
合計		度数	334	255	589
		行%	56.7%	43.3%	100.0%

$\chi^2(df=1, N=589)=20.335**, \text{Cramer } V=0.185$

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表12 救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験のクロス結果による60歳以上と60歳未満の比較

救急車で病院に行き入院せずに帰宅した経験とのクロス	60歳以上					60歳未満				
	χ^2	df	N	p	Cramer V	χ^2	df	N	p	Cramer V
学歴3分類	3.453	2	298	.178	.108	.76	2	278	.684	.052
性別	1.012	1	307	.314	.057	1.074	1	277	.3	.062
年収2	8.768	5	270	.119	.18	1.629	5	223	.898	.085
救急車価値1回分	8.074	6	293	.233	.166	8.108	6	279	.23	.17
世帯人数5分類	3.892	4	298	.421	.114	3.489	4	269	.48	.114
世帯人数2分類	.677	1	298	.411	.048	.596	1	269	.44	.047
車保有有り無し	1.329	1	297	.249	.067	.369	1	279	.544	.036
急病時に医療機関に連れていってくれる身近な人はいるか	1.924	1	299	.165	.08	2.094	1	280	.148	.086
急病時にすぐに相談できる人はいるか	1.721	1	304	.19	.075	1.131	1	282	.287	.063

5. 考察

分析の結果から、救急車の1回当たりの利用価値を金額で示す場合、年齢と学歴の高さが影響すること、身近に救急車の利用経験が1回あるほど全くない場合よりも有意に低く見積もることが明らかになった。高槻市の場合、60歳以上の高齢者よりも60歳未満の軽症

搬送が有意に多いことが分かったが、軽症搬送に関連する直接的な要因に接近することはできなかった。仮説1～4はすべて成立しなかったが、高槻市の調査では、救急車の利用価値を金額で考える場合、経済状況ではなく、むしろ、年齢に影響を受けること示唆された。こうした公共サービスの価値を高く見積もるといえるのは、市民の行政サービスや税への意識の高さ、社会規範や道徳観などが考えられ、そうした見識は学歴や年齢による影響を受ける可能性が高いことが明らかになったといえる。

また、利用したことがない人よりも1回だけ利用した人が低く見積もるという傾向が見られたにもかかわらず、救急車を2回以上利用している人と利用していない人で差が出なかった。このことは、川上他(2005)が今後の利用の可能性を考えて低い金額を期待すると述べたことには矛盾する。2回以上利用経験者と1回だけ利用経験者の搬送経験の違いについて、考えられる可能性は二つある。救急車の車両の違いと初回の要請による心理的影響である。

車両の違いとは、いわゆる119番で要請する総務省消防庁管轄の救急車両と、医療機関が独自に保有している救急車との違いである。前者は、搬送従事者は救急隊員(救命救急士を含む)であり、救急要請で搬送される可能性が最も高い車両である。後者の医療機関の保有する救急車は、医療機関が直接患者や家族から要請を受けて出動を受けることはなく、一般の搬送車両や消防庁管轄の救急車両では搬送困難な重篤な患者を医療機関の判断や消防からの要請で行う。特に、転院については、地域支援医療病院は患者移送用の救急車両を保有しており、医師が同乗して搬送中に治療ができるドクターカーと呼ばれるものや、医師が同乗しなくても看護師等が搬送中に医療処置のできる設備を備えた車両が多い。医療機関の救急車の保有台数は、大阪府は43台で福岡県の73台に次いで全国で2番目に多い(総務省, 2016)。これらの車両を利用すれば金額を高く見積もる可能性がある。つまり、本人あるいは家族が2回以上救急車両を使用する経験者の中には、高度医療を必要とする疾患を持つ患者が複数回にわたって救急搬送が経験した人と、一般に「リピーター」といわれるような軽症搬送の要請を繰り返す人のどちらもが混在するため、1回だけの利用との違いが出たと考えられる。

初回の救急車要請が心理的にどのように影響するかについて、次のことが考えられる。石井他(2001)は、重症感や不安感が救急要請の最も大きな理由となることを指摘している。家族の急病が子どもあれば症状を適切に訴えることができないため、より重症感や不安感が強くなる。1回だけの要請は初めての要請である可能性が高く、初めての子どもの急病で病状に対して重症感や不安感を持てば、要請した親は「その時は必要であった。」と感じて低く見積もったことが考えられる。つまり、1回だけの要請には、初めての子どもの急病で行った救急要請が多く含まれている可能性が考えられる。

また、今回は自分あるいは家族が救急車を要請したかどうかの質問になっているため、軽症の利用の経験があったとして、救急要請をするのが本人と本人以外では判断の基準が違うことが考えられる。つまり、本人であれば「大丈夫だ」と判断する病状やケガに際して、

周りの人が救急要請をするケースの場合、結果的に軽症利用になったということが含まれる。この場合の善意の要請を不適切といえるかどうかも考えなければならない。さらに、この調査において高齢者ほど軽症搬送が少ないというのは適切な利用であった可能性もあるが、高齢者特有の医療行動として重症化するまで気づかない、我慢してぎりぎりまで受診しないといったことによるともいえる。

60歳を境にカテゴリ化し、それぞれの要因で分析したが、仮説4にあげたような急病時の対処能力にあたる学歴や居住年数、急病時の相談の有無、世帯人数とも、どちらの年齢区分でも影響は見られなかった。さらに、石井他(2001)が自家用車の保有率と負の相関があったとする自動車の保有に関しても軽症搬送の関連は見られなかった。したがって、高槻市における軽症搬送の多さは、さらに別の要因が考えられる。石井他(2001)は軽症搬送に関連する社会的要因として経済状況や家族状況以外に、権利意識の高さをあげた。権利意識の説明の指標として行政訴訟率を用い、軽症搬送率との間に正の相関があることを示している。実際、大阪府は軽症搬送もさることながら、全国で最も行政訴訟件数が多い。都道府県別にみる行政訴訟及び民事訴訟に占める行政訴訟の割合は、全国で最も高く、平成28年度の大阪地方裁判所の民事・行政訴訟の新受総数のうち行政訴訟の新受件数の割合は2.10%(全国0.83%)である。しかし、権利意識の高さが救急車の利用に結びつくのであれば、救急車の利用価値の金額を低く見積もる傾向が見られても良いはずである。少なくとも、軽症搬送の経験の有無に利用価値の金額による差が出るのが考えられるが、この調査データからはそのような傾向は見られなかった。

それでは、先に述べた善意の要請ではなく、無料で利用できる搬送目的でもなく、さらに当然の権利であるとは思わないのに救急車を利用する目的とは何であろうか。それには三つの個人の便益に由来する可能性が考えられる。救急受け入れを行う病院で診療を受けられること、時間外に受診可能であること、診療までの待ち時間の短縮である。これらは高槻市に限らず、軽症搬送の多い大阪府全体にも当てはまる可能性が高い。安川(2008)が、大阪府の地域性として、救急時の行動選択も救急制度の望ましい制度のいずれの場合にも、かかりつけ医への相談を有意に選択しないことを指摘している。このことから考えられるのは、緊急時に速やかに検査や治療を受けたいと考える人々は、「大病院志向」によって救急車を要請するため、結果的に軽症搬送の増加につながっているのではないだろうか。救急車が有料になった場合、田中他(2007)はその料金負担によって需要を喚起する可能性を示唆している。つまり、その人にとって払っても良いと思える金額であれば、支払って積極的に救急車を利用しようとする人々が増えるということであり、その中には、時間外の受診や待ち時間の短縮といった身勝手な理由で利用しようとする人が含まれるだろう。

軽症利用や頻回利用について「タクシー代わり」「生活困窮者」「寂しい老人」といったイメージが先行すれば、結果的に軽症利用になることを怖れて本来必要な救急要請の判断が遅れることや、善意の要請すらも抑制される危険性が高くなる。年間10回以上の軽症あるいは不必要な頻回な救急要請を行う頻回利用者は精神疾患を持つことが多い。それらのケ

ースに対しては、ケースワーカーなどと一緒に個別に対応されており要請を減らすための一定の効果をあげている（総務省，2016）。こうした特殊なケースをもって「軽症搬送＝不適切利用」と考えることには注意が必要である。そして、判断の遅れから重症化することは、結果的に医療費の支出につながる。よって、救急事業費に限らない全体の支出として最も抑制できるポイントを考えていく必要があるだろう。

これらのことをふまえ、今一度、救急事業全体の費用とその恩恵について広く市民が知ると同時に、軽症利用の実態と要因の解明が必要である。また、大阪府の地域性として電話相談が住民の心情にそぐわない、つまり大きな病院に行ってみなければ納得できないといった心情を持つ可能性も考えておかなければ、横浜市で導入された 119 番によるコールセンターのような事業の活用は難しいといえよう。今後の課題として、軽症搬送の理由については医療機関の追跡調査などを含めて検討すること、軽症搬送の増加と関連して取りざたされる病院収容までの時間の遅延については、受け入れ医療機関の選定が困難なケースと搬送収容に時間がかかるケースを分けて検討することを提言したい。

6. 文献

- [1]石井敏弘・大井田隆・藤崎清道・武村真治・曾根智史・林謙治（2001）「救急車利用に影響を与える諸要因について 特に軽症者の利用に焦点を当てて」『日本公衆衛生雑誌』48(2), pp.109-120,
- [2]川上ちひろ・大重賢治・和田誠名・河野隆・常陸哲生・久保田勝明・朽久保修（2005）「横浜市における救急車利用に関する質問票調査」『日本公衆衛生雑誌』第 52 巻第 9 号, pp.809-816
- [3]裁判所，司法統計年報 民事・行政 平成 28 年度 「4 民事・行政事件数 一事件の種類及び新受，既済，未済 全地方裁判所及び地方裁判所別」
http://www.courts.go.jp/app/sihotokei_jp/list_detail?page=28&filter%5Bkeyword%5D%5B0%5D=12&filter%5Btype%5D=1 (2018 年 1 月 6 日閲覧)
- [4]総務省,消防庁,『平成 28 年版救急・救助の現況』, 2016
http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/houdou/h28/12/281220_houdou_2.pdf (2018 年 1 月 6 日閲覧)
- [5]総務省,消防庁,『平成 27 年版消防白書』, 2016
<http://www.fdma.go.jp/html/hakusho/h27/h27/html/2-5-1-2.html> (2018 年 1 月 6 日閲覧)
- [6]総務省,消防庁,「平成 27 年度 救急業務のあり方に関する検討会 報告書」, 2016
http://www.fdma.go.jp/neuter/about/shingi_kento/h27/kyukyu_arikata/houkoku/houkoku.pdf
- [7]高槻市消防本部「平成 28 年火災・救急活動の概要」,2016, pp5-6,
<http://www.fdm-takatsuki.jp/119/takatsuki/toukei/h28toukei.pdf> (2018 年 1 月 6 日閲覧)

覧)

- [8]田中輝征・半谷芽衣子・松本佑史(2007)「救急医療サービスの経済分析」,平成19年度「公共政策の経済評価」事例プロジェクト,東京大学公共政策大学院,
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/graspp-old/courses/2006/13100/documents/13100-2.pdf>
(2018年1月6日閲覧)
- [9]東京都財務局「機能するバランスシート－救急事業とバランスシートの役割－」,2004,
pp.53
[http://www.zaimu.metro.tokyo.jp/syukei1/zaisei/20040727_kinourubaransusiito\(kyuukyuujiyou\)/20040727_kinourubaransusiito\(kyuukyuujiyou\)honbun.pdf](http://www.zaimu.metro.tokyo.jp/syukei1/zaisei/20040727_kinourubaransusiito(kyuukyuujiyou)/20040727_kinourubaransusiito(kyuukyuujiyou)honbun.pdf)
(2018年1月6日閲覧)
- [10]安川文朗(2008)「救急搬送需要の背景に関する医療経済分析—近畿圏住民の意識と機会費用—」『経済論叢』,182(1), pp109-137 京都大学

第 8 章 高槻市民における高槻 JCT・IC 開設に関する

意識

川端 菜幹

1. はじめに

平成 29 年 12 月 10 日、高槻市宮ヶ谷町に高槻ジャンクション・インターチェンジ (JCT・IC) が設置され、新名神高速道路 (以下、新名神) 高速 JCT・IC～川西 IC までの開通が予定されている。また平成 35 年度に大津 JCT (仮称) ～城陽 JCT と八幡京田辺 JCT～高槻 JCT を開通させるべく、現在建設事業を進めている (NEXCO 西日本)。上記の区間は 2003 年 12 月に根本的見直し区間に設定され建設凍結になっていたが、2012 年 4 月に建設凍結の解除並びに、事業許可が下りたため工事が開始された (星の駅 高速道路新路線情報)。

これらの開通により、名神高速道路とのダブルネットワークが形成され、大阪北部地域及び川西地域から周辺高速道路ネットワークへのアクセス性が向上し、地域産業や観光の活性化、交通量の分散による渋滞解消が期待されている。また名神高速道路・中国自動車道には代替道路が無い場合、大規模な災害が発生した場合の代替道路としての期待も大きい。

本研究では、居住地区と高槻 JCT・IC 開通に対する関心度並びに期待度の関係の調査を実施し、高槻 JCT・IC 開通に対する仮説の検証を行う。

2. 仮説

2.1 先行研究

株式会社 百五総合研究所「新名神高速道路と東海環状自動車道の開通の影響について」の調査結果 (2017) によると、新名神、東海環状ともに、開通予定の認知度は両道路のある地域で最も高いとある。

このことから、高槻 JCT・IC の認知度においても居住地区が影響するのではないかと考えられる。また、高槻 JCT・IC により近い地域の方が開通に対しての期待度も高くなるのではないかと推測した。そこで、以下のような仮説を立てた。

2.2 仮説

[仮説 1] 高槻市北部に住んでいる人は高槻 JCT・IC 開設を知っている

[仮説 2] 高槻市北部に住んでいる人は高槻 JCT・IC 開設に期待している

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 29 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1196 票、回収率は 59.8%である。

3.2. 変数

変数は以下のものを使用して分析するものとする。

本分析では、全ての変数において欠損値処理を行った。

Q12. 「インターチェンジ利用状況」

「1.大山崎インターチェンジ」「2.茨木インターチェンジ」「3.吹田インターチェンジ」「4.摂津北又は摂津南インターチェンジ」「5.それ以外のインターチェンジ」「6.高速道路を利用しない」

Q13. 「高槻インターチェンジ認知度」

「1.知っている」「2.知らない」

Q14. 「高槻インターチェンジ期待度」

「1.期待している」「2.どちらかといえば期待している」「3.どちらかといえば期待していない」「4.期待していない」

以下のように二値変数化を行い、二つに分類を行った。

「1.期待している」「2.期待していない」

Q15. 「高槻インターチェンジ利用予定頻度」

「1.大いに利用する」「2.ときどき利用する」「3.あまり利用しない」「4.ほとんど利用しない」

Q68. 「居住地区」

「1.堅田地区」「2.高槻北地区」「3.高槻南地区」「4.五領地区」「5.高槻西地区」「6.如是・富田地区」「7.三箇牧地区」

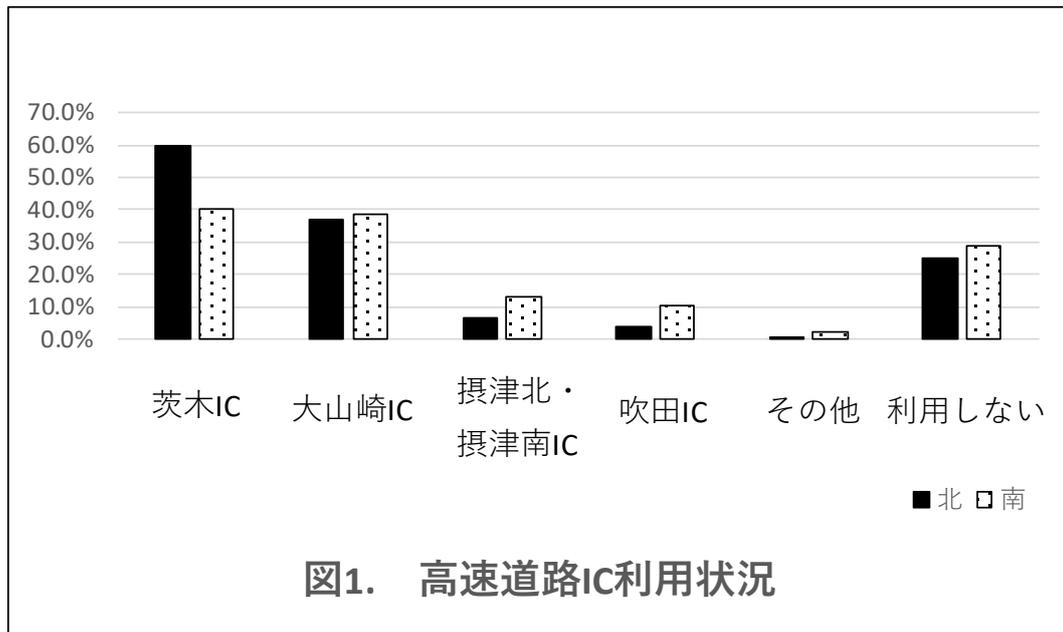
西国が移動（国道 171 号線）を基準とし、以下のように高槻市北部と高槻市南部にわけた。

高槻市北部：堅田地区、高槻北地区、高槻西地区

高槻市南部：高槻南地区、五領地区、如是・富田地区、三箇牧地区

4. 分析

全ての分析は、統計処理用ソフトウェア SPSS（ver.24）を用いて行う。まず高槻 JCT・IC 開通前の高速道路インターチェンジ利用状況を、高槻市北部と高槻市南部に分け、棒グラフで示す（図 1）。



IC の利用状況において目立った地域性は見られなかった。高槻 JCT・IC は、高槻市北部、高槻市南部共に多くの方が利用している茨木 IC と大山崎 IC の中間に開通するため、開通後現在の利用状況に大きな変化が見られるのではないかと考えられる。

次にクロス表を用いて、居住地区と高槻 JCT・IC 開設の認知度の関連性を検討する。Q13. 「高槻 IC 開設を知っているか」、Q68. 「居住地区」の二変数を用いクロス表を作成した (表 1)。

表1. 居住地区と高槻IC開設認知度のクロス表

		q13 高槻ICの開設を知っていたか		合計	
		知っている	知らない		
居住地区	高槻市北部	度数	456	66	522
		行パーセント	87.4%	12.6%	100.0%
	高槻市南部	度数	461	140	601
		行パーセント	76.7%	23.3%	100.0%
合計	度数	917	206	1123	
	行パーセント	81.7%	18.3%	100.0%	

$X^2 = 21.157^{***}, df=1, N=1123; Cramer's V = .137^{***}$

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

検索の結果カイ 2 乗の値が 21.157、Cramer の V の値が.137 であり、どちらも有意確率が 0.1%水準で有意であった。高槻 JCT・IC が開設される地域である高槻市北部は、開設を知っていると答えた人が 87.4%、開設を知らない人と答えた人が 12.6%となった。高槻市南部では、開設を知っていると答えた人が 76.7%、開設を知らない人と答えた人が 23.3%となった。高槻市北部と高槻市南部で比較すると、知っていると答えた人が多いのは高槻市北部、知らない人と答えた人が多いのは高槻市南部となった。

続いてクロス表を用い、居住地区と高槻 JCT・IC 開設への期待度の関連性を検討する。Q14.「高槻 IC 開設に期待しているか」、Q68.「居住地区」の二変数を用いクロス表を作成した (表 2)。

表2. 居住地区と高槻IC開設期待度のクロス表

		高槻IC開設に期待しているか		合計	
		期待していない	期待している		
居住地区	高槻市北部	度数	123	395	518
		行パーセント	23.7%	76.3%	100.0%
	高槻市南部	度数	191	401	592
		行パーセント	32.3%	67.7%	100.0%
合計	度数	314	796	1110	
	行パーセント	28.3%	71.7%	100.0%	

$X^2 = 9.882^{**}$, $df=1$, $N=1110$; Cramer's $V=.094^{**}$

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

検索の結果カイ 2 乗の値が 9.882、Cramer の V の値が.094 でありどちらも有意確率 0.1%水準で有意であった。高槻市北部は、開設を期待していないと答えた人が 23.7%、開設を期待していると答えた人が 76.3%となった。高槻市南部では、開設を期待していないと答えた人が 32.3%、開設を期待していると答えた人が 67.7%となった。高槻市北部と高槻市南部で比較すると、期待していると答えた人が多いのは高槻市北部、期待していないと答えた人が多いのは高槻市南部となった。

続いてクロス表を用い、居住地区と高槻 JCT・IC 利用頻度の関連性を検討する。Q15.「高槻 IC の利用頻度」、Q68.「居住地区」の二変数を用いクロス表を作成した (表 3)。

表3. 居住地区と q15 高槻ICの利用頻度のクロス表

		q15 高槻ICの利用頻度				合計
		大いに利用する	ときどき利用する	あまり利用しない	ほとんど利用しない	
居住地区	高槻市北部	度数 99	192	91	133	515
		行パーセント 19.2%	37.3%	17.7%	25.8%	100.0%
	高槻市南部	度数 63	210	115	195	583
		行パーセント 10.8%	36.0%	19.7%	33.4%	100.0%
合計	度数 162	402	206	328	1098	
	行パーセント 14.8%	36.6%	18.8%	29.9%	100.0%	

$X^2 = 19.184^{***}$, $df=3$, $N=1098$; Cramer's $V=.132^{***}$

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

検索の結果カイ 2 乗の値が 19.184、Cramer の V の値が.132 でありどちらも有意確率 0.1%水準で有意であった。高槻市北部は、開設後大いに利用すると答えた人が 19.2%、ときどき利用すると答えた人が 37.3%となり、あまり利用しないと答えた人が 17.7%、ほとんど利用しないと答えた人が 25.8%となった。高槻市南部は、大いに利用すると答えた人が 10.8%、ときどき利用すると答えた人が 36.0%となり、あまり利用しないと答えた人が 19.7%、ほとんど利用しないと答えた人が 56.5%、利用しないと答えた人が 43.5%となり、利用すると答えた人の方が多いたことが分かる。高槻市南部では、利用すると答えた人が 46.8%、利用しないと答えた人が 53.1%となり、利用しないと答えた人の方が多かった。

5. 考察

本研究では、高槻 JCT・IC 開設に関する高槻市民の意識調査を 2 つの仮説に基づき、クロス表分析を用いた。その結果、仮説 1「高槻市北部に住んでいる人は高槻 JCT・IC 開設を知っている」仮説 2「高槻市北部に住んでいる人は高槻 JCT・IC 開設に期待している」は共に支持された。高速道路の JCT・IC 開設にあたっての調査であった為、高槻 JCT・IC に居住地に近いほど認知度や期待度が高くなったと考えられる。

本調査で対象とした高槻 JCT・IC 開設は、新名神高速道路全線開通の一部でしかない。計画されている大津 JCT～神戸 JCT が開通すると、渋滞緩和や沿線活性化など、沿線地域に大きな影響を与えることが予測される。また、大規模な災害が発生した時に担う社会的役割を持つため、非常に重要な高速道路である。

今回は「居住地」との関係性を調査したが、高速道路は利用するかどうか期待や認知度に大きく影響する。そのため今後の課題として、名神高速道路並びに中国自動車道の利用頻度との関係性も検討することを提言したい。

6. 文献

- [1]谷ノ上千賀子(2017)「新名神高速道路と東海環状自動車道の開通の影響について」調査結果
- [2]NEXCO 西日本,E1A 新名神高速道路 (2017年12月18日閲覧)
「開通区間の概要」,「道路ネットワークの拡充」,「沿線への企業・物流施設の立地」,「周辺地域の開発」,「地域産業の活性化」,「観光の活性化」,「E1A 新名神高速道路の交通状況 (1)」,「E1A 新名神高速道路の交通状況 (2)」
<http://corp.w-nexco.co.jp/activity/branch/kansai/shinmeishin/information/arrival2.html>
- [3]国土交通省 関東地方整備局,NEXCO 中日本(2013)記者発表資料
- [4]薮下武司(2007)「東海環状自動車道の開通とその影響ー地域の雇用環境に与える影響を中心としてー」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研紀要/中部学院大学総合研究センター編』8号, pp.33-42
- [5]星の駅 高速道路新路線情報(2017年1月28日閲覧),「新名神高速道路[高槻 JCT・IC-川西 IC]」
<http://hoshinoeki.net/new-meishin04/>

第9章 インターネットの利用と生活満足度の関係

赤井 孝徳

1. はじめに

現代社会においてインターネットは必要不可欠なものとなっており、様々な物事に活用されている。特にスマートフォンの登場でインターネットに関わる機会が増加したうえ、日々の生活に大きな変化をもたらした。ここ数年、街中でもスマートフォンを触っている人が増加したように感じる。総務省「平成28年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によると、平成28年時点のスマートフォンの利用率は71.3%と年々増加している。それに伴って平成28年時点でのインターネット行為者の平日のインターネットの平均利用時間は136.5分で、祝日の平均利用時間が163.5分と増加している(図1)。

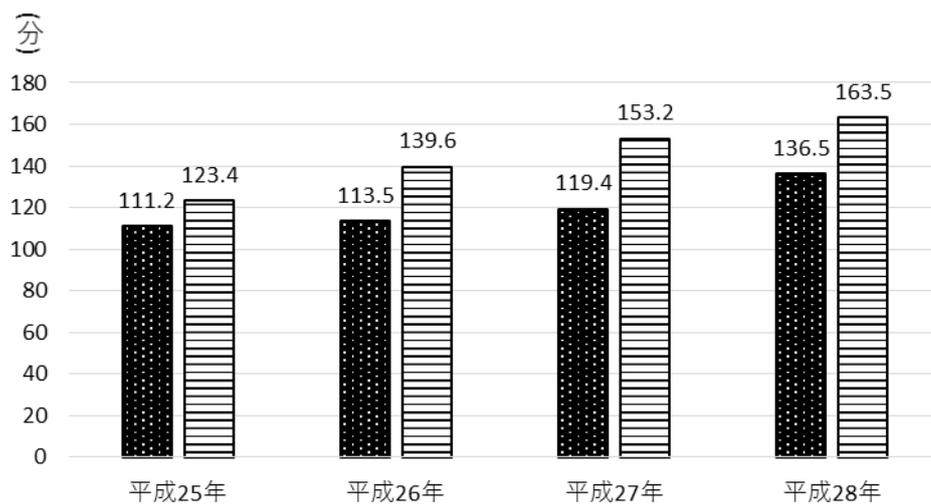


図1 平日と休日のインターネット利用時間の変化

■ 平日

▨ 休日

出典：総務省「平成28年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」

この結果から現時点でインターネットはすでに生活に定着しつつあるという印象を受ける。近年の携帯電話、スマートフォンの普及、メディアの発達により、デジタル情報端末を使用する時間は一日のうちかなりを占めている。一方でインターネットはネット依存や炎上などの悪影響を及ぼすことも知られるようになった。インターネットが日常生活に及ぼす影響が年々増加していく中でインターネットのどのように使用すると、どのような影響が起こるのだろうかと考えた。この章ではインターネットの利用時間、利用目的などの変数によって生活満足度にどのような影響を及ぼすのかどうかを検証する。

2. 仮説

インターネットの利用目的が多様化する中で、様々なことがインターネットを利用することで便利になっている。さらにスマートフォン等の登場により、利便性が大きく向上しインターネットの使用方法も変化が生じている。そこでインターネットを利用することで生活をより豊かにすることができるのではないかと考え、以下の2つの仮説を立てた。

仮説1：「情報収集を目的としてインターネットを利用している人の方が、生活満足度は高くなる。」

仮説2：「スマートフォン等でのインターネットの利用時間が長いほど、生活満足度は高くなる」

以下の節で2つの仮説を検証していく。

3. データと変数

3.1 データ

データは平成29年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1196票、回収率は59.8%である。

3.2 変数

本章の分析では以下の変数を使用して分析するものとする。

本分析ではすべての変数に欠損値処理を行った。

Q1「生活満足度」

「1. 満足」「2. やや満足」「3. どちらともいえない」「4. やや不満」「5. 不満」

下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど満足度が高くなるようにした。

「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」

Q22「パソコンでのインターネットの利用時間」

「1. 30分未満」「2. 30分以上1時間未満」「3. 1時間以上2時間未満」「4. 2時間以上4時間未満」「5. 4時間以上8時間未満」「6. 8時間以上」

「30分未満」「30分以上1時間未満」を「パソコンでのインターネット利用時間低」、「1時間以上2時間未満」「2時間以上4時間未満」を「パソコンでのインターネット利用時間中」、「4時間以上8時間未満」「8時間以上」を「パソコンでのインターネット利用時間高」にリコードを行い3カテゴリーのダミー変数を作成した。

Q23「スマートフォン等でのインターネットの利用時間」

「1. 30分未満」「2. 30分以上1時間未満」「3. 1時間以上2時間未満」「4. 2時間以上4時間未満」「5. 4時間以上8時間未満」「6. 8時間以上」

「30分未満」「30分以上1時間未満」を「スマートフォン等でのインターネット利用時間低」、「1時間以上2時間未満」「2時間以上4時間未満」を「スマートフォン等でのインターネット利用時間中」、「4時間以上8時間未満」「8時間以上」を「スマートフォン等でのインターネット利用時間高」にリコードを行い3カテゴリのダミー変数を作成した。

Q24「インターネット利用目的」

「1.電子メール」「2.情報収集」「3.SNS」「4.オンラインゲーム」「5.オンラインショッピング」「6.動画の投稿・視聴」「7.ブログの閲覧・更新・書き込み」「8.その他」

Q64「性別」

「1.男性」「2.女性」

男性=1、女性=0にリコードし、「男性ダミー」を作成した。

Q65「年齢」

「1. 18,19歳」「2. 20代」「3. 30代」「4. 40代」「5. 50代」「6. 60代」

Q67「最終学歴」

「1. 中学(旧小学校など)」「2. 高校(または旧制中学など)」「3. 専門学校」「4. 短大・高専(5年制)」「5. 大学(旧高専)・大学院」

「1. 中学(旧小学校など)」「2. 高校(または旧制中学など)」を「初等学歴ダミー」、「3. 専門学校」「4. 短大・高専(5年制)」を「中等学歴ダミー」、「5. 大学(旧高専)・大学院」を「高等学歴ダミー」にリコードを行い、3カテゴリのダミー変数を作成した。

4. 分析

「反転生活満足度」とQ24「インターネットの利用目的」「男性ダミー」Q65「年齢」、に加え「高等学歴ダミー」を基準カテゴリとした「初等学歴ダミー」「中等学歴ダミー」の変数を用いて重回帰分析を行ったところ、表1のような結果が表れた。

表 1 生活満足度の重回帰分析結果

	B	SE	β
(定数)	3.674 ***	.173	
q24_1 インターネット利用目的 電子メール	.027	.081	.012
q24_2 インターネット利用目的 情報収集	.158	.102	.055
q24_3 インターネット利用目的 SNS	.079	.082	.038
q24_4 インターネット利用目的 オンラインゲーム	-.112	.087	-.047
q24_5 インターネット利用目的 オンラインショッピング	-.024	.078	-.011
q24_6 インターネット利用目的 動画の視聴・投稿	-.147 *	.079	-.071
q24_7 インターネット利用目的 ブログ閲覧・更新・書き込み	-.052	.104	-.018
q24_8 インターネット利用目的 その他	-.161	.174	-.032
初等学歴ダミー	-.429 ***	.089	-.194
中等学歴ダミー	-.111	.098	-.047
男性ダミー	.029	.081	.014
q65 年齢	.029	.027	.044
調整済みR ²	.035 ***		
N	818.0		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

分析の結果、生活満足度の 3.5%が独立変数で説明できる。

また、従属変数に有意に影響を与えている変数を確認すると「初等学歴ダミー」が 0.1%水準で有意である。また「動画の視聴・投稿」が 5%水準で有意であることがわかる。

また、それぞれの独立変数が従属変数に影響を与える影響量を比較するために β の値に着目する。基準カテゴリである「高等学歴ダミー」と比べ「初等学歴ダミー」($\beta=-.194$)が生活満足度に最も強い影響を与えていると言える。

次に「反転生活満足度」に加え「パソコンでのインターネット利用時間低」を基準カテゴリとして「パソコンでのインターネット利用時間中」「パソコンでのインターネット利用時間高」、「スマートフォン等でのインターネット利用時間低」を基準カテゴリとして「スマートフォン等でのインターネット利用時間中」「スマートフォン等でのインターネット利用時間高」の変数を用いて重回帰分析を行ったところ、表 2 のような結果が表れた。

表2 生活満足度の重回帰分析結果

	B	標準誤差	β
(定数)	3.765 ***	.056	
パソコンでのインターネット利用時間中	.079	.089	.034
パソコンでのインターネット利用時間高	-.06	.137	-.017
スマートフォン等でのインターネット利用時間中	-.12	.083	-.057
スマートフォン等でのインターネット利用時間高	-.197	.151	-.051
調整済みR ²	.00		
N	780.00		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

従属変数に有意に影響を与えている変数を確認すると、10%水準以下では存在しないことがわかった。

また、独立変数が有意ではないため従属変数に対して影響力はないことがわかる。

5. 考察

今回、インターネットの利用時間、利用目的などの変数によって生活満足度にどのような影響を及ぼすのかの調査を行った。以上の分析から仮説1「情報収集を目的としてインターネットを利用している人の方が生活満足度が高い」が成立しないことがわかる。分析結果からインターネットの利用目的だけに注目して見ると、生活満足度に対して「動画の視聴・投稿」が最も強い負の影響を与えていることがわかる。これは動画を見ることでインターネットの利用時間が長くなってしまい、結果として生活満足度が下がってしまうと考えられる。しかし、今回分析を行った変数すべてを見ると、初等学歴ダミーが最も強い負の影響を与えており、インターネットの利用目的よりも学歴の方が生活満足度に対して、強い影響を与えることが分かった。よって、インターネットの利用目的はそれほど生活満足度に影響を与えないことが分かった。

次に仮説2:「スマートフォン等でのインターネットの利用時間が長いほど、生活満足度は高くなる」に関しても成立しないことがわかった。パソコン、スマートフォンともに利用時間が長いほど、生活満足度への影響が下がることがわかる。特にスマートフォンでは利用時間が長いほど生活満足度に対して負の影響が見られる。原因として考えられるのは、スマートフォンは気軽にインターネットを行うことができるが、気軽にできることからつつい仕事や勉強中などにスマートフォンでインターネットを見てしまい、本来すべきことがおろそかになったことで、生活満足度が低くなったと考えられる。

以上の分析より、インターネットを利用していく上では、利用目的より利用時間に気を付けて利用することで生活満足度に良い影響を与えることができると考えられる。

6. 参考文献

[1]総務省(2016)「平成 28 年通信利用動向調査」

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html> (2017 年 11 月 27 日閲覧)

[2]総務省(2016)「平成 28 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01iicp01_02000064.html (2018 年 1 月 9 日閲覧)

第10章 インターネット利用による健康被害について

平見 遥華

1. はじめに

総務省「平成28年通信利用動向調査」によると、2015年末のインターネット利用者数は、2014年末より28万人増加して1億46万人、人口普及率は83.0%となった。また、20代のインターネット利用は99%を超え、スマートフォンでのインターネット利用は88%となっており、スマートフォンの急速な普及によりインターネット利用者が増加しているといえる。インターネットは情報収集やコミュニケーションの道具として利便性が高いが、今日インターネット利用による身体的悪影響が示唆されていることも確かである。

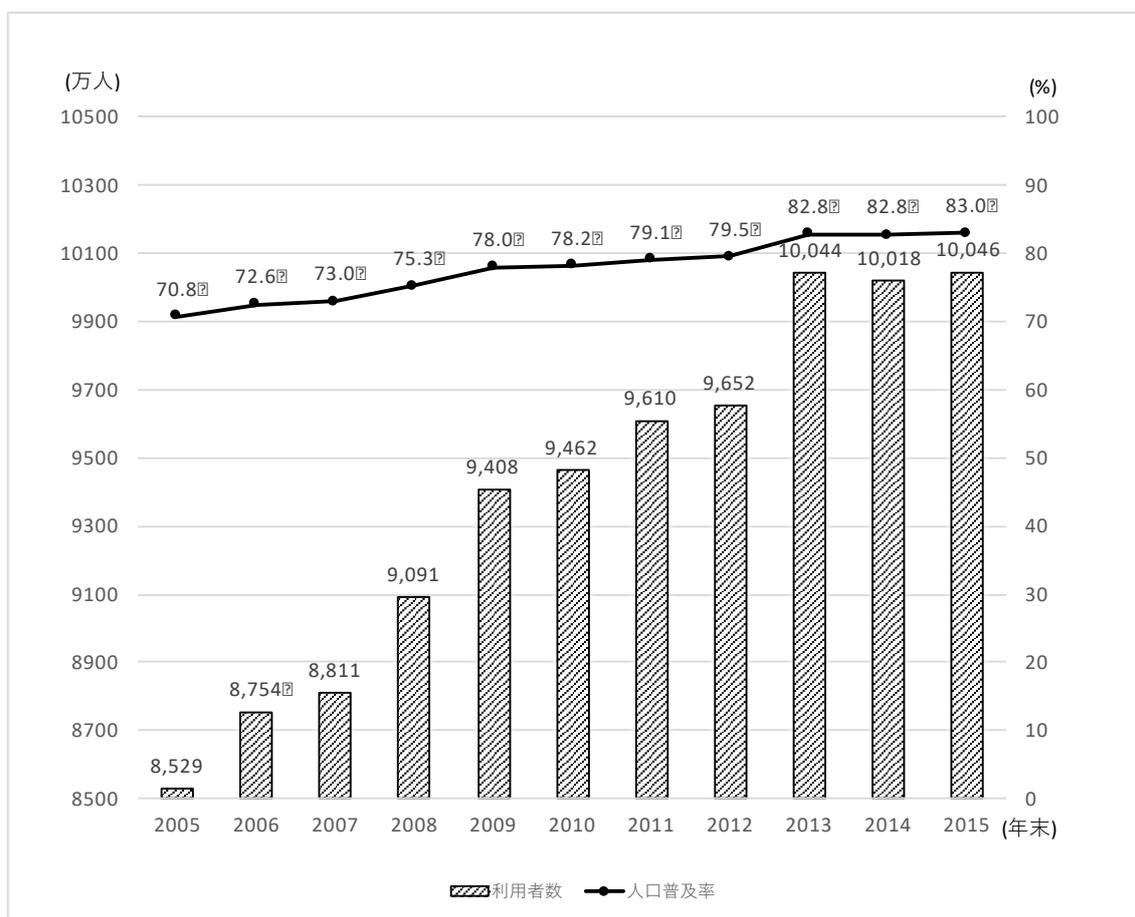


図1 インターネットの利用者数と人口普及率（総務省平成28年）

2. 仮説

2.1 先行研究

片山友子ほか（2016）による「大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性」の研究によると、大学生を対象に、健康度及び生活習慣の関連性について検討を行ったところ、スマートフォンの利用率が高い大学生はスマートフォンの利用率が低い大学生に比べて、身体的健康度、睡眠の充足度が有意に低値を示したという。これらの結果から、長時間のインターネット利用は、睡眠習慣と身体の両方に悪影響を与える可能性が示唆された。

2.2 仮説

本章では、高槻市民から標本抽出した 2000 人を対象とした高槻市民調査のデータをもとに、他の年代でも先行研究と同様の傾向があるかどうかを検討する。普段インターネットを利用する者にも睡眠習慣と身体の両方に悪影響を与える可能性があるとして想定し、以下の仮説を立てる。なお、今回は裸眼での視力を身体的影響として用いる。

仮説 1：インターネットを利用する人は、1 日の平均睡眠時間が短い

仮説 2：インターネットを利用する人は、裸眼での視力が悪い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 29 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1196 票、回収率は 59.8%である。

3.2. 変数

変数は以下のものを使用して分析するものとする。なお、すべての変数において、無回答の場合は欠損値として処理した。

- ・「q21 インターネットを利用するか」

「q21 インターネットを利用するか」の選択肢は、「1. 利用する」「2. 利用しない」である。

- ・「q61 1 日の平均睡眠時間」

「q61 1 日の平均睡眠時間」の選択肢は、「1. 5 時間未満」「2. 5 時間以上 6 時間未満」「3. 6 時間以上 7 時間未満」「4. 7 時間以上 8 時間未満」「5. 8 時間以上 9 時間未満」「6. 9 時間以上」である。分析を容易にするため、「5. 8 時間以上 9 時間未満」「6. 9 時間以上」を、「8 時間以上」とまとめた。

- ・「q63 裸眼での視力」

「q63 裸眼での視力」の選択肢は、「1. 0.1 未満」「2. 0.1 以上 0.5 未満」「3. 0.5 以上 1.0 未満」「4. 1.0 以上 1.5 未満」「5. 1.5 以上 2.0 未満」「6. 2.0 以上」である。分析を容易にするため、「5. 1.5 以上 2.0 未満」「6. 2.0 以上」を、「1.5 以上」とまとめた。

4. 分析

はじめに「インターネットを利用するかどうか」と「1日の平均睡眠時間」との関係性について明らかにするために、クロス表分析を行う（表1）。

表1 q21 インターネットを利用するかと q61 1日の平均睡眠時間のクロス表

			q61 1日の平均睡眠時間					合計
			5時間未満	5時間以上 6時間未満	6時間以上 7時間未満	7時間以上 8時間未満	8時間以上	
q21 インターネット を利用するか	利用する	度数	101	296	259	121	24	801
		行パーセント	12.6%	37.0%	32.3%	15.1%	3.0%	100.0%
	利用しない	度数	33	108	89	79	24	333
		行パーセント	9.9%	32.4%	26.7%	23.7%	7.2%	100.0%
合計			134	404	348	200	48	1134
			11.8%	35.6%	30.7%	17.6%	4.2%	100.0%

$\chi^2(df=5, N=1134)=25.455^{***}$, Cramer V=0.150^{***}
 ***: p < .001, **: p < .01, *: p < .05, †: p < .10

分析の結果、カイ 2 乗の値が 25.455、Cramer の V の値が 0.150 であり、どちらも有意確率が 0.1%以下である。したがって、この 2 変数はやや強い関連性があるといえる。インターネットを「利用する」と答えた人の中で 1 日の平均睡眠時間が「7 時間未満」と答えた人は、81.9%存在しているのに対し、インターネットを「利用しない」と答えた人の中で平均睡眠時間が「7 時間未満」と答えた人は 69.1%存在していた。一方で、インターネットを「利用する」と答えた人の中で 1 日の平均睡眠時間が「7 時間以上」と答えた人は、18.1%存在しているのに対し、インターネットを「利用しない」と答えた人の中で平均睡眠時間が「7 時間以上」と答えた人は 30.9%存在していた。よって、仮説 1 「インターネットを利用する人は、1 日の平均睡眠時間が短い」は成立した。

次に「インターネットを利用するかどうか」と「裸眼での視力」との関係性について明らかにするために、クロス表分析を行う（表 2）。

表2 q21インターネットを利用するかとq63裸眼での視力のクロス表

		q63 裸眼での視力					合計	
		0.1未満	0.1以上 0.5未満	0.5以上 1.0未満	1.0以上 1.5未満	1.5以上		
q21 インターネット を利用するか	利用する	度数	219	182	239	114	44	798
		行パーセント	27.4%	22.8%	29.9%	14.3%	5.5%	100.0%
	利用しない	度数	32	65	163	56	7	323
		行パーセント	9.9%	20.1%	50.5%	17.3%	2.2%	100.0%
合計			251	247	402	170	51	1121
			22.4%	22.0%	35.9%	15.2%	4.5%	100.0%

$\chi^2(df=5, N=1121)=67.829^{***}$, Cramer V=0.246^{***}

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

分析の結果、カイ 2 乗の値が 67.829、Cramer の V の値が 0.246 であり、どちらも有意確率が 0.1%以下である。したがって、この 2 変数はやや強い関連性があるといえる。インターネットを「利用する」と答えた人の中で裸眼の視力が「0.1 未満」であると答えた人は 27.4%、「0.1 以上 0.5 未満」であると答えた人は 22.8%存在しているのに対し、インターネットを「利用しない」と答えた人の中で裸眼の視力が「0.1 未満」であると答えた人は 9.9%、「0.1 以上 0.5 未満」であると答えた人は 20.1%存在し、インターネットを「利用する」と答えた人の方が、裸眼の視力が悪かった。一方で、インターネットを「利用する」と答えた人の中で裸眼の視力が「1.0 以上 1.5 未満」であると答えた人は 14.3%、「1.5 以上」であると答えた人は 5.5%存在しているのに対し、インターネットを「利用しない」と答えた人の中で裸眼の視力が「1.0 以上 1.5 未満」であると答えた人は 17.3%、「1.5 以上」であると答えた人は 2.2%存在し、インターネットを「利用する」と答えた人の方が、裸眼の視力が「1.0 以上」である割合が僅かに高いという結果に至った。

5. 考察

インターネット利用は睡眠習慣と身体の両方に悪影響を与えるかどうかを検討するため、高槻市民から標本抽出した 2000 人を対象とした高槻市民調査のデータをもとに、クロス表分析を行った。クロス表分析の結果より、仮説 1「インターネットを利用する人は、1 日の平均睡眠時間が短い」は成立し、インターネット依存者に限らず、普段インターネットを利用する者にも睡眠習慣に悪影響を与える可能性があるといえる。また仮説 2「インターネットを利用する人は、裸眼での視力が悪い」は、裸眼での視力が「0.5 未満」の人に限り成立し、裸眼での視力が「0.5 以上」の人では成立しなかった。このことより、裸眼での視力にインターネット利用だけではなく、遺伝や他の生活習慣が影響していると考えられる。

IT 化が進む現代社会において、インターネットの利用はますます増加していだろう。インターネット利用が必要不可欠となりつつある今、インターネット利用による悪影響からどのように身を守るかがこれからの課題だと考える。

6. 文献

[1]…総務省, 2017 「インターネット利用動向平成 28 年度版」

http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/170608_1.pdf (2018 年 1 月 9 日
閲覧) .

[2]…片山友子・水野由子, 2016, 「大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性」 『総合健診』 43 卷(6)657-664 (2018 年 1 月 9 日閲覧) .

第 11 章 プログラミング教育必修化の認知度

濱田 倅汰

1. はじめに

現在、日本では産業界において大型の IT 関連投資が続いており、IT 人材の不足が課題となっている。さらに、日本では少子高齢化の影響から労働人口の減少が見込まれており、今後、IT 人材の獲得が困難になると考えられている。経済産業省(2016)は、2020 年に 36.9 万人、2030 年には 78.9 万人の IT 人材が不足すると予測している。今後も IT 関連のビジネスが拡大していくと予想される一方で、それに対応する IT 人材の数が追いつかないと予測される。このような背景もあり、IT 人材の数を増やそうと 2020 年度から小学校でのプログラミング教育必修化が決まっている。そして、子ども向けのプログラミング教室やプログラミング学習用の玩具がニュースで取り上げられるなど、プログラミング教育に対する世間の関心も高まっている。しかしながら、実際にどのような人がプログラミング教育必修化に関心を寄せているのかはわからないと考えた。そこで本調査ではプログラミング教育必修化に対する認知度を調査し、どのような人がプログラミング教育必修化を知っているのかを検証する。

2. 仮説

2.1 先行研究

2017 年に行われた『『ケイコとマナブ』 2017 年 子どもの習い事アンケート』の調査では、小学校高学年の子どもに習わせたい習い事ランキングにパソコン関連の習い事が 4 位にランクインしている(ケイマナニュース, 2017)。さらに、CA Tech Kids で代表取締役社長を務める上野朝大によるとプログラミング教育必修化のニュースとともにプログラミング教育に注目があつまり、同社が運営しているプログラミング教室の生徒が増加しているようだ(CNET Japan, 2017)。

2.2 仮説

プログラミング教育必修化を知っている人は、普段から IT 関連のことに接触している機会が多いと考えた。そこで、今回は以下の 3 つの仮説をたてた。

仮説 1 「IoT という言葉を知っている人ほどプログラミング教育必修化を知っている」

仮説 2 「プログラミング経験のある人がプログラミング教育必修化を知っている」

仮説 3 「インターネットをよく使う人ほどプログラミング教育必修化を知っている」

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 29 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1196 票、回収率は 59.8%である。

3.2. 変数

今回の分析に使用した変数は以下の通りである。

q17 「IoT という言葉を知っているか」

「1.知っている」「2.知らない」

知っている=1、知らない=0 にリコードし「IoT 認知ダミー」を作成した。

q18 「小学校のプログラミング教育必修化を知っていたか」

「1.知っている」「2.知らない」

知っている=1、知らない=0 にリコードし「プログラミング教育認知ダミー」を作成した。

q19 「プログラミングの経験があるか」

「1.ある」「2.ない」

ある=1、ない=0 にリコードし「プログラミング経験ダミー」を作成した。

q22 パソコンでのインターネット利用時間

「1. 30 分未満」「2. 30 分以上 1 時間未満」「3. 1 時間以上 2 時間未満」「4. 2 時間以上 4 時間未満」「5. 4 時間以上 8 時間未満」「6. 8 時間以上」

「30 分未満」「30 分以上 1 時間未満」「1 時間以上 2 時間未満」を 0、「2 時間以上 4 時間未満」「4 時間以上 8 時間未満」「8 時間以上」を 1 として「PC でインターネットよく利用ダミー」を作成した。

q23 スマートフォン等でのインターネット利用時間

「1. 30 分未満」「2. 30 分以上 1 時間未満」「3. 1 時間以上 2 時間未満」「4. 2 時間以上 4 時間未満」「5. 4 時間以上 8 時間未満」「6. 8 時間以上」

「30 分未満」「30 分以上 1 時間未満」「1 時間以上 2 時間未満」を 0、「2 時間以上 4 時間未満」「4 時間以上 8 時間未満」「8 時間以上」を 1 として「スマートデバイスでインターネットよく利用ダミー」を作成した。

q64 「性別」

「1.男性」「2.女性」

男性=1、女性=0 にリコードし「男性ダミー」を作成した。

q66 「職業」

「1.常時雇用の勤め人」「2.臨時雇用、パート、アルバイト」「3.自営業主」「4.自営業の家族従業者」「5.経営者、役員」「6.家事専業」「7.学生」「8.無職」

それぞれを下のように各項目をリコードし、ダミーを作成した。

「1.常時雇用の勤め人」「5.経営者、役員」を「常勤の勤め人ダミー」、「3.自営業主」「4.自営業の家族従業者」を「自営業ダミー」、「2.臨時雇用、パート、アルバイト」「6.家事専業」「7.学生」「8.無職」を「その他職業ダミー」とした。

q67 「学歴」

「1.中学（旧小学校など）」「2.高校（または旧制中学など）」「3.専門学校」「4.短大・高専（5年制）」「5.大学（旧高専）・大学院」

それぞれを下のように各項目をリコードし、ダミーを作成した。

「1.中学（旧小学校など）」「2.高校（または旧制中学など）」を「初等学歴ダミー」、「3.専門学校」「4.短大・高専（5年制）」を「中等学歴ダミー」、「5.大学（旧高専）・大学院」を「高等学歴ダミー」とした。

ただし、すべての変数において欠損値処理をしている。

4. 分析

仮説 1「IoT という言葉を知っている人ほどプログラミング教育必修化を知っている」、仮説 2「プログラミング経験のある人がプログラミング教育必修化を知っている」、仮説 3「インターネットをよく使う人ほどプログラミング教育必修化を知っている」を検証する。これらの仮説を検証するために、2項ロジスティック回帰分析を行う（IBM SPSS Statistics 24.0 を使用）。この分析では、従属変数を「プログラミング教育認知ダミー」、共変量を「IoT 認知ダミー」「プログラミング経験ダミー」「PC でインターネットよく利用ダミー」「スマートデバイスでインターネットよく利用ダミー」「男性ダミー」「常勤の勤め人ダミー」「自営業ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」とした。分析結果を表 1 に示す。

表 1 プログラミング教育認知ダミーの 2 項ロジスティック回帰分析結果

	B	SE	Exp(B)
(定数)	-1.296 ***	.202	.274
IoT認知ダミー	1.177 ***	.194	3.246
プログラミング経験ダミー	.555 **	.192	1.741
PCでインターネットよく利用ダミー	-.177	.213	.838
スマートデバイスでインターネットよく利用ダミー	-.063	.197	.939
男性ダミー	-.302	.200	.739
中等学歴ダミー	.244	.250	1.276
高等学歴ダミー	.522 *	.217	1.686
常勤の勤めダミー	-.233	.190	.792
自営業ダミー	-.264	.375	.768
Cox-Snell R ²	.092		
Nagelkerke R ²	.129		
model X ² (df=9)	69.431 ***		
N	716		

***:p<.001,**:p<0.1,*:p<0.5,†:p<.10

表 1 の 2 項ロジスティック回帰分析の結果より、従属変数に有意に影響を与えている変数は、0.1%水準で有意な「IoT 認知ダミー」、1%水準で有意な「プログラミング経験ダミー」、5%水準で有意な「高等学歴ダミー」の 3 つである。それ以外の変数は従属変数に有意に影響を与えていないことがわかる。「IoT 認知ダミー」が有意であり、EXP (B) が 3.246 であることから、IoT という言葉を知らない人よりも知っている人のほうがプログラミング教育必修化を約 3.2 倍知っていることがわかる。「プログラミング経験ダミー」が有意であり、EXP (B) が 1.741 であることから、プログラミング経験のない人よりも経験がある人のほうがプログラミング教育必修化を約 1.7 倍知っていることがわかる。「高等学歴ダミー」が有意であり、EXP (B) が 1.686 であることから、初等学歴の人に比べて、高等学歴の人のほうがプログラミング教育必修化を約 1.7 倍知っていることがわかる。また、「PC でインターネットよく利用ダミー」「スマートデバイスでインターネットよく利用ダミー」が有意でないことから、インターネットの利用時間ではプログラミング教育必修化を知っているかどうかには関係ないことが分かる。

5. 考察

今回の調査では、プログラミング教育必修化の認知度を調査し、具体的にどのような人が知っているのかを明らかにすることを目的とした。そこで普段から IT 関連のことに接触し

ている機会の多い人がプログラミング教育必修化を知っているという仮説をたてた。具体的には、仮説1「IoTという言葉を知っている人ほどプログラミング教育必修化を知っている」仮説2「プログラミング経験のある人がプログラミング教育必修化を知っている」、仮説3「インターネットをよく使う人ほどプログラミング教育必修化を知っている」という3つの仮説である。これらの仮説を検証するために、プログラミング教育必修化を認知しているかどうか、IoTという言葉を知っているかどうか、プログラミング経験の有無、インターネットの利用時間、性別、学歴、職業に関するデータを用いて2項ロジスティック回帰分析を行った。分析結果より、仮説1「IoTという言葉を知っている人ほどプログラミング教育必修化を知っている」と仮説2「プログラミング経験のある人がプログラミング教育必修化を知っている」は支持された。一方、仮説3「インターネットをよく使う人ほどプログラミング教育必修化を知っている」は支持されなかった。インターネットの利用時間とプログラミング教育必修化を知っているかどうかの間には関係はみられなかった。仮説3が支持されなかった理由としては、インターネットの普及率が上昇し、社会的インフラになっており、ITに詳しくない人でも普段から接触する時間が増えているからだと考えられる。

仮説1,2が支持されている理由としては、インターネットの利用とは違って、IoTという言葉を知っている人やプログラミングの経験のある人は普段からIT関連のニュースに触れている可能性が高いからと考えられる。IT関連の情報を集めている人は、何らかの媒体でIoTという言葉を知る可能性が高いと考えられる。そして、プログラミング教育必修化の情報を得ていると考えられる。また、プログラミング経験のある人は、プログラミングの情報を集めていくうちにプログラミング教育必修化のニュースを知る可能性が高いと考えられる。

初等学歴の人に比べて、高等学歴の人のほうがプログラミング教育必修化を知っている割合が高いということは、高等学歴の人がほうがIT系のことに詳しい可能性がある。しかし、教育関連のことに詳しい可能性も考えられる。

今回の調査では、子どもの年齢に関する質問項目が無かったので未成年の子どもをもつ人々ともたない人々の間でプログラミング教育必修化の認知度に差があるのかを検証することができなかった。そのため次回の調査では子どもの年齢に関する質問項目を入れて検証する必要がある。また、調査結果からプログラミング教育必修化はまだ一般的に認知度があるとは言えず、一部の人しか知らないということがわかった。この結果を踏まえてプログラミング教育必修化の認知度をあげるために国や地方公共団体が宣伝活動をする必要があると考える。

6. 文献

[1] 経済産業省(2016)『IT人材の最新動向と将来推計に関する調査結果を取りまとめました』(最終閲覧日:2018年1月30日)

(<http://www.meti.go.jp/press/2016/06/20160610002/20160610002.pdf>)

[2] ケイマナニュース(2017)『発表！2017年子どもの習い事ランキング 1位は…?? - ケイマナニュース!』(最終閲覧日：2018年1月30日)

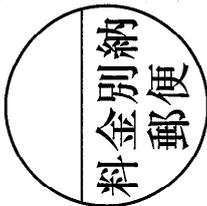
(<https://www.keikotomanabu.net/news/entry/20171002/kodomoranking17>)

[3] CNET Japan(2017)『プログラミングは“おもちゃ”ではない--大人に負けない技術力を育む「CA Tech Kids」』(最終閲覧日：2018年1月30日)

(<https://japan.cnet.com/article/35112297/>)

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



□□□□□□□□

予告はがき

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力をお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

平成29年8月



高槻市 Takatsuki City
 市民生活部 市民生活相談課
 〒569-0067 高槻市桃園町2-1
 TEL 072-674-7130

関西大学 総合情報学部
 〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
 TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらない場合は、高槻市へ返戻して下さい。

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行います。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活ともの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。この調査票に、封筒宛名のご本人様ご自身で、回答をご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月8日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活部 市民生活相談課

tel : 072-674-7130

関西大学 総合情報学部

tel : 072-690-2151

Q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q3. あなたは高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

1	2	3	4	5
感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない

Q4. あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q5. 高槻市営バスにおけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足していますか。

A. 運行時間帯

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

B. 路線・系統

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

C. バス停

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

D. 乗務員の対応

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

E. 運賃

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q6. あなたは、高槻市営バスをどれくらいの頻度で利用していますか。

1	2	3	4	5	6
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	年に1~2日	利用しない

Q7. あなたは、どれくらいの頻度で外出をしますか。

1	2	3	4	5	6
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	年に1~2日	外出しない

Q8へ ↓

Q9へ ↓

Q7で1~5を選んだ方におたずねします。

Q8. あなたは、外出の際に、自家用車またはレンタカーをどのくらい利用されますか。自分が運転しない場合も含みます。

1	2	3	4
よく利用する	ときどき利用する	あまり利用しない	まったく利用しない

↓ Q9へ

Q9. あなたは、自動車の運転免許をお持ちですか。

1. 持っている 2. 持っていない

Q10. あなたは、普段、自動車を運転されますか。

1	2	3	4
よく運転する	ときどき運転する	あまり運転しない	まったく運転しない

Q11. あなたのご家庭では、何台の自動車を所有していますか。

0	1	2	3
0台	1台	2台	3台以上

Q12. 現在、高速道路のインターチェンジ (IC) はどちらをよく利用されますか。よく利用されるものをいくつでもお選びください。

1. 大山崎インターチェンジ
2. 茨木インターチェンジ
3. 吹田インターチェンジ
4. 摂津北又は摂津南インターチェンジ
5. それ以外のインターチェンジ ()
6. 高速道路を利用しない

Q13. あなたは、今年高槻 IC が開設予定であることをご存じですか。

1. 知っている 2. 知らない

Q14. あなたは、高槻 IC の開設に期待していますか。それとも期待していませんか。

1	2	3	4
期待している	どちらかといえは期待している	どちらかといえは期待していない	期待していない

Q15. 高槻 IC 開設後、あなたはどの程度利用しますか。

1	2	3	4
大いに利用する	ときどき利用する	あまり利用しない	ほとんど利用しない

Q16. 高槻 IC 開設後、高槻市内の道路の混雑状況がどのように変わるとお考えですか。

1	2	3	4	5
よくなる	少しくよくなる	変わらない	少しく悪くなる	悪くなる

Q17. あなたは「I o T (インターネット オブ シングス)」という言葉をご存知ですか。

1. 知っている 2. 知らない

Q18. 2020 (平成 32) 年からの小学校の教育課程でコンピュータのプログラミング教育が必修化されます。あなたはこのことをご存知ですか。

1. 知っている 2. 知らない

Q19. あなたはコンピュータのプログラミングのご経験
がありますか。

1. ある → Q20へ
2. ない → Q21へ

Q19で「1. ある」を選んだ方におたずねします。

Q20. どのような場面でプログラミングをしたことが
ありますか。あてはまるものをいくつかもお選びくだ
さい。

1. 学校の授業
2. 学校以外の学び場（プログラミング教室など）
3. 仕事
4. 趣味
5. その他（ ）

Q21へ

Q21. あなたは普段、インターネットを利用されますか。

1. 利用する → Q22へ
2. 利用しない → 右上のQ25へ

Q21で「1. 利用する」を選んだ方におたずねします。

Q22. あなたはパソコンを使って1日のうちどれく
らいの時間インターネットを利用されますか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 30分未満 | 4. 2時間以上4時間未満 |
| 2. 30分以上1時間未満 | 5. 4時間以上8時間未満 |
| 3. 1時間以上2時間未満 | 6. 8時間以上 |

Q23. あなたはスマートフォンやタブレット型端末を
使って1日のうちどれくらい時間インターネットを
利用されますか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 30分未満 | 4. 2時間以上4時間未満 |
| 2. 30分以上1時間未満 | 5. 4時間以上8時間未満 |
| 3. 1時間以上2時間未満 | 6. 8時間以上 |

Q24. あなたはインターネットをどのような目的で
利用されますか。あてはまるものをいくつかもお選びくだ
さい。

1. 電子メールの送受信
2. ウェブ上で情報の収集
3. SNS (Twitter, LINE, Facebook など) の利用
4. オンラインゲームの利用
5. オンラインショッピングの利用
6. 動画の視聴・投稿
7. ブログの閲覧・更新・書き込み
8. その他（ ）

右上のQ25へ

Q25. A～Dは情報媒体（メディア）に対する印象を述
べた文です。A～Dのそれぞれについてテレビ、新聞、ラ
ジオ、雑誌、インターネットのうち、あてはまるものをい
くつでもお選びください。

A. 情報をすぐに得ることができる

- | | |
|--------|---------------|
| 1. テレビ | 4. 雑誌 |
| 2. 新聞 | 5. インターネット |
| 3. ラジオ | 6. どれもあてはまらない |

B. 情報を信頼できる

- | | |
|--------|---------------|
| 1. テレビ | 4. 雑誌 |
| 2. 新聞 | 5. インターネット |
| 3. ラジオ | 6. どれもあてはまらない |

C. 情報を簡単に手に入れることができる

- | | |
|--------|---------------|
| 1. テレビ | 4. 雑誌 |
| 2. 新聞 | 5. インターネット |
| 3. ラジオ | 6. どれもあてはまらない |

D. 情報の量が多い

- | | |
|--------|---------------|
| 1. テレビ | 4. 雑誌 |
| 2. 新聞 | 5. インターネット |
| 3. ラジオ | 6. どれもあてはまらない |

Q26. あなたが日常的に利用している情報媒体（メディ
ア）はどれですか。以下からいくつかもお選びください。

- | | |
|--------|------------|
| 1. テレビ | 4. 雑誌 |
| 2. 新聞 | 5. インターネット |
| 3. ラジオ | 6. 利用しない |

Q27. あなたは現在、ご自宅で、お住まいの地域で行わ
れる地域イベントについて何から情報を得ていますか。あ
てはまるものをいくつかもお選びください。

- | | |
|---------------------------|-------------|
| 1. 市の広報誌 | 6. 家族や知人 |
| 2. ホームページ | 7. 回覧板 |
| 3. SNS (Twitter, LINE など) | 8. その他（ ） |
| 4. チラシ | |
| 5. ポスター | 9. 情報を得ていない |

Q28. あなたは今後、ご自宅で、お住まいの地域で行われる地域イベントについて、何から情報を得たいと思いますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

- | | |
|---------------------------|-------------|
| 1. 市の広報誌 | 6. 家族や知人 |
| 2. ホームページ | 7. 回覧板 |
| 3. SNS (Twitter, LINE など) | 8. その他 () |
| 4. チラシ | |
| 5. ポスター | 9. 情報を得たくない |

Q29. あなたは現在、お住まいの地域で、地域イベントに参加していますか。

- よく参加している
- ときどき参加している
- あまり参加していない
- 過去に参加したことはあるが現在は参加していない
- 参加したことはない

Q30. 次に、現在の高槻市の環境に関するA～Dの項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

A. 高槻市には身近な自然環境とのふれあいがあると思いますか。

- | | | | |
|----|------|-------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう | ややそう | あまりそう | そう |
| 思う | 思う | 思わない | 思わない |

B. 高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちだと思いますか。

- | | | | |
|----|------|-------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう | ややそう | あまりそう | そう |
| 思う | 思う | 思わない | 思わない |

C. 高槻市には良好な環境づくりを目指した活動が豊富にあると思いますか。

- | | | | |
|----|------|-------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう | ややそう | あまりそう | そう |
| 思う | 思う | 思わない | 思わない |

D. 高槻市には環境活動に関する情報や呼びかけが十分にあると思いますか。

- | | | | |
|----|------|-------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう | ややそう | あまりそう | そう |
| 思う | 思う | 思わない | 思わない |

Q31. 次に、現在の高槻市のみどり環境や、緑化を進める活動について、あなたのお考えをおうかがいします。

A. 高槻市には、身近な生活環境に水やみどりの潤いがあると思いますか。

- | | | | |
|----|------|-------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう | ややそう | あまりそう | そう |
| 思う | 思う | 思わない | 思わない |

B. あなたはどの程度、園芸活動（プランターでの花の栽培など）を行っていますか。

- | | | |
|---------------|--------------|--------|
| 1 | 2 | 3 |
| 日常的に
行っている | まれに
行っている | 行っていない |

C. 1年以内に緑化または自然保護に関する活動やイベントに参加したことがありますか。

- | | |
|-------|-------|
| 1. ある | 2. ない |
|-------|-------|

Q32. 高槻市は、新エネルギー・省エネルギー機器の設置に対する補助制度(エコハウス補助金)を行っています。それについて、以下でお答えください。

A. 補助制度の対象である知っている機器をいくつでもお選びください。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 太陽光発電システム | 6. エコキュート |
| 2. 太陽熱利用システム | 7. エネファーム |
| 3. ペレットストーブ | 8. エコウィル |
| 4. 雨水タンク | 9. 蓄電池 |
| 5. 窓の断熱 | |
| | 10. 1つもない |

B. 今後、自宅へ導入したいと思う機器をいくつでもお選びください。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 太陽光発電システム | 6. エコキュート |
| 2. 太陽熱利用システム | 7. エネファーム |
| 3. ペレットストーブ | 8. エコウィル |
| 4. 雨水タンク | 9. 蓄電池 |
| 5. 窓の断熱 | |
| | 10. 1つもない |

Q33. あなたの関心が高い、環境問題に関する話題は何ですか。3つ以内でマルをつけてください。

- | | | |
|---------------|---------------|-----------------|
| 1. 地球温暖化 | 7. 騒音、振動 | 13. 食品ロス |
| 2. ヒートアイランド現象 | 8. 生物多様性、外来生物 | 14. ごみの減量、リサイクル |
| 3. 異常気象 | 9. 森林荒廃 | 15. 不法投棄 |
| 4. 省エネルギー（節電） | 10. 景観保全 | 16. その他（ ） |
| 5. 再生可能エネルギー | 11. 都市緑化 | |
| 6. 大気汚染、PM2.5 | 12. 食の安全性 | 17. いずれにも関心がない |

Q34. あなたの世帯の直近2か月の使用水量を教えてください。なお高槻市では、「ご使用水量等のお知らせ」に2か月分の使用水量が記載されています。

- | | |
|--|--|
| 1. 10 m ³ 未満 | 5. 40 m ³ 以上 50 m ³ 未満 |
| 2. 10 m ³ 以上 20 m ³ 未満 | 6. 50 m ³ 以上 60 m ³ 未満 |
| 3. 20 m ³ 以上 30 m ³ 未満 | 7. 60 m ³ 以上 70 m ³ 未満 |
| 4. 30 m ³ 以上 40 m ³ 未満 | 8. 70 m ³ 以上 |

Q35. 現在お使いの水道は、安全な水道水が安定して供給されていて、安心して水道を利用できていると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q36. 現在お使いの水道水について、不安に思うものをいくつかもお選びください。

- 味
- 水温
- におい
- 工事等による断水
- 水質
- その他（ ）
- 不安がない

Q37. あなたのご家庭では、災害や事故等による断水に備えてどの程度、飲料水の備蓄をしていますか。

- 備蓄していない
- 一人あたり1リットル未満
- 一人あたり1リットル以上3リットル未満
- 一人あたり3リットル以上6リットル未満
- 一人あたり6リットル以上9リットル未満
- 一人あたり9リットル以上

Q38. 就寝用の居室（寝室・子ども部屋）と階段（寝室が2階以上の階にある場合）の全てに、住宅用火災警報器が設置されていますか。

- | | | |
|----------------------|--------------------|-------------------|
| 1
すべてに設置
されている | 2
一部設置
されている | 3
設置されて
いない |
|----------------------|--------------------|-------------------|
- Q39へ (1, 2) | Q41へ (3)

Q38で1または2を選んだ方におたずねします。

Q39. 最近半年間に住宅用火災警報器の作動を確認しましたか。

- | | | |
|-----------|--------------|-------------|
| 1
確認した | 2
確認していない | 3
覚えていない |
|-----------|--------------|-------------|
- Q40へ (1) | Q41へ (2, 3)

Q39で1を選んだ方におたずねします。

Q40. 作動確認の結果はどうでしたか。

- 異常なし
 - 異常あり
- Q41へ

Q41. あなたご自身が急に体の具合が悪くなった時、医療機関に連れて行ってくれる身近な人はいると思いますか。

- 思う
- 思わない

Q42. あなたご自身が急に体の具合が悪くなった時、すぐに相談できる人はいると思いますか。

- 思う
- 思わない

Q 4 3. あなたにとって、救急車の利用1回分はどれくらいの価値があるものですか。近いと思われる金額をお答えください。

- 0. 0円
- 1. 1円以上1,000円未満
- 2. 1,000円以上2,000円未満
- 3. 2,000円以上3,000円未満
- 4. 3,000円以上5,000円未満
- 5. 5,000円以上1万円未満
- 6. 1万円以上3万円未満
- 7. 3万円以上

Q 4 4. これまで、あなたのご家庭で救急車を利用された回数はどのくらいですか。

- | | | | |
|----|------|------|-------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 1回 | 2～3回 | 4回以上 | 利用した
ことが
ない |



Q 4 4で、1から3を選んだ方におたずねします。

Q 4 5. あなたご自身、あるいは同居のご家族が救急車で病院に行き、入院せずに帰宅したことがありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q 4 6. あなたご自身、あるいは同居のご家族が救急車を呼んだけれども、どこにも搬送されなかったことはありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q 4 7へ

Q 4 7. 自殺で亡くなる人の数は全国で年間2万5千人前後となっています。あなたは毎年、このように多くの方が自殺で亡くなっていることをご存知ですか。

- 1. 知っている
- 2. 知らない

Q 4 8. あなたは、高槻市が自殺対策に関して、市役所での展示や街頭キャンペーンなどの取組を行っていることをご存知ですか。

- 1. 知っている
- 2. 知らない

Q 4 9. あなたは、自殺について相談できる機関があるのをご存知ですか。(例えば、保健所 ころの健康相談など)

- 1. 知っている
- 2. 知らない

Q 5 0. あなたは自殺に関して、「生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」と思いますか、それともそうは思いませんか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q 5 1. 自殺したいという気持ちを乗り越えるには、どのような方法が適切と思われますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

- 1. 家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう
- 2. 医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する
- 3. 弁護士や司法書士、公的機関の相談員等、悩みの元となる分野の専門家に相談する
- 4. できるだけ休養を取るようにする
- 5. 趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める
- 6. 特に何もしない
- 7. その他 ()
- 8. 適切と思われる方法はない

Q 5 2. あなたは、これまでの人生の中で本気で自殺したいと考えたことがありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q 5 3. あなたは、もし身近な人から「死にたい」と打ち明けられたとき、どう対応するのが良いと思いますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

- 1. 相談に乗らない、もしくは話題を変える
- 2. 「死んではいけない」と説得する
- 3. 「つまらないことを考えるな」と叱る
- 4. 「がんばって生きよう」と励ます
- 5. 「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す
- 6. 「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する
- 7. ひたすら耳を傾けて聞く
- 8. その他 ()
- 9. 適切と思われる対応はない

Q54. 次のa~sは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの（マルはいくつでも）、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの（マルは3つまで）をそれぞれ選んでください。

②力を入れてほしいもの（3つまで）		
① 良くなってきたもの（いくつでも）		↓
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 公園の整備や自然・緑の保全	7	7
h. 街並み・景観の整備	8	8
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	9	9
j. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	10	10
k. 下水道の整備	11	11
l. 水の安定供給、上水道整備	12	12
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	13	13
n. 身のまわりの生活道路の整備	14	14
o. 交通安全・災害防止対策	15	15
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	16	16
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	17	17
r. 災害対策・防犯対策	18	18
s. 子育て支援	19	19
t. 特になし	20	20

あなた自身のものの見方や現状についておたずねします。

Q55. 人生における結婚について、あなたの意見をお聞かせください。一般的に、結婚はするべきだと思いますか。

- | | | | |
|------|--------|---------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| するべき | した方がよい | しなくてもよい | する必要はない |

Q56. あなたは日常生活の中で、仕事や学業に追われな、ゆっくと過ごせるような時間を持っていますか。

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 十分持っています | かなり持っています | あまり持っていない | まったく持っていない |

Q57. 暮らしの中で経済的なゆとりはありますか。

- | | | | |
|--------|----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| ゆとりがある | ややゆとりがある | あまりゆとりがない | ゆとりがない |

Q58. あなたは社会について「チャンスが平等にあえられるなら、競争で貧富の差がついてもしかたがない」と思いますか。それともそうは思いませんか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q59. あなたは社会について「競争の自由をまもるよりも、格差をなくしていくことのほうが大切だ」と思いますか。それともそうは思いませんか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q60. あなたが1日のうち家事（育児や介護も含む）にあてる時間はどのくらいですか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 30分未満 | 5. 3時間以上4時間未満 |
| 2. 30分以上1時間未満 | 6. 4時間以上5時間未満 |
| 3. 1時間以上2時間未満 | 7. 5時間以上 |
| 4. 2時間以上3時間未満 | |

Q61. あなたの1日の平均睡眠時間はどのくらいですか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 5時間未満 | 4. 7時間以上8時間未満 |
| 2. 5時間以上6時間未満 | 5. 8時間以上9時間未満 |
| 3. 6時間以上7時間未満 | 6. 9時間以上 |

Q62. あなたは現在、喫煙されていますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1. している | 2. していない |
|---------|----------|

Q63. あなたの裸眼での視力は、左右平均してどのくらいですか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 0.1未満 | 4. 1.0以上1.5未満 |
| 2. 0.1以上0.5未満 | 5. 1.5以上2.0未満 |
| 3. 0.5以上1.0未満 | 6. 2.0以上 |

執筆者紹介

横井 桃子 (よこい ももこ)	編集・はじめに・第1章	(関西大学非常勤講師)
松本 渉 (まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
杉浦 翔 (すぎうら しょう)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
山根 優花 (やまね ゆか)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
中川 雅貴 (なかがわ まさき)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
播磨 遼 (はりま りょう)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
真鍋 和紗 (まなべ かずさ)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
高橋 えり (たかはし えり)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
川端 菜幹 (かわばた なみき)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
赤井 孝徳 (あかい たかのり)	第9章	(関西大学総合情報学部生)
平見 遥華 (ひらみ はるか)	第10章	(関西大学総合情報学部生)
濱田 倅汰 (はまだ こうた)	第11章	(関西大学総合情報学部生)

2017 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 2018 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—平成 29 年度—』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～11 章が省略されたものになります。